

追手筋遺跡

新図書館等複合施設建設に伴う埋蔵文化財試掘確認調査報告書



2016. 3

高知市教育委員会

追 手 筋 遺 跡

新図書館等複合施設建設に伴う埋蔵文化財試掘確認調査報告書

2016. 3

高知市教育委員会



SD2 墨書き瓦 (145) 出土状況



SX14 遺物出土状況・SK11・TP2 西壁セクション（南東より、焼土層はSK3）



墨書瓦 (145)



尾戸焼皿 (54)



尾戸焼蓋 (272)



火入れ又は香炉 (364)



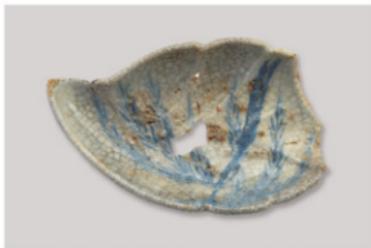
同底部の墨書 (364)



肥前産白磁水滴 (485)



肥前産色絵皿 (546)



京焼又は京都系色絵皿 (96)



京焼皿 (177)



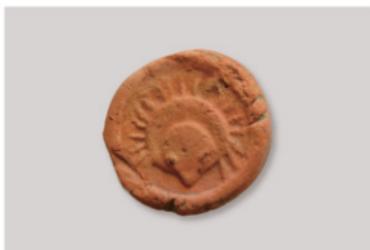
鉄繪壺 (12)



土師質土器人形 (376)



土師質土器人形 (108)



泥面子 (594)

序

追手筋遺跡は、高知城追手門から東に延びる表通りに位置し、かつては家老・中老などの広大な屋敷のそびえた一画にあたります。現在の追手筋は日曜市が軒を連ね、8月にはよさこい祭りの華やかな踊りと鳴子の音が響きわたる高知市観光のプロムナードといえる大通りとなっています。

この度、当地に長い歴史を刻んだ追手前小学校が統合・移転し、その跡地に高知県・市による図書館等複合施設「オーテビア」が建設される運びとなり、校舎解体時に埋蔵文化財の試掘調査が実施されました。その結果、17世紀から19世紀にかけての侍屋敷に伴う多くの遺構や、生活の一端を語る様々な遺物を得ることができ、貴重な成果とすることができます。この中でも「元禄十」「火」と墨書きされた被熱瓦の出土は特筆される発見でした。

この報告書が、高知市の近世史を理解するうえで何らかの役割を果たし、また地域文化の解明への一助ともなれば幸いです。最後になりましたが、調査にご協力いただいた関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成28年3月

高知市教育委員会

例　　言

1. 本書は高知市教育委員会が平成24・25年度に実施した埋蔵文化財試掘確認調査の報告書である。
2. 調査対象地は、高知市追手筋2丁目1番12号に所在する。
3. 調査期間と調査面積は次の通りである。資料整理、報告書作成は平成25年度から27年度にかけて行った。

　　試掘調査 平成24年8月20日～8月24日　調査面積22m²

　　平成25年5月24日～6月19日　調査面積95m²

　　調査体制は以下の通りである。

　　調査主体 高知市教育委員会

　　調査事務 同 民権・文化財課主事 吉村健吉

　　調査担当 同 民権・文化財課指導主事 浜田恵子 梶原瑞司

4. 本書の編集と執筆は浜田が行った。遺物写真は梶原が撮影した。
5. 調査にあたっては、高知県教育委員会文化財課をはじめとする関係諸機関の方々の協力を得た。
6. 遺物の資料調査については、池田研（土佐市教育委員会）、丸山真史（東海大学海洋学部）はじめ諸氏のご教示を賜った。（敬称略）
7. 発掘作業、整理作業においては下記の方々の協力を得た。

　　【発掘作業】岡崎速男 尾崎角美 崎田泰詔 佐竹寛 下本益之 武内順一 武内昌子

　　谷内孝子 西村道明 松吉弘明 山下勝正

　　【整理作業】稜尾洋子 片岡和美 島村加奈 和田エリ 山崎佳代子 吉川沙織

8. 掲載している平面図の方位は国土座標を基準としている。巻末の報告書抄録における経緯度についてでは世界測地系の数値を使用している。
9. 遺構の略号は、土坑：SK、溝：SD、柱穴及び小型の穴：P、性格不明遺構：SXとした。
10. 出土遺物は通し番号とし、挿図、写真図版とも同一番号を使用した。遺物は高知市教育委員会が保管した。注記の略号は平成24年度調査が「12-OS」、平成25年度調査が「13-OS」である。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境	
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
第Ⅲ章 調査の方法	9
第Ⅳ章 平成24年度試掘調査	11
第Ⅴ章 調査の成果	
第1節 基本層序	13
第2節 試掘坑の概要	16
第3節 遺構と遺物	23
1. 近世の遺構と遺物	
(1) 土坑	23
(2) 溝	39
(3) 性格不明遺構	41
(4) 杭群	52
(5) 瓦溜り	55
(6) 包含層出土遺物・その他の遺物	78
2. 近代の遺構と遺物	
(1) 石列	84
(2) 性格不明遺構	86
(3) 包含層出土遺物・その他の遺物	87
第VI章 考察	
第1節 絵図・文献にみる近世の追手筋と追手筋遺跡	117
第2節 追手筋遺跡検出遺構と遺物	132
第VII章 自然遺物	
追手筋遺跡出土の脊椎動物遺存体	136
追手筋遺跡出土の貝類	138

挿図目次

Fig. 1	追手筋遺跡調査区位置図	1
Fig. 2	寛文己酉高知絵図（抜粋）	7
Fig. 3	追手筋遺跡及び周辺の遺跡	8
Fig. 4	調査区風景	9
Fig. 5	平成24・25年度調査 試掘坑配置図	10
Fig. 6	平成25年度調査 調査区位置図	10
Fig. 7	平成24年度調査 TP5～7セクション図・土層柱状図・TP6出土遺物実測図	12
Fig. 8	検出遺構全体図（I・II層）	14
Fig. 9	検出遺構全体図（III・IV層）	15
Fig. 10	TP1平面図・セクション図	17
Fig. 11	TP2平面図・セクション図	18
Fig. 12	TP3平面図・セクション図	19
Fig. 13	TP4平面図・セクション図	20
Fig. 14	TP5平面図・セクション図	21
Fig. 15	TP6平面図・セクション図	22
Fig. 16	SK1・2平面図・セクション図・出土遺物実測図	24
Fig. 17	SK3平面図・セクション図・遺物出土状況図	26
Fig. 18	SK3出土遺物実測図	27
Fig. 19	SK4・5平面図・セクション図	28
Fig. 20	SK4出土遺物実測図（1）	29
Fig. 21	SK4出土遺物実測図（2）	30
Fig. 22	SK4出土遺物実測図（3）	31
Fig. 23	SK5出土遺物実測図	32
Fig. 24	SK6平面図・セクション図・遺物出土状況図	33
Fig. 25	SK6出土遺物実測図	34
Fig. 26	SK7～10平面図・セクション図・遺物出土状況図	35
Fig. 27	SK7・9出土遺物実測図	36
Fig. 28	SK11・11'・12平面図・セクション図	37
Fig. 29	SK11・11'・12出土遺物実測図	38
Fig. 30	SD1平面図・セクション図・出土遺物実測図	40
Fig. 31	SD2平面図・セクション図・遺物出土状況図	41
Fig. 32	SD2出土遺物実測図	42
Fig. 33	SX1平面図・セクション図	43
Fig. 34	SX1出土遺物実測図（1）	44
Fig. 35	SX1出土遺物実測図（2）	45
Fig. 36	SX9平面図・セクション図・出土遺物実測図	46
Fig. 37	SX11・杭群4平面図・セクション図・垂直分布図	47
Fig. 38	SX12出土遺物実測図	48
Fig. 39	SX14平面図・セクション図・遺物出土状況図	49

Fig. 40 SX14出土遺物実測図（1）	50
Fig. 41 SX14出土遺物実測図（2）	51
Fig. 42 桁群1～3平面図・垂直分布図	53
Fig. 43 桁群5平面図・エレベーション図	54
Fig. 44 瓦溜1出土遺物実測図（1）	56
Fig. 45 瓦溜1出土遺物実測図（2）	57
Fig. 46 瓦溜1出土遺物実測図（3）	58
Fig. 47 瓦溜1出土遺物実測図（4）	59
Fig. 48 瓦溜1出土遺物実測図（5）	60
Fig. 49 瓦溜1出土遺物実測図（6）	61
Fig. 50 瓦溜2出土遺物実測図（1）	63
Fig. 51 瓦溜2出土遺物実測図（2）	64
Fig. 52 瓦溜2出土遺物実測図（3）	65
Fig. 53 瓦溜2出土遺物実測図（4）	66
Fig. 54 瓦溜2出土遺物実測図（5）	68
Fig. 55 瓦溜2出土遺物実測図（6）	69
Fig. 56 瓦溜2出土遺物実測図（7）	70
Fig. 57 瓦溜3出土遺物実測図	71
Fig. 58 瓦溜4出土遺物実測図（1）	72
Fig. 59 瓦溜4出土遺物実測図（2）	73
Fig. 60 瓦溜5出土遺物実測図	75
Fig. 61 瓦溜6出土遺物実測図	76
Fig. 62 III層瓦集中1出土遺物実測図	77
Fig. 63 II層出土遺物実測図	78
Fig. 64 III・III'層出土遺物実測図（1）	80
Fig. 65 III・III'層出土遺物実測図（2）	81
Fig. 66 III・III'・IV層出土遺物実測図	82
Fig. 67 I層・搅乱層出土遺物実測図（1）	83
Fig. 68 I層・搅乱層出土遺物実測図（2）	84
Fig. 69 石列1・SX8平面図・セクション図・疊出土状況図	85
Fig. 70 石列1・SX8・I層出土遺物実測図	86
Fig. 71 I層・I'層・搅乱層出土遺物実測図	88
Fig. 72 絵図にみる追手筋遺跡の変遷（1）	127
Fig. 73 絵図にみる追手筋遺跡の変遷（2）	128
Fig. 74 絵図にみる追手筋遺跡の変遷（3）	129
Fig. 75 追手筋遺跡調査区の推定位置	130
Fig. 76 追手筋遺跡出土脊椎動物遺存体（1）	140
Fig. 77 追手筋遺跡出土脊椎動物遺存体（2）	140
Fig. 78 追手筋遺跡出土脊椎動物遺存体（3）	141
Fig. 79 追手筋遺跡出土貝類	141

表 目 次

Tab. 1 遺構一覧表 (SK・SD・SX・石列)	89
Tab. 2 ~22 遺物觀察表 (陶磁器・土器・その他)	90
Tab. 23 遺物觀察表 (石製品・金属製品・ガラス製品)	111
Tab. 24 遺物觀察表 (古錢)	112
Tab. 25~28 遺物觀察表 (瓦)	112
Tab. 29 遺物觀察表 (木製品)	116
Tab. 30 近世前期の居住者と性格	125
Tab. 31 絵図・史料にみる追手筋と居住者の変遷	126

写真図版目次

卷頭図版 1 SD2墨書瓦出土状況、SX14遺物出土状況・SK11・TP2西壁セクション	
卷頭図版 2 墨書瓦、尾戸焼皿、尾戸焼蓋、火入れ又は香炉、同底部の墨書	
卷頭図版 3 肥前産白磁水滴、肥前産色絵皿、京焼又は京都系色絵皿、京焼皿、鉄絵壺、土師質土器人形、土師質土器人形、泥面子	
PL. 1 調査前風景、調査区遠景	
PL. 2 TPI 石列1	
PL. 3 TPI 石列1の胴木痕、TP1 石列1最下段の石列	
PL. 4 TPI SX1完掘状況、TP1 SD2縹出土状況	
PL. 5 TPI SD2墨書瓦出土状況、TP2 瓦溜2遺物出土状況	
PL. 6 TP3 SK3遺物出土状況、TP2 SK3・SX9・SK11セクション	
PL. 7 TP2 SX9・SD1完掘状況、TP2 SK11・SX14	
PL. 8 TP2 SK11、TP2西壁セクション	
PL. 9 TP2 SX14遺物出土状況	
PL. 10 TP2 SX14遺物出土状況、TP3 SK12・13	
PL. 11 TP3 SK2セクション、TP4 SK4・7セクション	
PL. 12 TP5 SK5セクション、TP6 SK8木片・礫出土状況	
PL. 13 TP4 SK4遺物出土状況、TP6 SK6遺物出土状況、TP2 SX14遺物出土状況、TP1 瓦溜1 遺物出土状況、 TP2 瓦溜2遺物出土状況	
PL. 14 TP2 II層遺物出土状況、TP3 III層遺物出土状況、TP1 石列 1 遺物出土状況、 調査区周辺の遺跡	
PL. 15 SK2~4出土遺物	
PL. 16 SK4・5出土遺物	
PL. 17 SK6・9・11出土遺物	
PL. 18 SD2・SX1出土遺物	
PL. 19 SX1・9出土遺物	
PL. 20 SX9・12・14・瓦溜1出土遺物	
PL. 21 瓦溜1出土遺物	

- PL. 22 瓦溜1出土遺物
PL. 23 瓦溜1・2出土遺物
PL. 24 瓦溜2出土遺物
PL. 25 瓦溜2・3出土遺物
PL. 26 瓦溜4出土遺物
PL. 27 瓦溜4～6・II層出土遺物
PL. 28 III・III'層出土遺物
PL. 29 III・III'・搅乱層出土遺物
PL. 30 石列1・SX8・I層・搅乱層出土遺物

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

追手筋遺跡は高知市の中心市街地であり、高知城の追手門から東西に通る追手筋に面している。近世の追手筋は藩主の参勤交代出立の大名行列が通行する道であり、藩の会所や家老屋敷、上級武士の屋敷が並ぶ町筋であったことが絵図から知られている。

対象地は、追手筋に面した高知市立追手前小学校の構内にあたり、平成25年3月の小学校統合移転に伴って、跡地への新図書館建設設計画がなされていた。当地点は郭中参考地内にあり近世遺跡の広がりが予想されたことから、平成23年、対象地内の埋蔵文化財の有無についての照会が、高知市教育委員会を経由して高知県に提出された。これを受けた高知県教育委員会が試掘調査を実施し、校庭の4箇所に設けた試掘坑において近世の遺物包含層とピット、溝、杭等の遺構を確認した。平成23年12月に小学校構内の範囲が埋蔵文化財包蔵地に指定され、追手筋遺跡として新設された。

平成24年度は未調査であった校庭の南側部分について、高知市教育委員会が試掘調査を行った。調査は8月20日～8月24日に実施した。

平成25年3月には追手前小学校が閉校し、校舎の解体が開始された。平成25年度は旧校舎基礎内の埋蔵文化財の残存の可能性がある範囲について試掘調査を行ったもので、5月24日～6月19日にかけて実施した。

これらの調査結果を受け、新図書館建設予定地において、高知県埋蔵文化財センターが平成25年度に発掘調査を実施した。

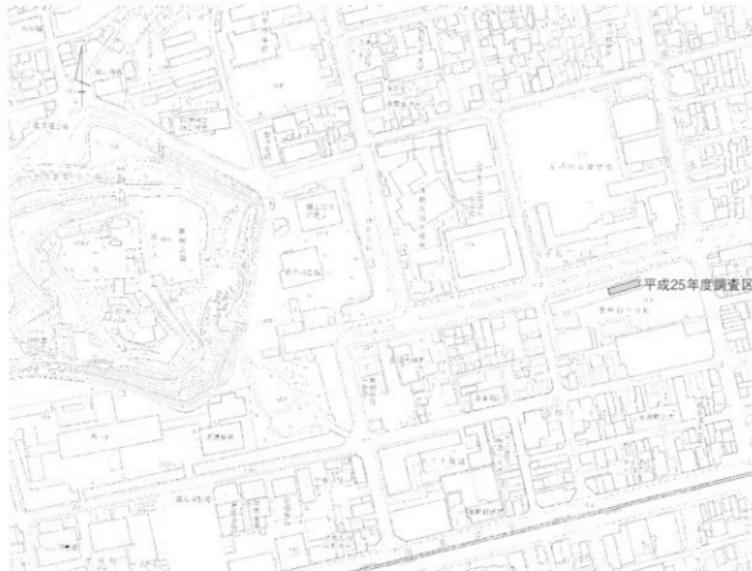


Fig.1 追手筋遺跡調査区位置図

1 / 1

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

高知市は土佐湾に面し、東部には高知平野、市域の西部から北部には東西に山地が連なっている。河川は、市の西北部から鏡川が東流して浦戸湾に注ぎ、南国市北部と香美市西部域からは国分川が西流して、江ノ口川、舟入川と共に浦戸湾に注いでいる。現平野部のほとんどは古くは内海であったが、その後鏡川などによる堆積や隆起、干拓による埋め立てなどによって、近世以降ほぼ現在の状態になったものである。

追手筋遺跡が立地する高知市の中心市街地は、北部は標高400～600mの東西に連なる山地、南方を300m級の帯状の山地、西方をなだらかな丘陵によって囲まれた平野部にあり、周囲には大高坂山、小高坂山、能茶山、比島山、葛島山などの小分離丘陵が存在している。しかし、かつては鏡川によって形成された三角州上に広がる低湿地であったため、平野部の土地は総体的に低く、集中豪雨、台風、津波による水害が繰り返される地域でもあった。一方で、平野部に内陸深く入り込む浦戸湾は自然の良港となり、近世には浦戸湾に注ぐ鏡川、江ノ口川の水運によって、交通至便の立地環境を得ることとなった。

追手筋遺跡は小分離丘陵である大高坂山の西にあり、その山裾から延びる微高地の先端付近に立地している。大高坂山の北を流れる江ノ口川は、現代の河川改修によって現在は東へ直線的に流れているが、かつては川筋が南側に大きく迂回し、山のすぐ北西側まで迫っていたことが近世の絵図から知ることができる。

2. 歴史的環境

周辺の遺跡

縄文時代の遺跡としては、高知市北部の丘陵に位置する福井遺跡、宇津野遺跡で縄文時代の遺物が検出されている。また、長浜チドノ遺跡から縄文前期の羽鳥下層式土器、正蓮寺不動堂前遺跡からは縄文中期初頭の舟元I式土器や礫石錘、縄文後期～晩期の条痕土器や磨研土器、高知市西部の柳田遺跡からは縄文後期～晩期の土器が出土している。

弥生時代には、福井遺跡、高知学園裏遺跡、初月遺跡、北秦泉寺遺跡など、丘陵沿いを中心に遺跡が増加する他、柳田遺跡では弥生前期の大篠式土器などが出土している。弥生時代中期から後期にかけては、山地・丘陵部に立地するからーと口遺跡、城山遺跡、高天原遺跡などがある。注目されるものとして、県下最古の中広形銅矛2本が池地区的長崎より、県下唯一の有柄式石劍と片刃石斧が北秦泉寺遺跡より出土している。また、大高坂山の北西側に立地する尾戸遺跡においても、弥生前期の大型蛤刃石斧の出土が確認されている。

古墳時代では、北部山麓に吉弘古墳、愛宕不動堂前古墳、宇津野1号墳、2号墳等の後期古墳が点在する秦泉寺古墳群が存在し、高知市西部から南部にかけての丘陵部には、7世紀前半の横穴式石室をもつ朝倉古墳や、塚ノ原古墳群が存在する。平野部においては、中島町遺跡や西秦泉寺遺跡などの遺跡が確認されている。

古代では、白鳳～奈良時代の瓦を出土する秦泉寺廃寺跡、東久万池田遺跡、西秦泉寺遺跡、吉弘遺跡、松葉谷遺跡、高知学園裏遺跡等がある。記録の上では高知市中心部の北西側に高坂郷が成立し、以後中世にかけて、南側の低湿地へと開拓が進んでいったものと推察される。

中世には、大高坂城跡、福井中城跡、万々城跡、安楽寺山城跡など、多くの山城が丘陵部に立地するようになる。大高坂城跡は南北朝期に土佐の南朝方として活躍した大高坂氏の居城であり、大高坂氏が暦応2～3年(1339～1340)に北朝方の攻撃を受け敗退した^(注1)後は、天正16年(1588)に長宗我部元親が岡豊城から大高坂山に移り、その後同氏が浦戸へ移る天正19年(1591)までの間、長宗我部氏の居城となった。高知城三ノ丸跡の平成16年度発掘調査では、現存する東石垣の背面で長宗我部の時代に遡る天正期の石垣が検出され、桐文軒丸瓦も出土している。

近世の遺跡は、高知城跡、高知城伝下屋敷跡、弘人屋敷跡、金子橋遺跡、西弘小路遺跡、帯屋町遺跡、本町遺跡、尾戸遺跡などが確認されている。高知城は享保12年(1727)に焼失するが再建され、現在、国の重要文化財に指定されている。平成5年度の御台所屋敷跡の発掘調査では、ピット、礎石、溝、石垣などの遺構が検出されている。城下町では、藩閥連の屋敷跡である高知城伝下屋敷跡、上級～中級武士の屋敷跡である弘人屋敷跡、金子橋遺跡、西弘小路遺跡などの調査が行われ、近世城下町の様相が次第に明らかになってきている。近世の窯跡には、尾戸窯跡と能茶山窯跡がある。尾戸窯は高知城の北西に位置する尾戸の地に、承応2年(1653)に開かれた藩の陶器窯で、茶陶を中心として優れた製品が作り出された。しかし文政3年(1820)には、城下の西方にある能茶山に能茶山窯磁器窯と陶器窯が開かれ、文政5年(1822)に尾戸窯も能茶山に移転することになった。

開成館跡は慶応2年(1866)に土佐藩が創立した勤業貨殖および技術教育の統括機関であり、慶応3年(1867)に山内容堂と英公使の通訳官アーネスト・サトウとの会見がなされた。明治初期には外客接待の場として「賓賓館」と改まり、明治4年(1871)に、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、杉孫三郎と板垣退助、福岡孝弟による会談が行われている。

大高坂山周辺の遺跡 - 古代・中世

追手筋遺跡の近隣にある大高坂山とその周辺の地域は、古代の高坂郷に属していた。高坂郷の名稱は、10世紀初めの『和名類聚鈔』に見えており、そこには「土佐郡 五郷 土佐・高坂・鶴部・朝倉・神戸」とある。こうした記述から、律令制下における高坂郷の開発は、平安時代にはすでに進められていたと考えられる。高知城跡平成18年度調査^(注2)では、大高坂山北側の微高地で古代の遺物包含層と土坑群を検出し、8～9世紀の遺物が出土している。東部では、弘人屋敷跡平成23・24年度調査^(注3)によって古代の土坑群や区画溝などが検出され、大高坂山から東に延びる微高地の南縁付近が11～12世紀には居住に適した立地環境にあり、開発が進められていたことが明らかにされた。

南北朝時代には、土佐の在地領主らが二派に分かれて争い、大高坂を主戦場に度々合戦が行われたとされる。『佐伯文書』によると、在地の有力地頭とみられる大高坂氏が城を構え、「大手」「一城戸」「西大手」「西之城戸」などがあったとされている。

中世の遺跡は、弘人屋敷跡平成23・24年度調査で15～16世紀前半の水路や区画溝、土坑、埋葬構などが多數検出されており、この時期の活発な土地利用の様子が窺える。

中世末には、長宗我部元親が天正16年（1588）に居城を岡豊城から大高坂に移し、城下町の設営を開始した。『長宗我部地検帳』によると当地には「弓場ヤシキ」「大テンスノ下」「御土居」などの語もみられ、一定の築城がなされていたことが推察される。しかし城下町建設は不調に終わり、2年余りで浦戸城への再移転となる。

高知城と近世城下町の形成

関ヶ原合戦後、土佐国を与えられた山内一豊は、慶長6年（1601）に長宗我部氏の居城であった浦戸城に入城した。その後、国内統治の要衝の地として大高坂山を城地に選び、慶長6年9月に築城を開始した。慶長8年（1603）には、本丸の建物と二ノ丸石垣までが竣工し、慶長16年（1611）に三ノ丸が完成して高知城の竣工に至った。築城当初、城山の名称は「河中山」とされたが、城下がたびたびの水害に悩まされたためその名を忌んで、慶長15年（1610）に「高智山」と改めた。

正保年間（1644～1648）の「正保城絵図」^[註4]、及び慶安5年（1652）の「慶安五年高知郭中絵図」^[註5]によると、城の南側と西の搦手門付近には下屋敷があり、南東及び北東には侍屋敷が置かれていた。また、寛文9年（1669）頃の城下の様子を表した「寛文己酉高知絵図」^[註6]（Fig.2）では、城の南東に「御馬場」、東北には江ノ口川に接して「御作事場」「御米蔵」「御武具蔵」等の藩の施設がみえている。

これらを囲んで、城の東・西・南に内堀が巡らされ、北は江ノ口川（当時の大川）が堀としての役割を果たした。城門は東西南北の4棟が設けられ、東を追手とし、西を搦手とした。

築城に並行して、城下町の造営も進められた。南の鏡川と北の江ノ口川を天然の外堀とし、東側と西側は新たに堀を設けて外堀とした。これらの外堀に囲まれる区域が郭中とされ、上級・中級武士の居住区となった。さらに郭中を挟んで、西には上町、東には下町を配した。上町は主に足軽、武家奉公人など下士の者を住ませ、下町には武士の生活を賄うための町人の居住地区が設けられた。上町、下町と郭中との境界は、東は廿代橋より南に堀詰を経て鏡川に至る線、西は江ノ口川より南に金子橋、築屋敷に至る線がこれにあたり、郭中との境には外堀とともに、土堤を築いて両者を区画している。

近世の追手筋

近世の追手筋遺跡は、「大門筋」「大御門筋」「大手筋」と呼称される東西の筋に面している。この筋は、城の正門である「大手門」前から東の廿代筋までを東西に延びる儀礼上の表通りであり、参勤交代の列がここを通り山田橋へ向かった。「大手門」の前は広小路になっており、ここから東に延びる筋の両側には、家老や藩主の一族などの屋敷が並び、近世中期から後期には会所や藩校教授館も置かれた。

寛文9年（1669）頃の城下の様子を描いたとされる「寛文己酉高知絵図」^[註6]（Fig.2）では、筋の南に面して西から「野々村長左衛門」「山内蔵監」「百々伊織」「山内左衛門佐」の屋敷、北に面して西から「寺村淡路」「寺村清兵衛」「桐間兵庫」「村田康庵」「並川主税」の屋敷がみえている。これらのうち平成25年度調査区が該当する一画は、西が家老職「百々伊織」、東が「山内左衛門佐」の屋敷にあたる。近世中期以降になると、居住者は西が山内氏、東が村田氏へと入れ替わっており、以後幕末まで、山内姓を与えられた家老や藩主主治医の屋敷となっている。

近現代

明治初年の廃藩置県を経て、明治6年（1873）に高知城の建物の一部は解体され、公園となった。

当調査区が所在する追手筋南面の敷地には、私学成章學舎を母校として、明治5年（1872）に高知街連公立小学校が創立され、その後、明治9年（1876）に追手筋小学校、明治24年（1891）に高知市第三尋常小学校、昭和16年（1941）に高知市第三国民学校と改称された。

この頃の地図をみると、明治30年（1897）の地図^(註7)では調査対象区画の西寄りの位置に「第三尋常小学校」の記述が見え、大正14年（1925）の地図^(註8)では区画西半分の敷地が「第三尋常小学校」、昭和4年（1929）の地図^(註9)でも区画の西半分が「第三小学校」となっている。

終戦後は、昭和21年（1946）に高知市が決定した戦災復興計画をうけて、街路網の整備が進められ、追手筋も道幅の拡張や街路樹の植栽が行われた。この頃の地図によると、昭和24年（1949）^(註10)や昭和25年（1950）の地図^(註11)では筋の西端に近世以来の広小路が残るが、昭和28年（1953）^(註12)、昭和29年（1954）の地図^(註13)には、広小路の道幅が東まで延長されて現在の姿となった追手筋が示されている。

小学校は、昭和20年7月の空襲によって校舎が全焼したが、昭和22年には高知市立追手前小学校と改称されて校舎建設が着工され、翌年から昭和25年にかけて校舎が完成した。長く親しまれた追手前小学校は、その後、平成25年3月に新堀小学校と統合されて、はりまやばし小学校となり、141年の歴史を閉じた。

【註】

- 1)『土佐國圖簡集拾遺』
- 2)『史跡 高知城跡－北曲輪地区埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会2011年
- 3)『弘人屋敷跡－新資料館整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県・高知県文化財団埋蔵文化財センター 2014年
- 4)『正保城絵図』国立公文書館所蔵
- 5)『慶安五年高知郭中絵図』高知市立市民図書館所蔵
- 6)『寛文己酉高知絵図』高知市立市民図書館所蔵
- 7) 明治30年「土佐國高知市街圖」高知市立自由民権記念館蔵『描かれた高知市』P107より引用
- 8) 大正14年「高知市街圖」個人蔵『描かれた高知市』P113より引用
- 9) 昭和4年「高知市街地圖」高知市立市民図書館蔵『描かれた高知市』P116より引用
- 10) 昭和24年「高知市街地圖」高知市立自由民権記念館蔵『描かれた高知市』P136より引用
- 11) 昭和25年「高知市街案内圖」高知市立市民図書館蔵『描かれた高知市』P153より引用
- 12) 昭和28年「高知市街図」個人蔵『描かれた高知市』P138より引用
- 13) 昭和29年「最新高知市街図」個人蔵『描かれた高知市』P139より引用

【参考文献】

横川末吉「第一編 古代・中世」「高知市史 上巻」高知市1958年

平尾道雄「第二編 近世」「高知市史 上巻」高知市1958年

『高知市戦災復興史』高知市1969年

『稿本 高知市史 現代編』高知市史編さん委員会・高知市1985年

『高知城下町読み本 -改訂版-』土佐史談会・高知市教育委員会2004年

『描かれた高知市 -高知市史絵図地図編』高知市史編さん委員会絵図地図部会・高知市2012年

『百四十一年の歩み -高知市立追手前小学校閉校記念誌』高知市立追手前小学校「創立141年の歩み・閉校記念」事業実行委員会2013年

『史跡高知城跡1 -高知市立動物園跡地の史跡整備化に伴う御台所屋敷跡発掘調査報告書』高知県教育委員会 1994年

『高知城跡 -伝御台所屋敷跡史跡整備に伴う発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995年

『高知城三ノ丸跡 -石垣整備事業に伴う試掘確認調査概要報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001年

『史跡高知城跡 -三ノ丸石垣整備事業に伴う発掘調査報告書』高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター 2010年

『高知城伝下屋敷跡 -高知地家簡裁序舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002年

『史跡高知城跡 -本丸石垣整備事業報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004年

『史跡高知城跡 -丸ノ内縁地試掘確認調査報告書』高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター 2006年

『尾戸窓跡 -共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会2007年

『開成館』高知市教育委員会2007年

『金子橋遺跡 -第六小学校屋内体育館及びプール改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会2008年

『西弘小路遺跡 -総合あんしんセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会2010年

『史跡高知城跡 -北曲輪地区埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会2011年

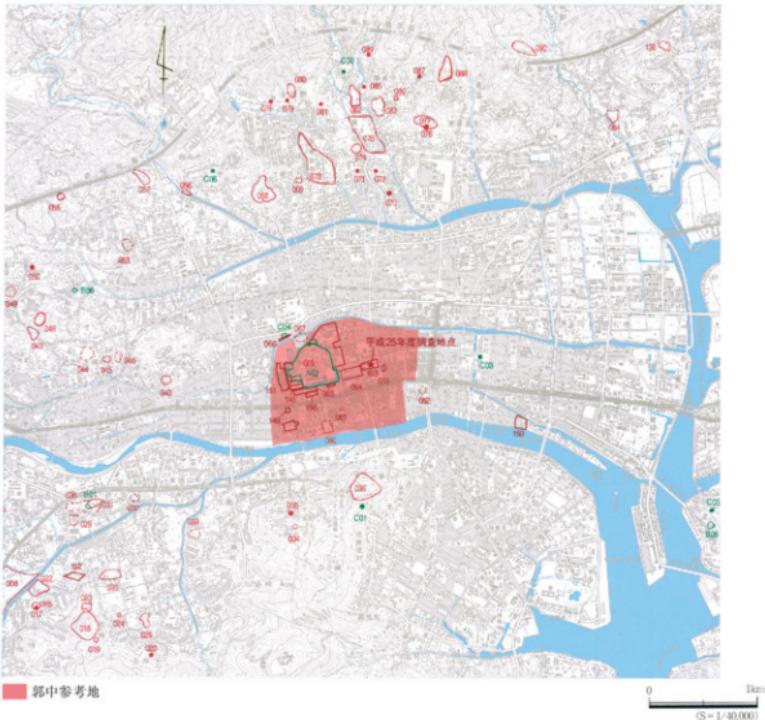
『西弘小路遺跡 -高知法務総合庁舎新営埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター 2012年

『史跡高知城跡 高知城跡 -内堀跡西側地区埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会2013年

『弘人屋敷跡 -新資料館整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県・高知県文化財団埋蔵文化財センター 2014年



Fig.2 寛文己酉高知絵図（抜粋）（高知市立市民図書館 平尾文庫所蔵）



■郭内参考地

0 1km
(S=1/40,000)

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
153	追手筋道路	近世	053	幕保宇室跡	中世	084	莉野城跡	古代
008	柳田道跡	礪文～古墳	055	福井道跡	礪文～中世	085	日の岡古墳	古墳
016	舟岡山道跡	弥生	056	初月道跡	弥生	086	北菴寺道跡	弥生
017	舟岡山古墳	古墳	057	万々城跡	中世	087	渕谷古墳	古墳
018	神田南城跡	中世	060	南御屋敷跡	近世	088	菴寺道城跡	中世
019	ケンカ瘤道跡	弥生	061	中島町道跡	古墳	089	菴寺道仁井田神社裏古墳	古墳
020	高原古墳	古墳	062	國城城跡	中世	090	莉野城跡	中世
022	鍋泊横付丘道跡	弥生～中世	063	高知城跡・大高坂城跡	中世・近世	136	一官別城跡	中世
023	シルダニ遺跡	弥生・古代	064	私人屋敷跡	近世	146	高知城伝下屋敷跡	古墳～近世
024	高神道跡	古墳・古代	065	常原町道跡	古墳・中世・近世	149	金子橋道跡	近世
025	神田道跡	弥生・中世	066	尾戸道跡	近世	150	開成船跡	近世～近代
026	神田木入道跡	弥生・中世	067	尾戸室跡	近世	151	西弘小路道跡	近世
029	鳴部道跡	礪文・弥生・古代	068	安楽寺山城跡	中世	152	男子洗道跡	弥生・中世・近世
030	神田旧城跡	中世	069	東久万進田道跡	古代～中世	156	本町道跡	中世・近世
033	能茶山廃跡	近世	070	愛宕不動前古墳	古墳	四指定史跡		
035	石立城跡	中世	071	豪小学校前古墳	古墳	A02	高知城跡	近世
039	久寿崎・丸道跡	弥生～中世	072	愛宕神社裏古墳	古墳		高知県指定史跡	
034	小石木町道跡	弥生	073	西菴寺道跡	古墳	B01	能茶山廃跡	近世
035	小石木山古墳	古墳	074	菴寺別寺城跡	中世	B06	庚持鷺沼跡	近世
036	瀬江城跡	中世	075	菴寺別廻寺跡	古代	B08	曉江庵跡	中世～
040	井戸城跡	中世	076	土居の前古墳	古墳		高知県指定史跡	
043	高知学園裏道跡	弥生～古代	077	前里城跡	中世	C01	野中豪山墓	近世
044	福井西城跡	中世	078	宇津野1号古墳	古墳	C02	吉弘古墳	古墳
045	福井中城跡	中世	079	宇津野1号墳	古墳	C03	桜井跡	近世
046	福井元尾城跡	中世	080	宇津野道跡	礪文	C04	寺田寅彦邸跡	明治
048	かろと口道跡	弥生	081	菴寺道新原敷古墳	古墳	C05	伊達兵部宗勝墓	近世
049	福井別城跡	中世	082	吉弘道跡	古代	C06	桑名古冢墓	近世
050	福井古墳	古墳	083	松葉谷道跡	古代～中世			

*Noは高知市道跡地図による。

Fig.3 追手筋遺跡及び周辺の遺跡

第Ⅲ章 調査の方法

高知県教育委員会が実施した平成23年度試掘調査(H23-TP1～4)に続き、平成24年度は校庭南部の3箇所(H24-TP5～7)に試掘坑を設定し、遺構検出と堆積状況の確認を行った。各試掘坑の規模は平成24年度調査TP5・6が3×3m、TP7が2×2mである。

平成25年度の調査では、校舎上部の解体の後、基礎枠内の6箇所(H25-TP1～6)において遺構検出と堆積状況の確認を行った。各試掘坑の規模はTP1が3.3×5.5m、TP2が3×5.7m、TP3が3×4.9m、TP4が3×5m、TP5が3.2×5m、TP6が3×4.7mである。

掘削は主に重機を用い、遺物包含層の掘削と遺構検出作業、遺構掘削は人力によった。また、一部については、近世の遺構検出面よりさらに下層まで掘削し堆積状況の確認を行った。検出された遺構については土層観察を行うとともに、土層断面図と平面図を作成し、写真撮影を行った。

遺構の平面実測及び土層断面図については、20分の1を基本に適時任意の縮尺を用いた。水準及び座標については、追手筋2丁目1番他に設置されている準拠点より導いた。



Fig.4 調査区風景

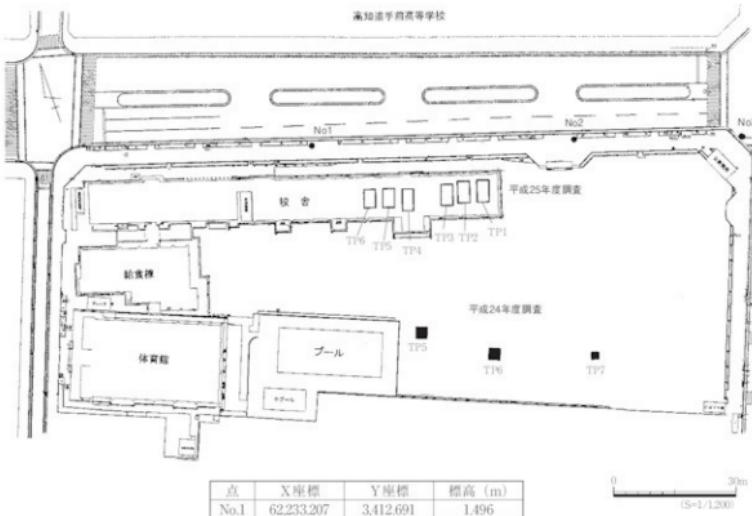


Fig.5 平成24・25年度調査 試掘坑配置図

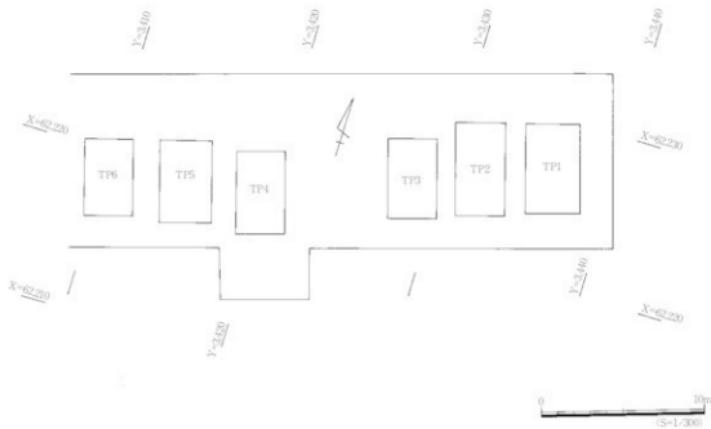


Fig.6 平成25年度調査 調査区位置図

第Ⅳ章 平成24年度試掘調査

平成24年度の調査では追手前小学校運動場の南部に試掘坑TP5～7を設定し、土層観察と遺構検出作業を行った。各試掘坑の概要は次の通りである。

なお、平成25年度に高知県埋蔵文化財センターが実施した発掘調査によると、TP5・6設定位置周辺で近世の池状遺構や土坑などの大型遺構が多数検出されている。試掘調査では遺構の特定が難しかったが、土層の一部にはこれら大型遺構の埋土に該当するものがあると考えられる。

TP5 (Fig7)

運動場の南西部に設定した試掘坑である。

1・2層は運動場造成土、3・4層は現代の整地層、6～8層は近現代の整地層である。5層は礫と焼土、炭化物を多く含む明赤褐色シルト層で、橙色に変色した瓦片や焼けた柱材、被熱し溶解したガラス片などの現代の遺物を含むことから、昭和20年の高知空襲後の廃棄層とみられる。

9層（標高0.68m～0.90m）は灰黄褐色シルト層で、炭化物、漆喰のブロック、シジミ貝等の貝殻を多く含んでいる。10層は明黄褐色シルト層で、漆喰のブロックを含んでいる。

11層（標高0.35m～0.68m）は灰黄褐色シルト層で、木片、瓦片、近世陶磁器、土器が多く出土しており、江戸後期の遺構の埋土であった可能性が考えられる。

12層（標高0.15m～0.35m）は褐灰色粘質シルト層、13層（標高-0.08m～0.15m）は砂混じりの褐灰色粘質シルト層で、とともに植物遺体を含んでいる。このうち、13層からは瓦片、木片、江戸後期の陶器片が少量出土している。14層（標高-0.26m～-0.08m）は粘質シルトが混じる褐灰色粗砂層で、植物遺体を含んでおり、桃の種と近世の土器片が出土している。

15～17層は細砂、粗砂、砂礫の堆積層で、出土遺物は確認できていない。

TP6 (Fig7)

運動場の南部に設定した試掘坑である。

1・2層は運動場造成土、3・4層は現代の整地層、6～8層は近現代の整地層と搅乱層である。5層は礫と焼土、炭化物を多く含む暗褐色シルト層で、TP5と同様に被熱した瓦片その他の現代の遺物を多く含んでおり、昭和20年の高知空襲に伴う廃棄物層とみられる。

9層（標高-0.46m～-0.18m）は褐灰色粘質シルト層である。9層からは荷札とみられる木片(1)、箸(2・3)などの木製品、板材が出土する他、丸太材を使用した3本の杭が打ち込まれる様子が確認された。検出位置や埋土の状況からみて、同層は池状遺構との関連が考えられる。

標高-0.46m以下に堆積する10層は、砂混じりの褐灰色粘質シルト層である。

TP7 (Fig7)

運動場の南東部に設定した試掘坑である。

1層は運動場造成土、2・3層は現代の整地層、4・5層は現代の搅乱層である。4層内にコンクリートの基礎が残存していたため、5層以下の調査は断念した。

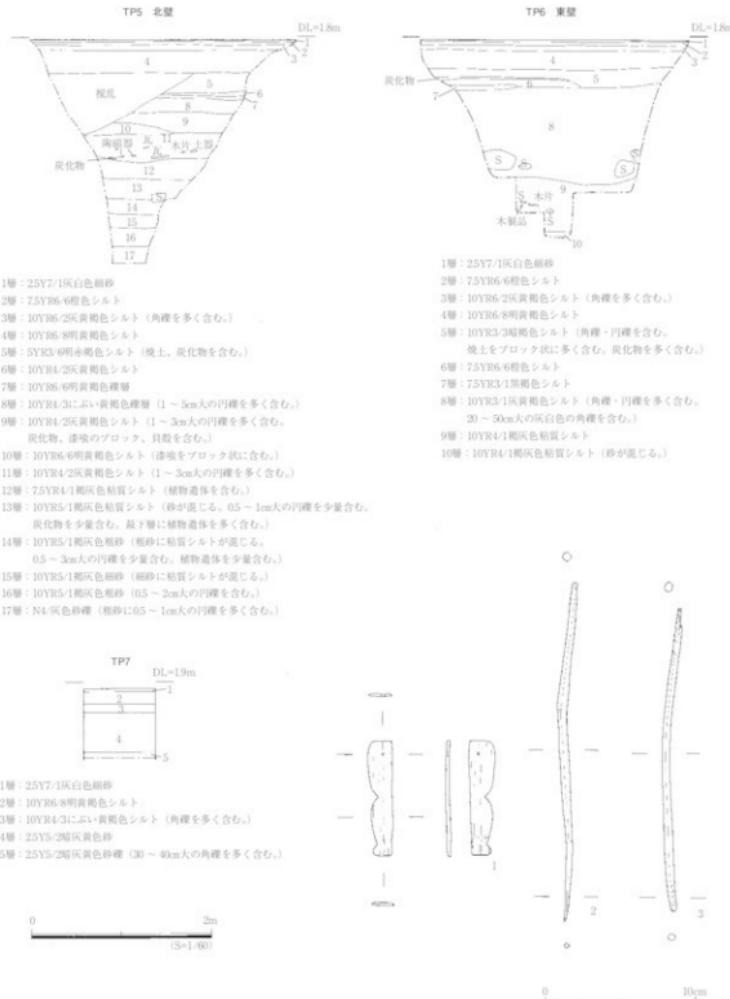


Fig.7 平成24年度調査 TP5～7セクション図・土層柱状図・TP6出土遺物実測図

第V章 調査の成果

第1節 基本層序 (Fig.10~15)

基本層序は、試掘坑TP1～6の中央に設定した東西バンクの南壁、TP2の東壁と西壁において観察した。各層の特徴は以下の通りである。

I-1層：明褐色シルト・黄褐色シルト

I-2層：明褐色シルト

I'層：にぶい赤褐色シルト

II層：灰黄褐色シルト

III層：灰黄褐色シルト

III'-1層：灰黄褐色砂質シルト、III'-2層：灰白色礫、III'-3層：灰黄褐色礫

IV層：黄灰色シルト・灰黄色シルト、IV'層：黄灰色粘質シルト

V層：暗灰黄色砂・灰色砂質シルト・黄灰色砂質シルト・灰黄色砂質シルト

V-1層：灰黄色砂質シルト、V-2層：灰黄色砂

I-1層は現代の整地層で、現在の地表面である標高1.6m以下に堆積する。TP5～6では標高1.1m以下で昭和20年の火災層とみられるI'層がI-1層の下面で検出されており、I-1層は昭和20年代以降の整地層にあたる。

I-2層は明褐色シルトに礫や橙色土が混じり、近現代の整地層にあたる。TP2では橙色のハンダを使用した遺構が検出されており、同層から近現代の遺物が多く出土している。

I'層は焼土と、被熱し変色した瓦片や煉瓦他の現代の遺物を多量に含んでおり、昭和20年の高知空襲に伴う火災層と推定される。

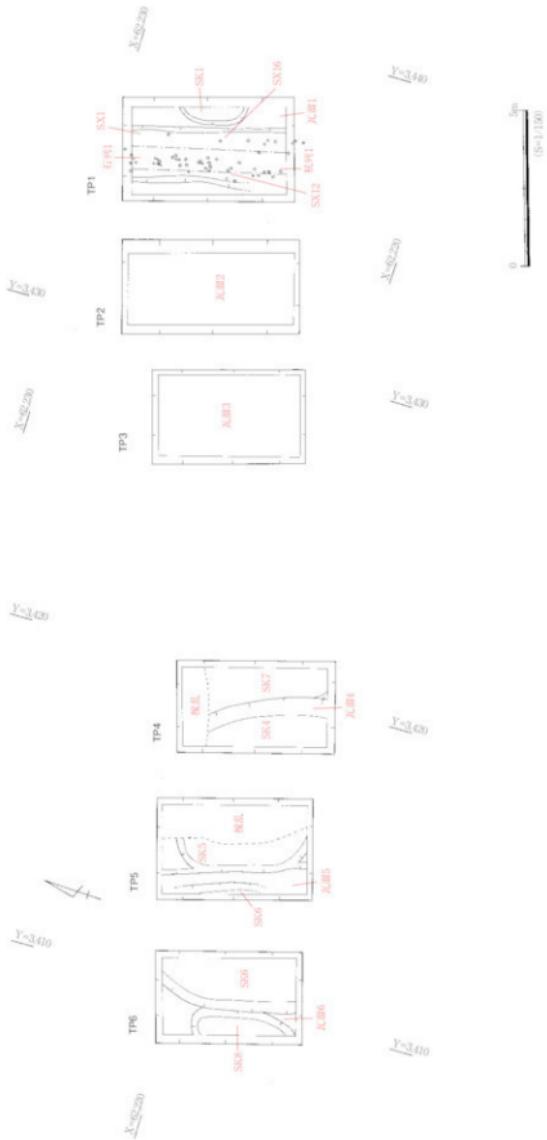
II層は近世後期の遺物包含層である。TP2～6では幕末の廃棄土坑と瓦溜りが広範囲に広がり、残存しないが、TP1では幕末の瓦溜りの直下で検出されている。

III層は角礫と円礫を多く含むシルト層で、近世前期の整地層にあたる。近世後期の遺構によって上面を削平され、本来の上面レベルが明らかでないが、TP1で標高0.2m、TP3で標高0.7m、TP2で標高0.5m、TP4では標高0.4m以下で検出されている。III'-1～3層はTP1～3で検出された砂質シルト層と礫層で、III層と同時期頃の整地層と考えられる。このうちTP2で検出されたIII'-1・2層は白色系の風化礫のブロックや細粒を多く含んでおり、砂質シルトと礫層が層状に堆積している。

IV層はシルト層、IV'層は粘質シルト層で、TP1で標高-0.1m、TP2で標高0.2m、TP3で標高0.3m、TP4で標高0.1m、TP5で標高0.7m、TP6では標高0.4mで検出された。同層からは近世前期の遺物が少量出土している。

V層は砂質シルト層と砂層で、TP1で標高-0.3m、TP2で標高0.0m、TP3・5で標高0.1m、TP4で標高-0.05m、TP6で標高0.2m以下で検出した。出土遺物は未確認である。

V層以下では、円礫に粗砂が混じる灰色砂礫層が確認されている。



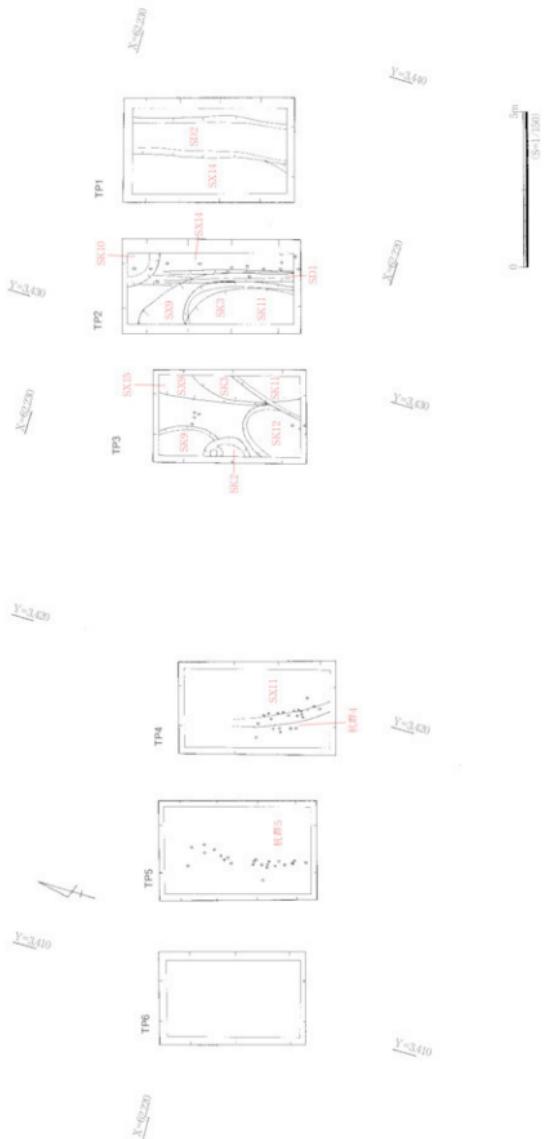


Fig.9 検出構造全体図（III・IV層）

第2節 試掘坑の概要

調査区に設定したTP1～6において近世前期から後期の遺構、近代の遺構を確認した。近世の遺構検出はⅡ層の下面、Ⅲ層の上位と下位、Ⅳ層上面で行った。

TP1 (Fig.10)

調査区東部に設定した試掘坑である。

現代の整地層であるI-1層の下面で、近代の石列1とSX8を検出した。

その直下には、近世末に瓦片と陶磁器・土器を多量に廃棄した瓦溜1が堆積しており、その下で近世中期～後期のSK1、SX1・12・16を検出した。また、SX1の床面付近から下位にかけて打ち込まれた、南北方向の杭群1を検出した。

近世前期の整地層にあたるⅢ'層の上面では、南北方向に延びる溝SD2を検出した。

さらにⅢ'層の下位からⅣ'層上面にかけては、近世前期の浅い落ち込み状の遺構SX14を検出した。SX14は西に隣接するTP2まで広がっており、双方で遺構と遺物の検出を行った。

TP2 (Fig.11)

調査区東部に設定した試掘坑である。

近現代の整地層I-2層では、ハンダによって組まれた長方形の施設を2基検出している。

I-2層の下面では、近世末の瓦溜2を検出している。

瓦溜2の直下では、火災関連の焼土溜りSK3と溝SD1を検出し、さらにその下面で、落ち込み状の性格不明遺構SX9と土坑SK10・SK11を検出している。これらは、近世の整地層とみられるⅢ層・Ⅲ'層を掘り込んでおり、整地層Ⅲ層の構築以後の遺構群にあたる。この他、Ⅲ'層の上面から下位にかけて、南北方向の杭群2を検出した。

Ⅲ層・Ⅲ'層の直下には、黄灰色シルトからなるⅣ層が堆積する。TP2東部では南北方向に延びる浅い落ち込み状の遺構SX14が検出されており、埋土中には腐植した植物や木片が多量に溜まっている。

TP3 (Fig.12)

調査区東部に設定した試掘坑である。

近現代の堆積層I-2層の下面では、近世末の瓦溜3を検出した。

Ⅲ・Ⅲ'層の上面ではSK3・SX9の一部を検出し、その下面でSK11'を検出している。

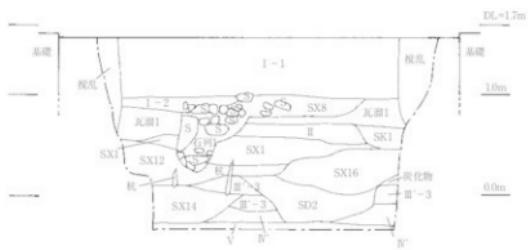
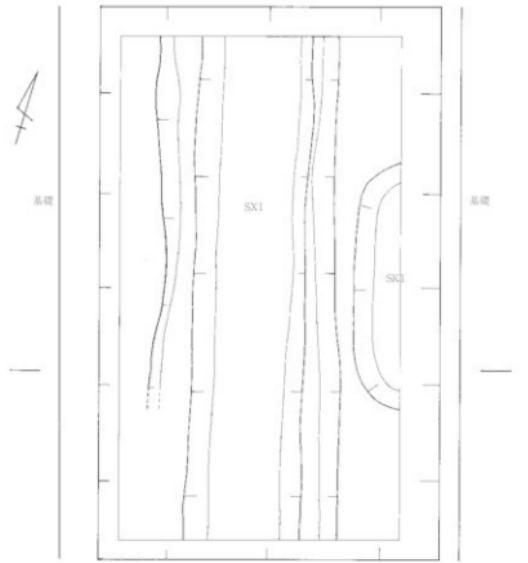
さらにⅢ層の下位からⅣ層上面にかけては、近世前期のSK2・9・12を検出した。また、Ⅲ層の中位からⅣ層上面にかけて、不規則に分布する杭群3を検出している。

TP4 (Fig.13)

調査区西部に設定した試掘坑である。

近代の堆積層I-2層の下面では、近世末の瓦溜4を検出した。さらにその下面で近世後期～末の廃棄土坑SK4・7を検出している。

SK4・7と整地層Ⅲ層の下面では、炭化物を多く含む粘質シルトの溜りであるSX11を検出し、この面に打ち込まれた杭群4を検出している。



1-1種：7.5YR5/6明褐色シルト（礫を多く含む）

1-2番：7.5YR5/6明褐色シルト（礫が多く含む。橙色土が混じる。）

Ⅱ層：10YR4/2灰黃褐色シルト。0.5～1cm大の角礫・円礫が多く、3～5cm大の円礫を少量含む。

炭化物を多く含む。褐色土粒、明暗褐色土のブロックを含む。泥炭のブロックを少量含む。

成化物と云ふ。綠色玉紅、明黃兩色玉のコレクションは強力なコレクションを有する。

直：3号：101R3/2灰黃褐色
面糊：25Y5/1鐵灰色

新規：25Y5/1青灰色粘質シ
リコン・セメントの施工範囲

V層：25Y5/2幅灰黃色的



Fig.10 TP1 平面図・セクション図

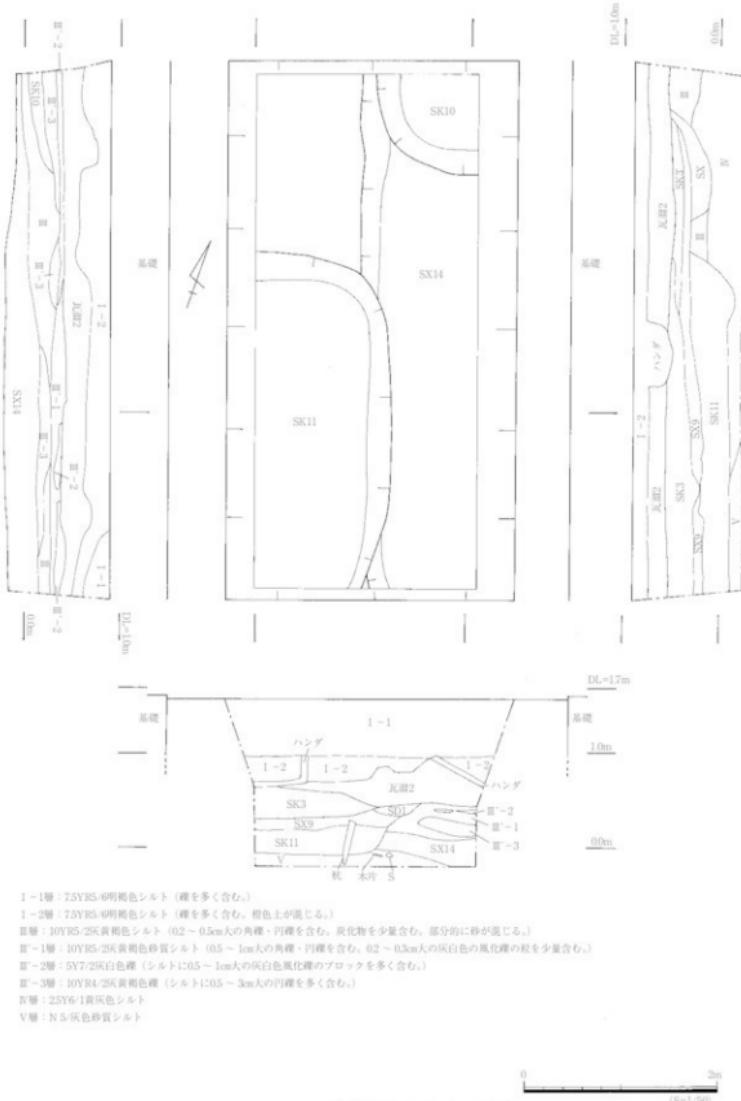


Fig.11 TP2 平面図・セクション図

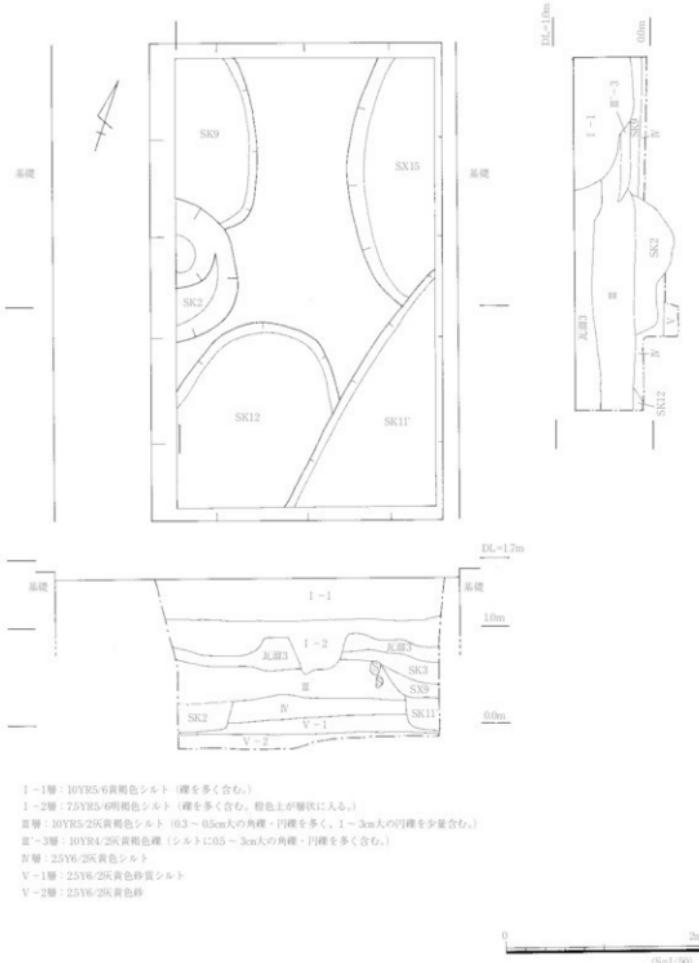
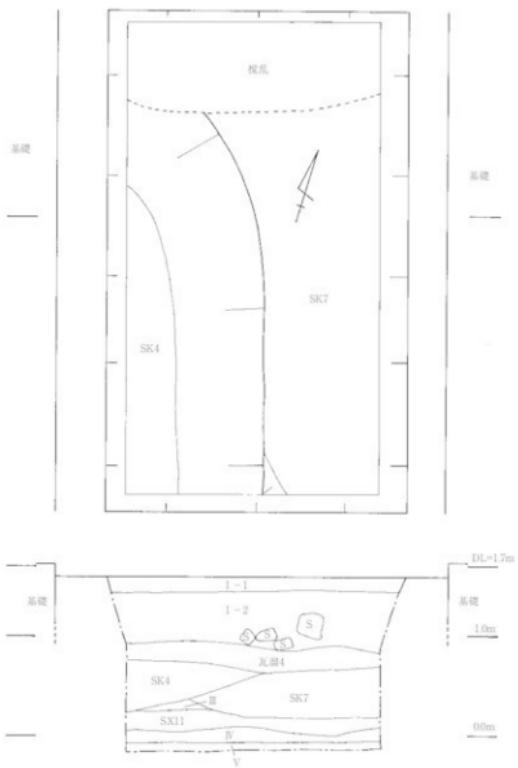


Fig.12 TP3 平面図・セクション図



I-1層：10YR5/6黄褐色シルト（縫を多く含む。）
 I-2層：75YR5/6明黄色シルト（縫を多く含む。橙色土が層状に入る。）
 II層：10YR5/2灰黄褐色シルト（0.3～0.5cmの大角縫・円縫を多く、1～3cm大の凹縫を少數含む。）
 III層：25YR6/1黄灰色シルト
 IV層：25YR6/1黄灰色砂質シルト
 V層：25YR6/1黄灰色砂質シルト



Fig.13 TP4 平面図・セクション図

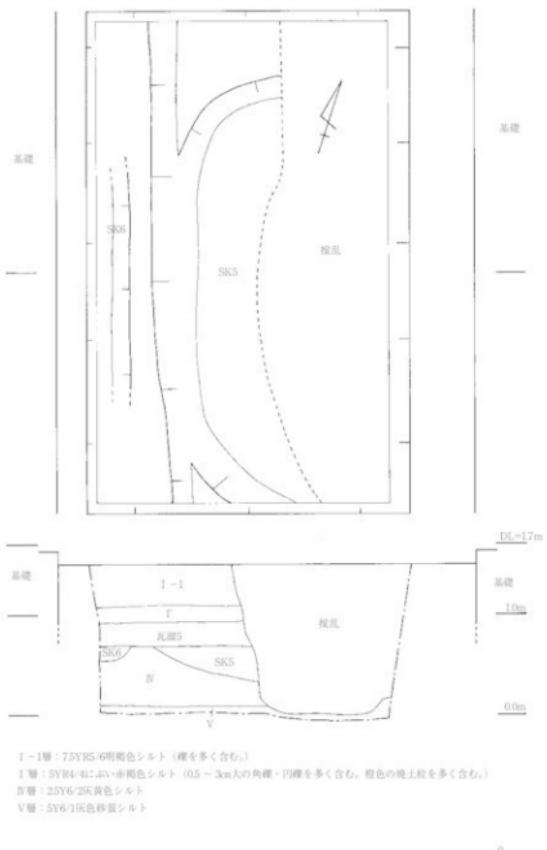


Fig.14 TP5 平面図・セクション図

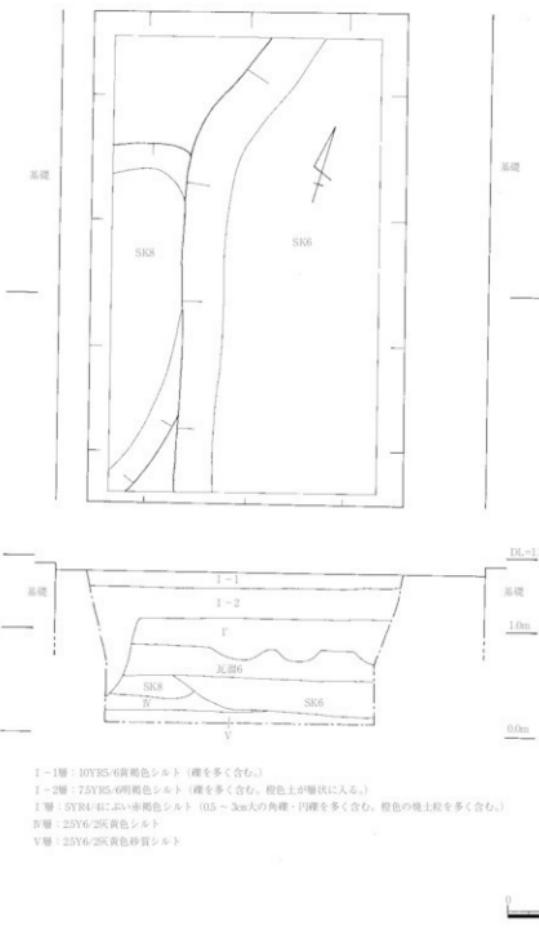


Fig.15 TP6 平面図・セクション図

TP5 (Fig.14)

調査区西部に設けられた試掘坑である。現代の整地層I-1層の直下にはI'層が堆積している。I'層はにぶい赤褐色シルト層に焼土粒を多く含んでおり、橙色に変色した瓦片や煉瓦などの遺物を多く含むことなどから、昭和20年空襲に伴う火災層の可能性をもつ。I'層の直下には近世末の瓦溜5が堆積し、その下面で近世後期のSK5・6を検出している。TP5では、SK5・6による掘削がIV層まで及んでいるが、IV層の上面では杭群5が検出されている。

TP6 (Fig.15)

調査区西部に設けられた試掘坑である。近現代の整地層I-2層の直下に、昭和20年空襲に伴う火災層とみられるI'層が堆積している。I'層の直下では近世末の瓦溜6が堆積し、その下面で近世後期のSK6・8を検出している。

第3節 遺構と遺物

今回の調査では、近世の土坑12基、性格不明遺構7基、溝2条、杭群、瓦溜り等を検出した。また調査対象地内に設定した6箇所の試掘坑のうち、東部側の試掘坑TP1・2において、屋敷境に関するとみられる近世から近代までの遺構を確認した。

1. 近世の遺構と遺物

(1) 土坑

SK1 (Fig.10・16)

TP1の東部に位置する土坑で、II層の上面で検出した。他遺構との切り合い関係では、SX1・16を切り、瓦溜1に切られている。西側の一部を検出したのみで全体の規模と形態が不明であるが、検出規模は南北長2.42m、東西残存長0.46m、深さ46cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は近世陶器・土器、瓦片で、瓦片はコンテナ1箱分が出土している。

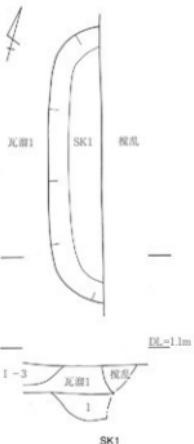
図示したものは4・5である。4・5は陶器。4は灰釉の鳥の水入れで、にぶい黄橙色を帯びる透明の釉を施している。5は灰釉の飼猪口である。

SK1は19世紀中葉に比定される。

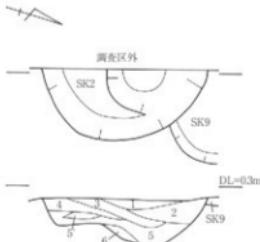
SK2 (Fig.12・16)

TP3の西部に位置する土坑で、SK9を切っている。SK2はIII層の下面～IV層上面で検出したものであるが、調査区の西壁ではSK2の上面付近でIII'-3層が切られているようにも見え、III'層との関係は不明である。東部を検出したのみで全体の規模と形態が不明であるが、南北長1.46m、東西確認長0.63m、深さ42cmを測る。床面は北側が深く、南にテラス状の高まりをもつ。埋土は灰黄褐色粘質シルトと灰黄褐色シルトで、床面には粘質シルトが混じった灰黄褐色粗砂(6層)が堆積する。また、木片を含んだ腐食植物の層(3層)が斜めに入り込んでおり、その下の灰黄褐色粘質シルト層(5層)にも炭化物が多く含まれている。

出土遺物は染付碗又は鉢・皿、白磁中碗、陶器中碗・碗又は鉢・擂鉢・火鉢又は火入・壺、青花皿、土師質土器小皿、及び陶磁器・土器細片と瓦片である。



1層：10YR4/2灰黄褐色シルト
(0.5～1cm大の角礫・円礫を多く、3～5cm大の円礫を少量含む。)



- 1層：10YR5/2灰黄褐色シルト (0.5～1cm大の角礫・円礫を含む。炭化物を少量含む。)
- 2層：10YR5/2灰黄褐色粘質シルト (炭化物を少量含む。)
- 3層：10YR3/2灰褐色シルト (腐食植物にシルトが混じる。)
- 4層：10YR5/2灰黄褐色シルト (0.5～1cm大の角礫・円礫を含む。炭化物を少量含む。)
- 5層：10YR6/2灰黄褐色粘質シルト (炭化物を多く含む。)
- 6層：10YR5/2灰黄褐色相移 (粗砂に粘質シルトが混じる。)

SK2

0 1m

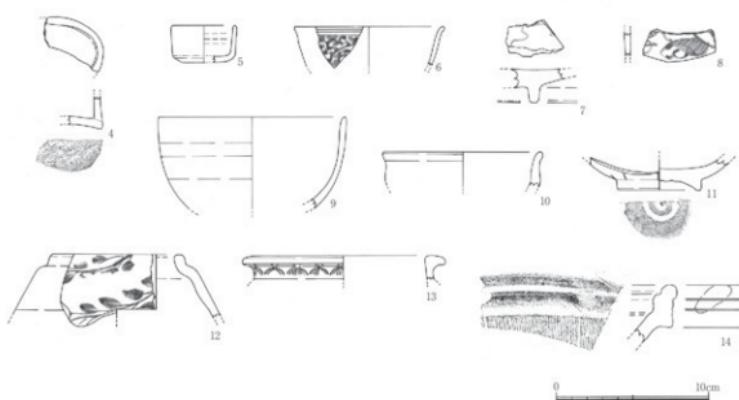


Fig.16 SK1・2 平面図・セクション図・出土遺物実測図
(SK1: 4～5、SK2: 6～14)

図示したものは6～14である。6～8は染付で、何れも肥前産。6は端反形の碗又は鉢で、唐草文を描く。7は皿である。8は宝文を描くもので、被熱し釉が変質している。

9～14は陶器。9は肥前産の灰釉丸形中碗で、にぶい黄橙色を帯びる透明の釉を施す。10は瀬戸・美濃産の鉄釉天目形碗である。11は京都系の碗又は鉢で、外面にヘラによる縦筋を施す。高台施釉で、にぶい黄橙色を帯びる半透明の釉を施している。12は壺で、外面に鉄絵による植物を描く。13は瀬戸・美濃産の火鉢又は火入で、外面に印花文を施し口縁部内外面にオリーブ黄色を帯びる透明の釉を施している。14は備前の描鉢である。

SK2は17世紀後半に比定される。

SK3 (Fig.11・12・17・18)

TP2の西部からTP3の東部にかけて広がる、浅い掘り込みを作った焼土溜りである。切り合い関係では、SD1とSX9を切り、上面を瓦溜2・3に切られている。南側が調査区外に出るため平面プランが不明であるが、南北に長い不整形の掘り込みとみられ、検出規模は、南北確認長5.08m、東西長4.10m、深さ32～38cmを測る。

埋土は灰黄褐色シルトと明赤褐色シルトで、焼土粒、焼土ブロック、炭化物が多く含んでいる。また、埋土中には被熱し橙色に変色した瓦片や被熱した陶磁器、炭化した木片、硬化した焼土塊などが多く含まれている。炭化物溜りはSK3の東西にも広がっており、周辺ではSD1の上面を炭化物や炭化材が覆う様子が確認されている。

出土遺物は染付中碗・小皿・中皿・鉢又は皿・猪口・蓋物・瓶、白磁猪口又は鉢、白磁又は染付中皿・青磁皿・青花皿・陶器碗・皿、土師質土器杯・小皿・中皿・窯道具・銅錢、及び瓦片である。瓦片の多くは被熱し変色しており、陶磁器も被熱し変質したもの(17・19)が含まれている。

図示したものは15～30である。15～20は磁器で、何れも肥前産。15～17・20は染付。15は丸形中碗。16・17は鉢又は皿で、17は被熱し釉が変質する。20は猪口で、草花文を描く。19は肥前産の青磁皿で、印刻による算本文を施す。釉は被熱し変質する。18は肥前産の染付又は白磁の中皿。21～23は中国景德鎮窯系の青花皿。22は内面に花文を描き、口縁部の釉が虫食い状に剥がれる。

24～26は陶器。24は尾戸窯の灰釉中碗。25は肥前産の灰釉中碗。26は肥前内野山窯の銅線釉小皿で、外面にオリーブ黄色を帯びる半透明の釉を施す。見込み蛇ノ目釉剥ぎで、釉剥ぎ部分には砂目痕が残る。

27・28は土師質土器小皿。30は寛永通宝である。29は窯道具で、トチンである。

SK3は17世紀末～18世紀初頭に比定される。

SK4 (Fig.13・19～22)

TP4の西部に位置する土坑で、瓦溜4の直下で検出した。他遺構との切り合い関係ではSK7を切り、上面を瓦溜4に切られている。西側の半分が試掘坑の外側に出るが、検出規模は南北残存長3.83m、東西確認長1.30m、深さ54cmを測る。検出された東壁は外上方へ緩やかに立ち上がっている。埋土は黒褐色シルトで、埋土中に炭化物や漆喰のブロック、石灰岩の角礫を多く含んでいる。漆喰と石灰岩角礫は西に近接するSK5の埋土中にも認められているため、両者が同一の土坑であった可能性も考えられる。

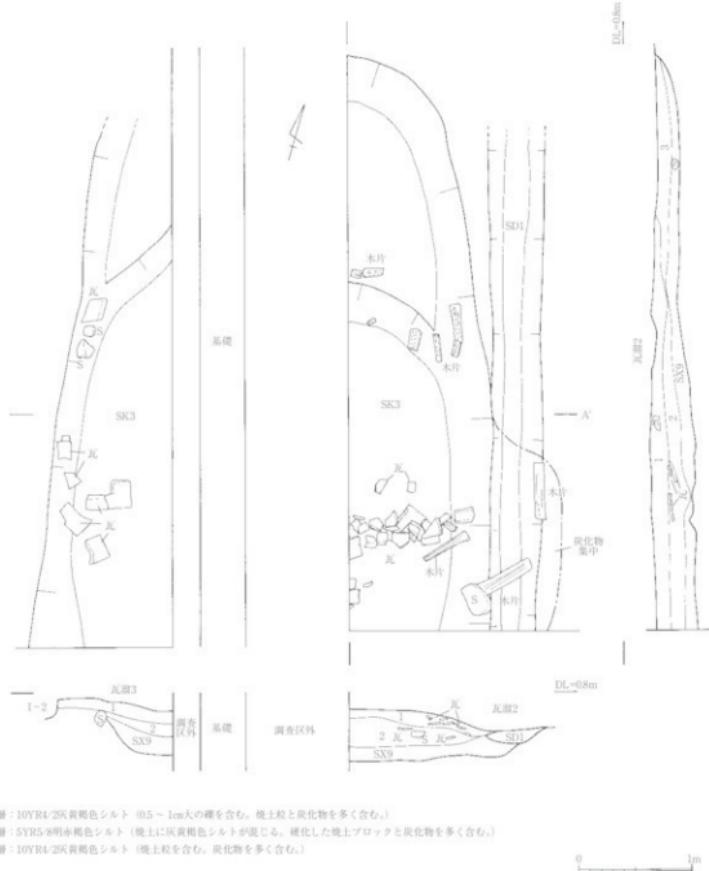


Fig.17 SK3 平面図・セクション図・遺物出土状況図

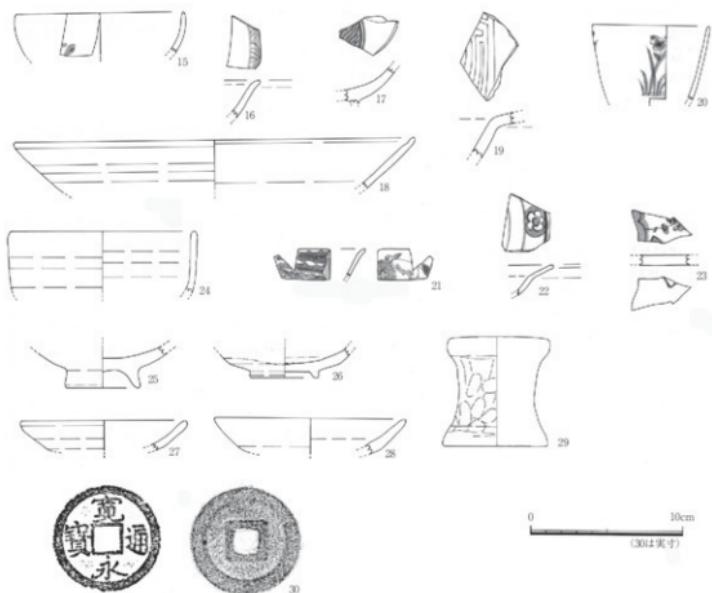


Fig.18 SK3 出土遺物実測図

出土遺物は磁器染付大碗・中碗・小碗・碗蓋・蓋物蓋・銚子か、白磁又は染付の瓶、青磁香炉、青花碗・皿、陶器中碗・小皿・鉢・小碗又は柄杓・提子・水注・土瓶蓋・蓋物蓋・瓶・灯明受皿・火入か・ミニチュア、土師質土器人形、銅製品簪か、及び陶器・土器細片と瓦片である。

図示したものは31～75である。31～36・39～50は磁器で、34は能茶山窯産、その他は肥前産又は肥前系である。31～34・36・39～44は染付。31～34は中碗。34は能茶山窯産の中碗で、高台内に角枠内「茶山」銘をもつ。31・32は広東形中碗で、31は多重の圓線と紅葉を描く。33は丸形中碗で、丸に花卉を描く。36は丸形の大碗で、土坡と植物を描く。39・40は碗蓋で、39は摘み内に変形字銘を描く。41・42は蓋物の蓋。44は蓋で、菊を描く。43は銚子とみられ、花唐草文を描く。35は染付又は白磁の碗で、釉は被熱し変質している。45～47は青磁。45は香炉。47も香炉で、明オリーブ灰色の半透明の釉を施し、三足を貼付する。46は器種不明。釉は明緑灰色を呈し被熱し変質する。48は白磁の菊花形紅皿である。49は白磁又は染付の端反棘葦形中瓶。50は白磁又は染付の仏花瓶である。37・38は青花。38は中国景德鎮窯系の青花碗で、区画間に花文を描く。37は中国景德鎮窯系の青花皿で、口縁部内面に四方擗、内底に柘榴を描く。

51～67は陶器。51・52は尾戸窯の灰釉中碗、53は尾戸窯の灰釉小碗である。54は尾戸窯の灰釉小皿で、口縁部を波縁状に変形させる。55は尾戸窯の灰釉鉢で、口縁部の数箇所を内側に押して輪

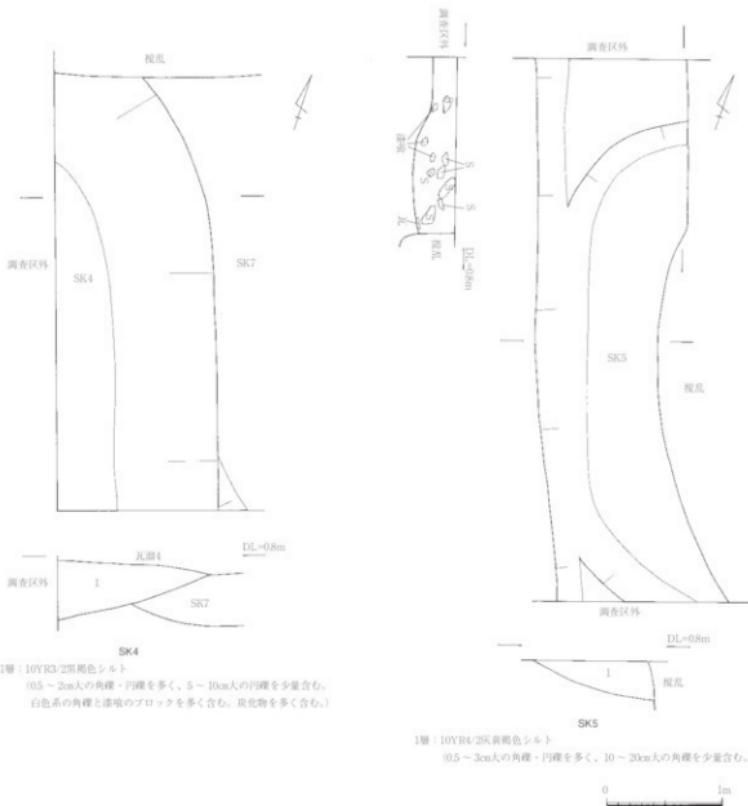


Fig.19 SK4・5 平面図・セクション図

花形に成形し、口縁部の数箇所に縁軸を掛ける。56は京都・信楽系の灰釉小碗又は柄杓で、内面中位に鉄軸による圓線を巡らせる。57は京都・信楽系の灰釉蓋物蓋。58は京都・信楽系の灰釉灯明受皿である。59・60は備前の灯明受皿である。61は土瓶の蓋で、手捏ねによる紐状の摘みを貼付し、灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施す。62はミニチュアの鍋で、鉄軸を施す。63は雲助形の水注で、紐状の把手を貼付する。内面下半に鉄軸、外面は白化粧の後透明の釉を施している。64・65は鉄軸の提子である。66は鉄軸の瓶で、能茶山窯の製品か。67は丹波焼の壺である。

68～70は土師質土器。68は焜炉で、口縁部から切り込む窓をもつ。69は火入か。削り出し高台をもち、内面が強く煤ける。70は人形。中空で、前後貼り合わせによる。胎土中に金雲母を含んでおり、関西の製品か。71は瓦質土器の焜炉で、外面に型による人物その他の陽刻文様を施している。

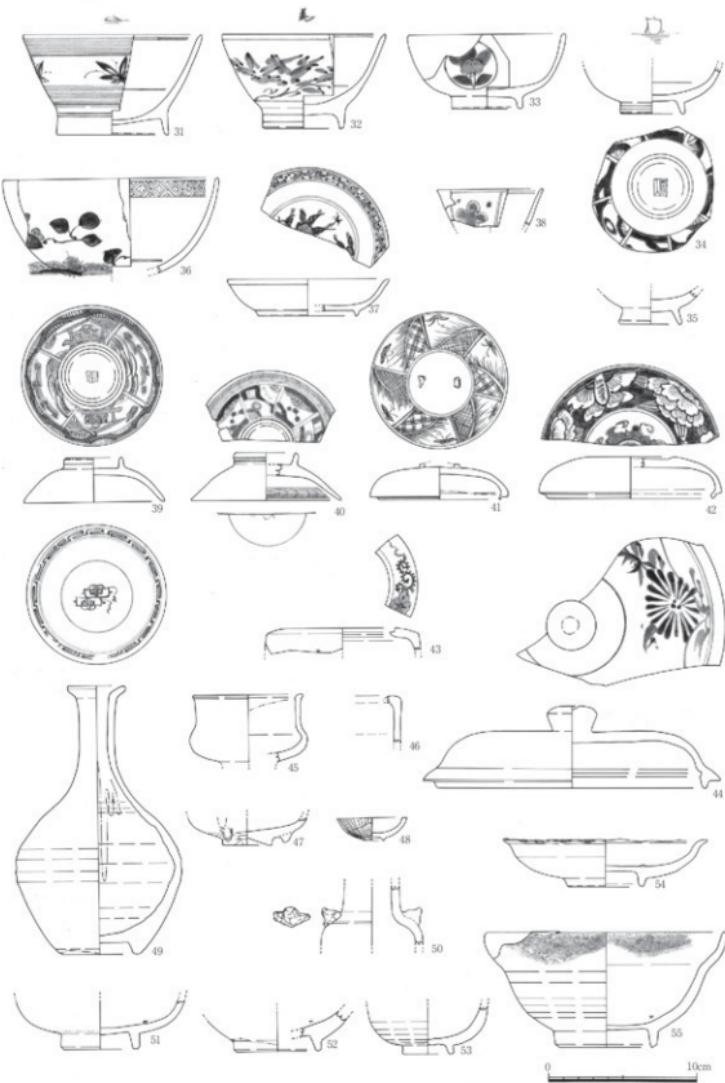


Fig.20 SK4 出土遺物実測図 (1)

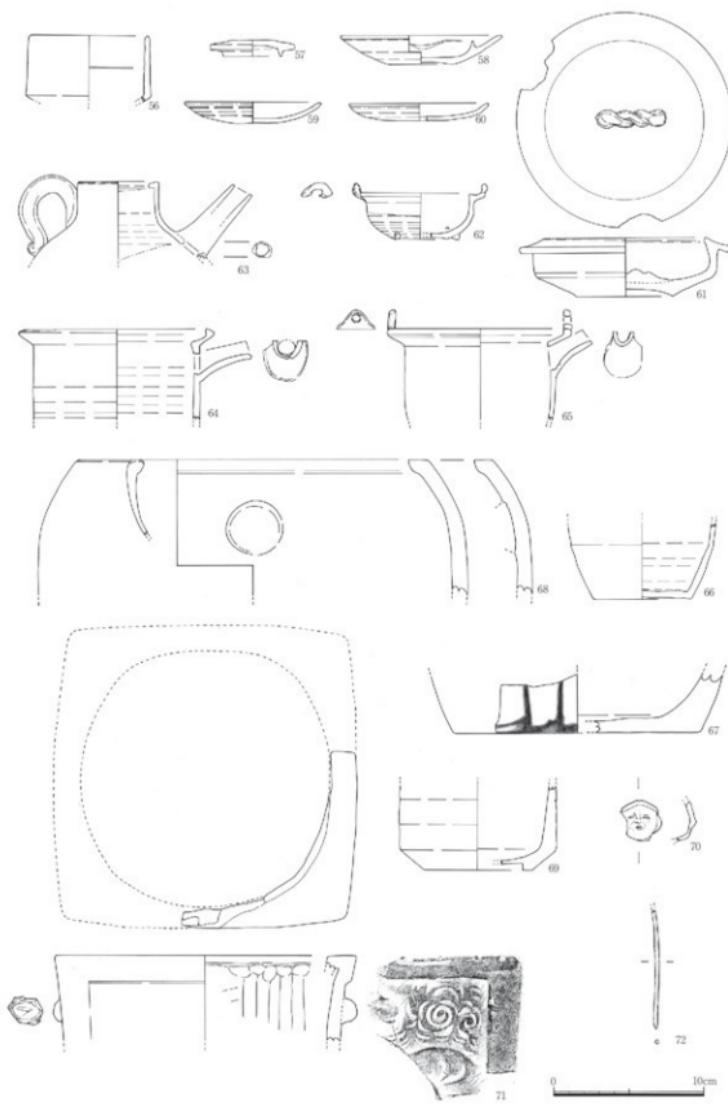


Fig.21 SK4 出土遺物実測図 (2)

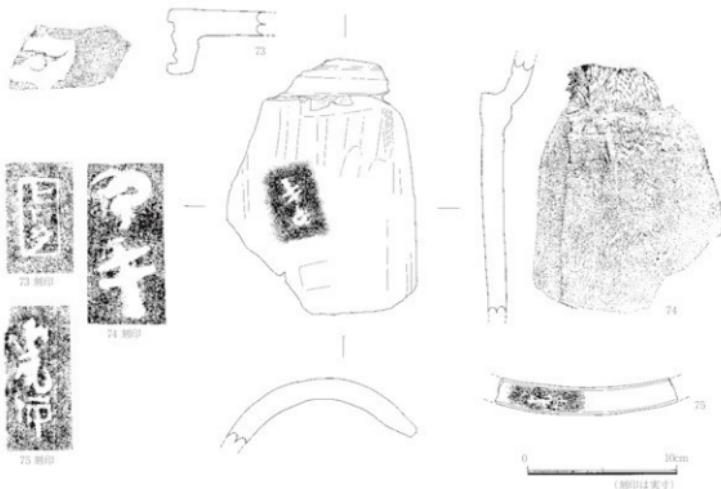


Fig.22 SK4 出土遺物実測図 (3)

72は棒状の銅製品で、簪か。

73～75は瓦。73は軒桟瓦、74は丸瓦、75は棟瓦又は平瓦である。これらのうち、74は「アキ」、75は「御瓦師」銘印をもち、安芸（高知県安芸市）産。73は角枠内「ヒロタ」銘印をもつ。

SK4は19世紀中葉に比定される。

SK5 (Fig.14・19・23)

TP5の東部に位置し、瓦溜5の直下で検出された。東に近接するTP4のSK4と同一遺構の可能性があるが、東側の大部分が搅乱を受けるため両者の関係が明らかでない。

検出規模は、南北確認長4.80m、東西残存長1.28m、深さ35cmを測る。また、SK4・5が同一遺構であると仮定した場合、東西の規模は5.52mとなる。床面は中央付近が深く、北と南側にテラス状の高まりをもつ。西壁は外上方に緩やかに立ち上がっている。埋土は灰黄褐色シルトで、埋土中に10～20cm大的の石灰岩の割石と砂岩、漆喰のブロックが多く含まれている。

出土遺物は磁器染付中碗、陶胎染付中碗、白磁小杯か、中国彦色絵皿、陶器中碗・小皿・擂鉢・蓋・灯明受皿、土師質土器中皿・小皿、及び陶磁器・土器細片と瓦片である。また、貝殻も多く出土している。

図示したものは76～86である。76・77・79は磁器、78は陶胎染付で、何れも肥前産。76・77は染付中碗。76は高台内に変形字銘を描く。77は初期伊万里の碗で1630～1650年代。高台内無釉で、豊付に灰白色の粗砂が付着している。78は肥前産の陶胎染付中碗で、外面に唐草文を描く。79は肥前産の白磁で、小杯か。80は中国漳州窯系の二彩又は五彩の皿で、16世紀末～17世紀初頭。白化粧の

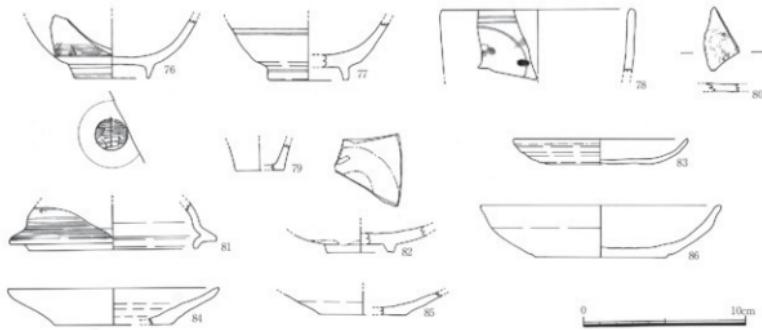


Fig.23 SK5 出土遺物実測図

後、透明釉を施し、内面に赤の上絵付で花文を描く。81～83は陶器。82は肥前内野山窯の銅緑釉小皿で、釉剥ぎ部分に砂目痕が残る。81は肥前産の白化粧土刷毛目の蓋である。83は備前の灯明受皿で、内面と口縁部外面に鉛釉を施す。84～86は土師質土器。84・85は小皿。86は中皿で、外底に回転糸切り痕が残る。

SK5は19世紀前半～中葉に比定される。

SK6 (Fig.15・24・25)

TP6東部からTP5西部にかけて検出した土坑で、瓦溜5・6の直下で検出した。切り合関係では、SK8を切り、瓦溜5・6に切られている。TP5・6検出部分を合わせると、検出規模は南北確認長4.35m、東西長4.02m、深さ37cmを測る。埋土は1層：灰黄褐色シルト、2層：褐灰色シルト、3層：黒褐色の腐植土層で、下層には腐植した植物と薄い木屑の層とシルト層が層状に堆積している。

出土遺物は磁器染付中碗、白磁小杯、陶器中碗・小皿・小碗又は柄杓・蓋・土瓶又は急須蓋・水滴・壺・瓶・灯明受皿、色絵陶器中碗、土師質土器小皿・人形、及び陶器・土器細片と瓦片で、この中には肥前産の灰釉丸碗、肥前内野山窯の銅緑釉小皿など被熱した遺物が含まれている。また、床面から土師質土器小皿(106・107)が完形で出土している。

図示したものは87～108である。87は肥前産の染付丸形中碗で、見込みを蛇ノ目釉剥ぎし、外面にコンニャク印判による文様を施す。88は肥前産の白磁小杯である。

89～105は陶器。89～92は尾戸窯の灰釉中碗で、89・90は灰白色を帯びる半透明の釉を施し、高台内に渦状の鉋痕が残る。93は京焼の色絵半球形碗で、青と薄緑の上絵付で植物を描く。94は京焼の色絵碗で、外面に強いロクロ目が残る。鉄絵と緑の上絵付で植物を描く。96は型作りによる貝形の小皿で、京焼か。灰釉を施し、内面に青の上絵付で海藻文を描く。95は京都系の灰釉小碗又は柄杓で、内面に鉄釉で圓線を描く。97は灰釉の蓋で、外面に鉄絵を描く。98は土瓶又は急須の蓋で、灰黄色を帯びる透明の釉を施す。99は尾戸窯の製品で、水滴か。呉須で花文を描き、灰白色を帯びる透明の釉を施す。100は灰釉の瓶で、尾戸窯の製品か。被熱し釉が変質している。101は丹波焼の壺で、外面に鉄釉、口縁部外面と体部内面にオリーブ黄色を帯びる半透明の釉を施す。102～105

は備前の灯明受皿である。

106~108は土師質土器。106·107は小皿で、107は口縁部に灯芯油痕が残る。108は関西産の人形。型作り前後貼り合わせにより、中実。胎土中に金雲母を含み、体部の中央に穿孔を認める。

SK6は18世紀~19世紀中葉に比定される。

SK7 (Fig.13・26・27)

TP4の東部に位置する土坑で、瓦窯4の直下で検出した。切り合ひ関係では、SX11を切り、SK4・瓦窯4に切られている。検出規模は南北残存長2.80m、東西確認長1.94m、深さ49cmを測る。埋土は1層：灰黄褐色シルト、2層：灰黄褐色砂質シルト、3層：灰黄褐色シルト、4層：黒褐色シルトで、床付近には砂質シルトや炭化物を多く含んだシルト層が堆積している。

出土遺物は磁器染付中碗・蓋・陶器小碗・鉢・灯明受皿・土師質土器焜炉、瓦質土器焜炉、及

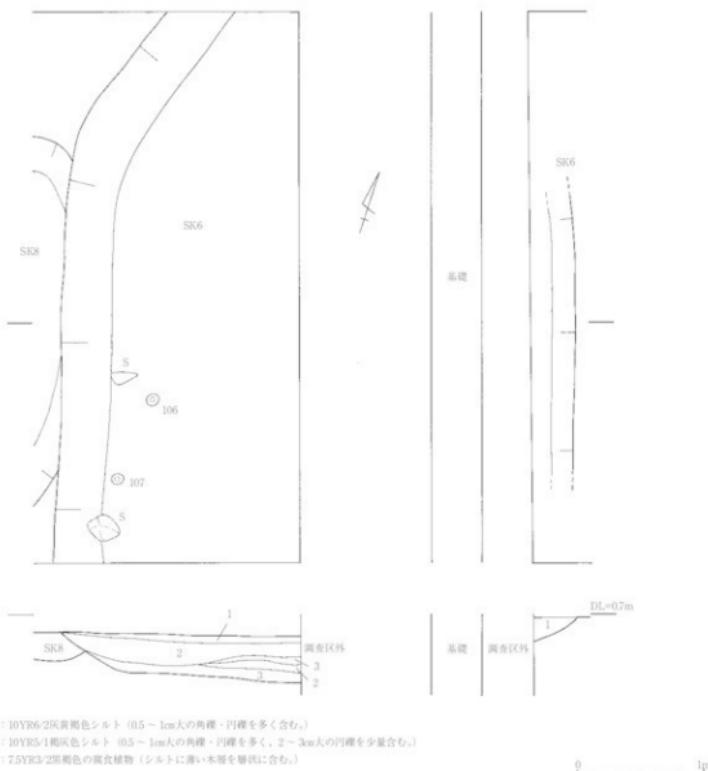


Fig.24 SK6 平面図・セクション図・遺物出土状況図

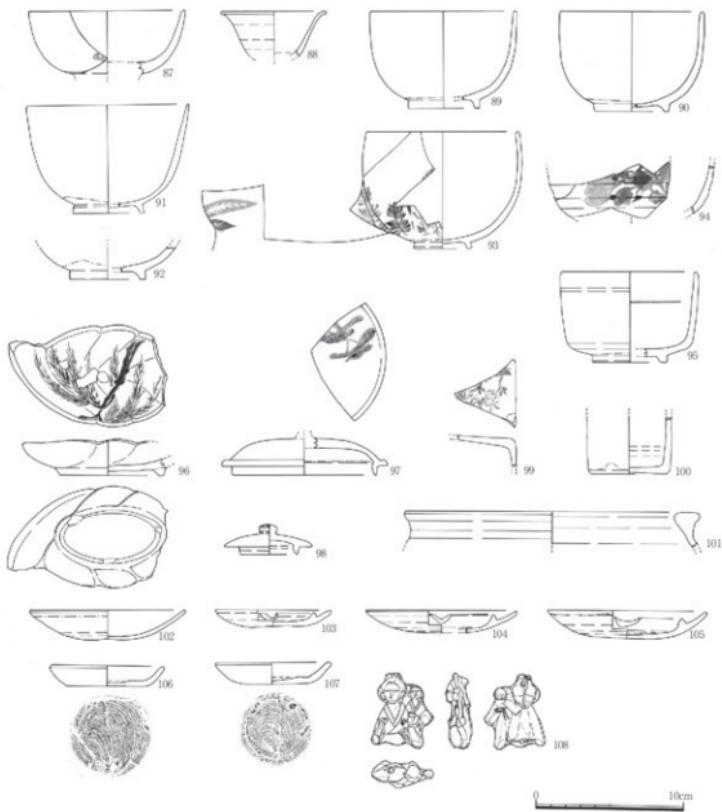


Fig.25 SK6 出土遺物実測図

び陶磁器・土器細片と瓦片である。

図示したものは109~113である。109は肥前産の染付蓋物で、外面に山水文を描く。110は信楽の端反形小碗で、内外面に灰釉、口縁部に緑釉を施す。111は尾戸窯の鉢で、ロクロ成形の後口縁部を輪花形に変形させる。内外面に灰釉、口縁部に緑釉を施している。112は京都・信楽系の灯明受皿で、灰黄色を帯びる透明の釉を施す。113は土師質土器の焜炉で、前方に口縁部から切り込む窓を設け、内面上位に型作りによる突起を貼付している。

SK7は19世紀前半～中葉に比定される。

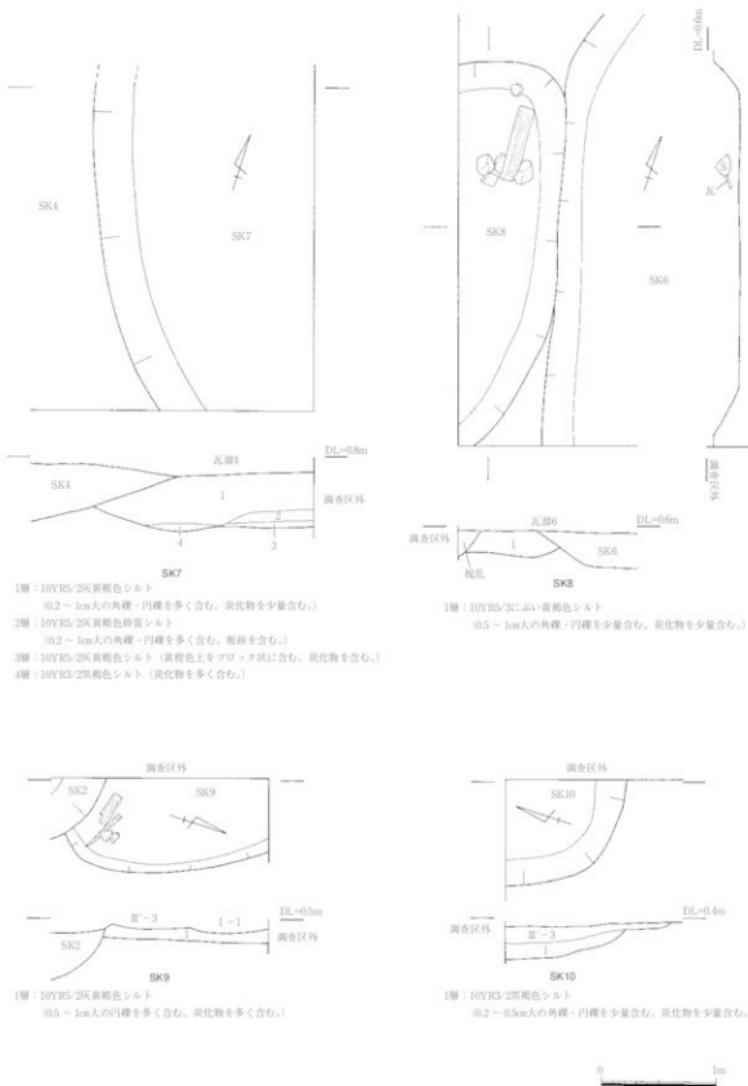


Fig.26 SK7 ~ 10 平面図・セクション図・遺物出土状況図



Fig.27 SK7・9 出土遺物実測図

(SK7: 109 ~ 113、SK9: 114 ~ 117)

SK8 (Fig.15・26)

TP6の西部に位置する土坑で、瓦溜6の下面で検出した。切り合い関係ではSK6・瓦溜6に切られている。SK8は東側の一部を検出したのみで、全体の規模、形態が明らかでないが、南北確認長3.32m、東西確認長0.86m、深さ23cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトで、北壁際の下層からは板材と15~20cm大の砂岩角礫、橙色に変色した瓦片がまとまって出土している。

出土遺物は磁器染付碗、陶器碗、陶磁器、土器細片、瓦片で、尾戸焼碗の口縁部2点が含まれている。SK8は18世紀~19世紀中葉に比定される。

SK9 (Fig.12・26・27)

TP3の西部に位置する土坑で、III'-3層の直下~IV層上面で検出した。他遺構との切り合い関係では、SK2に切られている。全体の規模と形態は不明であるが、南北確認長1.77m、東西確認長0.76m、深さ12cmを測る。床面はほぼ平坦である。埋土は灰黄褐色シルトで、床付近には炭化物が多量に溜り、木片と板材が出土している。

出土遺物は磁器染付猪口、青花碗又は鉢、土師質土器杯・小皿、陶磁器・土器細片である。

図示したものは114~117である。114は中国景德鎮窯系の青花碗で、口縁端部の釉が虫食い状に剥がれる。115は陶器で器種不明。鋸釉を施し、把手は剥離する。116・117は土師質土器小皿である。

SK9は17世紀前半に比定される。

SK10 (Fig.11・26)

TP2の北東隅に位置する浅い掘り込み状の遺構で、Ⅲ層の上位（整地層上位にあるIII'-3層の直下）で検出した。他遺構との直接的な切り合いはないが、SX14の上面で検出しておらず、これに後続する。全体の規模と形態は不明であるが、南北確認長1.06m、東西確認長0.93m、深さ25cmを測る。埋土は黒褐色シルトで、腐食した植物遺体が多く含んでいる。

出土遺物は陶器中碗・皿、土師質土器小皿、及び陶磁器・土器細片で、これには鉄釉天目形碗の体部、唐津系灰釉陶器小皿の底部、肥前産の灰釉丸碗など17世紀前半~後半の遺物が含まれている。

SK10は17世紀後半に比定される。

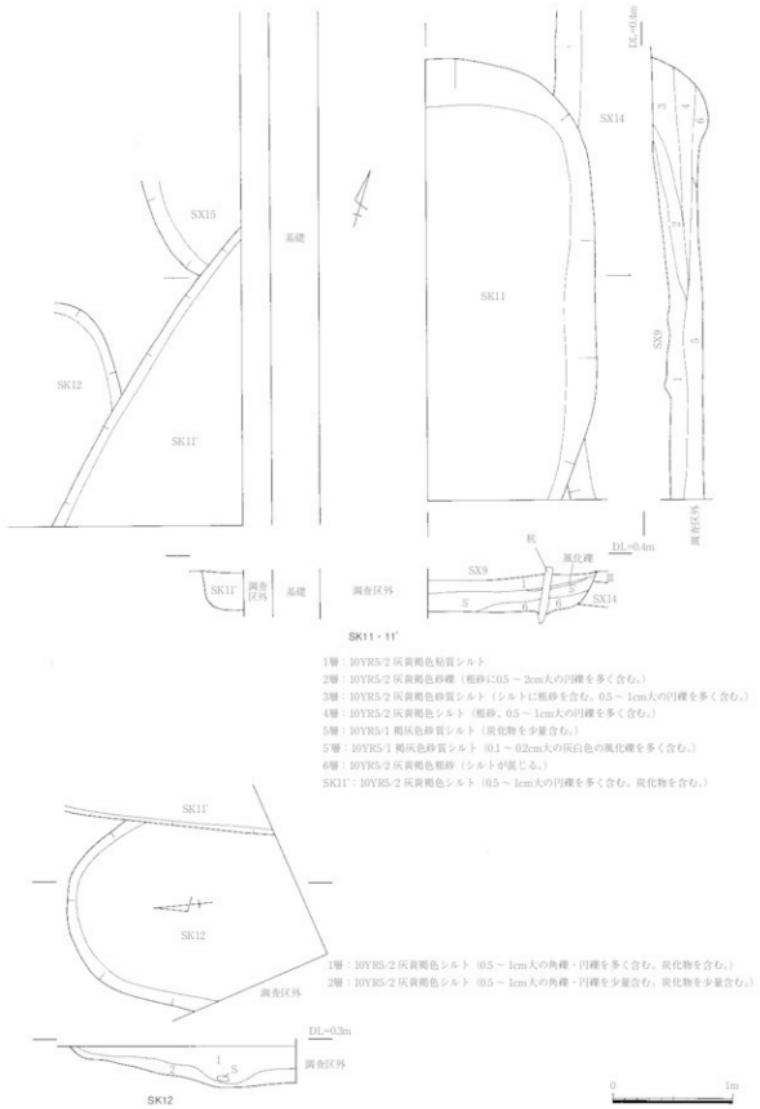


Fig.28 SK11・11'・12 平面図・セクション図

SK11 (Fig.11・12・28・29)

TP2の西部で検出された。上面を他遺構によって切られているため、検出面はⅢ層中位にあつたが、調査区セクションではⅢ層・Ⅲ'層を切っている様子が確認されており、同層上面から掘り込まれていた可能性がある。他遺構との切り合い関係ではSX14を切っている。またSK11埋土の最上面にはSX9が堆積している。全体の形態と規模は不明であるが、南北確認長3.66m、東西確認長1.40m、深さ30~46cmを測る。また、西に設定したTP3では、ほぼ同じ埋土と床面レベルをもつSK11'が検出されており、両者を同一遺構と仮定した場合、東西長3.54m、南北確認長約5mの大型の遺構になるとみられる。壁は斜め上方に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。埋土は1層：灰黄褐色粘質シルト、2層：灰黄褐色砂礫、3層：灰黄褐色砂質シルト、4層：灰黄褐色シルト、5層：褐灰色砂質シルト、6層：灰黄褐色粗砂である。また、5'層には、整地層Ⅲ'層内にみられる灰白色の風化礫の粒が多く認められ、東側の肩からⅢ'層と同質の砂質シルトが入り込んでいる様子が認められる。

出土遺物は磁器染付中碗、陶器中碗・小皿、陶器又は須恵器甕、土師質土器小皿、及び陶磁器・土器細片と瓦片である。

図示したものはSK11出土の118~120・123・124、SK11'出土の121である。118は白磁又は染付の中碗で、高台内と疊付に模様が付着している。肥前産1610~1630年代の製品である。119・120は肥前産の染付中碗で、120は高台内に「大明年製」銘を描く。123・124は同一個体とみられる焼締め陶器の甕で、自然釉が掛かる。124は体部片で、外面に格子状の叩き目、内面に青海波状の圧痕が残る。121は手捏ね成形の土師質土器小皿で、内外面にユビオサエとナデを施す。

SK11は17世紀後半に比定される。

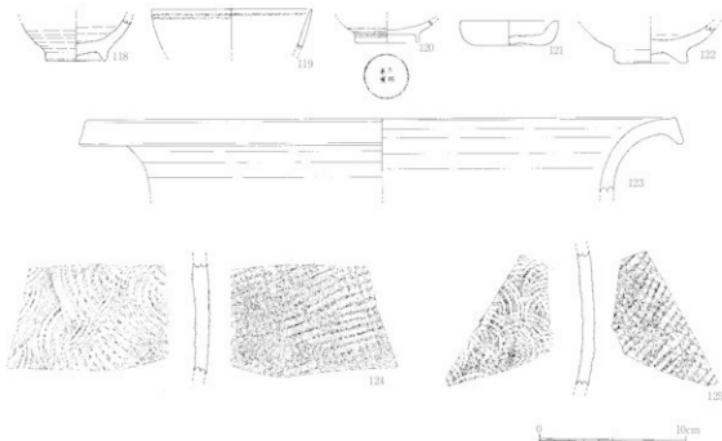


Fig.29 SK11・11'・12 出土遺物実測図
(SK11: 118~120・123・124、SK11': 121、SK12: 122・125)

SK12 (Fig.12・28・29)

TP3 南部に位置する土坑で、Ⅲ層の下面で検出した。他遺構との切り合い関係では、SK11' に切られている。全体の規模と形態は不明であるが、南北確認長2.07m、東西残存長1.50m、深さ34cmを測る。床面は平坦でなく南に向かって緩やかに落ち込んでいる。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は磁器染付皿、白磁中碗、陶器中碗、陶器又は須恵器甕、及び陶磁器・土器細片と瓦片で、17世紀後半までの遺物が含まれている。

図示したものは122・125である。122は肥前産の灰釉中碗。高台施釉で、にぶい黄橙色を帯びる半透明の釉を施す。125は焼締め陶器の体部片で、外面に格子状の叩き目、内面に青海波状の圧痕が残る。

SK12は17世紀後半に比定される。

(2) 溝

SD1 (Fig.11・30)

TP2 のⅢ' 層上面で検出した南北方向の溝で、N-16°-W の軸方向をもつ。他遺構との切り合い関係では、上面を瓦溜2に切られ、SX9を切る。またSD1の上面には、SK3に伴う焼土と炭化物の層が広がっており、SK3に先行する。検出規模は幅0.50m、深さ15cmを測る。埋土は黒褐色シルトで、床付近には角礫・円礫が多く含まれている。

出土遺物は、磁器染付小皿、陶器中碗・小皿、擂鉢・瓶、土師質土器小皿、及び陶磁器・土器細片である。

図示したものは126~130である。126は肥前産の染付丸形小皿で、外面に連続唐草文、内面に山水文とみられる文様を描く。釉は被熱し変質している。129は肥前産の染付又は白磁の瓶である。127は灰釉中碗で、灰白色を帯びる透明の釉を施す。128は肥前内野山窯の銅綠釉小皿で、内面に銅綠釉、外面に灰釉を施す。見込みを蛇ノ目釉剥ぎし、錆釉を刷毛塗りしている。釉剥ぎ部分には砂目痕が残る。130は備前焼の擂鉢である。

他遺構との前後関係及び出土遺物からみて、SD1は17世紀後半に比定される。

SD2 (Fig.10・31・32)

TP1 のⅢ層中位で検出した南北方向の溝で、N-17°-W の軸方向をもつ。他遺構との切り合い関係ではSX12・16に上面を切られる。また直接的な切り合い関係はないが、SK1・SX1の下面で検出されており、これらに先行する。整地層との関係では、Ⅲ'-3層を掘削して掘り込まれている。

検出規模は幅1.20~1.54m、深さ46cmを測る。断面形は逆台形である。埋土は灰黄褐色粘質シルトと褐灰色粘質シルトで、埋土中に植物遺体が多く含まれ、最下層の灰黄褐色シルト層には粗砂と礫が多く含まれている。また上層から下層にかけて、チャート、砂岩、石灰岩の10~40cm大の角礫が多く出土している。

出土遺物は磁器染付中碗・小碗、うがい茶碗・小皿・皿、磁器色絵碗、陶器中碗・中皿、土師質土器杯・小皿・焼塙壺、及び陶磁器・土器細片と瓦片である。

図示したものは131~149である。131~136は磁器で、何れも肥前産。131~136は染付。131は端

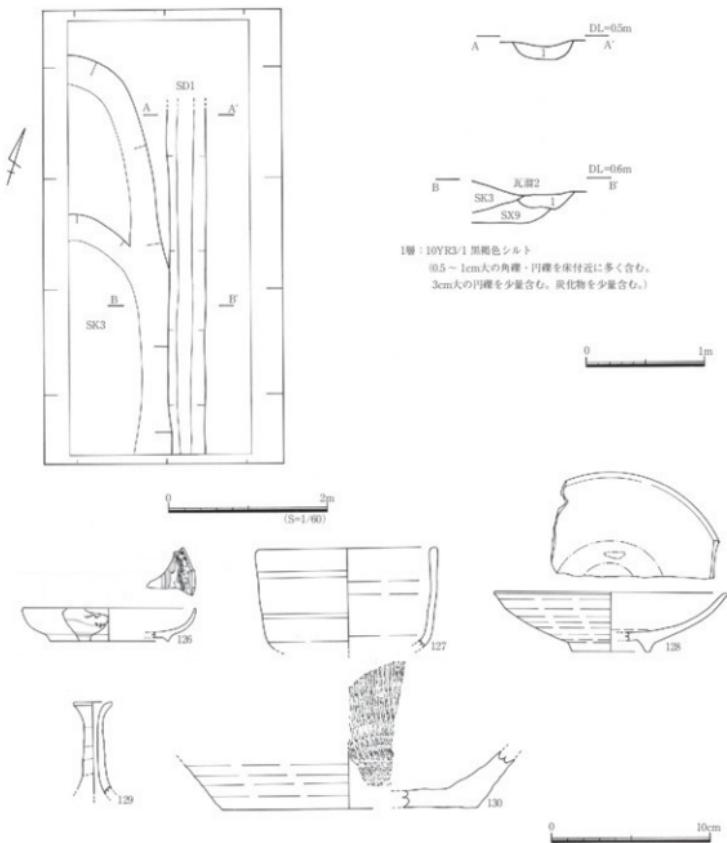


Fig.30 SD1 平面図・セクション図・出土遺物実測図

反形小碗で、山水文を描く。132は中碗で、高台内無釉。133は碗の体部片とみられ、外面にコンニャク印判による五弁花文を施す。134は平形のうがい茶碗で、鳳凰を描く。135は初期伊万里の小皿である。136は皿で、内面に柳を描く。137・138は陶器。137は肥前産の灰釉丸形中碗で、浅黄色を帯びる透明の釉を施す。138は唐津系灰釉陶器の中皿で、内面に鉄絵を描く。139～144は土師質土器。139～141は小皿。142～144は関西産の焼塩壺である。146～149は木製品。146・147は用途不明の板状製品。148は棒状製品で、断面四角形。149は箸で、側面に面取りを施し、先端付近を窄ませている。145は平瓦。被熱によって橙色に変色しており、「十月□ 元禄十□ 火□…」の墨書が残る。

SD2の廃絶時期は17世紀末～18世紀初頭に比定される。

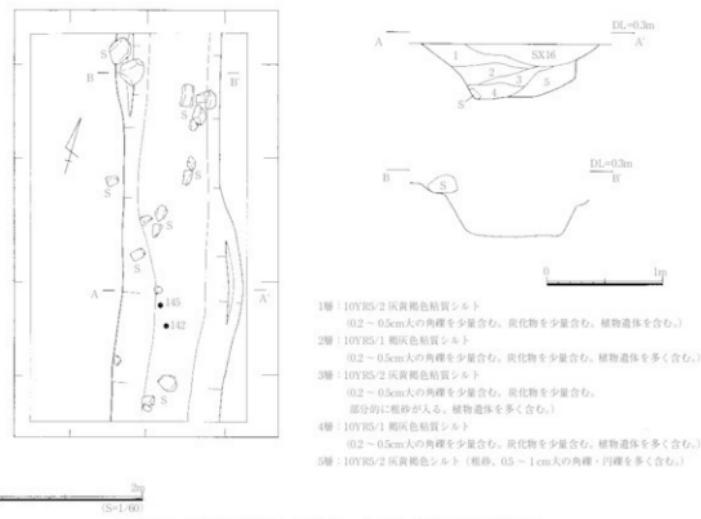


Fig.31 SD2 平面図・セクション図・遺物出土状況図

(3) 性格不明遺構

SK1 (Fig.10・33~35)

TPIのII層下面で検出した浅い溝状の遺構である。他遺構との切り合い関係では、SK1・瓦溜1と近代の石列1に切られている。また直接的な切り合いはないが、SX14・SD2の上面で検出されており、これに後続する。検出規模は幅1.80~1.90m、深さ30cmを測る。軸方向はN-16°-Wである。埋土は1層が灰黄褐色シルトで、角繩、円繩、炭化物を多く含んでいる。最下層の2層は黒褐色粘質シルトで、腐殖した植物を多く含んでいる。SX1はSD2や石列1と近い位置で検出され、共通した軸方向をもつことから、屋敷地の境界に関わる施設の一部であった可能性がある。

出土遺物は磁器染付中碗・小碗・小杯・小皿・皿・猪口・水滴・陶胎染付中碗・白磁小杯・五寸皿・陶器中碗・中皿・小皿・擂鉢・土師質土器小皿・硯、及び陶磁器・土器細片と瓦片である。

図示したものは150~194である。150・151・153~168は磁器、152は陶胎染付で、何れも肥前産。150は端反形中碗で、外面に花唐草文、見込みに手描きによる五弁花文、高台内に「太明成化年製」銘を描く。151は描いとみられるものである。154は丸形中碗で、草花文を描く。153は端反形小碗で、松と筆を描く。155は草花文の丸形小碗。156は花唐草文の丸形小碗である。157は端反形小碗で、コンニャク印判による松文を描く。159は変形形の皿で、貼付高台。内面に柘榴と藤、花唐草文、外面に唐草文、高台外に雷文帯、高台内に角棒内渦「福」を描く。160は丸形小皿で、内面に墨書きと濃みによる唐草文、コンニャク印判による五弁花を描く。高台内に「□明□製」銘を認める。

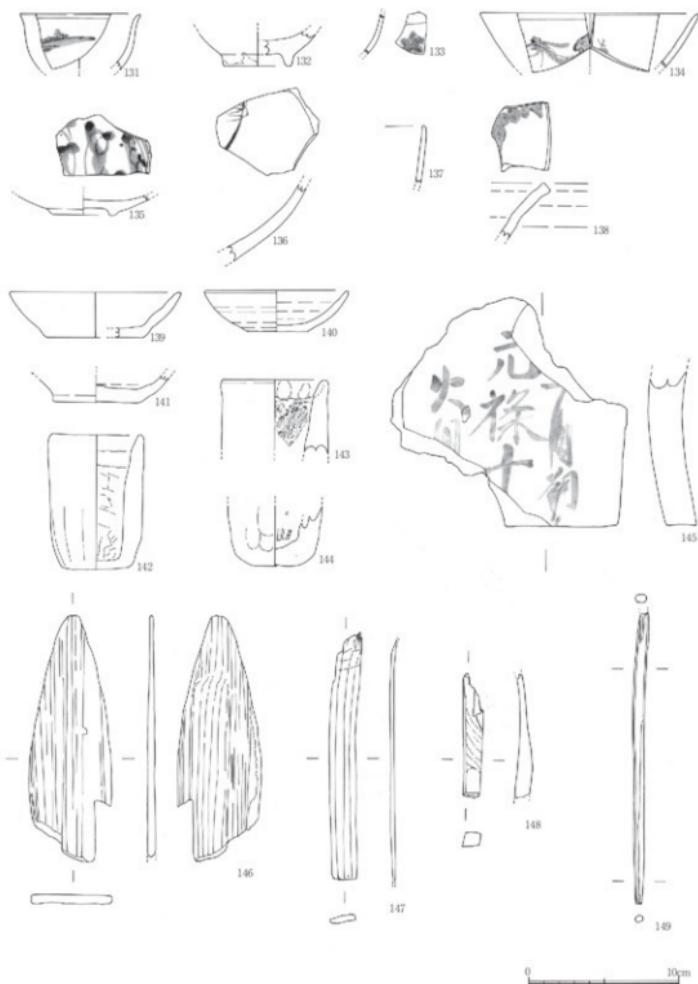


Fig.32 SD2 出土遺物実測図

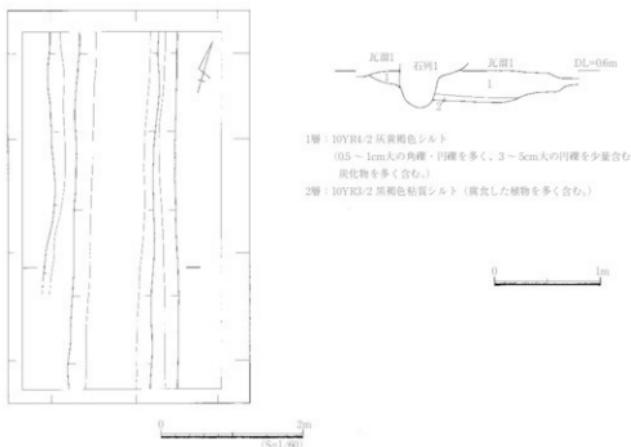


Fig.33 SX1 平面図・セクション図

161は皿で、内面に動物を描く。162は皿で、内面に濃みを施した文様を描く。163は中皿で、外面に二重線描きによる唐草文、内面に植物を描く。165は輪花形の猪口で、口銘。外面に雷文帯と花唐草文を描く。167・168は猪口で、雨降り文を描く。166は水滴。唐子を表し頭部の横に圓孔をもつ。152は陶胎染付碗である。158・164は白磁。158は小杯で、高台無釉。外面に丸彫りによる鏽を施す。164は菊花形の五寸皿で、陽刻型打成形による。内面に型による菊花、外面にヘラ彫りで菊弁を描く。

169~181は陶器。169は京焼の灰釉中碗で、外面中位に強いロクロ目を巡らせる。170~172は肥前産の京焼風陶器碗。174は肥前産の高台施釉の灰釉丸形碗、173は同様の灰釉碗である。175は高台無釉の灰釉丸形碗で高台内兜巾状。176は高台無釉の灰釉中碗で、内外面に強いロクロ目が残る。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施す。177は京焼の灰釉丸形小皿で、内面に銘釉、呉須、白土による椿文、外面に椿の葉を描いている。178は肥前内野山窯の銅綠釉小皿で、見込み蛇ノ目釉剥ぎ。内面に銅綠釉、外面に灰釉を施す。179は肥前産の三島手の中皿で、口縁部内面に白象嵌による印花文と團線を巡らせる。181は備前焼の掻鉢である。180は鉄釉の陶器である。

183・184は土師質土器小皿で、口縁部に灯芯油痕が残る。182は粘板岩製の硯で、陸部は使用により窪む。背に釘彫痕を認める。

185~194は瓦。185・186は軒棧瓦、187~194は棧瓦又は平瓦で、186は巴文と均整唐草文を配する。これらのうち、187は「アキ」、188は「アキ□」、189は「アキ□」、186は山に「久」と「アキ兼」銘印をもち、安芸（高知県安芸市）産。185は「とく□」銘印をもち、徳王子（高知県香南市香我美町徳王子）産。190は「やス□□」銘印をもち、夜須（高知県香南市夜須）産。また、191は角棒内「□傳」、192は「蒲百」、193・194も銘印をもつ。

SX1は18世紀~19世紀中葉に比定される。

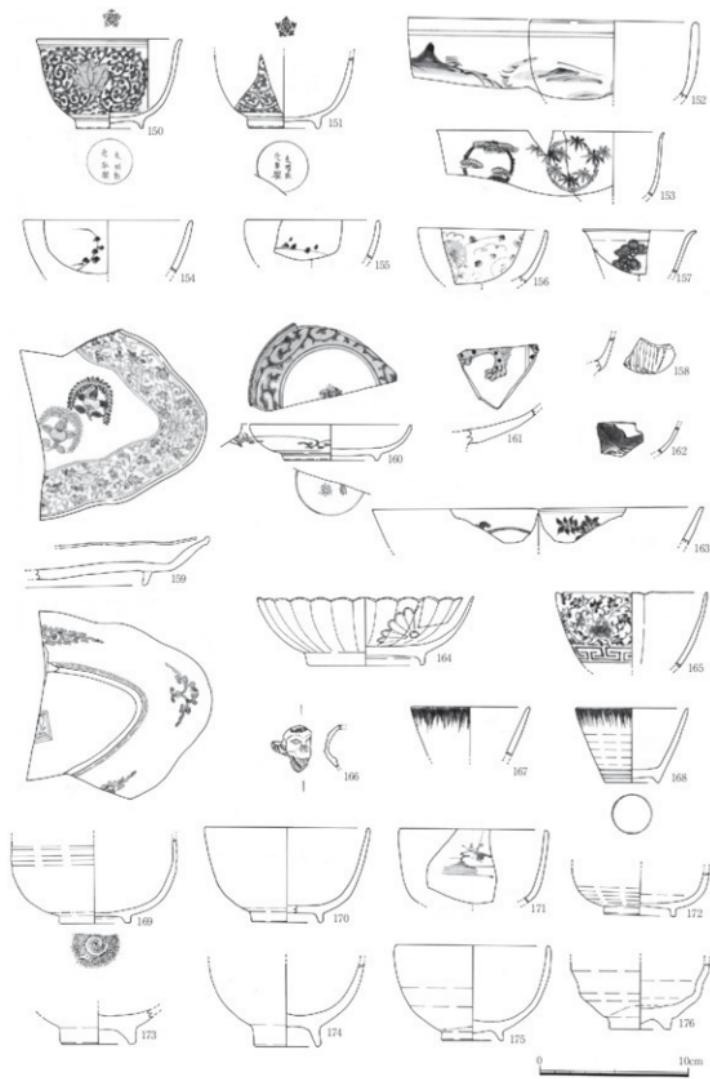


Fig.34 SX1 出土遺物実測図 (1)



Fig.35 SX1 出土遺物実測図 (2)

SX9 (Fig.11・36)

TP2の西部とTP3の東部で検出された浅い落ち込み状の遺構である。検出面はⅢ・Ⅲ'層の上面にあたり、Ⅲ' - 1~3層を掘り込んでいる。他遺構との切り合い関係では、SK11の上面を切り、SK3・SD1に切られている。部分的な検出のため全体の規模や形態は不明であるが、南北に長い不

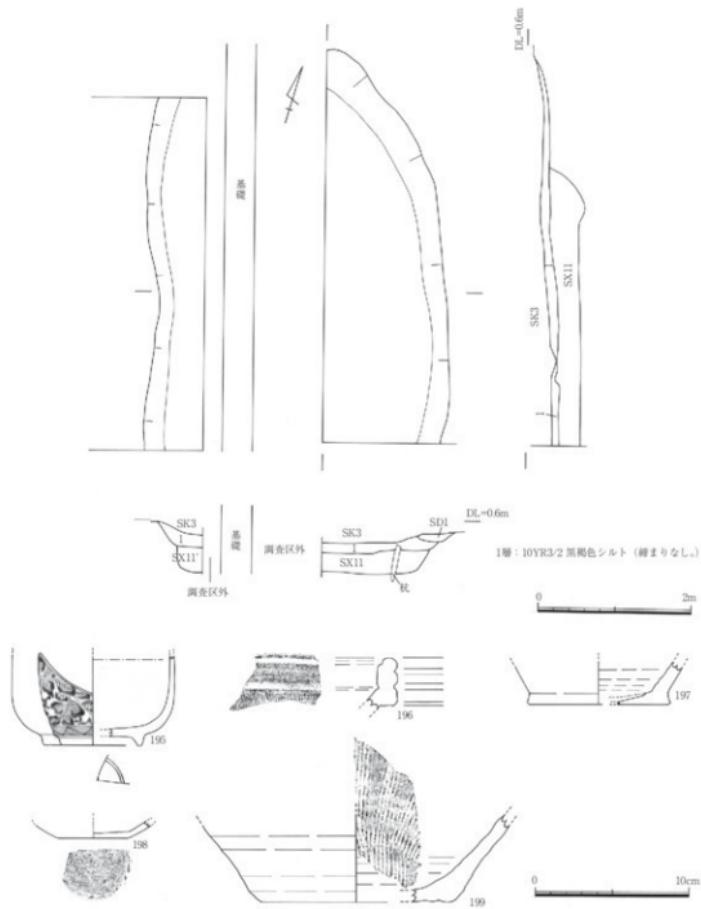


Fig.36 SX9 平面図・セクション図・出土遺物実測図

整形の落ち込みであったとみられ、TP2・3 檜出部分を合わせると、検出規模は南北確認長5.10m、東西長3.96m、深さ13~32cmを測る。埋土は腐植土層とみられる黒褐色シルトである。

出土遺物は磁器染付蓋物、陶器擂鉢・瓶類、土師質土器小皿である。

図示したものは195~199である。195は肥前産の染付蓋物で、唐草文と檜垣を描く。196・199は備前焼の擂鉢。197は焼締めの陶器の底部で、備前焼の瓶類か。198は土師質土器小皿である。

SK3・11・SD1との前後関係及び出土遺物からみて、SX9は17世紀後半に比定される。

SX11 (Fig.13・37)

TP4のⅢ層下面で検出されたもので、上面をSK4・7に切られている。壁の立ち上がりが未検出

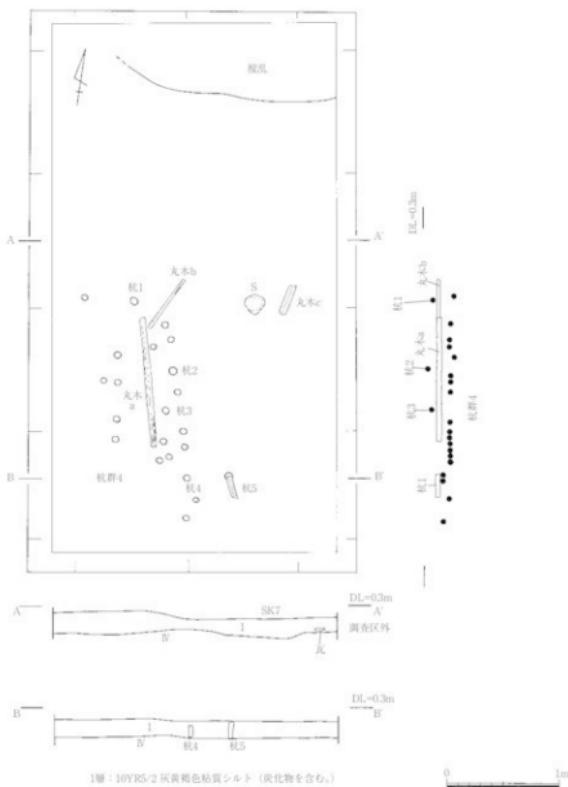


Fig.37 SX11・杭群4 平面図・セクション図・垂直分布図

で、規模や性格が不明であるが、SX14に類似する浅い落ち込み状の遺構であった可能性がある。床面は東側がわずかに深くなってしまっており、深さ23cm前後を測る。埋土は炭化物を含んだ灰黄褐色粘質シルトである。SX11の床面では多数の杭穴と残存する杭を検出している。また床から10cm程浮いた位置では、杭とみられる丸木が横たわった状態で数本出土している。

出土遺物は土師質土器小皿と瓦片である。

SX11の時期については不明なところが多いが、Ⅲ層との関係からみて、17世紀前半～中葉に比定される。

SX12 (Fig.10・38)

TP1 西部で検出した性格不明の掘り込みで、Ⅲ' 層を掘削している。他遺構との切り合い関係では、SD2・SX14・16を切り、SX1・杭群1・瓦溜1に切られている。平面プランは不明瞭であるが、TP1 の東西セクションで、東西確認長1.63m、深さ44cmの断面を確認している。埋土は灰黄褐色シルトで部分的に砂が混じっている。

出土遺物は青花皿、陶器中碗・小皿・中皿・皿、及び陶磁器・土器細片、瓦片で、瓦片には被熱し橙色に変色した丸瓦1点が含まれている。

図示したものは200～204である。203は中国漳州窯系の青花皿である。200は肥前産の京焼風陶器碗で、呉須で山水文を描く。201は尾戸窯の灰釉皿である。202は唐津系灰釉陶器の小皿で、内底に胎土目痕が残る。204は焼締めの灯明受皿か。口縁部内外面にタール状の焦げが付着する。

出土遺物や他遺構との前後関係からみて、SX12は18世紀に比定される。

SX14 (Fig.11・39～41)

TP2 の東部からTP1 の西部にかけて検出された浅い落ち込み状の遺構で、検出面はⅢ層・Ⅲ' 層の直下にある。他遺構との切り合い関係では、SK11に切られている。

同地点では灰黄褐色粘質シルトからなる南北方向の緩やかな落ち込み(IV' 層)が検出されているが、SX14はその中の楕円形の緩やかな落ち込み部分にあたり、ここに木屑や木片、木製品などが溜まっている。検出規模は南北確認長5.00m、東西長4.32m、深さ32cmを測る。

埋土は1層が暗褐色の腐植土層で木屑を多量に含んでいる。2層は炭化物を含んだ灰黄褐色粘質シルトである。床面からは下駄、桶の底、箸、漆器椀などの木製品、木片等が多数出土している。また床面からは、動物骨とみられる小片も各所から出土している。

出土遺物は磁器染付中碗・小皿、陶器中碗・碗又は鉢・小皿・皿・瓶・壺又は壺、土師質土器杯・小皿・焼塩壺、及び陶磁器・土器細片と瓦片、木片と木製品、骨片である。

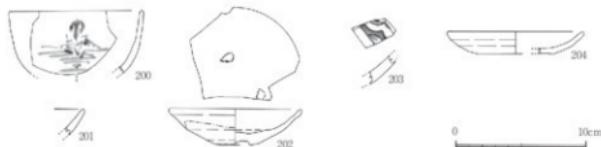


Fig.38 SX12 出土遺物実測図

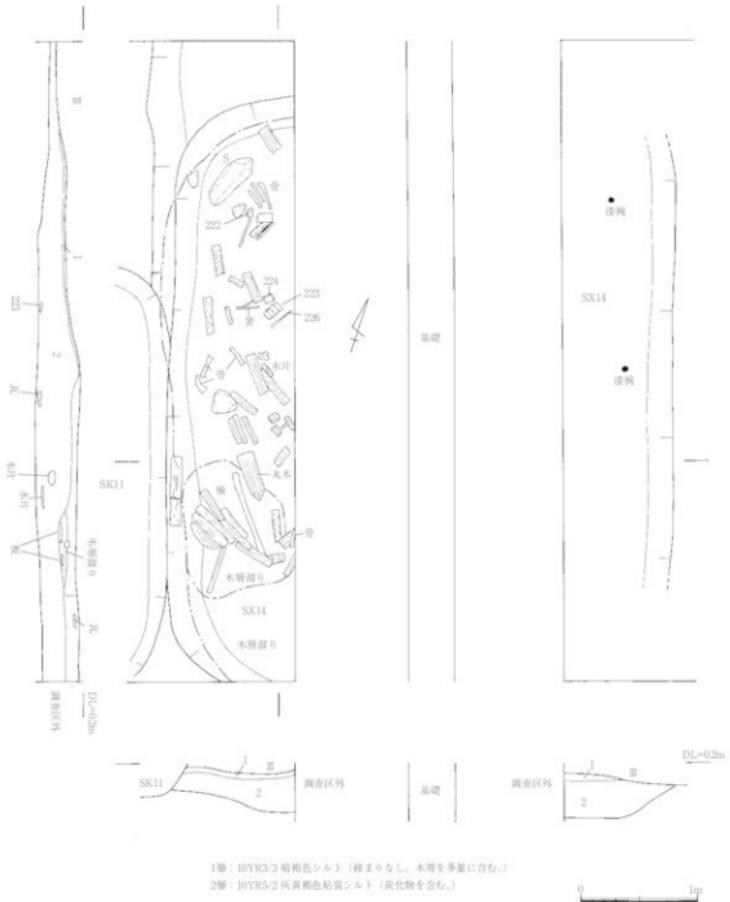


Fig.39 SX14 平面図・セクション図・遺物出土状況図

図示したものは205～230である。205は染付中碗で、肥前産1610～1630年代。縦方向の鏽を数条入れ、その間に「福寿」字を配する。豊付に粗砂が付着している。206は肥前産の染付小皿である。

207～213は陶器。207は瀬戸・美濃産の灰釉丸碗。208は唐津系灰釉陶器の中碗。209は高台施釉の灰釉碗で、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。210は灰釉の碗で、尾戸窯産の可能性をもつ。211は肥前産の灰釉小皿で、内底に砂目痕が残る。212は肥前産の二彩手の皿で、内面に白化粧土刷毛

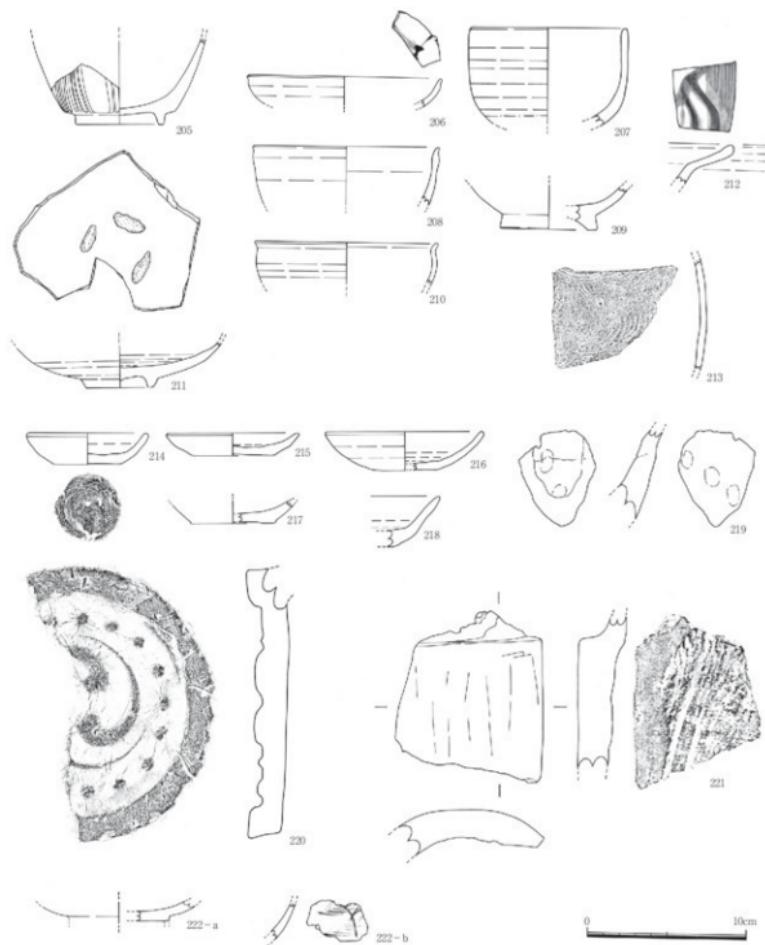


Fig.40 SX14 出土遺物実測図 (1)

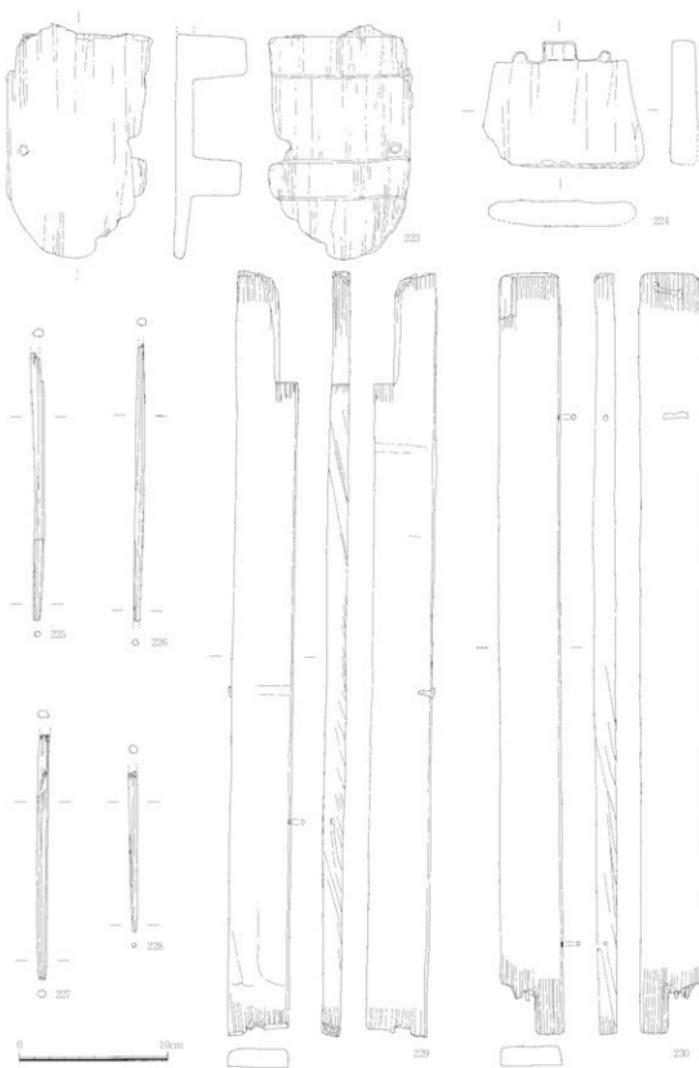


Fig.41 SX14 出土遺物実測図 (2)

目を施した後、縁軸と鉄軸を流し掛けする。213は壺又は甕の体部で、外面に白濁した軸が掛る。内面に青海波状の圧痕が残る。

214～219は土師質土器。214～217は小皿、218は杯又は皿である。219は関西産の焼塙壺で、内外面にユビオサエとナデを施し、胎土中に金雲母を含む。

220・221は瓦。220は巴文軒丸瓦である。221は丸瓦で、外面にイタナデ、内面に布目痕が残る。

222～230は木製品。222-a・bは漆器椀で、内外面に黒漆、外面に赤蒔絵を施す。223・224は下駄。223は小判形の連歯下駄で、歯は削り出しによる。224は下駄の歯。差歛で、上部に3箇所の差し込みを設けている。225～228は箸で、側面に面取りを施している。229・230は用途不明の板状製品で、同一個体の部品とみられる。

Ⅲ層・Ⅲ'層との関係及び出土遺物からみて、SX14は17世紀前半～中葉に比定される。

SX15 (Fig.12)

TP3 北西部で検出した性格不明の掘り込みで、Ⅲ層の下面で検出された。他遺構との切り合い関係では、SK11' に切られている。東部が調査区外に出るため形態は不明であるが、検出規模は南北確認長2.54m、東西確認長0.65m、深さ19cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は確認できていない。

SK11' 及びⅢ層との前後関係からみて、SX15は17世紀前半～中葉に比定される。

SX16 (Fig.10)

TP1 東部で検出した性格不明の掘り込みで、Ⅲ'層を掘削している。切り合い関係では、SD2 を切り、SK1・SX1・12に切られている。平面プランは不明瞭であったが、TP1 の東西セクションで、東西確認長1.20m、深さ45cmの断面を確認している。埋土は灰黄褐色シルトである。

他遺構との切り合い関係からみて、SX16は18世紀に比定される。

(4) 杭群

杭群 1 (Fig.10・42)

TP1 で検出した杭群で、径5cm前後の丸木を使用した杭が、周辺の溝群と軸方向を揃えて南北方向に分布している。杭はSX1の床面から検出され始め、以下、Ⅲ層検出の遺構内にかけて検出される。各杭の検出レベルには高低差があり、SX1の直下面に分布するものとSX14の上面に広がるものがあるが、位置関係や分布の軸方向からみて境界施設などに関わる杭列であった可能性がある。他遺構との前後関係では、SX1に切られ、SX12・14・16・SD2を切っている。

杭群 1 は18世紀に比定される。

杭群 2 (Fig.11・42)

TP2 で検出した杭群で、径5cm前後の丸木を使用した杭が、周辺の溝群と軸方向を揃えて南北方向に分布している。杭はⅢ'層の上面から検出され始め、以下、Ⅲ層検出の遺構内とSX14の上位にかけて検出される。各杭の検出レベルには高低差があるが、位置関係や分布の軸方向からみて、境界施設などに関わる杭列であった可能性がある。他遺構との前後関係では、SK11・SX9・14を切っている。

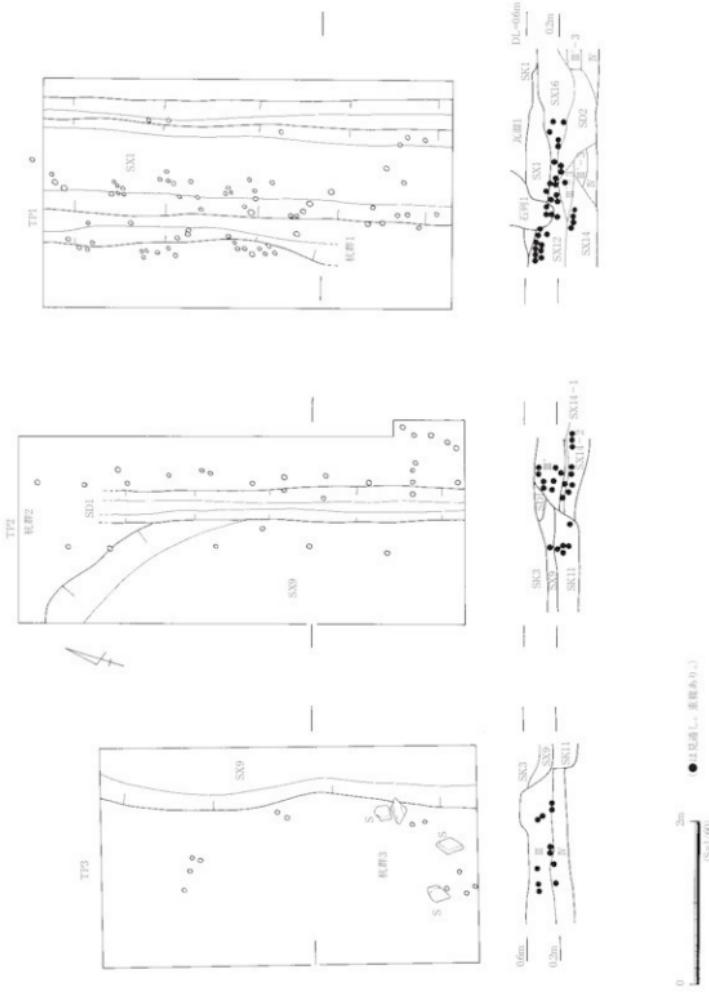


Fig.42 杭群1～3 平面図・垂直分布図

SX9との前後関係からみて、杭群2は17世紀後半以降に比定される。

杭群3 (Fig.42)

TP3で検出した杭群で、不規則に分布している。杭はⅢ層の中位からⅣ層上面にかけて検出されている。Ⅲ層との関係からみて、杭群3は17世紀後半以降に比定される。

杭群4 (Fig.37)

TP4のSX11埋土中で検出されたもので、径4～8cmの丸木を使用した杭がSX11の埋土上位から

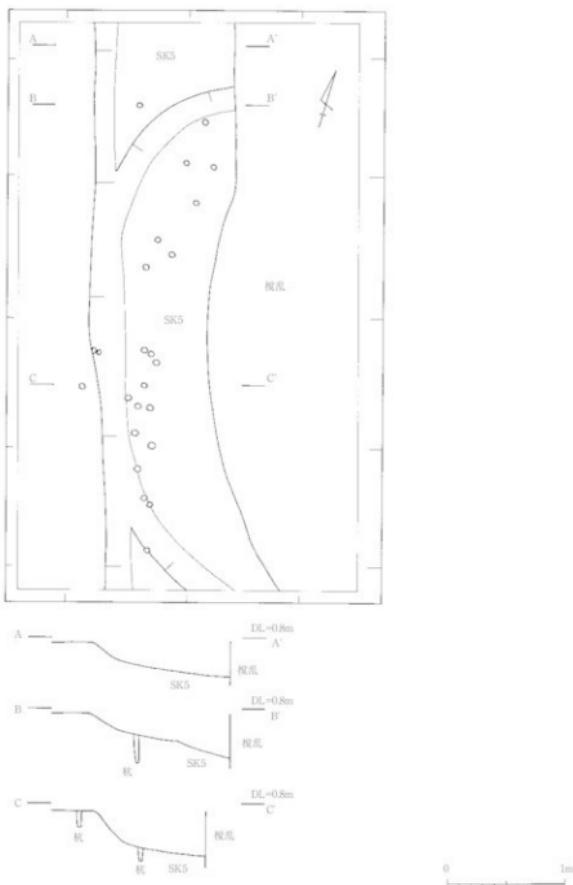


Fig.43 杭群5 平面図・エレベーション図

床にかけて打ち込まれている。SX11の埋土中では、杭とみられる丸木が横たわって出土している。

杭群5 (Fig.43)

TP5のSK5の直下及びIV層の上面で検出された杭群で、径4~6cmの丸木を使用した杭が南北方向に不規則に分布している。SK5によって上面を削平されているため、本来の打ち込み面が明らかでないものが多いが、IV層上面から打ち込まれた杭が検出されているため、その他の杭群についてもIV層上面から打たれていた可能性がある。

(5) 瓦溜り

瓦溜1~6はTP1~6にかけての広い範囲に分布するもので、何れも近現代の整地層であるI層と擾乱層の直下~II層の上面で検出している。各試掘坑間で遺物片の接合や描いのものがみられることから同時期の廃棄遺物と考えられるが、出土地点別に瓦溜1~6に分けて調査を行った。深さは、TP1で36cm、TP2で48cm、TP3で36cm、TP4で28cm、TP5で26cm、TP6で30cmを測り、床面に高低差がみられる。瓦溜1~6では多数の瓦とともに陶磁器・土器等が出土しており、出土遺物の総量は、コンテナ箱にして瓦片が33箱、陶磁器・土器が12箱分である。

瓦溜1 (Fig.11・44~49)

TP1で検出した瓦溜りである。他遺構との切り合い関係では、SK1・SX1・SX12を切り、近代の石列1・SX8に切られている。隣接する瓦溜2とは出土遺物片の接合関係が認められ、同時期の遺物廃棄と考えられる。

図示したものは231~323である。231~239・243~261は磁器で、232・234・235が能茶山窯産、その他は肥前産又は肥前系である。231~239・243~249・251・254~257・259~261は染付。232は能茶山窯の端反形中碗で、高台内に角枠内「茶」銘をもつ。234・235は能茶山窯の広東形中碗で、高台内に「サ」銘をもつ。233は端反形中碗で、格子文と梅花を描く。236は端反形の薄手酒杯。237は小杯で、口縁部輪花形。外面に山水文と蓮弁文、内面に鶴を描く。238は輪花形の小皿である。239は変形の極小皿で、内面にコンニャク印判による紅葉を描く。243は丸形の中皿。244・245は八角形の鉢である。246は鉢で、外面下位に蓮弁文と不明文様、高台内に銘を認める。247・248は蓋物で、247は蛇ノ目高台をもつ。251は蓋物の蓋で、丸文と寿字文を描く。249は段重で、花唐草文を描く。254は仏飯器で、蛸唐草文を描く。255は辯慶形の小瓶で、梅花と葦を描く。256は辯慶形の小瓶で、蛸唐草文を描く。257は小瓶で、蝙蝠と蓮弁文を描く。259-a・bは銚子で、把手に型作りによる菊花を貼付する。260・261は宝船を表した水滴で、瓦溜2出土の染付水滴(339~341)と描いとみられるものである。252・253は白磁の菊花形紅皿である。250は青磁染付の蓋物で、内面に四方擗とコンニャク印判による五弁花文を描く。258は青磁の香炉である。240~242は中国景德镇窯系の青花皿である。

262~292は陶器。262は灰釉の丸形中碗で、高台内無釉。263は灰釉の折沿形鉢である。264は鉄釉の半筒形小碗。265は灰釉の小皿で、外面に縱筋を施す。266は尾戸窯の灰釉鉢。高台無釉で、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。267は灰釉のおろし皿である。268~270は京都・信楽系の柄杓とみられるもので、灰釉を施し、内面中位に鉄釉による圈線を巡らせる。271は灰釉の蓋物で、鉄絵

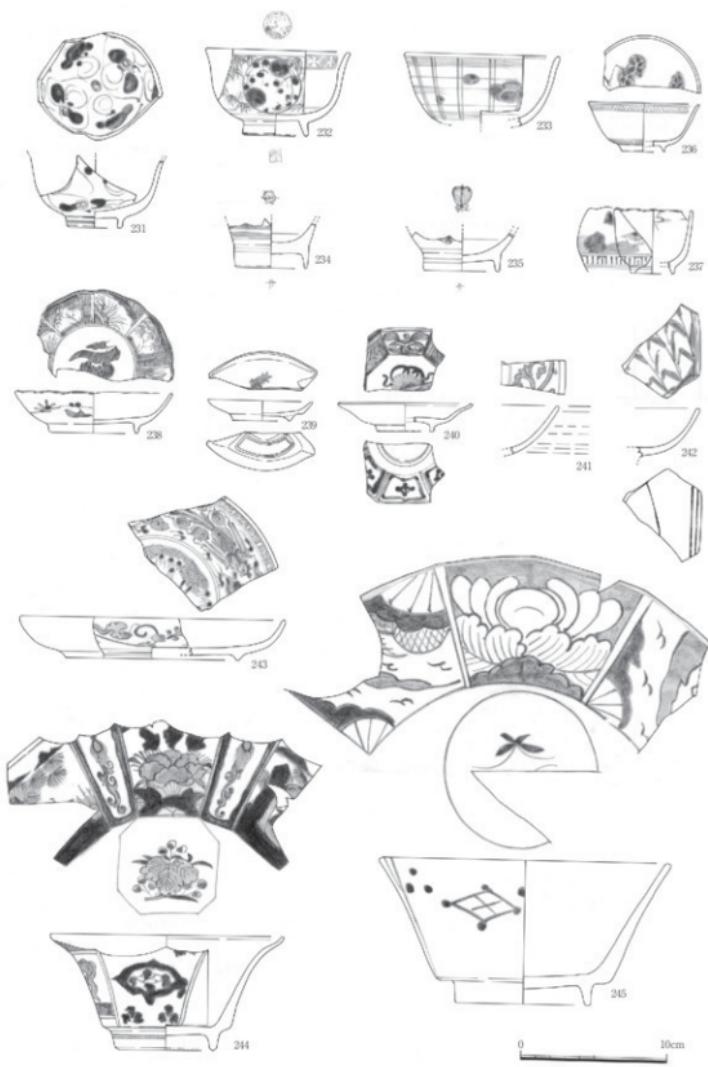


Fig.44 瓦窯 1 出土遺物実測図 (1)



Fig.45 瓦窯 1 出土遺物実測図 (2)

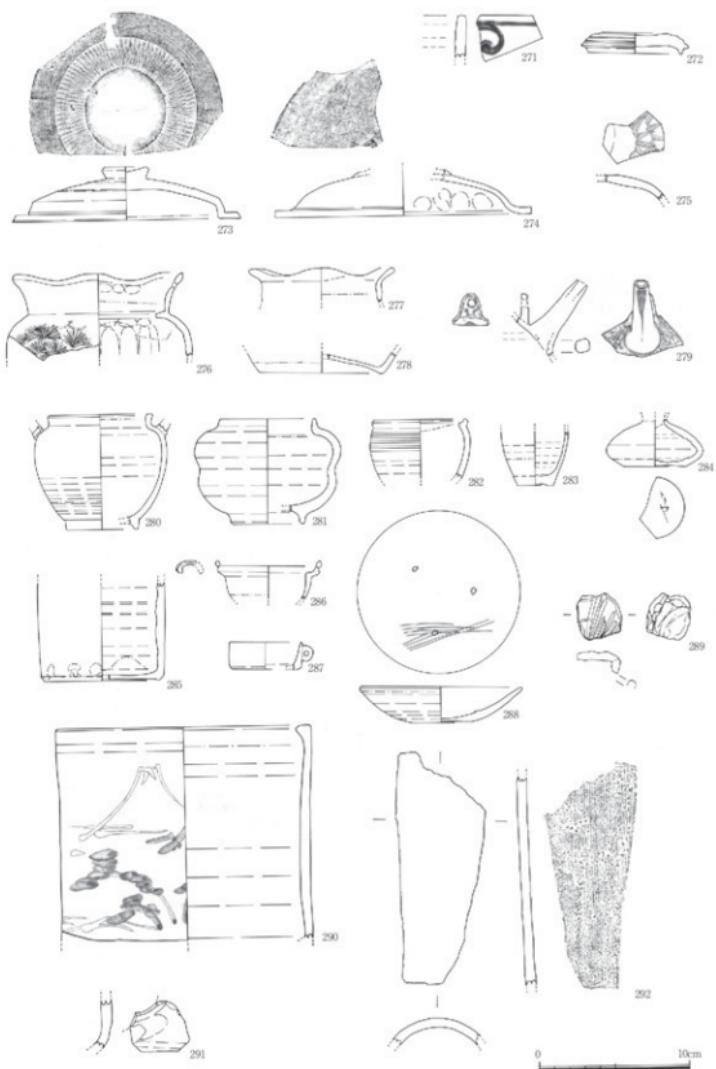


Fig.46 瓦溜1出土遺物実測図 (3)

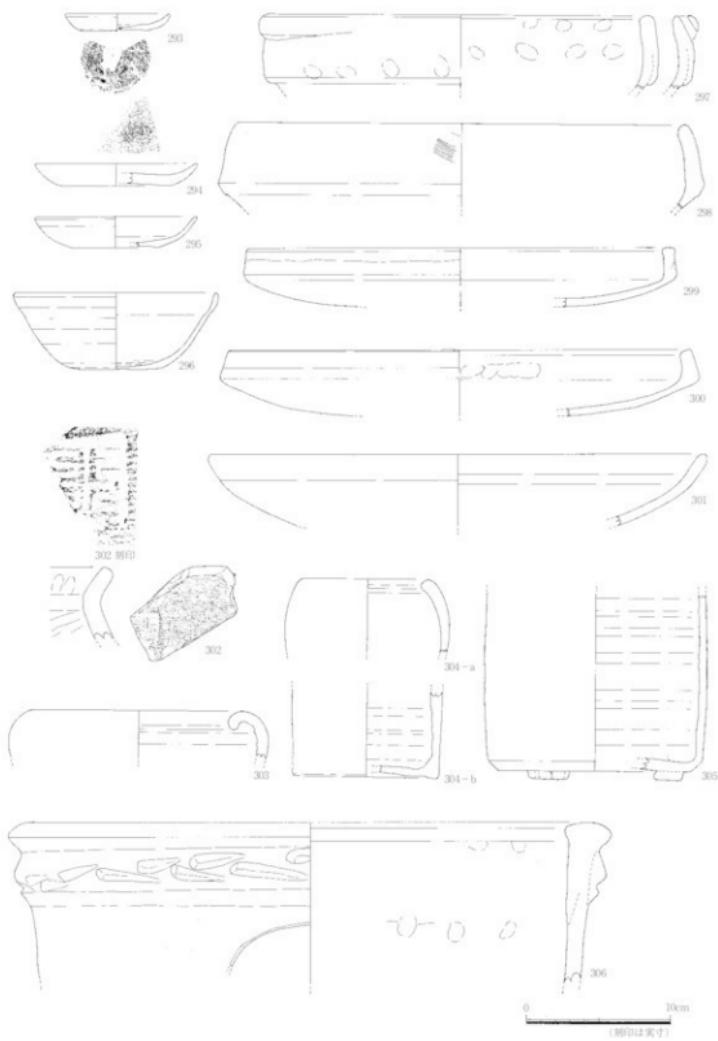


Fig.47 瓦窯 1 出土遺物実測図 (4)

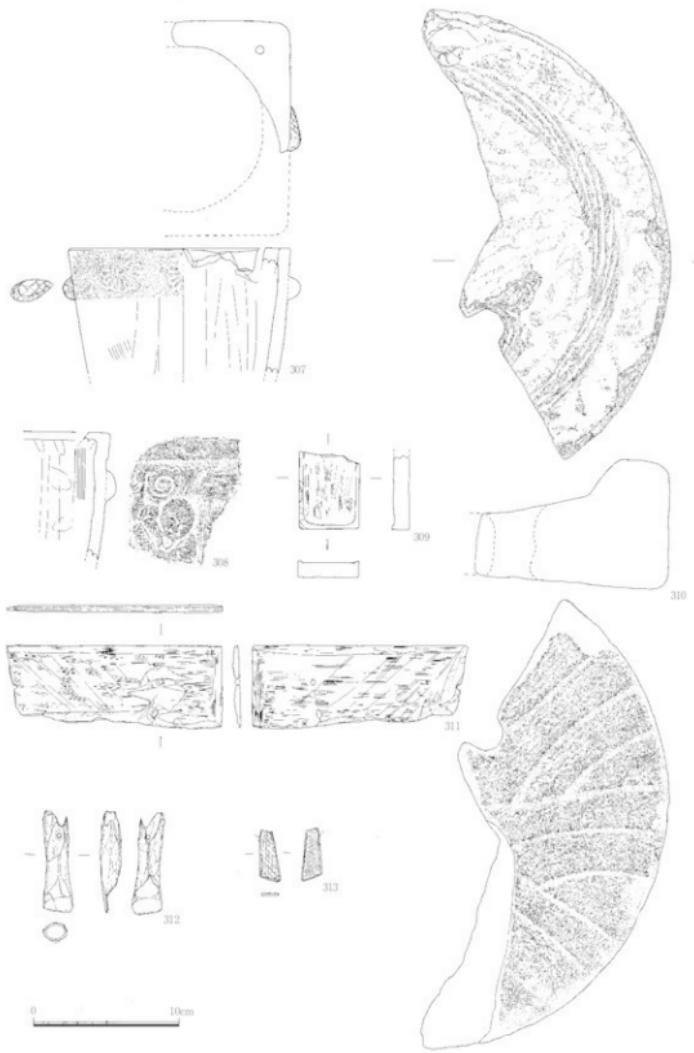


Fig.48 瓦窯 1 出土遺物実測図 (5)

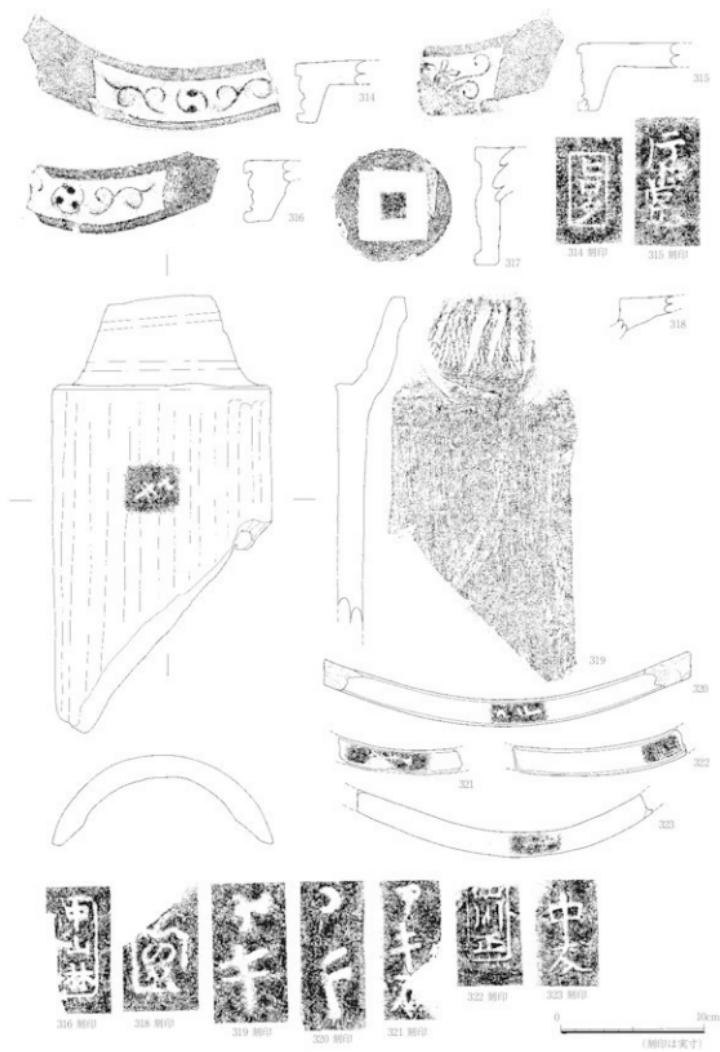


Fig.49 瓦罐1出土遺物実測図 (6)

を描き、尾戸窯の製品か。272は尾戸窯の灰釉蓋である。273は鉄釉の鍋の蓋で、能茶山窯産の可能性をもつ。外面に飛鉤を蛇ノ目状に巡らせる。274は焼締めの鍋の蓋。内面にユビオサエとナデ、外面に布目痕が残る。275は尾戸窯の蓋で、鉄絵の笠文を描く。276は灰釉の急須か。口縁部を波線状に成形し、外面に型による陽刻の松文を施す。277は京都系の急須か。口縁部を波線状に変形させ、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。278は灰釉の土瓶又は急須で、外面に型による粒状の陽刻文様が施される。279は色絵の土瓶で、赤の上絵付で唐草文を描く。280は灰釉の小壺で、双耳を貼付する。281は鉄釉の小壺で、茶入か。内外面に暗褐色の釉、口縁端部と口縁部内面、疊付に白土を施している。282は蓋物か。外面上位に柳目を巡らせ赤褐色の釉を施す。283は鉄釉の小瓶で、暗褐色の釉を施す。284は灰釉の小瓶で、外底に墨書を認める。285は鉄釉の瓶類で、尾戸窯又は能茶山窯の製品か。286はミニチュアの鍋で、にぶい赤褐色の釉を施す。287は灰釉の飼猪口。288は京都・信楽系の灰釉灯明受皿で、内底に柳目を施す。289は水滴で、人物か。型押成形前後貼り合わせにより、背面に円孔を穿つ。灰白色を帯びる半透明の釉を施す。290は尾戸窯の灰釉火鉢で、吳須と白土イッヂ描きで富士山と樹木を描く。291は前方に窓をもち、風炉か。灰白色を帯びる半透明の釉を施し、尾戸窯の製品か。292は焼締めの土管。型作りの後、外面にハケ目を施す。内面には圧痕が残り、灰白色的粗砂が付着する。

293~306は土師質土器。293・295は小皿。294は尾戸窯の白土器小皿で、型による松竹梅鶴亀文を施す。296は外底と外面下位に回転ケズリを施すもので、外面全体に煤が強く付着しており、鍋として使用したものか。297は関西産の焰烙で、双耳をもつ。298~300は関西系の焰烙。301は在地系の焰烙である。302は口縁部から切り込む窓を認めており、焜炉か。外面に回転方向の横目を巡らせ、上位に刻印を認める。304-a・bは練り込み手の焜炉又は涼炉。305は筒形の焜炉で、灰白色の胎土をもつ。外底に五角形の三足を貼付する。306は関西産の竈で胎土中に金雲母を含む。体部前方に窓をもち、口縁部外面には粘土帶を貼付してヘラ彫りによる文様を巡らせる。303は火消し壺か。307・308は瓦質土器の焜炉。307は外面に印花による菊文を施し、松笠形の双耳を貼付する。308は外面に型による陽刻の人物文を施し、松笠形の双耳を貼付する。

309~311は石製品。311は用途不明の板状製品。枯板岩製で、周縁を斜めに薄く削り数箇所に円孔を穿つ。309は枯板岩製の硯である。310は砂岩製の石臼で、上面から貫通する円孔を穿つ。312・313は銅製品。312は匙の把手とみられるもので、中央に円孔を穿つ。313は用途不明の板状製品で、両面に型による陽刻の格子文と繪垣文が施される。

314~323は瓦。317は棟飾り瓦、314~316は軒桟瓦、318・319は丸瓦、323は棟瓦、320は平瓦、321・322は桟瓦又は平瓦で、314・316は巴文と均整唐草文、315は丁字文と均整唐草文、317は丸に一つ石紋を配する。これらのうち、319・320は「アキ」、321は「アキ□」銘印をもち、安芸（高知県安芸市）産。316は角枠内「中山林」、323は「中友」銘印をもち、中山田（高知県香南市野市町中山田）産。315は「片常」銘印をもち、片地（高知県香美市土佐山田町片地）産である。また314は角枠内「ヒロタ」、318は角枠内「□の□」、322は角枠内「□川正」銘印をもつ。

瓦溜 2 (Fig.11・50~56)

TP2 にて検出した瓦溜りである。他遺構との切り合い関係では、SK3・SD1 を切っている。隣接



Fig.50 瓦窯2出土遺物実測図（1）

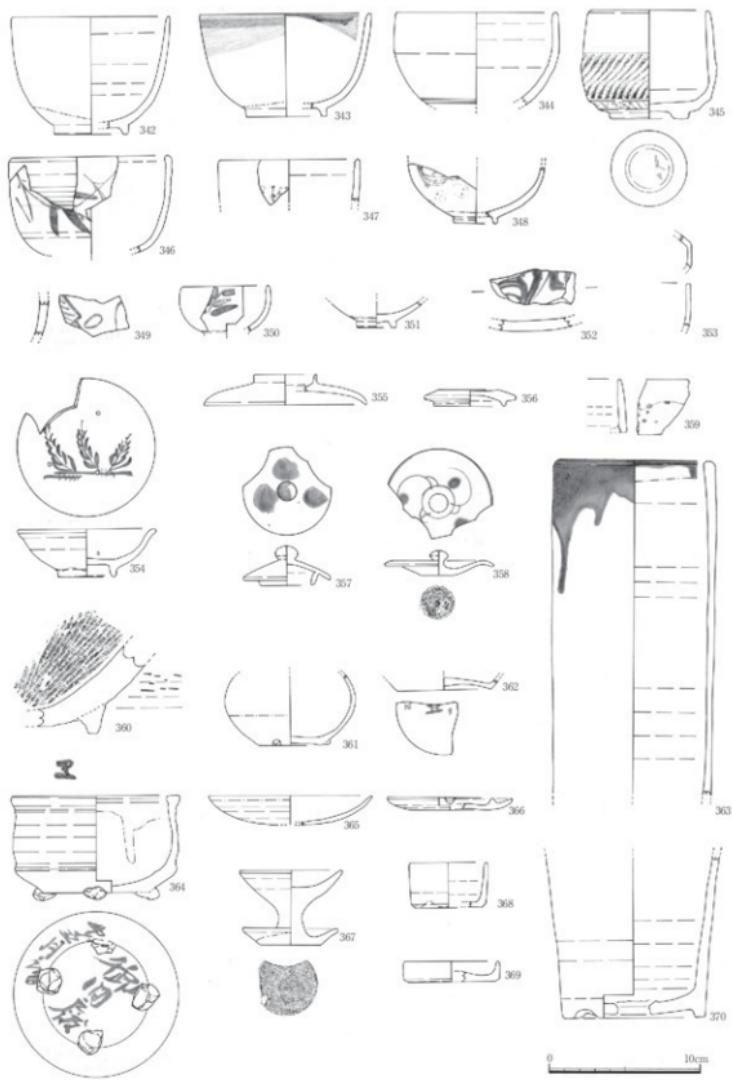


Fig.51 瓦溜2出土遺物実測図 (2)

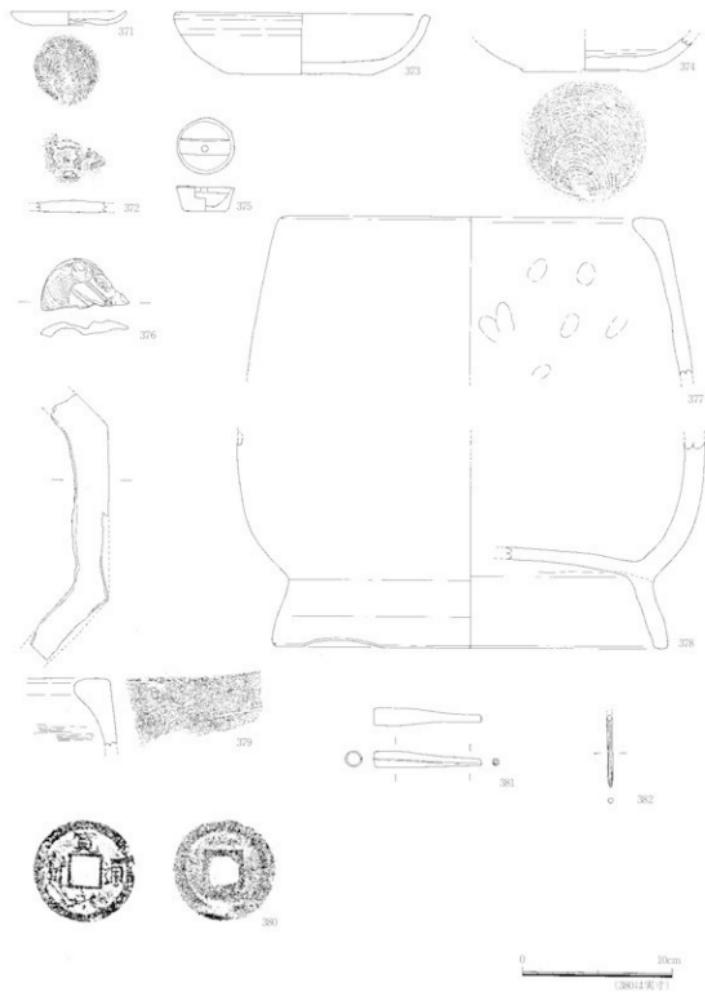


Fig.52 瓦窯2出土遺物実測図 (3)

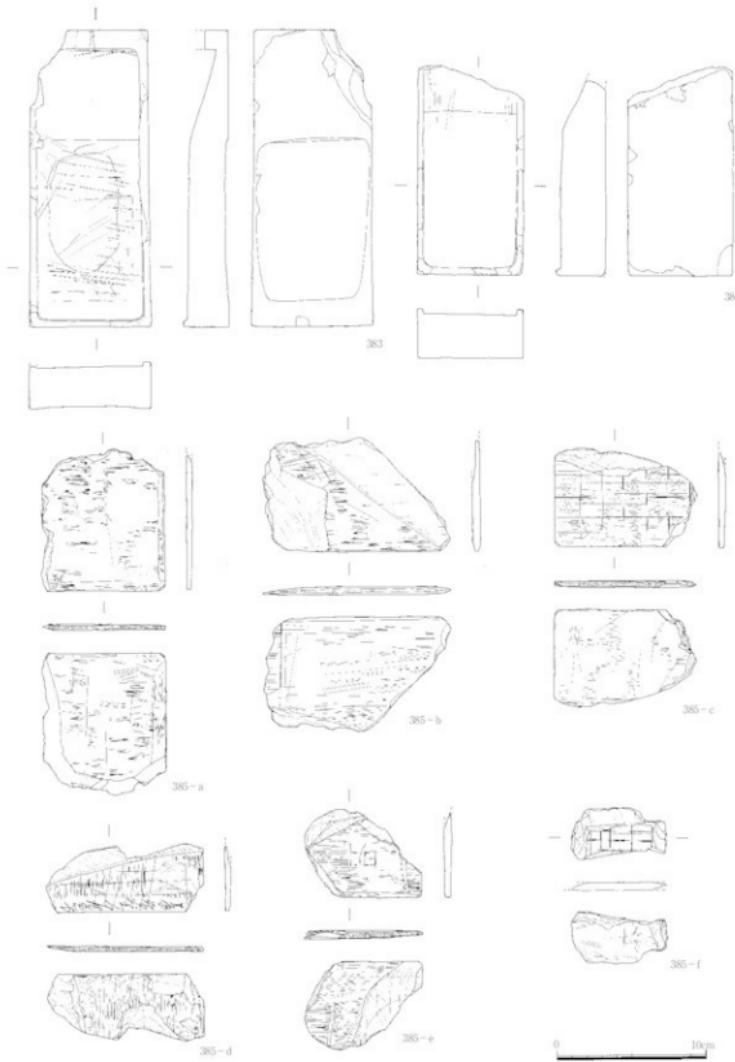


Fig.53 瓦窯2出土遺物実測図 (4)

する瓦溜1とは出土遺物片の接合関係が認められ、同時期の遺物廃棄と考えられる。

図示したものは324~425である。324~327・329~341は磁器で、325が能茶山窯産、その他は肥前産である。325~327・329~336・338~341は染付。325は能茶山窯の広東形中碗で、高台内に「サ」銘をもつ。326は半筒形の小碗で、算本文を描く。327は丸形の小碗で、コンニヤク印判による菊花文を描く。329は丸形の小杯で、福寿を描く。330は小皿で、口縁部後花形。高台内に変形字銘を描く。331は糸切り細工による変形形の極小皿で、内面にコンニヤク印判による紅葉と折松葉を描く。333は初期伊万里の小皿で、内面に銀杏合わせ文を描く。豊付には粗砂が付着している。334は見込み蛇ノ目釉調ぎの小皿で、内面に略化した文様を描く。335は広東形碗の蓋である。336は仏飯器で、半菊文様を描く。338は水滴。339~341は宝船を表した水滴で、同一個体又は揃いとみられるものである。324は青磁染付の丸形中碗で、外面にオリーブ灰色の釉を施し、内面に四方擣、見込みに手描きによる五弁花文、高台内に角棒内渦「福」を描く。337は白磁の香炉で、三足を貼付する。328は中国景德鎮窯系の青花小碗で、花唐草文を描く。口縁端部の釉が虫食い状に剥がれる。

342~370は陶器。342・343・346・349は尾戸窯の灰釉中碗で、343は口縁部内外面にオリーブ褐色の釉を2方向から斜め掛けする。346は外面中位に四線を巡らせ、鉄絵による松葉と筆を描く。349は鉄絵による宝文を描く。344は灰釉の丸形中碗で、外面下位に沈線を巡らせており、尾戸窯の製品か。灰白色を帯びる半透明の釉を施し御本が入る。345は鉄釉中碗で、輪高台をもつ。外面上半と内面に黒色の釉を施し、外面下半に飛鉢を巡らせる。351は京都・信楽系の灰釉小碗である。352は志野焼の皿又は鉢で、内面に鉄絵を描く。353は尾戸窯の陶器で、器種不明。多角形の口縁部をもち、内外面に灰釉を施している。354は尾戸窯の灰釉端反形小皿で、呉須で植物を描く。355は尾戸窯の灰釉蓋。356は京都・信楽系の灰釉蓋物の蓋。357は灰釉の土瓶又は急須の蓋で、鉄釉を掛け分ける。358は土瓶又は急須の蓋で、白化粧の後、鉄絵と緑釉による文様を描き、灰釉を施す。359は尾戸窯の陶器で髪水入れか。灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施し、外面に鉄絵による草花文を描く。被熱し釉は変質している。360は備前の擂鉢である。361は灰釉の土瓶で、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。362は灰釉の土瓶又は急須で、外底に墨書を認める。363は花生か。白化粧の後口縁部に緑釉を流し掛けする。364は鉄釉の火入又は香炉で、手捏ねによる四足を貼付する。口縁部全体に敲打痕が残り、外底と内底に墨書を認める。365は備前の灯明受皿で、内面に錆釉を刷毛塗りする。366は灯明受皿で、油溝をもち、内面に錆釉を施す。367は尾戸窯又は能茶山窯の台付灯明受皿で、褐色の釉を施す。368・369は灰釉の餌猪口。370は瀬戸・美濃産の植木鉢で、浅黄色を帯びる透明の釉を施す。347・348・350は色絵。347は京都又は京都系の中碗で、灰白色を帯びる透明の釉を施し、赤その他の上絵付で唇手文を描く。348は京都・信楽系の半球形小碗で、赤その他の上絵付による草花文を描く。350は京都・信楽系の丸形小杯で、上絵付で植物を描く。色絵は被熱し変質している。

371~374・376~379は土師質土器。372は尾戸窯の白土器小皿で、内底に型による陽刻の高砂文を施す。371は小皿で、口縁部にタール状の焦げが付着する。373・374は中皿。373は外面下半に回転ケズリ、外底に回転糸切り後ナデを施すもので、煤や焦げの付着からみて焙烙として使用したとみられる。377・378は丸形の焜炉。379は火鉢又は焜炉で、八角形のものか。胎土中に金雲母を含

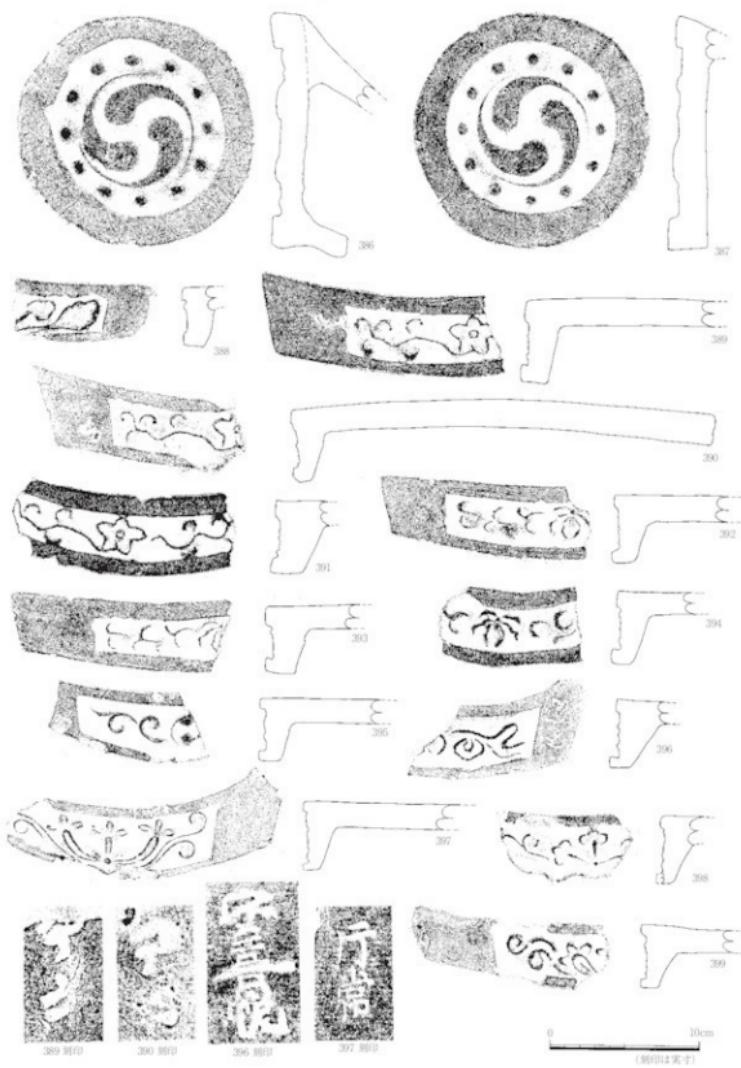


Fig.54 瓦窯2出土遺物実測図（5）

み関西産とみられる。376は人形で、馬。型押成形貼り合わせにより、接合部で剥離している。375は施釉土器のひょうそくで、内面に橙色の低火度釉を施す。

381は煙管の吸口。380は寛永通宝である。

382～385は石製品。382は用途不明の棒状製品で、先端を尖らせる。385-a～fは用途不明の板状製品で、粘板岩製。周縁を斜めに薄く削り、両面に研磨を施している。表面には、釘状の原体による格子状の刻みや直線方向の刻み、釘彫による文字が認められる。383は粘板岩製の硯で、硯背に窪みをもつ。陰部の中央は使用により窪み、釘状の原体による線彫が数条残る。384は凝灰岩製の硯である。

386～425は瓦。386は棟飾り瓦、387は軒丸瓦、389～391・402・403は軒平瓦とみられるもの、

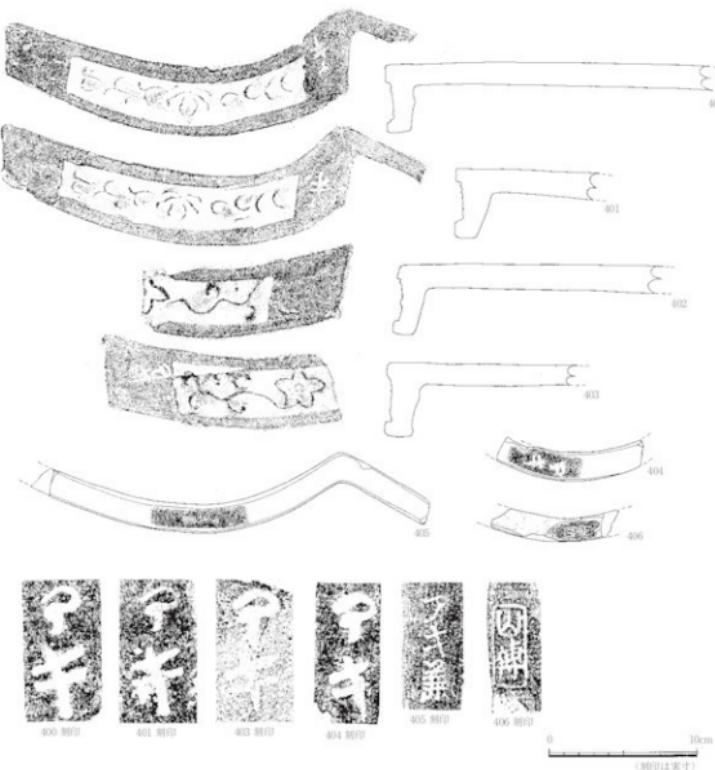


Fig.55 瓦窯2出土遺物実測図 (6)

388・396・397・399・400・401は軒棟瓦、392～395・398は軒棟瓦とみられるもの、404～425は棟瓦又は平瓦である。このうち386・387は巴文、395は巴文と均整唐草文、389～391・402・403は花文と均整唐草文、392～394・400・401は薦文と均整唐草文、397～399は丁字文と均整唐草文を配する。これらのうち、389・390・400・401・403・404・407～412は「アキ」、413～415は「アキ万」、396は「安喜□」、405は「アキ兼」、416は「御瓦□」銘印をもち、安芸（高知県安芸市）産。417は「中□」銘印をもち、中山田（高知県香南市野市町中山田）産。397・418は「片常」、419は「片重」、420～422は角枠内「片□」銘印をもち、片地（高知県香美市土佐山田町片地）産。423は「布直」銘印を

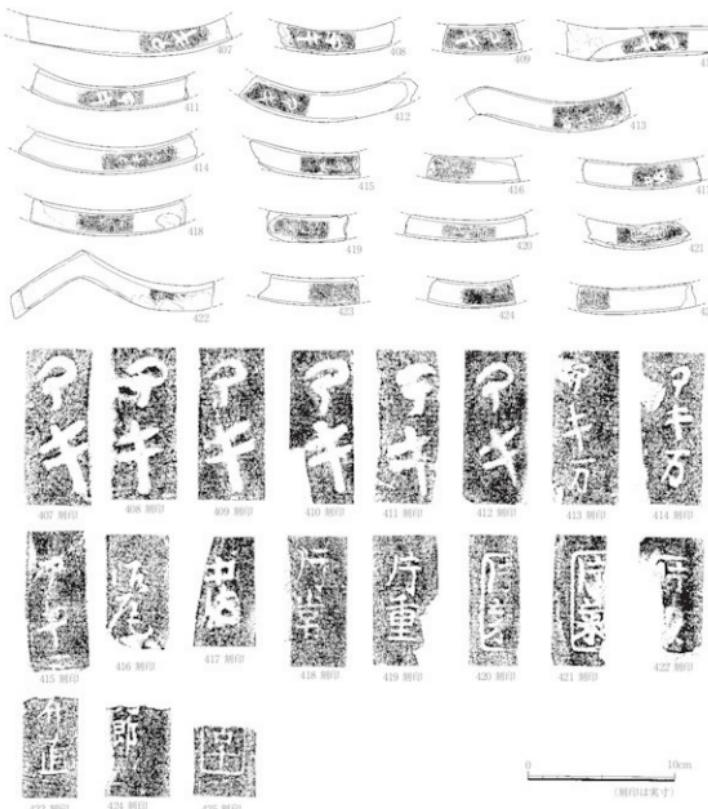


Fig.56 瓦溜2出土遺物実測図 (7)

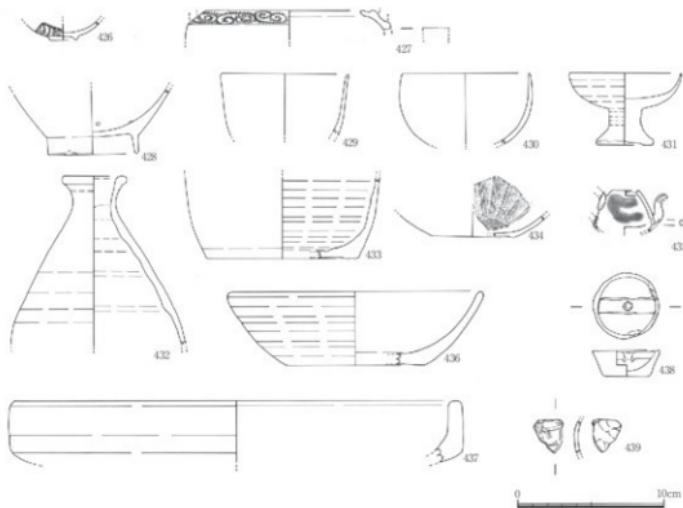


Fig.57 瓦溜3出土遺物実測図

もち、布師田（高知市布師田）産である。また406は角枠内「山傳」、424は「・□郎」、425は角枠内銘印をもつ。

瓦溜3 (Fig.12・57)

TP3にて検出した瓦溜りである。他遺構との切り合い関係では、SK3を切っている。

図示したものは426～439である。426・427は肥前産の染付。426は小杯で、蛸唐草文を描く。427は銚子で、蛸唐草文を描く。

428～435は陶器。428は尾戸窯の広東形中碗。灰釉を施し、高台内無釉である。429は尾戸窯の灰釉小碗。430は京都・信楽系の灰釉半球形小碗。431は仏壇器で、灰白色の白濁した釉を施す。432は備前の鉄釉瓶である。433は鉄釉の瓶で、黒褐色の釉を施す。434は小型の擂鉢か。焼締めで、内面に櫛目を施している。435はミニチュアの水注で、白化粧の後、緑釉を流し掛けする。

436・437・439は土師質土器。436は鉢で、外面下半に回転ケズリ、外底にナデを施す。外面に強い煤、内底に焦げを認め、焙烙として使用したものか。437は関西産の焙烙。439は人形で、人物か。中空で、型押成形前後貼り合わせによる。438は施釉土器のひょうそくで、内面に橙色の低火度釉を施す。

瓦溜4 (Fig.13・58・59)

TP4にて検出した瓦溜りである。他遺構との切り合い関係では、SK4・7を切っている。

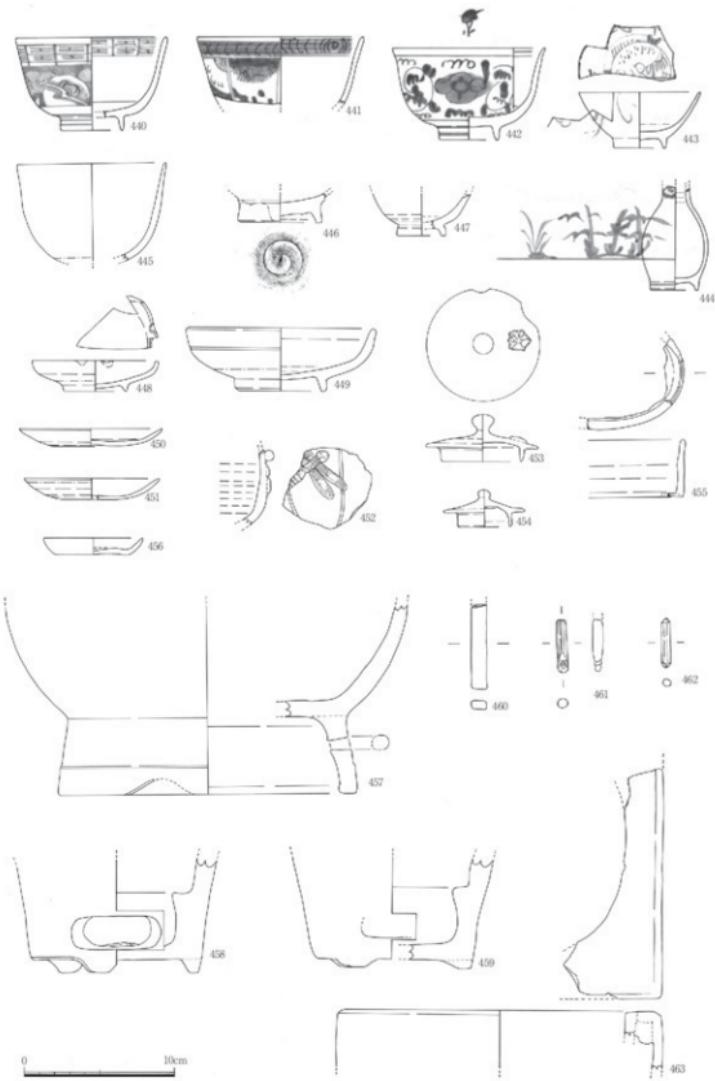


Fig.58 瓦窯4出土遺物実測図（1）

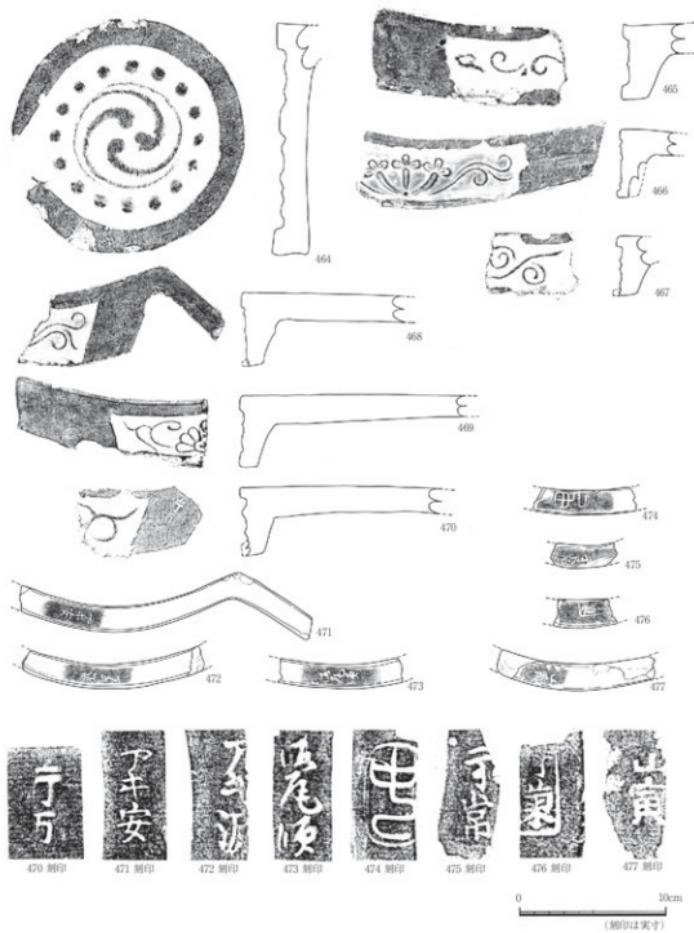


Fig.59 瓦溜4出土遺物実測図 (2)

図示したものは440～477である。440～444は磁器で、442が瀬戸・美濃産、その他は肥前産又は肥前系である。440～442は染付端反形中碗。443は色絵小杯で、見込み蛇ノ目釉剥ぎの後、内面に赤・緑・黒の上絵付で鯛と「めでたい」の文字、外面に赤の上絵付で「めでたい」とみられる文字文を描く。444は辻並形の染付小瓶である。

445～455は陶器。445は尾戸窯の灰釉中碗。446は鉄釉中碗の底部で、高台内に渦状の鉢痕が残る。447は尾戸窯の灰釉小碗。448は尾戸窯の灰釉小皿で、口縁部の数箇所を押して輪花形に成形している。449は能茶山窯の鉄釉丸形小皿で、見込み蛇ノ目釉剥ぎ。450・451は備前の灯明受皿である。452は外面にヘラ彫りによる縦筋を施し、手捏ねによる蜻蛉を貼付する。外面にオリーブ色の釉、蜻蛉に白土を施す。453・454は灰釉の土瓶蓋で、453は桐の浮文を貼付する。455は灰釉の鳥の水入れで、尾戸窯又は能茶山窯の製品とみられる。ロクロ成形の後梢円形に成形し、底部を貼り合わせている。

456～459は土師質土器。456は小皿。457は丸形の焜炉。458・459は筒形の焜炉で、体部前方に梢円形の窓、内面下位に段をもつ。463は瓦質土器の箱形の焜炉で、内部施設をもつ。

460はガラス製の棒状製品で、断面長方形である。461は石製の棒状製品で、断面円形。端部を斜めに面取り、円孔を穿つ。462も棒状製品で、断面円形。両先端を斜めに削り尖らせている。

464～477は瓦。464は軒丸瓦、468・470は軒棟瓦、465・466・467・469は軒棟瓦又は軒平瓦、471～477は棟瓦又は平瓦で、464は巴文、466・469は丁字文と均整唐草文を配する。これらのうち、471は「アキ安」、472は「アキ□」、473は「御瓦師」銘印をもち、安芸（高知県安芸市）産。474は小判桙内「中己」銘印をもち、中山田（高知県香南市野市町中山田）産。470は「片万」、475は「片常」、476は「片□」銘印をもち、片地（高知県香美市土佐山田町片地）産である。また477は「山寅」銘印をもつ。

瓦溜5 (Fig.14・60)

TP5にて検出した瓦溜りである。他遺構との切り合い関係では、SK5・6を切っている。

図示したものは478～494である。478～485は磁器で、何れも肥前産。478・479・481～484は染付。478は碗又は猪口で、花唐草文と鳥、蓮弁文を描く。479は端反形の小杯で、草花文を描く。481は皿で、内面に鳥、高台内に鉢を描く。482は香炉又は火入で、外面に桐文を描き、外側下半に鉄釉を施す。483は香炉か。三足を貼付し、外面に七宝繋ぎ文と草花文を描く。484は端反辻並形の瓶である。480は白磁の菊花形紅皿である。485は白磁の水滴で、玄武を表す。

486～492は陶器。486は尾戸窯の灰釉丸形小碗。487は瀬戸・美濃の鉄釉天目形碗。488は備前の擂鉢。489は関西系の土瓶で、鉄釉と呉須、白土で窓に富士、格子文を描く。490は土瓶又は急須の蓋で、白化粧の後鉄絵による草文を描き、灰釉を施す。491は京都・信楽系の灰釉蓋物の蓋である。492は灰釉の飼猪口である。

493は尾戸窯の土師質土器小皿で、にぶい橙色の胎土をもつ。外面と外底に回転ケズリとナデ、内面にヨコナデを施している。494は瓦質土器の釜で、体部上半に型による陽刻の菊花と流水文を施す。

瓦溜6 (Fig.15・61)

TP6にて検出した瓦溜りである。他遺構との切り合い関係では、SK6・8を切っている。

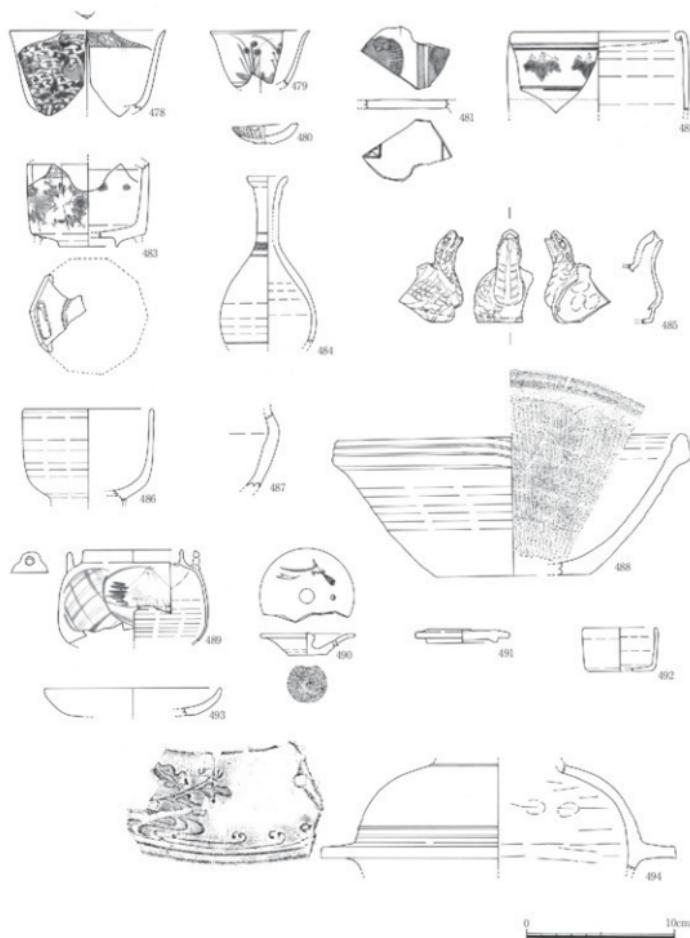


Fig.60 瓦溜5出土遺物実測図



Fig.61 瓦溜6出土遺物実測図

図示したものは495~514である。495・496・498~502は磁器で、何れも肥前産。495・496・498~501は染付。495は半筒形小碗。496は望料碗で、碗蓋499と組になるとみられる。外面に文字、口縁部内面に四方櫛を描く。498は広東形碗の蓋で、曆手文を描く。500は小瓶。501は瓶。502は色絵の体部片で、内面無釉。外面に赤・緑・黒の上絵付による丸と花卉を描く。497は中国景德鎮窯系の青花皿で、内面に玉取獅子文とみられる文様がみられる。

503~508は陶器。503・504は尾戸窯の灰釉中碗。505は尾戸窯の灰釉碗で、口縁部外面に白象嵌による囲線がみられる。薄手で、灰白色を帯びる透明の釉を施しており、御本が入る。506は尾戸窯の灰釉碗又は鉢でロクロ成形の後、中位を押して窪ませる。507は瀬戸・美濃の天目形碗か。外

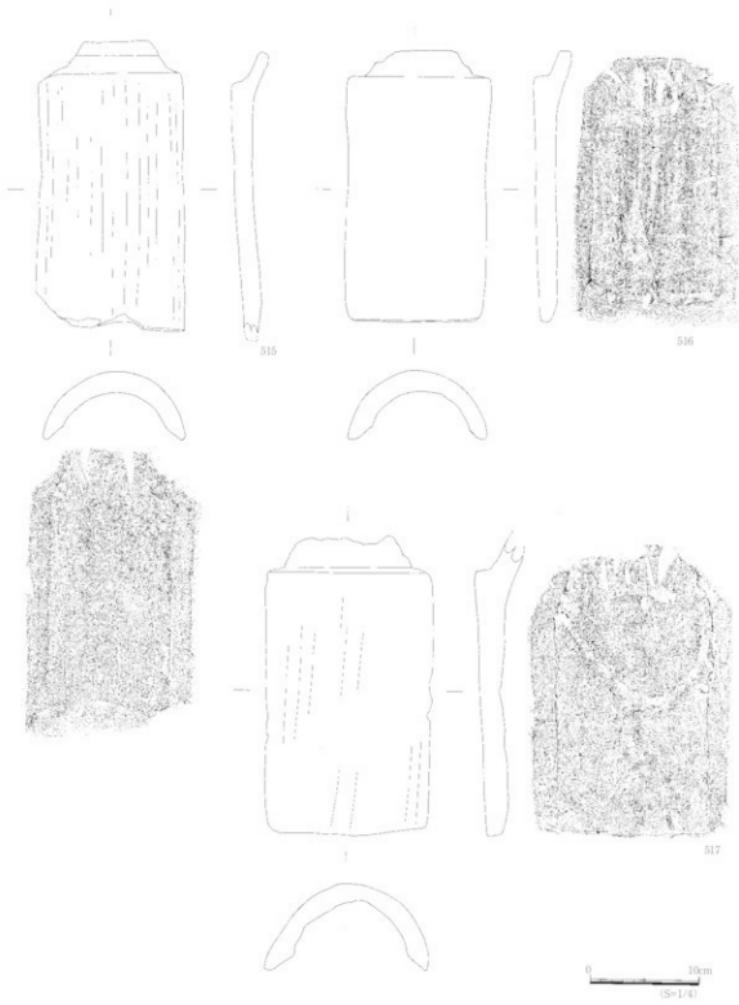


Fig.62 Ⅲ層瓦集中1出土遺物実測図

面下位無釉で、黒色の釉を施す。508は灰釉の飼猪口か。

509～511は土師質土器。509・510は尾戸窯の白土器小皿で、灰白色の胎土をもつ。509は内面に型による陽刻の寿字文を施す。511は小皿で、口縁部に灯芯油痕が残る。

512～514は瓦。512は軒丸瓦、513は軒棟瓦、514は棟瓦又は平瓦で、512は巴文、513は均整唐草文を認める。これらのうち、513は「ア□」、514は「アキ」銘印をもち、安芸（高知県安芸市）産である。

Ⅲ層-瓦集中1 (Fig.62)

TPIの西部で検出した。瓦集中1は、Ⅲ層の上位でコンテナ箱2箱分程の瓦が面的に広がって出土したもので、完形に近い状態の瓦片が多く含まれている。図示したものは丸瓦515～517である。瓦集中1は17世紀に比定される。

(6) 包含層出土遺物・その他の遺物

Ⅱ層出土遺物 (Fig.63)

近世の遺物包含層であるⅡ層から、近世の遺物が出土している。

図示したものは518～530である。518は染付又は白磁の小皿で、肥前産1610～1620年代。内底に灰色の砂目を伴い、疊付に粗砂が付着する。519は京焼の色絵丸形小杯。外面に上絵付による籠文が施されるが、被熱し変色している。520～523は備前の灯明受皿。524は土師質土器の焰烙。525は瓦質土器の焜炉で、丸内「八」の銘印をもつ。526は施釉土器のひょうそくで、にぶい黄色の低火

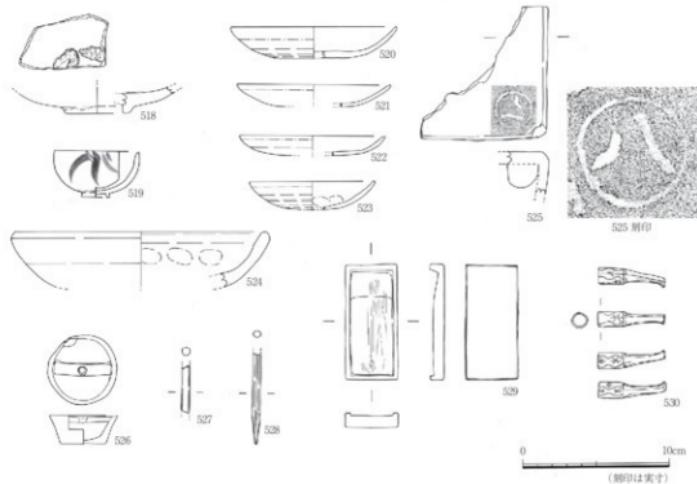


Fig.63 Ⅱ層出土遺物実測図

度釉を施す。

527～529は石製品。527・528は用途不明の棒状製品で灰白色を呈する。528は先端を削り尖らせている。529は粘板岩製の硯。530は煙管の吸口で、ラウが残存する。肩付きで、外面に線彫りの文様が施される。

III・III'層出土遺物 (Fig.64~66)

近世の整地層にあたるIII・III'層から、近世の遺物が出土している。

図示したものは531～573である。531～551は磁器で、何れも肥前産。531～537・540～545・548は染付、547は染付か。531～535は中碗で、531は草花文、533・534は山水文、532・535は雲を描く。536は碗で、梅花文を描く。537は丸形小碗である。541は小皿で、内面文様は植物か。疊付に灰白色の粗砂が付着している。542・543は五寸皿で、肥前産1630～1650年代。542は内面に捺文、543は山水文を描く。544は蛇ノ目高台の小皿で1640～1650年代。545は小皿で、外面に花唐草文、高台内に「□・□製」銘を描く。547は中皿で、文様の有無は不明。外面下位に放射状の鉋痕が残り、透明釉は粗い貫入が入る。548は大皿で、外面に山、内面に太湖岩と植物を描いている。538は青磁中碗で、高台内無釉。550は青磁の五寸皿で、見込み蛇ノ目釉剥ぎ。551は青磁中皿で、内面に片切り彫りによる文様を施す。539は瑠璃釉の碗か。549は釉裏紅の小皿。内面に辰砂による文様を描き、肥前産1630～1640年代。540は色絵染付の碗で、外面に不明文様、内面に花唐草文、高台内に「福」字を上絵付で描く。546は色絵の変形形皿で、肥前産17世紀後半。外面に赤の上絵付と呉須による梅文、内面に赤・緑・黒その他の上絵付による桐文、高台外に柳葉文、高台内に変形字銘を描く。552・553・555は中国漳州窯系の青花で、16世紀末～17世紀初頭。552は碗、553・555は皿で、555は外面に不明文様、内面に青海波文を描く。554は青花又は染付の皿である。

556～569は陶器。556は灰釉の丸形中碗で、尾戸窯又は京都窯か。557は蓋か。外面に鉄釉と呉須で四方櫛を描き、灰白色を帯びる透明の釉を施す。559・560は唐津系灰釉陶器の小皿で、559は内底に砂目痕を伴い、肥前産1610～1630年代。558は絵唐津の小皿で、肥前産1610年代。内面に鉄絵を描き、内底に砂目痕が残る。562は唐津系灰釉陶器の皿で、胎土目痕が残り、肥前産1590～1610年代。561は肥前産の灰釉鉢で、口縁部溝縁状。内底に砂目痕が残る。564は肥前武雄の二彩手の中皿で、内面に白化粧土刷毛目と緑釉の流し掛けを施す。563は灰釉の中皿である。565～567は備前の播鉢。568・569は備前の焼縮めの瓶で同一個体か。

570～573は土師質土器。570～572はロクロ成形の小皿。573は手捏ね成形の小皿で、内外面にユビオサエとナデを施す。

IV層出土遺物 (Fig.66)

IV層は近世の整地層であるIII層の下面に堆積するもので、近世の遺物が少量出土している。

図示したものは574～576である。575は陶器又は須恵器の甕で、体部内面に青海波状の圧痕が残る。外面に自然釉が掛る。574は焼縮めの甕の体部片で、外面に平行状の叩き目、内面に青海波状の圧痕が残る。576は手捏ね成形の土師質土器小皿で、内外面にユビオサエとナデを施す。

I層・搅乱層出土遺物 (Fig.67・68)

この他、近現代の整地層であるI層と搅乱層内にも近世の遺物が多く混入している。

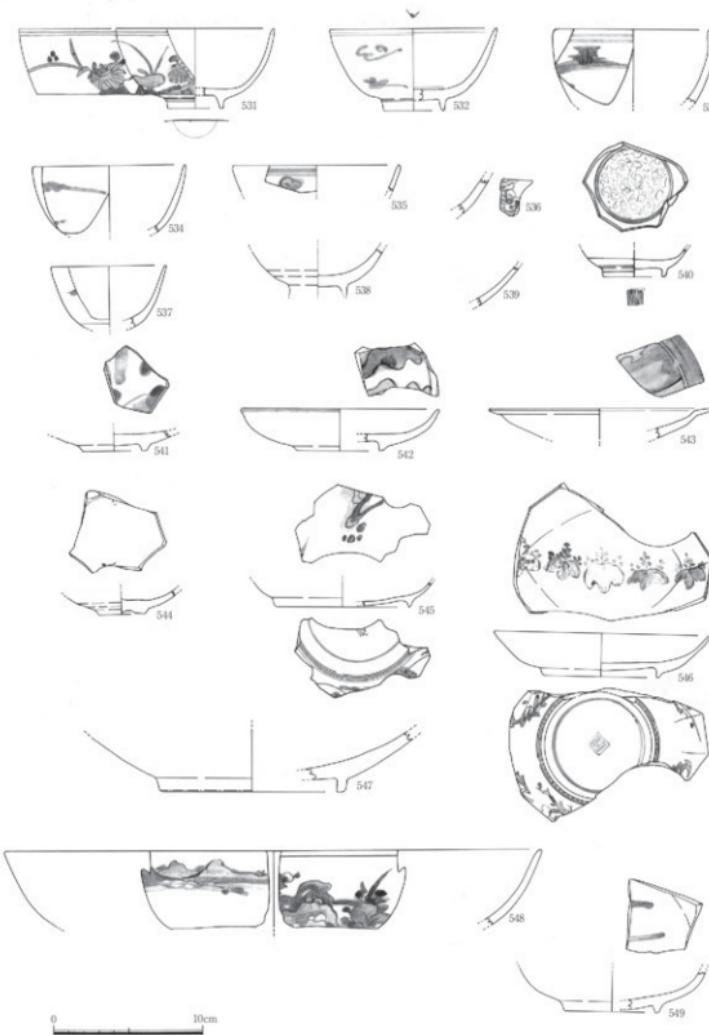


Fig.64 III・III'層出土遺物実測図(1)

(III層：532・533・535・537・539・540・541・545・547～549、
III'層：531・534・536・538・542～544・546)

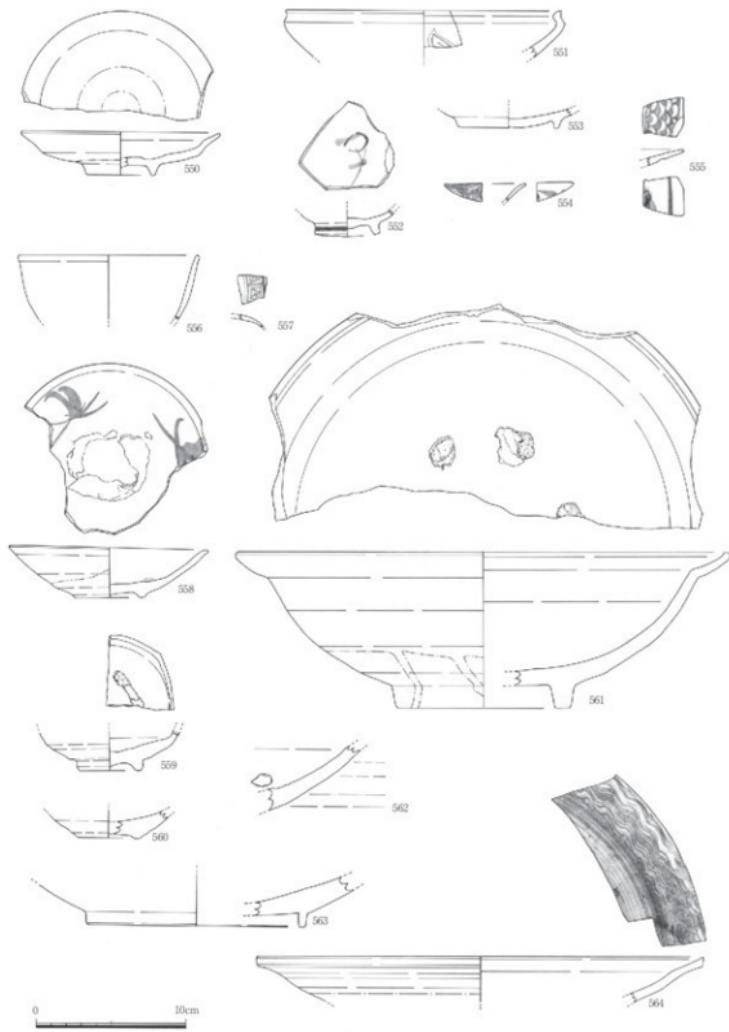


Fig.65 III・III'層出土遺物実測図(2)
 (III層: 551・554・555・558・560～562・564、III'層: 550・552・553・556・557・559・563)

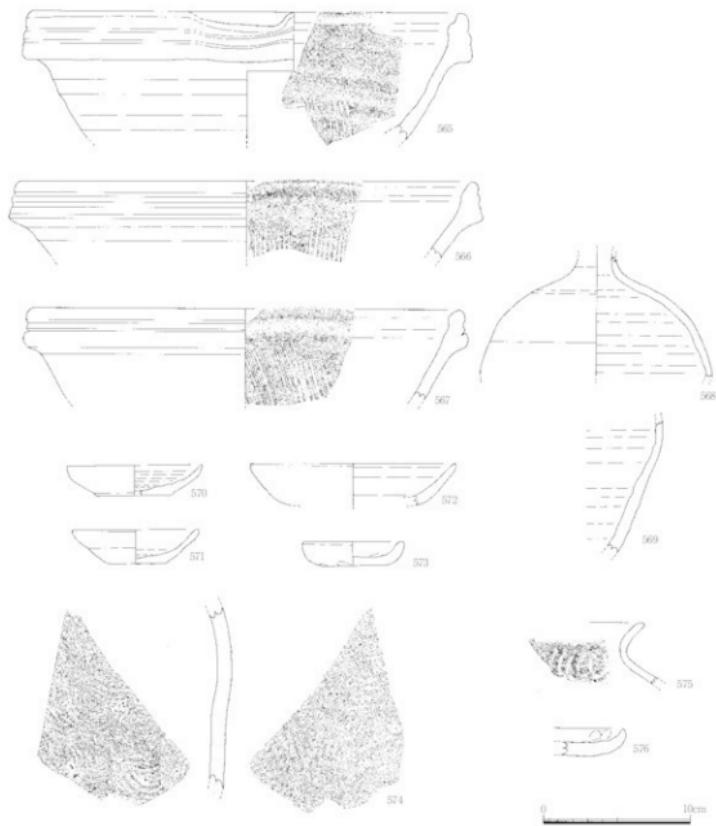


Fig.66 III・III'・IV層出土遺物実測図
(III層：565～567・571、III'層：568～570・572・573、IV層：574～576)

図示したものは577～598である。577～582・585は磁器。577は初期伊万里の染付筒形中碗で、被熟し釉は変質する。578は能茶山窯の染付中碗で、見込みに雲、高台内に角棒内「茶」銘をもつ。579は能茶山窯の染付皿で、蛇ノ目凹形高台。高台内に角棒内「茶山」銘をもつ。580は能茶山窯の染付碗蓋で、摘み内に角棒内「茶」銘をもつ。

581は肥前産又は肥前系の五寸皿で、蛇ノ目凹形高台をもつ。582は肥前産の染付極小皿で、内面に旗を描く。585は肥前産の蓋物。583は中国景德鎮窯系の青花皿で花唐草文を描く。584は中国漳州

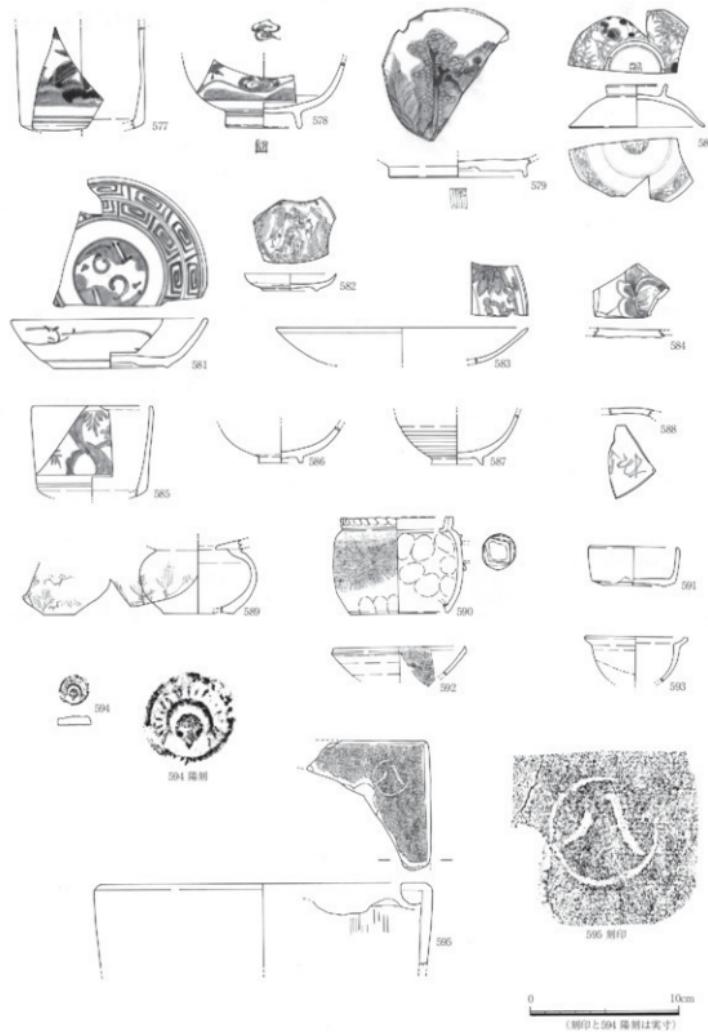


Fig.67 I層・搅乱層出土遺物実測図(1)

(I層:577、搅乱層:578~595)

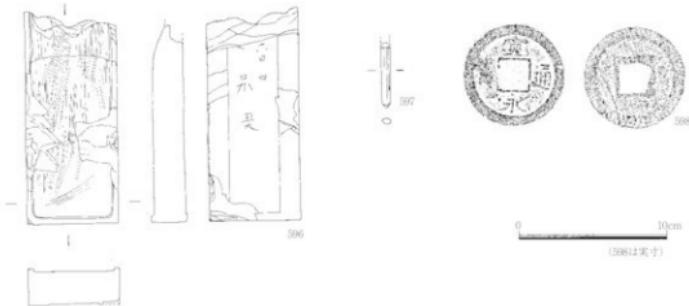


Fig.68 I層・搅乱層出土遺物実測図 (2)

(I層: 597・598、搅乱層: 596)

窯系の五彩又は赤絵の皿で、赤の上絵付による花文を描く。外底に灰白色の粗砂が付着している。

586~593は陶器。586は京都・信楽系の灰釉半球形碗である。587は灰釉の小碗で、外面下位に沈線状の段を多段重ねせる。589は尾戸窯の灰釉小壺で、鍔状の口縁を貼付する。呉須と鉄軸で若松文を描く。591は尾戸窯の灰釉餌猪口で、把手の有無は不明である。590は焼締めの急須で、外面に型による粒状の文様が施される。口縁部に連続したユビオサエを施し、波縁状に成形する。588は灰釉の陶器片で、外底に墨書を認める。592はミニチュアの擂鉢。593はミニチュアの鍋である。

594は土師質土器の泥面子。595は瓦質土器の焜炉で、上面に丸内「八」銘印をもつ。596は粘板岩製の硯で、背に長方形の窪みをもつ。背に釘彫りによる文字が認められる。597は用途不明の棒状製品で、断面を稍円形に成形し、先端を尖らせる。色調は灰白色を呈する。598は寛永通宝である。

2. 近代の遺構と遺物

(1) 石列

石列1 (Fig.10・69・70)

TP1 の I 層下位にて検出した南北方向の石列で、N-16°-W の軸方向をもつ。検出規模は幅70cm、検出長5.2mである。石列は径40~50cmの大角礫が西に面を揃えて並んでおり、石列の背面と上面に径10~20cm前後の角礫が多量に入れられている。石材は大型礫が石灰岩、裏込石は石灰岩と砂岩の割石を主体としている。石列の下面には胴木とみられる腐食した木片と丸木の痕が残っている。また、石列の下側にも礫が多数入れられている。

角礫と陶磁器・土器が裏込石の間からは、近世後期～明治の陶磁器・土器、瓦片が出土している。

図示したものは599~601・603・604である。599~601・603・604は染付で、酸化コバルトによる文様を施す。599は肥前系の平形中碗で、外面に草花文、口縁部内面に宝珠繋ぎ文を描く。600は肥前系の小皿で、蛇目凹形高台をもつ。外面に不明文様、内面に海浜風景文を描く。明治5年～20年代に操業した鹿児窯(高知県高知市大津鹿児)の窯跡出土資料に類似のものがあり、鹿児窯産の可能性をもつ。601・603・604は型紙刷りによる文様を施すもので、肥前産又は肥前系。601は平形

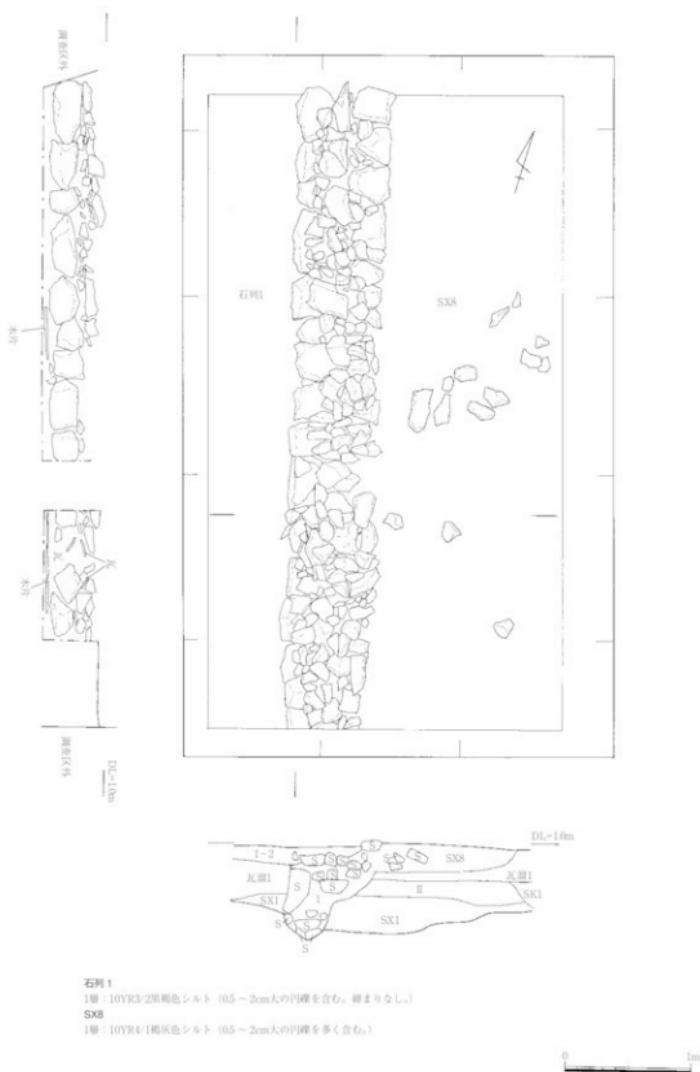


Fig.69 石列1・SX8 平面図・セクション図・礫出土状況図

の小碗。603・604は五寸皿で、蛇ノ目凹形高台をもつ。

(2) 性格不明遺構

SX 8 (Fig.11・69・70)

TPI の I 層下面にて検出したもので、石列 1 の背面から東部にかけて広がる浅い掘り込みである。切り合い関係では、近世の瓦溜 1 の上面を切っている。また、石列 1 との前後関係は不明である。検出規模は南北確認長 5.00m、東西長 1.10m、深さ 22cm を測る。埋土は褐灰色シルトで、円礫を多量に含んでいる。また、埋土中から石列 1 と同様の石灰岩の角礫が多く出土していることから、石列 1 との関連性が窺われる。

出土遺物は近世から近代の陶磁器・土器、石製品である。

図示したものは 606～608 である。606 は肥前産又は肥前系の鉢で、外面は区画間に雲と花卉、内面には四方擣と菊花を描く。607・608 は石製の棒状製品。断面を円形に成形し、先端を尖らせる。

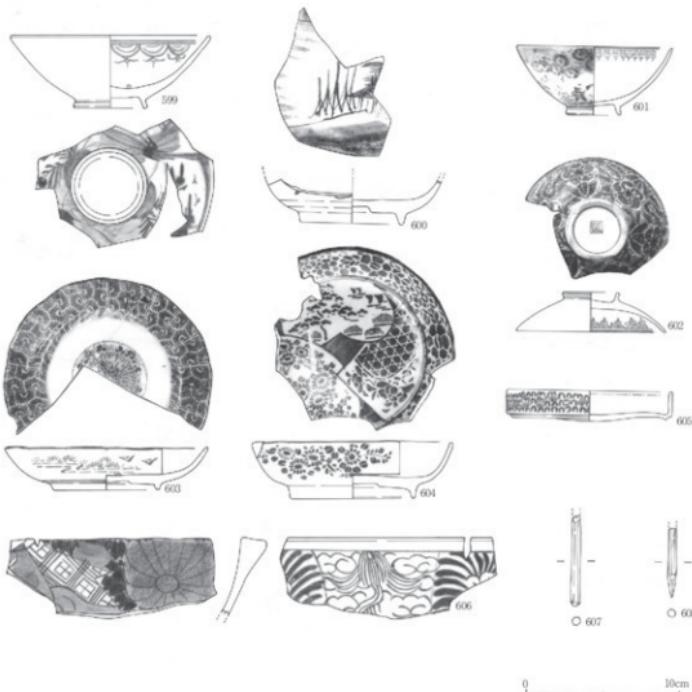


Fig.70 石列 1・SX8・I 層出土遺物実測図
(石列 1 : 599～601・603・604、SX8 : 606～608、I 層 : 602・605)

(3) 包含層出土遺物・その他の遺物

I 層及び搅乱層には近世の遺物が多く混入しているが、ここでは近現代の可能性をもつものを中心に図示した。また瓦片は時代を特定できないものが殆どであったため、銘印をもち、近世の遺構内出土資料と同范でないものを図示することとした。

I 層出土遺物 (Fig.70・71)

図示したものは602・605・609～611・612～616である。602・605は型紙刷りによる文様を施すもので、肥前産又は肥前系。605は段重である。609は色絵染付の小杯で、内面に赤・金の上絵付による旭日旗と文字、高台外に呉須による柳葉文、高台内に変形字銘を描く。610は能茶山窯の擂鉢で、外面上半と口縁部内面に黒褐色の釉を施す。611は土瓶で、白化粧の後酸化コバルトによる文様を施す。

612～616は近現代または近世の瓦。612は軒桟瓦、613～616は棟瓦又は平瓦である。このうち613は「□キ□□」銘印をもち、安芸（高知県安芸市）産。614は小判枠内「クレタ□」銘印をもち久礼田（高知県南国市久礼田）産か。612は山に「片□」銘印をもち、片地（高知県香美市土佐山田町片地）産とみられる。615は「□□□吉」、616は「前長」銘印をもつ。

I' 層・搅乱層出土遺物 (Fig.71)

その他、現代の火災層（I' 層）と搅乱層から、近現代又は近世の瓦片が多量に出土している。617・618は昭和20年の火災層にあたる I' 層から出土したもので、618は被熱し変色している。617・618は棟瓦又は平瓦で、同じ角枠内銘印をもつ。619・620は瓦を多量に廃棄した現代の搅乱層内から出土したものである。ともに棟瓦又は平瓦で、619は「アキ友」銘印をもち、安芸（高知県安芸市）産。620は角枠内「片兼」銘印をもち、片地（高知県香美市土佐山田町片地）産とみられる。

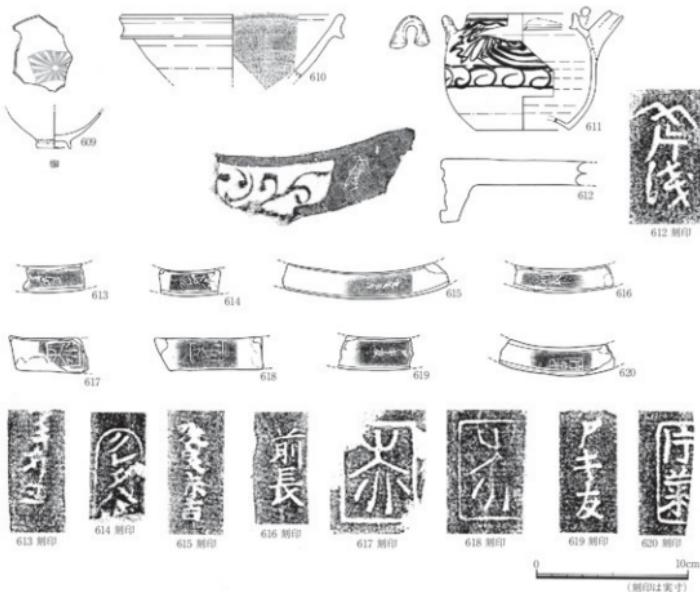


Fig.71 I層・I'層・攪乱層出土遺物実測図
(I層:609~611・612~616、I'層:617・618、攪乱層:619・620)

Tab. 1 遺構一覧表 (SK・SD・SX・石列)

遺構名	試掘坑	検出面	形態・軸	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	切り合い関係	時期
SK1	TP1	II層	不明	南北長 242	東西残存長 0.46	46	SX1・16を切る。瓦溜1に切られる。	19世紀中葉
SK2	TP3	III層下位又はIV層下面～IV層上面	不明	南北長 146	東西確認長 0.63	42	SK9を切る。	17世紀後半
SK3	TP2・3	III・III'層上面	不整形	南北確認長 508	東西長 4.10	32～38	SD1・SX9を切る。瓦溜2・3に切られる。	17世紀末～18世紀初頭
SK4	TP4	II層	不明	南北残存長 383	東西確認長 1.30	54	SK7を切る。瓦溜4に切られる。	19世紀中葉
SK5	TP5	II層	不明	南北確認長 480	東西残存長 1.28	35	瓦溜5に切られる。	19世紀前半～中葉
SK6	TP5・6	II層	不明	南北確認長 435	東西長 4.02	37	SK8を切る。瓦溜5・6に切られる。	18世紀～19世紀中葉
SK7	TP4	II層	不明	南北残存長 280	東西確認長 1.94	49	SX11を切る。SK4・瓦溜4に切られる。	19世紀前半～中葉
SK8	TP6	II層	不明	南北確認長 332	東西確認長 0.86	23	SK6・瓦溜6に切られる。	18世紀～19世紀中葉
SK9	TP3	III・3層下面～IV層上面	不明	南北確認長 177	東西確認長 0.76	12	SK2に切られる。	17世紀前半
SK10	TP2	II層上位	不明	南北確認長 106	東西確認長 0.93	25	SX14の上面で検出。	17世紀後半
SK11	TP2	II・III'層上面又はIII・III'層中位	不明	南北確認長 366	東西確認長 1.40	30～46	SX14を切る。SX9に切られる。	17世紀後半
SK11'	TP3	III層上面又はIII層中位	不明	南北確認長 257	東西確認長 1.38	28	SK12を切る。SX9に切られる。	17世紀後半
SK12	TP3	III層下面～IV層上面	不明	南北確認長 207	東西残存長 1.90	34	SK11'に切られる。	17世紀後半
SX1	TP1	II層下面	溝状 N-16°-W	検出長 500	幅 180～190	30	SK1・瓦溜1・石列1に切られる。SX14・SD2の上面で検出。	18世紀～19世紀中葉
SX8	TP1	I層下面	不明	南北確認長 500	東西長 1.10	22	石列1と切り合う。	近代
SX9	TP2・3	III'層上面	不整形	南北確認長 510	東西長 3.96	13～32	SK11を切る。SK3・SD1に切られる。	17世紀後半
SX11	TP4	III層下面～IV層上面	不明	不明	不明	23	SK4・7に切られる。	17世紀前半～中葉
SX12	TP1	III'層上面	不明	東西確認長 163	不明	44	SD2・SX14・16を切る。SX1・杭群1・瓦溜1に切られる。	18世紀
SX14	TP1・2	III'層下面～IV層上面	稍円形	南北確認長 500	東西長 4.32	32	SK11・SX12・杭群1に切られる。	17世紀前半～中葉
SX15	TP3	III層下面～IV層上面	不明	南北確認長 254	東西確認長 0.65	19	SK11'に切られる。	17世紀前半～中葉
SX16	TP1	III'層上面	不明	東西確認長 120	不明	45	SD2を切る。SK1・SX1・12・杭群1に切られる。	18世紀
SD1	TP2	III'層上面 N-16°-W	検出長 4.30	幅 0.50	15	SX9を切る。SK3に伴う焼土層・瓦溜2に切られる。	17世紀後半	
SD2	TP1	III'層上面 N-17°-W	検出長 500	幅 1.20～1.54	46	SX12・16に切られる。	17世紀末～18世紀初頭	
石列1	TP1	I層下面 N-16°-W	南北確認長 520	幅 0.70	—	瓦溜1を切る。SX8と切り合う。	近代	

Tab.2 遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

国版 番号	出土 地点	種類	種器 形	法量 (cm)			色調	文様・種裏	特徴 (成形・調整・釉調性)	備考 (生産地・生産年代・ 路・使用歴他)	
				口径	器高	底径					
4	TP1 SK1	陶器	鳥の水 入れ 猪円形	—	—	—	—	外) にい黄橙 10YR6/4 内) 淡黄橙10YR8/3	灰釉	内外面ナデ。外成周輪ナデ。 中央に布目痕。内面施釉。 外底無釉。にい黄橙色を 帯びる透明の釉。	
5	TP1 SK1	陶器	阿羅口	4.2	2.4	3.0	—	外) 灰白5Y7/1 内) 灰白5Y7/1	灰釉	摸みは不明。内面ロクロ日。 外底回転糸切り。外底無釉。	
6	TP3 SK2 下層	磁器 染付	碗又は 鉢 端反形	9.8	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 唐草文・團線		肥前產
7	TP3 SK2 下層	磁器 染付	皿	—	—	—	—	外) 白 内) 白	内) 不明		肥前產
8	TP3 SK2 下層	磁器 染付	不明	—	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 宝文	内面施釉。	肥前產 二次被熱により釉 は変質。
9	TP3 SK2	陶器	中碗 丸形	12.2	—	—	—	外) にい黄橙 10YR6/4 内) にい黄橙 10YR7/2	灰釉	外面継やかなロクロ日。に い黄橙色を帯びる透明の 釉。	肥前產 17世紀後半～18世 紀前半
10	TP3 SK2	陶器	碗 天目形	10.4	—	—	—	外) 黑褐5YR2/2 内) 黑10YR8/2	黑釉	黑褐色の釉。	瀬戸・美濃
11	TP3 SK2	陶器	碗又は 鉢	—	—	5.4	—	外) にい黄橙 10YR7/3 内) 灰10YR8/2	灰釉	高台内に継状の鉢痕。高 台施釉。にい黄橙色を帯び る半透明の釉。	京都系
12	TP3 SK2	陶器	壺	8.4	—	—	—	外) 灰白25Y7/1 内) 鉄絵による植物	内面施釉。灰白色を帯びる 透明の釉。		美濃 志野焼
13	TP3 SK2 下層	陶器	火鉢 又は 火入	13.4	—	—	—	外) 淡黄7.5Y7/3 内) 灰白25Y8/1 外) 印花による宝珠型 書き	灰釉 内) 印花	内面無釉。口縁部外表面に オリーブ黄色を帯びる透明 の釉。	瀬戸・美濃 口縁端部に敲打痕。
14	TP3 SK2 下層	陶器	壺鉢	約 37.4	—	—	—	外) 灰白25YR5/2 内) にい黒褐 25YR5/3	燒締め	口縁部外間に2条の凹線。 体部外側周輪ナデ。内面鶴 日。口縁部内面は鶴日後回 転ナデ。	備前
15	TP2 SK3 2層	磁器 染付	中碗 丸形	11.0	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 不明		肥前產
16	TP3 SK3 2層	磁器 染付	盆又は 皿	—	—	—	—	外) 白 内) 白	口縁内) 蓼弁文か	口縁部端反形。	肥前產
17	TP2 SK3 2層	磁器 染付	鉢又は 皿	—	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 二重團線 高台外) 团線 見込み	不眞	肥前產 二次被熱により釉 は変質。
18	TP3 SK3 2層	染付 又は 白磁	中皿	26.2	—	—	—	外) 白 内) 白		内外面に継やかなロクロ日。	肥前產
19	TP2 SK3 2層	青磁	皿 折縁形	—	—	—	—	外) オリーブ灰 10Y5/2 内) 灰白7.5Y8/1	内) 印刷による算木文 青磁釉	オリーブ灰色の釉。	肥前產 二次被熱により釉 は変質。
20	TP3 SK3 2層	磁器 染付	窯口 楕形	7.6	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 草花文		肥前產
21	TP3 SK3 2層	青花	皿	—	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 花唐草文 内) 不明		中国 景德鎮窯系 17世紀前葉～中葉
22	TP2 SK3 2層	青花	皿	約 18.0	—	—	—	外) 白 内) 白	内) 花文・團線	古染付。口縁端部の釉が虫 食い状に剥がれる。	中国 景德鎮窯系 17世紀前葉～中葉
23	TP3 SK3 2層	青花	皿	—	—	—	—	外) 白 内) 白	内) 草花 高台内) 跡		中国 景德鎮窯系
24	TP2 SK3 2層	陶器	中碗	12.2	—	—	—	外) 灰オーブ5Y6/2 内) 灰白5Y7/1	灰釉	内外面ロクロ日。灰白色を 帯びる透明の釉。御本が入 る。	尾戸窯
25	TP2 SK3 2層	陶器	中碗	—	—	4.8	—	外) 淡黄25Y8/3 内) 灰白25Y8/2	灰釉	高台施釉。淡黄色を帯びる 透明の釉。	肥前產 17世紀後半～18世 紀前半
26	TP2 SK3 2層	陶器	小皿	—	—	4.5	—	外) オーブ5Y6/3 内) 灰白25Y7/1 内) 不明	見込み蛇・貝紋測定。 高台 見込み。外側にオリーブ黄色 を帯びる半透明の釉。釉剥 き部に砂目痕。		肥前 内野山 17世紀後半
27	TP2 SK3 1層	土師質 土器	小皿	10.8	—	—	—	にい黄橙10YR7/3		内外面回転ナデ。外面ロク ロ日。	

Tab.3 遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

国版 番号	出土 地点	種類	番種 器形	法量 (cm)				色調	文様・繪葉	特徴 (成形・調整・施調査)	備考 (生産地・生産年代・ 鉢・使用痕)
				口径	器高	底径	最大径				
28	TP2 SK3 2層	土師質 土器	小皿	12.6	—	—	—	にぶい青75YR7/4		内外面回転ナデ。	
29	TP3 SK3 又12 丸部3 混入	窯道具	トチン	上面 径 6.7	7.2	下面 径 6.8	—	外) 灰褐75YR5/2 断) 明褐灰75YR7/2		外面ユビオサエ・ナデ。外 面に自然釉。	
31	TP4 SK4	磁器 染付	中碗 広口彫形	12.0	6.7	7.5	—	外) 白 断) 白	外) 多重圓線・紅葉 高台外) 二重圓線 (口継内) 二重圓線 見込み) 圓線・岩波		肥前系 1780~1860年代
32	TP4 SK4 床	磁器 染付	中碗 広口彫形	11.0	6.3	5.5	—	外) 白 断) 白	外) 芭花文・團線 高台外) 二重圓線 (口継内) 團線 見込み) 圓線・不明		肥前系又は肥前系 1780~1860年代
33	TP4 SK4 下層	磁器 染付	中碗 丸形	10.4	5.0	4.7	—	外) 白 断) 白	外) 丸に花卉		肥前系 18世紀
34	TP4 SK4	磁器 染付	中碗	—	—	4.2	—	外) 灰白25Y8/1 断) 灰白25Y8/1	外) 区画間に崩した他の 文様 高台外) 二重圓線 見込み) 圓線・帆船 高台内) 角内「茶山」	高台は撥状に広がる。透明 釉は買入が入る。	能茶山廬 1820~1860年代 角内「茶山」銘 あり。
35	TP4 SK4 下層	磁器 染付 又は 白釉	中碗	—	—	4.0	—	外) 灰白10Y8/1 断) 灰白1N8/			肥前系 二次被熱により釉 は変質。
36	TP4 SK4	磁器 染付	大碗 丸形	14.3	—	—	—	外) 灰白N8/ 断) 灰白N8/	外) 植物・土坡 (口継内) 四方擗 見込み) 二重圓線	透明釉は買入が入る。	肥前系
37	TP4 SK4	青花	皿 丸形	10.8	2.5	6.6	—	外) 白 断) 白	外) 團線 高台外) 團線 (口継内) 四方擗 内) 二重圓線・枯桜	盤付に粗糲が付着。	中国 景徳鎮窯系 17世紀前業~中葉
38	TP4 SK4 下層	青花	碗	7.1	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 区画間に花文 (口継内) 二重圓線		中国 景徳鎮窯系 17世紀前業~中葉 二次被熱により釉 は変質。
39	TP4 SK4	磁器 染付	碗蓋	笠部 径 9.4	3.0	—	横 径 3.8	外) 白 断) 白	外) 区画間に山水文・ 東洋・人物 雷文帶・團線・文 綱内) 角内内変形字 路		肥前系 1820~1860年代
40	TP4 SK4	磁器 染付	碗蓋	笠部 径 10.1	3.2	—	横 径 4.4	外) 帯縁に雲氣・区画 間に崩・松・梅 摘み外) 二重圓線 (口継内) 帯縁に雲氣・團線・ 帆船	透明釉は買入が入る。 外須は暗青灰色に発色。	肥前系又は肥前系 40~44組組	
41	TP4 SK4	磁器 染付	蓋物蓋	笠部 径 9.2	—	かえり 径 8.0	横 径 2.8	外) 白 断) 白	外) 区画間に格子・繩	帯状の摘みを貼付。内面施 釉。かえり無釉。	肥前系
42	TP4 SK4	磁器 染付	蓋物蓋	笠部 径 12.2	2.8	かえり 径 11.0	—	外) 白 断) 白	外) 牡丹・蝶・波瀬	摘みは不明。内面施釉。か えり無釉。	肥前系
43	TP4 SK4	磁器 染付	跳子か	6.3	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 花唐草文	内面施釉。受部無釉。	肥前系
44	TP4 SK4 下層	磁器 染付	蓋	笠部 径 20.0	5.5	かえり 径 18.0	横 径 3.4	外) 白 断) 白	外) 菊・團線	内面施釉。かえり無釉。	肥前系又は肥前系
45	TP4 SK4 下層	青磁	香炉	7.2	—	—	8.0	外) 明褐灰7.5GY7/1 白	青磁釉	内面無釉。明緑灰色の半透 明の釉。	肥前系
46	TP4 SK4 下層	青磁	不明	—	—	—	—	外) 明褐灰10GY7/1 断) 灰白IN8/	青磁釉	内面施釉。明緑灰色の釉。	肥前系 二次被熱により釉 は変質。
47	TP4 SK4	青磁	香炉	—	—	3.2	—	外) 明オリーブ灰 5G-Y7/1 断) 灰白IN8/	青磁釉	三足を貼付。内面と外底無 釉。明オリーブ灰色の半透 明の釉。	肥前系
48	TP4 SK4	白磁	紅皿 菊花形	4.6	1.6	1.3	—	外) 白 断) 白	外) 型による菊弁	型押成形。外面下半無釉。 外底にチダレ目。	肥前系 1780~1860年代
49	TP4 SK4	白磁 又は 染付	中盤 端反 瓣形	3.8	18.0	5.0	11.0	外) 灰白75Y7/1 断) 灰白IN7/		文様の有無は不明。内外面 ロクロ目。内面無釉。	肥前系

Tab.4 遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

国版 番号	出土 地点	種類	着種 器形	法量 (cm)				色調	文様・繪葉	特徴 (成形・調整・釉調性)	備考 (生産地・生産年代・ 鉢・使用痕)
				口径	器高	底径	最大径				
50	TP4 SK4 下層	白磁 又は 染付	仏花瓶	—	—	—	—	外) 灰白5GY8/1 断) 灰白8N/8		双耳を貼付。内面無釉。	肥前窯
51	TP4 SK4	陶器	中碗	—	—	5.0	—	外) 灰5Y6/1 断) 灰5Y6/1・浅黄 25Y7/3	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる 透明の釉。内底に目痕3足。	尾戸窯
52	TP4 SK4	陶器	中碗	—	—	5.6	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1・浅 黄橙10YR8/3	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる 半透明の釉。脚本が入る。 内底に目痕。	尾戸窯
53	TP4 SK4	陶器	小碗	—	—	3.5	—	外) 灰5Y7/1 断) 灰5Y7/1	灰釉	高台内に亂れた溝状の鉢痕。 外面下部に細いテスリ痕が 残る。高台施釉。灰白色を 帯びる半透明の釉。内底に 枯土片が溶着。	尾戸窯
54	TP4 SK4	陶器	小皿	13.7	3.2	5.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/2	灰釉	ロクロ成形の後口縁部を波 線状に成形。高台施釉。灰 白色を帯びる透明の釉。内 底に目痕3足。	尾戸窯
55	TP4 SK4	陶器	鉢	16.0	7.7	6.2	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	灰釉・緑釉	口縁部を内側に押し輪花形 に成形。体部外面ロクロ目。 高台施釉。灰白色を帯びる 手透けの釉。口縁部の紋筒 所に緑釉を撒ける。内底に 目痕3足。	尾戸窯
56	TP4 SK4	陶器	小碗 又は 柄杓	8.0	—	—	—	外) 浅黄25Y7/2 断) 灰E125Y8/2	内) 鉄釉による擦痕 灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉。	京都・信楽系
57	TP4 SK4 下層	蓋物蓋	笠部 蓋	5.6	かえり 径 3.9	—	—	外) 浅黄25Y7/3 断) 灰E25Y8/3	灰釉	内面とかえり無釉。灰白色 を帯びる透明の釉。	京都・信楽系
58	TP4 SK4	陶器	灯明 受皿	10.5	1.9	4.1	受部 径 6.8	外) 灰白5Y7/2 断) 灰黄25Y7/2	灰釉	外底と外下部半回転ケズリ。 外面とかえり端部無釉。灰 白色を帯びる半透明の釉。	京都・信楽系
59	TP4 SK4 下層	陶器	灯明 受皿	9.1	1.4	4.0	—	外) 灰褐5YR5/1 断) 灰褐7.5YR5/1	鉄釉	外面回転ケズリ。内面回転 ナデ。内底ナデ。内面と口 縁端部に階級。	備前
60	TP4 SK4 下層	陶器	灯明 受皿	9.2	1.1	4.0	—	外) 灰E25YR5/2 断) にせい・標 25YR6/4	鉄釉	口縁部外面回転ナデ。外 面回転ケズリ。内面回転ナデ。 内底ナデ。内面と口縁外 面に階級。	備前
61	TP4 SK4 下層	陶器	土瓶蓋	笠部 径 14.0	3.8	6.0	摘み 径 4.6	外) 灰オリーブ 5Y5/3 断) 灰N6/	灰釉	手捏ねによる棍状の描みを 貼付。外側回転ケズリ。外 面と天井端部無釉。灰オ リーブ色を帯びる半透明の 釉。	
62	TP4 SK4 下層	陶器	ミニ チャコ	8.5	3.6	3.5	—	外) にせい赤褐 5YR4/4 断) 灰E25Y6/1	鉄釉	三足を貼付。外面下半無釉。 にせい・標色の釉。内底に 目痕。	
63	TP4 SK4	陶器	水注 後手湯匙 跡形	5.1	—	—	—	外) 灰白5Y8/2 断) 灰E25Y7/1	白化粧土・透明鉄・灰釉	紡錘形の把手を貼付。内面ロ クロ目。内面上手と口縁端 部無釉。外側白化粧後透明 釉。内面下半に鉄釉。	
64	TP4 SK4	陶器	提子	12.2	—	—	—	外) 黒25Y2/1 断) 黄E25Y6/1	鉄釉・白土	片口を貼付。内面ロクロ目。 受部に白土を刷毛塗り。内 面施釉。	
65	TP4 SK4 下層	陶器	提子	12.0	—	—	—	外) 黒褐5YR3/1 断) 錫5YR6/6	鉄釉・白土	片口を貼付。受部に白土を 刷毛塗り。内面施釉。	
66	TP4 SK4	陶器	瓶	—	—	6.5	—	外) 黒褐7.5YR3/1 断) 灰N6/	鉄釉	内面ロクロ目。内面無釉。 外底の釉は拭き取る。黒褐 色の釉。	能茶山窯か
67	TP4 SK4	陶器	壺	—	—	16.1	—	外) 赤褐2.5YR3/4 内) 灰オリーブ 5Y5/3 断) 灰白2.5Y7/1	鉄釉・灰釉	外面に暗赤褐色の釉。部分 的に黒色の釉が流れる。内 面灰オリーブ色を帯びる半 透明の釉。外底にも釉が薄 く掛かる。	丹波
68	TP4 SK4 下層	土師質 土器	堀切 丸型	23.0	—	—	—	外) にせい・黄橙 10YR7/3 内) にせい・黄橙 10YR7/3 断) 黄E25Y4/1		前方に口縁部から切り込む 意あり。堀切は剥離。外側 ナデ。内面回転ナデ。	
69	TP4 SK4 下層	土師質 土器	火入か	—	—	7.2	—	灰白5YR8/2		内外面ロクロ目。割り出し 高台。	内面に煤。

Tab.5 遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

団版 番号	出土 地点	種類	器形	法量 (cm)			色調	文様・繪葉	特徴 (成形・調整・釉調性)	備考 (生産地・生産年代・ 使用地)
				口径	器高	底径				
70	TP4 SK4	土師質 土器	人形	—	—	—	—	に赤い黄褐色10YR6/3	人物	型押成形前後貼り合わせ。中空、内面にスピオサエ・ナデ。外側にキラ粉。粘土中に金墨を含む。
71	TP4 SK4	瓦質 土器	便盆 箱形	—	—	—	20.0	外) 灰白N3/ 断) 灰白N7/	外) 型による人物文	把手を貼付。内部施設は欠損。型作り跡り合わせ。内面の四隅に粘土光暈。内面イタナダ。
76	TP5 SK5	磁器 染付	中碗	—	—	4.6	—	外) 白 断) 白	外) 多重團線・草 高台外) 二重團線 高台内) 团線・变形字 路	肥前產
77	TP5 SK5 上層	磁器 染付	中碗	—	—	4.8	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 二重團線 高台外) 团線	高台内無釉。透明釉は無い 貰入が入る。盤付に粗糲が付着。
78	TP5 SK5 上層	陶胎 染付	中碗	11.6	—	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白7.5Y7/1	外) 二重團線・唐草文	須頬は暗緑灰色に発色。透 明釉は貰入が入る。
79	TP5 SK5 上層	白磁	小杯か	—	—	2.9	—	外) 灰白7.5Y8/1 断) 灰白7.5Y8/1	—	内面施釉。外底無釉。
80	TP5 SK5	二彩又 は五彩	皿	—	—	—	—	外) 灰白5Y8/1 断) 灰白5Y7/1	内) 赤の上絵付による 花文	外面白化粧後透明釉。外底 に粗糲が付着。
81	TP5 SK5 上層	陶器	蓋	笠部 径128	—	かえり 径102	—	外) に赤い黄褐色 10YR5/3 断) に赤い黄褐色 10YR7/3	外) 白化粧土刷毛目	内面とかえり無釉。
82	TP5 SK5 上層	陶器	小皿	—	—	4.0	—	外) オリーブ黄5Y6/3 内) 緑6.5G6-1 断) 灰白2.5Y7/1	銅綠釉・灰釉	見込み蛇ノ目釉剥ぎ。高台 無釉。緑色の種。灰釉は オリーブ黄色を帯びる半透 明の種。釉剥ぎ部に砂目痕。
83	TP5 SK5 下層	陶器	灯明受皿	10.6	1.5	6.5	—	外) 灰褐5YB6-2 断) 灰白10YR7/1	青釉	外面上半回転ナデ。外下面 半回転ケズリ。内面回転ナ デ。内面と口縁部外面に諸 種を刷毛仕り。
84	TP5 SK5 上層	土師質 土器	小皿	13.0	2.2	7.2	—	橙7.5YR7/6	—	内外面回転ナデ。外底回転 系切り。
85	TP5 SK5 上層	土師質 土器	小皿	—	—	5.2	—	に赤い橙7.5YR7/4	—	内外面回転ナデ。外底回転 系切り。
86	TP5 SK5	土師質 土器	中皿	14.6	3.2	8.0	—	に赤い黄褐色10YR7/3	—	内外面回転ナデ。外底回転 系切り。
87	TP6 SK6 3層	磁器 染付	中碗 丸形	10.5	—	—	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) コニャック印判に よる文様・團線	見込み蛇ノ目釉剥ぎ。
88	TP6 SK6 2層	白磁	小杯 瘤反形	7.0	—	—	—	外) 白 断) 白	—	外面ロクロ目。
89	TP6 SK6 2層	陶器	中碗 丸形	9.8	6.5	4.7	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	灰釉	高台内に淡黄の難痕。高台 無釉。灰白色を帯びる半透 明の種。
90	TP6 SK6 2層	陶器	中碗 丸形	9.6	6.7	5.0	—	外) 灰E2.5Y7/1 断) 灰E2.5Y7/1	灰釉	高台内に淡黄の難痕。高台 無釉。灰白色を帯びる半透 明の種。
91	TP6 SK6 2層	陶器	中碗 丸形	11.0	7.3	4.8	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰E5Y7/1	灰釉	高台無釉。灰オリーブ色を 帯びる透明の種。
92	TP6 SK6 2層	陶器	中碗	—	—	5.0	—	外) 灰E2.5Y7/1 断) 灰E2.5Y8/2	灰釉	高台無釉。燒成不良で釉は 白濁。
93	TP6 SK6 3層	陶器 色絵	中碗 半球形	10.4	7.9	3.8	—	外) 灰E2.5Y7/2 断) 灰E2.5Y8/2	外) 青・薄緑の上絵付 による植物 灰釉	高台内に圓團状の段。高台 無釉。灰白色を帯びる透明 の種。
94	TP6 SK6 3層	陶器 色絵	碗	—	—	—	—	外) 灰E2.5Y7/1 断) 灰E2.5Y8/2	外) 鉄絵と緑の上絵付 による植物 灰釉	外面強いロクロ目。
95	TP6 SK6 3層	陶器 色絵	小碗 又は 納付	9.0	6.1	5.0	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰E2.5Y7/1	内) 鉄絵による團線 灰釉	内面施釉。高台無釉。灰才 リーブ色を帯びる透明の種。
96	TP6 SK6 3層	陶器 色絵	小皿 変形	—	2.4	—	—	外) 灰E2.5Y7/1 断) 灰E2.5Y8/1	貝形 内) 青の上絵付による 海藻文 灰釉	内面型による貝殻の陽刻文 様。貼付高台。高台施釉。

Tab. 6 遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

国版 番号	出土 地点	種類	器形	法量 (cm)			色調	文様・繪葉	特徴 (成形・調整・釉調館)	備考 (生産地・生産年代・ 鉢・使用痕)	
				口径	器高	底径					
97	TP6 SK6 2層	陶器	蓋	笠部 径 11.2	—	かえり 径 9.7	—	外) 淡黄25Y8/3 内) 灰白25Y8/2	外) 鉄絵 灰釉	内面施釉。かえり無釉。淡 黄色を帯びる透明の釉。鉄 絵は黄褐色に発色。	
98	TP6 SK6 2層	陶器	土瓶 又は 急須の 蓋	笠部 径 6.0	20	かえり 径 3.9	捕み 径 1.0	外) 淡黄25Y7/2 内) 灰白25Y8/2	灰釉	内面とかえり無釉。灰黄色 を帯びる透明の釉。	
99	TP6 SK6 2層	陶器	水滴か	—	—	—	—	外) 灰白15Y7/2 内) 灰白25Y7/1	外) 刻頭による花文 灰釉	内面施釉。側面無釉。灰白色 を帯びる透明の釉。	尾口窓
100	TP6 SK6 2層	陶器	瓶	—	—	5.0	—	外) 灰白10YR7/1 内) 灰白10YR7/1	灰釉	外底回転ケズリ。内面クロ ロ目。内面施釉。外底無釉。	尾口窓か 二次被熱により釉 は変質。
101	TP6 SK6 2層	陶器	甕	19.7	—	—	—	外) 黒褐75YR3/2 内) オリーブ5Y6/3 黄25Y6/1	鉄釉・灰釉	体部外面に黒褐色の釉。口 縁部と体部内面にオリーブ 黄色を帯びる半透明の釉。	丹波
102	TP6 SK6 2層	陶器	灯明受皿	10.4	20	4.0	—	外) 灰青25YR4/2 内) 灰25N/5	錯釉	外面回転ケズリ。内面回転 ナデ。内底ナデ。内面と口 縁部外側に錯釉。	備前
103	TP6 SK6 2層	陶器	灯明受皿	7.8	12	4.0	受部 径 3.4	外) にぶい赤褐 SYR5/3 内) 黑褐75YR6/1	錯釉	油滴半月状。外面回転ケズ リ。内面回転ナデ。内底ナ デ。外内面に錯釉。	備前 口縁部に灯芯油痕
104	TP6 SK6 2層	陶器	灯明受皿	10.1	15	4.0	受部 径 7.1	外) 灰青25YR4/2 内) 灰25N/6	錯釉	油滴半月状。外面回転ケズ リ。内面回転ナデ。内外面 に錯釉。	備前
105	TP6 SK6 2層	陶器	灯明受皿	10.7	18	4.0	受部 径 7.2	外) 错灰75YR4/1 内) 灰青25YR5/2	錯釉	油滴半月状。外面上半回転 ナデ。下半回転ケズリ。内 面回転ナデ。内面と口縁部 外面に錯釉。	備前
106	TP6 SK6 3層	土師質 土器	小皿	7.6	14	5.2	—	にぶい橙75YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転 系切り。内面口クロ目。	口縁部と内面に煤
107	TP6 SK6 3層	土師質 土器	小皿	7.8	14	4.4	—	にぶい橙75YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転 系切り。内面口クロ目。	口縁部に灯芯油痕
108	TP6 SK6 2層	土師質 土器	人形	—	—	—	—	にぶい橙75YR6/4	人物	型押成形前後貼り合わせ。 中実。体部中央に穿孔あり。	関西産
109	TP4 SK7 下層	磁器 染付	蓋物	12.2	—	—	—	外) 灰白75Y7/1 内) 灰IN8'	外) 二重図線・山水文	内面施釉。口縁部と口縁 部内面無釉。	肥前産
110	TP4 SK7 中層	陶器	小碗 反彌	8.8	5.0	3.6	—	外) 灰白25Y8/2 内) 灰白25Y8/2	灰釉・緑釉	高台無釉。淡黄色を帯びる 透明の釉。口縁部内面に 緑釉。	信楽 19世紀
111	TP4 SK7 下層	陶器	鉢	18.8	—	—	—	外) 灰5Y6/1 内) 灰5Y6/1	灰釉・緑釉	口縁部を内側に押し輪花 に成形。灰白色を帯びる半 透明の釉。口縁部の数据所 に緑釉。	尾口窓
112	TP4 SK7 下層	陶器	灯明受皿	10.0	20	4.0	受部 径 6.6	外) 橙2.5Y7/2 内) 灰E2.5Y8/1	灰釉	油滴半月状。外面下半と外 底回転ケズリ。外面無釉。 灰黄色を帯びる透明の釉。	京都・信楽系
113	TP4 SK7 下層	土師質 土器	壺切 丸形	21.2	—	—	—	外) にぶい黄橙 10YR7/3 内) にぶい黄橙 10YR7/3・黄灰 25Y4/1		前方に口縁部から切り込み あり。内面土台に型作り による突起を貼付。外面ナ デ。内面回転ナデ。	
114	TP3 SK9 床	青花	碗	—	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 圖線・植物 (口縁内) 圖線	口縁端部の釉が虫食い状に 剥がれる。	中国 明徳宗窯系 17世紀前葉～中期
115	TP3 SK9 床	陶器	不明	15.6	—	—	—	外) 薙赤10B3/4 内) 灰N6'	錯釉	把手は剥離。	
116	TP3 SK9 床	土師質 土器	小皿	12.4	3.2	6.6	—	にぶい橙75YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転 系切り。	
117	TP3 SK9 床	土師質 土器	小皿	9.4	2.3	5.0	—	橙5YR6/6		内外面回転ナデ。外底直線 方向のナデ。	
118	TP2 SK11	白磁 又は 染付	中碗	—	—	2.0	—	外) 白 内) 白		高台内兜巾状。高台内と最 付に模様が付着。	肥前産 1610～1630年代
119	TP2 SK11	磁器 染付	中碗	10.9	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 二重図線・不明 (口縁内) 図線 (内) 不明		肥前産 17世紀

Tab.7 遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

国版 番号	出土 地点	種類	種類 器形	法量 (cm)			色調	文様・繪葉	特徴 (成形・調整・釉調査)	備考 (生産地・生産年代・ 鉢・使用痕)
				口径	器高	底径				
120	TP2 SK11	磁器 染付	中碗	—	—	42	—	外) 白 内) 黄白	外) 圓線 高台外) 三重圓線 高台内) 圓線・「大明 年製」	肥前產 17世紀後半
121	TP3 SK11'	土師質 土器	小皿	63	17	4.4	—	に赤い程7.5YR6/4	手捏ね成形。内外面ユビオ サエ・ナデ。	京都系
122	TP3 SK12 床	陶器	中碗	—	—	4.6	—	外) に赤い黃橙 10YR7/3 内) 淡黄橙10YR8/3	灰釉 高台施釉。に赤い黃橙色を 帯びる半透明の釉。	肥前產 17世紀後半～18世 紀前半
123	TP2 SK11 下層	陶器	甕	40.0	—	—	—	外) 灰N6/ 灰白10YR6/1 内) 灰10YR6/1	燒結め 内外面口クロ目。口縁部内 面に自然な掛かる。	E23・124同一個体 か
124	TP2 SK11	陶器	甕	—	—	—	—	外) 黄25Y6/1 内) 灰7.5YR6/1	燒結め 外面格子状の叩き目。内面 青海波状の压痕。	123・124同一個体 か
125	TP3 SK12 床	陶器	甕	—	—	—	—	外) 黄25Y6/1 内) 灰7.5YR6/1	燒結め 外面格子状の叩き目。内面 青海波状の压痕。	
126	TP2 SD1	磁器 染付	小皿 丸形	10.8	21	7.4	—	外) 白 内) 白	外) 連続唐草文 高台外) 二重圓線 内) 山水文	肥前產 二次被熱により釉 は変質。
127	TP2 SD1	陶器	中瓶	11.0	—	—	—	外) 灰白25Y7/1 内) 灰E25Y8/1	灰釉 内外面口クロ目。灰白色を 帯びる透明の釉。	
128	TP2 SD1	陶器	小皿 端反形	14.6	38	4.9	—	外) 灰黄25Y7/2 内) オリーブ灰 10Y5/2 内) 灰白25Y8/1	外) 圓線 内) 鋼綠釉 外面口クロ目。見込み蛇ノ 目釉剥ぎし錆斑を刷毛毛り。 高台施釉。内面に緑釉、外 面に灰釉。外面の釉は幾成 不良で白濁。釉剥ぎ部に砂 目痕。	肥前 内野山 17世紀後半
129	TP2 SD1	染付 又は 白絵	瓶	24	—	—	—	外) 白5Y7/1 内) 灰E5Y7/1	内面無釉。	肥前產
130	TP2 SD1	陶器	櫛鉢	—	—	16.0	—	外) に赤い赤褐 25YR5/3 内) に赤い赤褐 25YR5/3	燒結め 体部外面口クロ目。体部内 面から内底まで櫛目。外底 凹凸。	備前
131	TP1 SD2 下層	磁器 染付	小碗 端反形	7.9	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 圓線・山水文	肥前產
132	TP1 SD2 下層	磁器 染付	中碗	—	—	4.4	—	外) 明暎灰7.5YR8/1 内) 灰E1N8/	高台内無釉。透明釉は粗い 貢入が入る。	肥前產 1640～1650年代
133	TP1 SD2 上層	磁器 染付	碗か	—	—	—	—	外) 白 内) 白	外) コニヤカ印判に よる五弁花文・圓線	肥前產 17世紀末～18世紀
134	TP1 SD2 上層	磁器 染付	うがい 茶碗 平形	14.4	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 二重圓線・鳳凰 内) 圓線・不明	肥前產
135	TP1 SD2 上層	磁器 染付	小皿	—	—	4.1	—	外) 灰白5GY8/1 内) 灰E1N8/	内) 不明	
136	TP1 SD2 上層	磁器 染付	皿	—	—	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 内) 灰白7.5Y7/1	内) 柳 外面継やかな口クロ目。透 明釉は粗い貢入が入る。	肥前產
137	TP1 SD2 上層	陶器	中碗 丸形	—	—	—	—	外) 淡黄25Y7/3 内) 灰E12.5Y8/2	灰釉 浅黄色を帯びる透明の釉。	肥前產 17世紀後半～18世 紀前半
138	TP1 SD2 下層	陶器	中皿	—	—	—	—	外) 灰オリーブ 5Y5/2 内) 灰5Y6/1	内) 鉄絵 灰釉 唐津系灰釉陶器。外面口 クロ目。	肥前產 1590～1610年代
139	TP1 SD2 下層	土師質 土器	小皿	11.2	3.0	6.4	—	に赤い程7.5YR7/4	内外面回転ナデ。外底回転 糸切り。	
140	TP1 SD2 下層	土師質 土器	小皿	9.4	2.7	4.2	—	に赤い程7.5YR7/3	内外面回転ナデ。外底回転 糸切り。内外面口クロ目。	
141	TP1 SD2 下層	土師質 土器	小皿	—	—	5.7	—	に赤い程7.5YR6/4	内外面回転ナデ。外底回転 糸切り。内面口クロ目。	
142	TP1 SD2 下層	土師質 土器	焼塙壺	6.0	8.9	4.0	—	外) に赤い程 7.5YR7/4 内) に赤い程 5YR6/4	外面ナデ。内面板状の压痕。	関西產
143	TP1 SD2 中層	土師質 土器	焼塙壺	7.0	—	—	—	に赤い程5YR6/4	外面ナデ。口縁部内面ユビ オサエ。体部内面布目。	関西產

Tab.8 遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

器版 番号	出土 地点	種類	種類 器形	法量 (cm)			色調	文様・繪葉	特徴 (成形・調整・釉調性)	備考 (生産地・生産年代・ 鉱・使用歴)	
				口径	器高	底径					
144	TP1 SD2 床	土師質 土器	燒塗壺	—	—	3.0	—	にぶい程5YR6/4	外面ユビオサエ・ナデ。内 側板状の圧痕。	関西産	
150	TP1 SX1	磁器 染付	中碗 端反形	9.7	6.0	4.5	—	外) 白 断) 白	外) 花唐草文 高台(内) 二重團線 見込み) 五弁花文 高台(内) 團線・「太明 成化年製」	肥前産 17世紀後葉～18世 紀初頭	
151	TP1 SX1	磁器 染付	中碗	—	—	4.6	—	外) 白 断) 白	外) 花唐草文か 高台(外) 二重團線 見込み) 五弁花文 高台(内) 團線・「太明 成化年製」	肥前産 17世紀後葉～18世 紀初頭	
152	TP1 SX1	陶胎 染付	中碗	11.0	—	—	—	外) 灰白75Y7/1 断) 灰白75Y7/1	外) 二重團線・山水文	肥前産 17世紀末～18世紀 前半	
153	TP1 SX1	磁器 染付	小碗 端反形	6.8	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 板文・竹文	肥前産	
154	TP1 SX1	磁器 染付	中碗 丸形	11.3	—	—	—	外) 灰白75Y7/1 断) 灰白N8/	外) 草花文	肥前産 18世紀	
155	TP1 SX1	磁器 染付	小碗 丸形	9.0	—	—	—	外) 印刷灰75GY8/1 断) 灰IN8/	外) 草花文	肥前産 18世紀	
156	TP1 SX1	磁器 染付	小碗 丸形	8.6	—	—	—	外) 灰白5Y8/1 断) 灰IN8/	外) 花唐草文	肥前産 18世紀	
157	TP1 SX1	磁器 染付	小碗 端反形	7.5	—	—	—	外) 白 断) 白	外) コンニャク印押に よる松文	肥前産 17世紀末～18世紀 前半	
158	TP1 SX1	白磁	小杯	—	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 丸彫りによる箇 高台無釉。	肥前産 1630～1650年代	
159	TP1 SX1	磁器 染付	皿 変形皿	—	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 唐草文 高台(外) 雷文帯 内) 花唐草文・漆・柘植 高台(内) 刃角内溝「福」	糸切り細工。貼付高台。 肥前産 17世紀末～18世紀 前半	
160	TP1 SX1	磁器 染付	小皿 丸形	10.9	2.4	6.2	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 如意頭連続唐草文・ 團線 高台(外) 二重團線 内) 黒彌きと濃みによ る唐草文・コンニャク 印押による五弁花文 高台(内) 團線・「□明 □製」 口絞	透明釉は貢入が入る。 肥前産 18世紀	
161	TP1 SX1	磁器 染付	皿	—	—	—	—	外) 灰白5GY8/1 断) 灰IN8/	内) 動物(獅子か)	肥前産 1630～1650年代	
162	TP1 SX1	磁器 染付	皿	—	—	—	—	外) 白 断) 白	内) 不明	内面に濃みによる不明文様。 肥前産	
163	TP1 SX1	磁器 染付	中皿	22.2	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 唐草文 内) 二重團線・植物	口縁部輪花形か。 肥前産 17世紀後半	
164	TP1 SX1	白磁	五寸皿 菊花形	14.6	4.6	7.6	—	外) 白 断) 白	内) 型による菊花文	陽刻型打成形。外面上にヘア 彫りによる菊弁。 肥前産	
165	TP1 SX1	磁器 染付	猪口	10.2	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 花唐草文・雷文帯 口縁	口縁部輪花形。 肥前産 18世紀前半	
166	TP1 SX1	磁器 染付	水滴	—	—	—	—	外) 白 断) 白	唐子	型押成形貼り合わせ。内面 ユビオサエ。頭部の横に径 4mmの円孔。	肥前産
167	TP1 SX1	磁器 染付	猪口	8.0	—	—	—	外) 灰白5GY8/1 断) 灰IN8/	外) 降雨り文	透明釉は貢入が入る。呉須 は暗青灰色に発色。 肥前産 17世紀末～18世紀 前半	
168	TP1 SX1	磁器 染付	猪口 桶形	7.6	5.0	3.6	—	外) 白 断) 白	外) 降雨り文・三重團 線 高台(内) 團線	外面上口に強いロクロ目。 高台(内) 滑状の跡痕。高台 無釉。淡黄色を帯びる半透 明の釉。 肥前産 17世紀末～18世紀 前半	
169	TP1 SX1	陶器	中碗	—	—	4.6	—	外) 法黃2.5Y8/3 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	京焼風陶器。文様の有無は 不明。高台無釉。浅黄色を 帯びる透明の釉。 京都	
170	TP1 SX1	陶器	中碗 丸形	11.0	6.4	4.8	—	外) 浅黄25Y7/3 断) 灰白25Y8/2	灰釉	京焼風陶器。にぶい黄褐色 を帯びる透明の釉。 肥前産 1660年代～18世紀 前半	
171	TP1 SX1	陶器	中碗 丸形	9.9	—	—	—	外) にぶい黄 10VR7/3 断) 灰白10YR8/2	外) 鉄絵による山水文 灰釉	京焼風陶器。にぶい黄褐色 を帯びる透明の釉。 肥前産 1660年代～18世紀 前半	
172	TP1 SX1	陶器	中碗	—	—	4.8	—	外) 浅黄10YR8/3 断) 灰白10YR8/1	灰釉	京焼風陶器。文様の有無は 不明。高台無釉。浅黄色を 帯びる透明の釉。 肥前産 1660年代～18世紀 前半	

Tab.9 遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

国版 番号	出土 地点	種類	種類 器形	法量 (cm)			色調	文様・繪葉	特徴 (成形・調整・釉調性)	備考 (生産地・生産年代・ 銘・使用歴他)	
				口径	器高	底径					
173	TP1 SX1	陶器	中碗	—	—	48	—	外) にい黄橙 10YR7/3 内) にい黄橙 10YR7/2	灰釉	高台施釉。にい黄橙色を 帯びる透明の釉。	肥前產 17世紀後半～18世 紀前半
174	TP1 SX1	陶器	中碗 丸形	—	—	42	—	外) にい黄5YR6/4 内) 灰白25Y7/1	灰釉	高台内肥巾状。高台施釉。 にい黄橙色を帯びる透明の 釉。	肥前產 17世紀後半～18世 紀前半
175	TP1 SX1	陶器	中碗 丸形	10.1	6.4	4.0	—	外) 灰白75Y7/1 内) 灰E1N7	灰釉	高台内肥巾状。高台施釉。 種は燒成不良臭氣で白濁。	肥前產又は肥前系
176	TP1 SX1	陶器	中碗	—	—	4.0	—	外) 灰オリ75Y6/2 内) 灰白25Y8/2	灰釉	内外面強烈クロ口。高台 内肥巾状。高台無釉。灰オ リーブ色を帯びる半透明の 釉。	肥前か 肥前
177	TP1 SX1	陶器	小皿 丸形	12.6	4.1	4.6	—	外) 灰白5Y7/2 内) 灰白5Y7/1	外) 銚・呂須による榜 の葉 内) 銚・呂須・白土に よる榜文 灰釉	高台内に円盤状の段。高台 無釉。灰白色を帯びる透明 の釉。	京都
178	TP1 SX1	陶器	小皿	—	—	4.6	—	外) 灰25Y7/2 内) 細灰10G5/1 内) 灰125Y7/1	外) 灰釉 内) 銅綠釉	見込み蛇ノ目割剥ぎ。高台 無釉。内面に緑灰色の釉。 外側の釉は燒成不良で白濁。	肥前 内野山 17世紀後半～18世 紀前半
179	TP1 SX1	陶器	中皿	—	—	—	—	外) 灰白10YR4/2 内) 灰E1N5/1	内) 白象嵌による印花 文・團線		肥前產 17世紀
180	TP1 SX1	陶器	不明	9.4	—	—	—	外) にい・鶴 75YR5/3 内) 灰175YR8/2	鐵釉	内外面口クロ口。内面無釉。 は変質。	二次被熱により釉 は変質。
181	TP1 SX1	陶器	搖鉢	—	—	21.0	—	外) 灰削75YR5/2 内) にい・赤褐 25YR5/4	燒め	内面から内底まで焼目。体 部外側イタナデ。外底凹凸、 ナデ。	備前
183	TP1 SX1	土師質 土器	小皿	8.2	1.1	4.8	—	にい黄橙10YR7/2		内外面回転ナデ。外底回転 糸切り。	口縁部に灯芯油痕
184	TP1 SX1	土師質 土器	小皿	6.9	1.0	4.2	—	浅黄橙10YR8/3		内外面回転ナデ。外底回転 糸切り。	口縁部に灯芯油痕
195	TP3 SX9	磁器 染付	蓋物 腰張形	—	—	6.4	—	外) 白 内) 白	外) 唐草文・繪垣 高台外) 二重團線 高台内) 二重團線・不 明	内面施釉。口縁部内面無釉。	肥前產
196	TP3 SX9	陶器	搖鉢	—	—	—	—	外) 灰削10YR5/1 内) 灰E1N5/4R4/1	燒め	口縁部外側に2条の凹線。 口縁部内面回転ナデ後焼目。	備前
197	TP3 SX9	陶器	瓶類か	—	—	9.1	—	外) 灰N5/ 内) 灰E1N5/4 内) 灰E7.5YR4/1	燒め	内外面回転ナデ。外底回転 糸切り。内面口クロ口。	備前か
198	TP3 SX9	土師質 土器	小皿	—	—	4.4	—	にい黄橙10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転 糸切り。	
199	TP3 SX9	陶器	搖鉢	—	—	12.5	—	外) 灰削YR5/2 内) 灰E7.5YR4/1 内) にい・赤褐 5YR5/4	燒め	体部外面口クロ口。体部内 面から内底まで焼目。外底 凹凸。	備前
200	TP1 SX12	陶器	中碗 丸形	10.2	—	—	—	外) にい黄橙 10YR7/4 内) 灰125Y8/2	外)呂須による山水文 灰釉	京焼風陶器。にい黄橙色 を帯びる透明の釉。呂須は 暗緑灰色に発色。	肥前產 1660年代～18世紀 前半
201	TP1 SX12	陶器	皿	—	—	—	—	外) 灰E5Y7/1 内) 灰E5Y7/1	灰釉	灰白色を帯びる透明の釉。	尾戸窯
202	TP1 SX12	陶器	小皿	10.2	2.8	2.7	—	外) にい・鶴 75YR5/3 内) 灰オリーブ5Y5/2 内) にい・鶴 75YR6/3	灰釉	唐津系灰釉陶器。下面下半 無釉。灰オリーブ色を帯び る白濁した釉。内底に胎土 目痕。	肥前產 1590～1610年代
203	TP1 SX12	青花	皿	—	—	—	—	外) 明オリーブ灰 25GY7/1 内) 灰E5Y7/1	内) 不明	白化粧長透明釉。	中国 滋州窯系 16世紀末～17世紀 初頭
204	TP1 SX12	陶器	灯明 受皿	10.5	1.7	5.2	—	外) にい・鶴 75YR6/4 内) にい・鶴 75YR6/4	燒めか	外面と外底回転ケズリ。内 面回転ナデ。	口縁部外側に タール状の焦げ。
205	TP2 SX14	磁器 染付	中碗 大口形 か	—	—	5.4	—	外) 明灰10GY8/1 内) 白	外) 銚・「福寿」	縦方向の縫を数条入れ。そ の間に「福寿」字を描く。 高台内肥巾状。墨付に粗砂 が付着する。	肥前產 1610～1630年代
206	TP2 SX14	磁器 染付	小皿 龍反形	12.3	—	—	—	外) 灰白IN/ 内) 灰E1N7	内) 不明	呂須は暗緑灰色に発色。	肥前產
207	TP2 SX14	陶器	中碗 丸形	10.0	—	—	—	外) 斜5YR4/3 内) 灰白10YR8/1	鐵釉	外面口クロ口。高台無釉。 褐色の釉。	瀬戸・美濃

Tab. 10 遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

国版 番号	出土 地点	種類	種類 容器	法量 (cm)				色調	文様・繪葉	特徴 (成形・調整・釉調性)	備考 (生産地・生産年代・ 鉢・使用痕)
				口径	器高	底径	最大径				
208	TPI SX14	陶器	中碗	11.6	—	—	—	外) 薄灰黄25Y5/2 内) にい黄橙 10YR7/2	灰釉	唐津系灰釉陶器。外面鏡や かなクロ口。灰オーリーブ 色を帯びる半透明の釉。	肥前產 1590～1630年代
209	TPI SX14	陶器	中碗	—	—	6.0	—	外) 灰白25Y7/1 内) 灰白25Y8/1	灰釉	高台施釉。灰白色を帯びる 半透明の釉。	尾戸窯か
210	TP2 SX14	陶器	碗 反彫	11.5	—	—	—	外) 灰白5Y6/1 内) 灰白25Y7/1	灰釉	高台内兜巾状。高台施釉。 灰オーリーブ色を帯びる透明 の釉。内底に鋸目。	肥前產 1610～1630年代
211	TP2 SX14	陶器	小皿	—	—	4.2	—	外) 灰オーリーブ5Y6/2 内) 灰黄25Y6/1	灰釉	高台内兜巾状。高台施釉。 灰オーリーブ色を帯びる透明 の釉。内底に鋸目。	肥前產 1610～1630年代
212	TP2 SX14	陶器	皿	—	—	—	—	外) 灰白25Y8/1 内) にい赤褐色 SYR4/3	内) 白化粧土刷毛目 絵繪・鉄繪 外) 灰釉	二重手。内面に白化粧土刷 毛目後鏡體と鉄繪の分け分け。	肥前產 17世紀～18世紀前半
213	TP2 SX14	陶器	盃又は 羹	—	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 内) 灰5Y5/1 外) 灰黄25Y6/2	灰釉	内面に青海波状の压痕。白 濁した釉。内面無釉。	内面と断面に焦げ。
214	TP2 SX14	土師質 土器	小皿	7.6	19	4.2	—	にい灰75YR7/4	—	内外面回転ナデ。外底回転 糸切り。	—
215	TP2 SX14	土師質 土器	小皿	8.2	19	5.1	—	にい灰75YR6/4	—	内外面回転ナデ。外底回転 糸切り。内底ロクロ目。	内面に強い爆。
216	TP1 SX14	土師質 土器	小皿	9.9	24	4.0	—	にい灰75YR7/4	—	内外面回転ナデ。外底回転 糸切り。内底ロクロ目。	口縁部外面に タール状の焦げ。
217	TP2 SX14	土師質 土器	小皿	—	—	5.2	—	にい灰75YR7/4	—	内外面回転ナデ。外底回転 糸切り。	—
218	TP2 SX14	土師質 土器	杯又は 皿	—	31	—	—	にい灰75YR7/4	—	内外面回転ナデ。	—
219	TP2 SX14	土師質 土器	燒塗壺	—	—	—	—	明赤褐25YR5/6	—	内面上位に粘土苔接合痕。 内外面ユビオサエ・ナデ。 胎土中に金雲母を含む。	関西產
231	TP1 瓦罈1	磁器 染付	碗 端反彫	—	—	35	—	外) 白 内) 白	外) 薄艺 高台外) 回線 内) 薄艺	—	肥前產 19世紀
232	TP1 瓦罈1	磁器 染付	中碗 端反彫	9.7	5.8	4.4	—	外) 白 内) 白	外) 竹文・丸に梅・團線 高台外) 二重團線 口縁内) 四方摩 見込み) 二重團線・松 竹梅円形文 高台内) 角縁内「茶」	外) 多重團線・格子・梅花 口縁内) 二重團線 見込み) 團線	能茶山窑 1820～1860年代 角縁内「茶」路あり。
233	TP1 瓦罈1	磁器 染付	中碗 端反彫	10.6	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 多重團線・格子・ 梅花 口縁内) 二重團線 見込み) 團線	—	肥前產 1820～1860年代
234	TP1 瓦罈1	磁器 染付	中碗 廣東形	—	—	4.8	—	外) 灰白10Y8/1 内) 灰白N8/	外) 山水文か 高台外) 二重團線 見込み) 團線・龜 高台内) 「サ」	能茶山窑 1820～1860年代 「サ」路あり。	
235	TP1 瓦罈1	磁器 染付	中碗 廣東形	—	—	5.0	—	外) 灰白10Y8/1 内) 白	外) 團線・不明 高台外) 二重團線 見込み) 團線・宝文 高台内) 「サ」	透明釉は焼成不良気味で白 濁。	能茶山窑 1820～1860年代 「サ」路あり。
236	TP1 瓦罈1	磁器 染付	薄手 杯・端反彫	7.6	3.3	2.9	—	外) 白 内) 白	外) 銀衝文・蓮瓣文 内) 銀衝文・花文	—	肥前產 19世紀前半～1860 年代
237	TP1 瓦罈1	磁器 染付	小杯	5.2	4.4	2.8	—	外) 白 内) 白	外) 山水文・蓮瓣文 高台外) 二重團線 内) 鶴	口縁部輪花形。	肥前產
238	TP1 瓦罈1	磁器 染付	小皿	10.6	2.8	5.9	—	外) 灰白10Y8/1 内) 白	外) 花唐草文 内) 区画間に植物・團 線・葉	—	肥前產
239	TP1 瓦罈1	磁器 染付	椭小皿	7.4× 2.6	1.4	4.0× 1.0	—	外) 白 内) 白	粗糸 内) コニャック印柄に よる紅葉	糸切り細工。貼付高台。具 頬は暗紅色に発色。	肥前產 17世紀末～18世紀 前半
240	TP1 瓦罈1	青花	皿 六角形	9.0	1.9	3.8	—	外) 白 内) 白	外) 区画間に宝文 内) 区画間に宝文・櫻 垣 高台外) 回線	—	中国 景德鎮窯系
241	TP1 瓦罈1	青花	皿	—	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 團線 内) 唐文・團線	口縁部の釉が虫食い状に 剥がれる。	中国 景德鎮窯系 17世紀前業～中業
242	TP1 瓦罈1	青花	皿	—	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 二重團線・唐文 内) 奉	口縁部の釉が虫食い状に 剥がれる。	中国 景德鎮窯系 17世紀前業～中業
243	TP1 瓦罈1	磁器 染付	中皿 丸形	18.0	2.8	11.8	—	外) 灰白5Y8/1 内) 白	外) 唐文・團線 高台外) 二重團線 内) 四方摩・鳳凰・ 二重團線・松・竹	—	肥前產

Tab. 11 遺物観察表 (陶磁器・土器・その他)

器版 番号	出土 地点	種類	種 器形	法量 (cm)				色調	文様・繪葉	特徴 (成形・調整・釉調性)	備考 (生産地・生産年代・ 鉢・使用歴)
				口径	器高	底径	最大径				
244	TP1 瓦罈1	磁器 染付	鉢 八角形	15.9	7.9	6.4	—	外) 白 内) 白	外) 区画間に墨雲・ 宝文 高台外) 二重團線 内) 区画間に墨塔文・ 牡丹・松 見込み) 桐		肥前產
245	TP1 瓦罈1	磁器 染付	鉢 八角形	19.5	9.9	9.1	—	外) 白 内) 白	外) 区画間に宝文 内) 区画間に花卉・刷 見込み) 横		肥前產又は肥前系
246	TP1 瓦罈1	磁器 染付	鉢	—	—	9.4	—	外) 灰白10Y8/1 内) 白	外) 邊弁文・不明 高台内) 鉢 (大明年製 か)	透明釉は白濁し粗い貫入が ある。	肥前產
247	TP1 瓦罈1	磁器 染付	蓋物 腰張形	9.8	5.6	5.2	—	外) 白 内) 白	外) 花唐草文 高台外) 圖繩	蛇ノ目高台・内面施釉・口 縁端部と口縁部内面無釉。	肥前產
248	TP1 瓦罈1	磁器 染付	蓋物 丸形	9.0	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 梅・植物・圖繩	内面施釉・口縁端部と口縁 部内面無釉。	肥前產
249	TP1 瓦罈1	磁器 染付	段重	受部 径 10.4	3.2	10.0	—	外) 白 内) 白	外) 花唐草文	内面と外底施釉。受部と底 部脇無釉。	肥前產
250	TP1 瓦罈1	青磁 染付	碗蓋	笠部 径 9.6	3.4	—	摘み 径 3.6	外) 灰白7.5Y8/1 内) 白	内) 四方押・二重團線・ コンニャク印押による 五角花文 摘み内) 角舟内溝「福」	外面の釉は焼成不良で白濁 18世紀後半	肥前產
251	TP1 瓦罈1	磁器 染付	蓋物蓋	笠部 径 6.2	—	かえり 径 5.2	—	外) 白 内) 白	外) 丸文・寿字文・二 重團線・圖繩	帶状の摘みを貼付。内面施 釉。かえり無釉。	肥前產 二次被熱により釉 は変質。
252	TP1 瓦罈1	白磁	紅皿 菊花形	4.4	2.5	1.6	—	外) 白 内) 白	外) 型による菊弁	型押成形。高台施釉。	肥前產
253	TP1 瓦罈1	白磁	紅皿 菊花形	4.5	1.4	1.5	—	外) 白 内) 白	外) 型による菊弁	型押成形。外面無釉。 外底にチザレ目。	肥前產 1780～1860年代
254	TP1 瓦罈1	磁器 染付	仏頭器	6.4	5.8	3.6	—	外) 白 内) 白	外) 唐唐草文・圖繩		肥前產 1690～1780年代
255	TP1 瓦罈1	磁器 染付	小瓶 擦花形	—	—	2.6	4.3	外) 灰白10Y8/1 内) 白	外) 梅花・並	内面ロクロ目。内面無釉。	肥前產
256	TP1 瓦罈1	磁器 染付	小瓶 擦花形	—	—	3.0	4.2	外) 灰白10Y8/1 内) 白	外) 姫唐草文・二重團 線	内面ロクロ目。内面無釉。	肥前產
257	TP1 瓦罈1	磁器 染付	小瓶	—	—	—	7.5	外) 白 内) 白	外) 二重團線・編幅・ 瓣弁文	内面ロクロ目。内面無釉。	肥前產
258	TP1 瓦罈1	青磁	香炉	12.4	—	—	13.3	外) 明暦灰10GY7/1 内) 白	青磁釉	口縁部内面まで施釉。体部 内面無釉。明暦灰色の半透 明の釉。	肥前產
259- a - b	TP1 瓦罈1	磁器 染付	鏡子	13.3	—	—	—	外) 不明		把手に製作による菊花を 貼付。内面と受部無釉。把 手は断面六方形。	肥前產
260	TP1 瓦罈1	磁器 染付	水滴	—	—	—	—	外) 白 内) 白	宝船	型押成形貼り合わせ。船の 先端に径3mmの円孔。	肥前產
261	TP1 瓦罈1	磁器 染付	水滴	—	—	—	—	外) 白 内) 白	宝船	上面に径3mmの円孔。型押 成形貼り合わせ。内面エビ オサエ・ナガエ。内面無釉。 外面の一個面無釉。	肥前產
262	TP1 瓦罈1	陶器	中碗 丸形	12.6	8.0	5.4	—	外) にぶい黄橙 10YR7/3 内) 浅黄橙10YR8/3	灰釉	外面強いクロ目。高台内 に溝伏の斑痕。高台内面無釉。 にぶい黄色を帯びる半透明の釉。	肥前產 17世紀後半
263	TP1 瓦罈1	陶器	鉢 折形	13.6	6.9	5.2	—	外) 灰白10Y7/1 内) 白	灰釉	高台施釉。灰白色を帯びる 半透明の釉。内底に日暦4足。	
264	TP1 瓦罈1	陶器	小碗 半筒形	8.8	5.8	4.5	—	外) にぶい赤褐 SYR4/4 内) 浅黄橙10YR8/3	铁釉	高台無釉。にぶい赤褐色の 釉。	
265	TP1 瓦罈1	陶器	小皿	—	—	5.2	—	外) 灰白5N7/1 内) 灰E25Y7/1	灰釉	外面に擬態。内外面ナデ。 貼付高台。高台無釉。透明 の釉。	
266	TP1 瓦罈1	陶器	鉢	—	—	9.0	—	外) 灰5Y6/1 内) 灰5Y7/1	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる 半透明の釉。内底に日暦。	尾戸窯
267	TP1 瓦罈1	陶器	おろし 皿	10.0	2.0	4.6	—	外) 灰白7.5Y6/2 内) 灰5Y7/1 外) 黄灰10YR7/3	灰釉	内底におろし目。高台無釉。 灰白色を帯びる半透明の釉。	
268	TP1 瓦罈1	陶器	柄杓	8.6	—	—	—	外) 灰E5Y7/1 内) 灰E5Y7/1		把手を貼付。灰白色を帯び る透明の釉。	京都・信楽系
269	TP1 瓦罈1	陶器	柄杓	8.0	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 内) 灰E5Y7/1		把手を貼付。灰白色を帯び る透明の釉。	京都・信楽系
270	TP1 瓦罈1	陶器	柄杓か	7.6	—	—	—	外) 灰E5Y7/1 内) 灰白5Y7/1		把手の有無は不明。灰白色 を帯びる透明の釉。	京都・信楽系

Tab. 12 遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

国版 番号	出土 地点	種類	器形	法量 (cm)				色調	文様・繪葉	特徴 (成形・調整・釉調性)	備考 (生産地・生産年代・ 銘・使用痕)
				口径	器高	底径	最大径				
271	TP1 瓦罈1	陶器	蓋物	—	—	—	—	外) 灰白25Y7/1 内) 灰白25Y7/1	外) 鉄絵 灰釉	内面施釉。口縁端部と口縁 部内面無釉。灰白色を帯び る透明の釉。	尾戸窯か
272	TP1 瓦罈1	陶器	蓋	笠部 径 7.1	14	かえり 径 6.2	—	外) 灰白5Y7/2 内) 灰白5Y7/1	灰釉	内面施釉。瓦弁部とかえり 無釉。灰白色を帯びる半透 明の釉。	尾戸窯
273	TP1 瓦罈1	陶器	鍋蓋	笠部 径 15.2	35	—	描み 径 31	外) 橙7.5YR7/6 内) 暗赤25YR3/1 内) 橙7.5YR7/6	外) 飛翔 鉄絵	外面鉄絵を刷毛筆で塗る後、 飛翔を蛇ノ目状に造らす。 内面施釉。笠部無釉。暗赤 灰色の釉。	能茶山窯か
274	TP1 瓦罈1	陶器	鍋蓋	17.0	—	—	—	外) 灰黄褐10YR6/2 内) 暗赤25YR6/1	焼締め	描みを貼付。型押成形。外 面に布目・内面ユビオサエ ナデ。胎土中に金雲母を含 む。	関西産
275	TP1 瓦罈1	陶器	蓋	—	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 内) 灰白5Y8/1	外) 鉄絵による筆文 灰釉	内面施釉。灰白色を帯びる 透明の釉。鉄絵は暗灰黄色 に免色。	尾戸窯
276	TP1 瓦罈1	陶器	急須か	11.2	—	—	—	外) 橙5Y6/1 内) 灰白5Y7/2	外) 型による陽刻の松 文 灰釉	口縁部波線状。内面ユビオ サエ・ナデ。内面施釉。受 部無釉。	関西系
277	TP1 瓦罈1	陶器	急須か	9.6	—	—	—	外) 灰黄25Y7/2 内) 灰黄25Y7/2	灰釉	ロクロ成形の後口縁部を波 線形に変形させる。体内部 面無釉。灰白色を帯びる半 透明の釉。	京都系
278	TP1 瓦罈1	陶器	土瓶 又は 急須	—	—	8.2	—	外) 灰白25Y7/1 内) 灰白25Y7/2 内) 灰白25Y7/1	外) 型による粒状の陽 刻文様 灰釉	型押成形。内面ユビオサエ ナデ。内面施釉。外部無釉。 灰白色を帯びる透明の釉。	
279	TP1 瓦罈1	陶器	色絵	—	—	—	—	外) 赤E5Y7/1 内) 灰白25Y8/2	外) 赤の上絵付による 唐草文 灰釉	内面施釉。灰白色を帯びる 透明の釉。	京都系
280	TP1 瓦罈1	陶器	小壺 胴丸形	6.9	7.6	4.6	8.8	外) 灰白5Y7/1 内) 灰白10YR7/1	灰釉	双耳を貼付。内外面ロクロ 目。内面施釉。口縁部内面 と外面下部無釉。灰白色を 帯びる半透明の釉。	
281	TP1 瓦罈1	陶器	小壺	6.4	6.9	4.8	9.7	外) 略褐色10YR3/3 内) 灰白10YR7/1	鉄絵	内面施釉。口縁端部と口縁 部内面の釉を拭き取り白土 を施す。高台施釉。豊富に 白土。	
282	TP1 瓦罈1	陶器	蓋物か	6.1	—	—	6.7	外) 略褐色10R4/4 内) 灰白10R5/6	鉄絵	外面上位に鶴目を造らせる。 内面無釉。受部内面まで施 釉。小瓣形の釉。	
283	TP1 瓦罈1	陶器	小瓶	—	—	2.4	—	外) 略褐色10YR3/4 内) 灰白10YR8/2	鉄絵	内外面ロクロ目。外底回転 系切り。内面施釉。外面下 半無釉。略褐色の釉。	
284	TP1 瓦罈1	陶器	小瓶	—	—	4.0	6.4	外) に赤い・黄橙 10YR6/4 内) に赤い・黄橙 10YR7/3	灰釉	内面ロクロ目。外底回転ケ ズリ。外面上位と内面無釉。	外底に墨書き。
285	TP1 瓦罈1	陶器	瓶類	—	—	7.6	—	外) に赤い・赤褐色 5YR4/3 内) に赤い・黄橙 25YR5/3	鉄絵	内面ロクロ目。内面無釉。 内面の一部と内底に釉が流 れる。に赤い・赤褐色の釉。	尾戸窯又は能茶山 窯か
286	TP1 瓦罈1	陶器	ミニ チュア 瓶	6.5	—	—	—	外) に赤い・赤褐色 5YR4/4 内) 略褐色10YR6/1	鉄絵	把手を貼付。外面下半無釉。 に赤い・赤褐色の釉。	
287	TP1 瓦罈1	陶器	筒題(1)	4.8	1.8	4.4	—	外) E5Y6/1 内) E5Y6/1	灰釉	描みを貼付。外底無釉。灰 オリーブ色の釉。	
288	TP1 瓦罈1	陶器	灯明 受皿	10.7	2.5	3.8	—	外) 灰白25Y7/2 内) 灰白25Y8/2	内) 楊目 灰釉	外面下手と外底回転ケズリ。 外底無釉。灰黄色を帯びる 透明の釉。日肌3C。	京都・信楽系 口縁部内外面に タール状の焦げ。
289	TP1 瓦罈1	陶器	水滴	—	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 内) 灰白25Y8/2	人物 灰釉	背面に径4mmの円孔。型押 成形前後割り合わせ。内面 ユビオサエ・ナデ。内面無 釉。灰白色を帯びる半透明 の釉。	
290	TP1 瓦罈1	陶器	火鉢 筒形容	16.8	—	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 内) に赤い・黄橙 10YR7/4 内) に赤い・黄 25YR7/4	外) 具頭と白土イチ ン描きによる富士山・ 櫻木 灰釉	内面ロクロ目。内面無釉。 灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯 口縁端部に銀打痕。
291	TP1 瓦罈1	陶器	風炉か	—	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 内) 灰白5Y7/1	灰釉	前方に窓をもつ。内面施釉。 灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯か
292	TP1 瓦罈1	陶器	土管	—	厚さ 0.6	復元 径 7.6	—	外) に赤い・黄 7.5YR5/3 内) に赤い・黄 7.5YR5/3	焼締め	製作り。外面纏ハケ。内面 に縱方向の凹痕。内面に灰 白色の根脚が付着。	

Tab. 13 遺物觀察表 (陶磁器・土器・その他)

図版番号	出土地点	種類	各種器形	法量 (cm)			色調	文様・繪葉	特徴 (成形・調整・釉調性)	備考 (生産地・生産年代・鉱・使用者)	
				口径	器高	底径					
293	TP1 瓦器1	土師質 土器	小皿	7.2	1.2	4.6	—	に赤い黄澄10YR7/3	内外面回転ナデ。外底回転系切り。		
294	TP1 瓦器1	土師質 土器	白土器 小皿	11.1	1.5	7.6	—	灰白10YR8/1 内) 型による松竹梅鶴 龜文	内底型による陽刻文様。内 面回線と外面ヨコナデ。外 底直線方向のナデ。	尾戸窯	
295	TP1 瓦器1	土師質 土器	小皿	11.1	2.1	6.0	—	に赤い黄澄10YR7/2	内外面回転ナデ。外底回転 系切り。	内底と外底に僅。	
296	TP1 瓦器1	土師質 土器	鍋か	13.9	5.3	5.0	—	に赤い橙5YR7/4	内外面回転ナデ。外底回転 ケズリ。	外面に僅。	
297	TP1 瓦器1	土師質 土器	焼塔	26.2	—	—	—	に赤い橙5YR7/4	双耳を貼付。双耳に径5mm の円孔。内外面ユビオサエ 後回転ナデ。外底凹凸。胎 土中に金雲母を含む。	関西産	
298	TP1 瓦器1	土師質 土器	焼塔	31.0	—	—	—	外) 赤灰7.5YR5/1 内) に赤い赤褐 5YR5/4 内) に赤い赤褐 5YR5/4	外底型作り。内外面回転ナ デ。外底に凸。	関西系 外面に焦げ。	
299	TP1 瓦器1	土師質 土器	焼塔	29.5	—	—	—	外) に赤い橙 7.5YR7/4 内) に赤い褐 7.5YR5/3 内) に赤い橙 7.5YR7/4	口縁部内外面と内底回転ナ デ。外底にナデレ日・凹凸。 口縁部外面に粘土帶接合痕。	関西系 口縁部外面と外底 に焦げ。内底に漆 み状の焦げ。	
300	TP1 瓦器1	土師質 土器	焼塔	31.8	—	—	—	に赤い橙7.5YR7/3	口縁部内外面ユビオサエ後 回転ナデ。外底ナデ。内底 回転ナデ。	関西系 内面に焦げ。	
301	TP1 瓦器1	土師質 土器	焼塔	34.0	—	—	—	に赤い橙7.5YR7/4	口縁部外表面ヨコナデ。外底 不定方向のナデ。内面回転 ナデ。	在埴系 内面に焦げ。	
302	TP1 瓦器1	土師質 土器	提灯か	—	—	—	—	に赤い橙7.5YR7/4	口縁部が切り込む窓あり。 外表面回転方向の横目。内面 ユビオサエ・ナテ。外面上 に鉢印。	鉢印あり。	
303	TP1 瓦器1	土師質 土器	火消し 巻か	14.8	—	—	—	橙5YR6/6	外面ナデ。内面回転ナデ。 内面ロロ目。	口縁部内面に僅。	
304-a・b	TP1 瓦器1	土師質 土器	提灯 又は 波紋	8.7	—	10.0	—	橙5YR6/6	橙色土に灰白色土を練り込 む。外表面ナデ・ミガキ。内 面回転ナデ。外底回転ケズ リ。		
305	TP1 瓦器1	土師質 土器	提灯 筒形	—	—	13.2	15.4	灰白10YR8/2	五角形の三足を貼付。内部 施設は欠損。円孔と窓は不 明。外表面ナデ。外底回転ケ ズリ。内底回転ナデ。	京都系	
306	TP1 瓦器1	土師質 土器	籠筒 筒形	40.4	—	—	—	に赤い橙7.5YR6/4	前方に窓。口縁部外面下に 粘土帶を貼付しヘラ彫りによ る文様を施す。内外面 回転ナデ。内面粘土帶接合部 付近にユビオサエ。胎土 中に金雲母を含む。	関西産 口縁部と口縁部 外面に僅。	
307	TP1 瓦器1	瓦質 土器	提灯 箱形	—	—	全幅 15.2	—	外) 灰N4/ 断) 灰白N7/	外) 印花による菊文	松笠形の双耳を貼付。内部 施設は欠損。上面隅に径5 mmの円孔。内面の四隅に粘 土充填。外表面ナデ・ミガキ。 内面イタナデ。	
308	TP1 瓦器1	瓦質 土器	提灯 箱形	—	—	—	—	外) 灰N4/ 断) 灰N6/	外) 型による人物文	松笠形の双耳を貼付。内部 施設は欠損。正面押しに よる陽刻文様。内面イタナ デ。	
324	TP2 瓦器2	青磁 染付	中碗 丸形	11.8	6.5	5.0	—	外) 明オリーブ灰 5CY7/1 内) 灰白10YR8/1 断) 灰白N8/ 高台内) 角棒内溝「福」	外) 青磁袖 口縁内) 四方摩 見込み) 二重團線・五 重花文 高台外) 角棒内溝「福」	外面に明オリーブ灰色の袖。 見込み手描きによる五重花 文。	肥前窯 18世紀後半
325	TP2 瓦器2	磁器 染付	中碗 東京形	—	—	6.1	—	外) 灰白7.5Y8/1 断) 白	外) 草花文・團線 高台外) 二重團線 見込み) 團線・帆船 高台内) 「十」	透明釉は貢入がある。乳 須は青灰色に発色。内底に目 痕3足。	能茶山窯 1830-1860年代 「サ」路あり。
326	TP2 瓦器2	磁器 染付	小碗 半筒形	8.2	6.2	4.1	—	外) 白 断) 白	外) 二重團線・算木本 外底) 磨化した底・薄継 高台外) 二重團線 口縁内) 丸文・團線・團線 見込み) 二重團線・團線		肥前窯
327	TP2 瓦器2	磁器 染付	小碗 丸形	9.7	4.8	4.2	—	外) 灰白10Y8/1 断) 灰白N8/	外) コンニャク印押に よる菊花文・團線 高台外) 团線	乳須は暗オリーブ灰色に發 色。	肥前窯 17世紀末~18世紀 前半

Tab. 14 遺物観察表 (陶磁器・土器・その他)

国版 番号	出土 地点	種類	器形	法量 (cm)			色調	文様・繪葉	特徴 (成形・調整・釉調性)	備考 (生産地・生産年代・ 鉢・使用遺物)	
				口径	器高	底径					
328	TP2 瓦罈2	青花	小碗 端反形	9.4	5.1	4.7	—	外) 白 内) 白	外) 圓線・二重圓線 高台外) 二重圓線 口縁内) 帯縁に唐草か 見込み) 二重圓線	口縁端部の釉が虫食い状に 剥がれる。	中国景德鎮窯系 17世紀前業～中業 二次被熱により釉 は変質。
329	TP2 瓦罈2	磁器 染付	小杯 丸形	7.4	3.0	2.6	—	外) 白 内) 白	外) 福寿		肥前産
330	TP2 瓦罈2	磁器 染付	小皿	10.2	2.1	5.7	—	外) 白 内) 白	外) 意頭連続唐草文・ 圓線 高台外) 二重圓線 内) 花唐草文・凱暉 高台内) 圓線・変形字跡	口縁部棱花形。口縁端部に 乳頭。	肥前産
331	TP2 瓦罈2	磁器 染付	無小皿 変形形	—	2.0	—	—	外) 白 内) 白	外) 唐草文か 内) 松葉文・コンニヤ タ印押による紅葉 高台内) 不明 口縁	糸切り細工。貼付高台。	肥前産
332	TP2 瓦罈2	磁器 染付	小皿 端反形	9.6	2.6	4.0	—	外) 白 内) 白	外) 花唐草文か 内) 帯縁と花唐草文。 区画間に草花文・雲芝 文 口縁端部に乳頭		肥前産
333	TP2 瓦罈2	磁器 染付	小皿	—	—	5.0	—	外) 白 内) 白	内) 銀杏合わせ	疊付に粗糸が付着。	肥前産 1630～1640年代
334	TP2 瓦罈2	磁器 染付	小皿	11.7	3.2	3.7	—	外) 底白10Y8/1 内) 底白IN8/	内) 暗化した文様	見込み蛇ノ目釉調ぎしアル ミニ紗を被布。高台内無釉。 透明釉は燒成不良気味で白 濁。	肥前 波佐見 18世紀
335	TP2 瓦罈2	磁器 染付	碗	笠部 径9.7	3.0	—	横み 径5.3	外) 明暦灰7.5GY8/1 内) 底白IN8/	外) 算本文 内) 丸文・圓線・二重 圓線 横み内) 雪輪	広東形碗の蓋。	肥前産 1780～1820年代
336	TP2 瓦罈2	磁器 染付	仏壇器	—	—	3.3	—	外) 白 内) 白	外) 半菊文か・圓線	外底無釉。	肥前産 1780～1860年代
337	TP2 瓦罈2	白磁	香炉	—	—	4.2	9.9	外) 底白5Y7/1 内) 底白IN8/		三足を貼付。内面と外底無 釉。白濁した釉。	肥前産
338	TP2 瓦罈2	磁器 染付	水滴	—	2.5	—	—	外) 白 内) 白	外) 型による陽刻文様	型押成形貼り合わせ。内面 ユビオサエ・ナヂ。	肥前産
339	TP2 瓦罈2	磁器 染付	水滴	—	—	—	—	外) 白 内) 白	宝船	型押成形貼り合わせ。内面 ユビオサエ・ナヂ。	肥前産 339～341無い又は 同一個体
340	TP2 瓦罈2	磁器 染付	水滴	—	—	—	—	外) 白 内) 白	宝船	型押成形貼り合わせ。内面 ユビオサエ・ナヂ。	肥前産 339～341無い又は 同一個体
341	TP2 瓦罈2	磁器 染付	水滴	—	3.6	—	—	外) 白 内) 白	宝船	型押成形貼り合わせ。六角 形の船の背面部分を張り合 わせる。内面ユビオサエ・ ナヂ。背面無釉。	肥前産 339～341無い又は 同一個体
342	TP2 瓦罈2	陶器	中碗 丸形	10.4	7.7	4.9	—	外) 底黄2.5Y7/2 内) 底黄2.5Y8/3	底釉	高台内に淡黄の鉢底。高台 無釉。釉は燒成不良気味で 白濁。	尾戸窯
343	TP2 瓦罈2	陶器	中碗 丸形	11.2	6.7	5.4	—	外) 浅黃10YR8/3 内) 底白10Y8/2	底釉・オリーブ褐色の釉	口縁内部外面にオリーブ褐 色の釉を2方向から斜め掛け る。高台無釉。灰釉は焼成 不良気味で白濁。	尾戸窯
344	TP2 瓦罈2	陶器	中碗 丸形	10.6	—	—	—	外) 底黄2.5Y7/2 内) 底白2.5Y8/2	底釉	外面下部に沈線。灰白色を 帯びる半透明の釉。脚部が 入る。	尾戸窯か
345	TP2 瓦罈2	陶器	中碗	7.7	7.1	5.0	—	外) 黑7.5YR2/1 内) 飛躍	外面上半と内面に黒色の釉。 外面下部の露胎部に飛躍。	外底に墨書き。	
346	TP2 瓦罈2	陶器	中碗 丸形	10.4	—	—	—	外) 底黄2.5Y7/2 内) 底E2.5Y7/1	外) 鉄絵による松葉・ 梅・ 底釉	外面中位に凸線。灰白色を 帯びる透明の釉。	尾戸窯
347	TP2 瓦罈2	陶器 色絵	中碗	9.2	—	—	—	外) 底白5Y8/2 内) 底白5Y7/1	外) 赤その他の上絵付 による蟹手文 底釉	灰白色を帯びる半透明の釉。 京都又は京都系	
348	TP2 瓦罈2	陶器 色絵	小碗 半球形	—	—	2.6	—	外) 底黄2.5Y7/2 内) 底黄2.5Y8/2	外) 赤その他の上絵付 による草花文 底釉	高台無釉。	京都・信楽系 18世紀第2・349年 期
349	TP2 瓦罈2	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 底白5Y7/1 内) 底白5Y7/1	外) 鉄絵による宝文 底釉	灰白色を帯びる半透明の釉。 鉄絵は暗灰褐色に発色。	尾戸窯
350	TP2 瓦罈2	陶器 色絵	小杯 丸形	5.8	—	—	—	外) 底白5Y7/1 内) 底白IN8/	外) 上絵付による植物 底釉	高台無釉。	京都・信楽系 二次被熱により色 絵は変色。

Tab. 15 遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

国版 番号	出土 地点	種類	器形 器型	法量 (cm)			色調	文様・繪葉	特徴 (成形・調整・釉調査)	備考 (生産地・生産年代・ 鉢・使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
351	TP2 瓦瀬2	陶器	小碗	—	—	24	—	外) 灰白25Y8/2 内) 灰白25Y8/2	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	京都・信楽系
352	TP2 瓦瀬2	陶器	皿又は 鉢	—	—	—	—	外) 灰白7Y8/1 内) 灰白25Y8/2	灰釉	外底施釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	美濃 志野焼
353	TP2 瓦瀬2	陶器	不明	—	—	—	—	外) 灰5Y7/1 内) 灰25Y7/1	灰釉	多角形。内面施釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
354	TP2 瓦瀬2	陶器	小皿 彫反形	9.2	31	37	—	外) 灰白25Y8/2 内) 灰白25Y8/1	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。内底に日食さ足。	尾戸窯
355	TP2 瓦瀬2	陶器	蓋	笠部 径 10.8	20	—	—	外) 灰5Y7/1 内) 灰125Y7/1	灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯 二次被熱により釉は変質。
356	TP2 瓦瀬2	陶器	蓋物蓋	笠部 径 6.0	11	かえり 径 4.6	—	外) 灰白5Y7/1 内) 灰5Y8/1	灰釉	内面とかえり無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	京都・信楽系
357	TP2 瓦瀬2	陶器	土瓶 又は 急須蓋	笠部 径 5.8	26	かえり 径 3.4	—	外) 浅黄25Y7/3 内) 浅黄25Y8/3	外) 鉄釉の掛け分け 灰釉	内面とかえり無釉。浅黄色を帯びる半透明の釉。	
358	TP2 瓦瀬2	陶器	土瓶 又は 急須蓋	笠部 径 7.2	16	22	—	外) 淡黄25Y8/3 内) 鉄絵・緑釉による文様 白化粧土・灰釉	外) 鉄絵による草花文 内) 灰釉	内面無釉。底部回転糸切り。	
359	TP2 瓦瀬2	陶器	銚水入 れか	—	35	—	—	外) 灰リーフ5Y6/2 内) 灰白25Y7/1	灰釉	内面クロ口目。内面施釉。 外底無釉。灰リーフ色を帯びる透明の釉。	尾戸窯
360	TP2 瓦瀬2	陶器	深鉢	—	—	—	—	外) 灰5Y1 内) 黄25Y6/1	焼締め	輪高台を貼付し回転ナデ。 体部外縁に外底回転ケズり。 内面から内底にかけて横目。	備前
361	TP2 瓦瀬2	陶器	土瓶	—	—	4.0	87	外) 灰白5Y7/2 内) 灰5Y7/1	灰釉	三足を貼付。内面と外面下 半無釉。灰白色を帯びる半 透明の釉。	外底に焦げ。
362	TP2 瓦瀬2	陶器	土瓶 又は 急須	—	—	6.2	—	外) 灰白25Y8/2 内) 灰10Y8R2/2 内) 灰25Y8/2	灰釉	内面施釉。外底無釉。内面 に灰白色を帯びる半透明の 釉。	外底に墨書き。
363	TP1-2 瓦瀬1 瓦瀬2	陶器	花生か	10.0	—	—	—	外) 灰15Y8/2 内) 灰75Y4R4/3 内) にぶい橙 75YR7/3	白化粧土・緑釉・灰釉・ 鉄釉	内面クロ口目。外面と口縁 部内面に白化粧後灰釉。体 部内面に鉄釉。口縁部外 面に緑釉を流し掛け。	
364	TP2 瓦瀬2	陶器	火入 又は 香呑	11.2	6.9	7.1	—	外) 黒10Y8R2/3 内) 灰25Y8/1	鉄釉	手捏による4足を貼付。 内面と外側下位無釉。黒褐 色の釉。	外底と内底に墨書き。 口縁部に敲打痕。
365	TP2 瓦瀬2	陶器	灯明 受皿	10.8	1.9	4.0	—	外) 灰8Y4R4/2 内) 灰10YR7/1	鉄釉	口縁部外側回転ナデ。以下 は回転ケズり。内面と口縁 部外縁に鉄釉を網毛塗り。	備前 口縁部にタール状の焦げ。
366	TP2 瓦瀬2	陶器	灯明 受皿	8.2	0.8	5.4	—	外) にぶい赤褐 25YR5/4 内) にぶい赤褐 25YR4/3 内) にぶい赤褐 25YR5/4	鉄釉	油渋半月状・外側回転ケ ズリ。内面に網刷。	
367	TP2 瓦瀬2	陶器	灯明 受皿 台付き	6.8	4.9	4.1	—	外) 灰10YR4/4 内) 灰7.5YR4/2	鉄釉	外底回転糸切り。外底無釉。 褐色の釉。	尾戸窯又は龍茶山 窯
368	TP2 瓦瀬2	陶器	鉢猪口	5.0	2.9	4.4	—	外) にぶい黄澄 10YR7/3 内) 浅黄澄10YR8/3	灰釉	外底回転糸切り。外底無釉。 にぶい黄澄を帯びる半透明 の釉。	
369	TP2 瓦瀬2	陶器	鉢猪口	6.2	1.4	5.8	—	外) にぶい黄澄 10YR7/3 内) 浅黄澄10YR8/3	灰釉	把手は不明。外底回転ケ ズリ。外底無釉。にぶい黄澄 色を帯びる透明の釉。御本 が入る。	尾戸窯か
370	TP2 瓦瀬2	陶器	植木鉢	—	—	9.4	—	外) 浅黄5Y7/3 内) 灰白25Y8/1	灰釉	底部に径3cmの円孔。高 台の2箇所にアーチ状の抜 き。内外側回転ナデ。内面 クロ口目。内面と高台無釉。 浅黄色を帯びる透明の釉。	濃口・美濃
371	TP2 瓦瀬2	土師質 土器	小皿	7.6	0.9	4.6	—	にぶい橙75YR7/3	—	内外側回転ナデ。外底回転 糸切り。	口縁部にタール状の 焦げ。
372	TP2 瓦瀬2	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	—	—	灰白10YR8/2	内) 型による高砂文	内底型による陽刻文様。外 底直線方角のナデ。	尾戸窯
373	TP2 瓦瀬2	土師質 土器	中皿	16.6	4.1	9.3	—	にぶい橙5YR7/4	—	外面上半回転ナデ。下半回 転ケズリ。内面回転ナデ。 外底回転ケズリ後ナデ。	培燒として使用。 外面に墨書き。内底と 口縁部外縁に焦げ。
374	TP2 瓦瀬2	土師質 土器	中皿	—	—	8.3	—	鶴灰10YR4/1	—	内外面回転ナデ。内底に溝 状のクロ口目。外底回転糸 切り。	

Tab. 16 遺物観察表 (陶磁器・土器・その他)

国版 番号	出土 地点	種類	器形	法量 (cm)			色調	文様・繪葉	特徴 (成形・調整・釉調性)	備考 (生産地・生産年代・ 使用者)	
				口径	器高	底径					
375	TP2 瓦部2	施釉土器	ひょうそく	38	17	27	—	外) 桜5YR6/6 内) 明治5YR5/6 無) 不明	褐色の低火度釉	型押成形。帯状の花芯立てを貼付。径3mmの円孔あり。 外面と外底チザレ目・ナデ。外面無釉。	
376	TP2 瓦部2	土師質 土器	人形	—	—	—	—	にふい黄澄10YR7/3	馬	型押成形貼り合わせ。内面 ユビオサエ。接合部に剥離。	
377	TP2 瓦部2	土師質 土器	從切 丸形	257	—	—	—	にふい桜7YR7/3		窓は不明。外面ナデ。内面 ユビオサエ・回転ナデ。	
378	TP2 瓦部2	土師質 土器	從切 丸形	—	—	26.0	—	外) にふい黄澄 10YR7/3 無) にふい黄澄 10YR7/3・褐灰 10YR5/1		体部中位に凹孔。窓は不明。 貼付高台、高台にアーチ状 の抉りあり。体部外側ナデ・ ミガキ、内面ヨコナデ、外 底ナデ。高台内外面回転ナ デ。	
379	TP2 瓦部2	土師質 土器	火鉢 又は 壺	—	—	—	—	にふい黄澄10YR6/4	八角形か 外) 型による点・ヘラ による沈澱	外面チザレ目・ナデ。内面 ヨコナデ。胎土中に金雲母 を含む。	関西産 内面に焦げと粒状 の渦み。
426	TP3 瓦部3	磁器 染付	小杯	—	—	18	—	9% 白 無) 白	外) 鮎唐草文		肥前産
427	TP3 瓦部3	磁器 染付	鏡子	115	—	—	—	9% 黄白5Y8/1 無) 黄5IN8/	外) 鮎唐草文	把手は剥離。把手接合部 下に注10の穴あり。内面釉 軸。	肥前産 次被熱により釉 は変質。
428	TP3 瓦部3	陶器	中碗 広葉形	—	—	6.0	—	外) 灰白5Y7/2 無) 灰白5Y7/1	灰釉	高台内無釉。高台外側まで 施釉。灰白色を帯びる半透 明の釉。内底に日焼け(足)。	尾戸窯
429	TP3 瓦部3	陶器	小碗	87	—	—	—	9% 灰5Y7/2 無) 灰5Y7/1	灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
430	TP3 瓦部3	陶器	小碗 半球形	87	—	—	—	9% 灰5Y8/2 無) 灰白5Y8/1	灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉。 文様の有無は不明。	京都・信楽系 18世紀第2・3四半期
431	TP3 瓦部3	陶器	仏腹器	77	49	38	—	9% 灰10YR7/1 にふい桜 75YR7/3・灰白 10YR6/1	灰釉	灰白色の白濁した釉。	
432	TP3 瓦部3	陶器	瓶	41	—	—	—	9% 灰2.5YR4/2 無) 褐灰10YR6/1	鉄釉	内外面ロクロ目。内面無釉。 灰赤色の釉。口縁部に自然 釉が附かる。	肥前
433	TP3 瓦部3	陶器	瓶	—	—	102	—	外) 黑5YR2/2 無) 黑2.5Y6/1	鉄釉	内面ロクロ目。内面無釉。 外底の釉は拭き取り。黒褐 色の釉。	
434	TP3 瓦部3	陶器	擂鉢	—	—	5.6	—	9% 黑2.5Y3/1 無) 黑2.5Y3/1	焼締め	内面に鶴目・外面と外底回 転ケズリ後ナデ。	
435	TP3 瓦部3	陶器	ミニ チュア 水注	1.8	—	—	—	外) 黑5Y8/1 内) 浅模10YR8/3 無) 浅模10YR8/3	白化粧土・綠釉・透明 釉	外面白化粧の後、綠釉を部 分的に流し掛け。内底無釉。	
436	TP3 瓦部3	土師質 土器	鉢	172	50	92	—	標5YR6/6		内外面回転ナデ。外面下半 回転ケズリ。外底ナデ。	外面に強い堀。内 底に焦げ。
437	TP3 瓦部3	土師質 土器	埴	302	—	—	—	外) にふい黄澄 10YR6/3 無) にふい桜 75YR7/4		口縁部内外面回転ナデ。外 底に凹凸。胎土中に金雲母 を含む。	関西産 口縫部外縁に堀。内底に焦げ。
438	TP3 瓦部3	施釉 土器	ひょうそく	4.6	18	30	—	9% 浅模10YR8/3 内) 桜7.5YR6/6 無) 灰白2.5Y8/2	褐色の低火度釉	型押成形。帯状の花芯立て を貼付。外面チザレ目・ナ デ。外面無釉。	打芯立ての周囲に 焦げ。
439	TP3 瓦部3	土師質 土器	人形	—	—	—	—	灰白10YR8/2	人物か	型押成形前貼り合わせ。 中空。内面ユビオサエ。内 外面にキラ粉。	
440	TP4 瓦部4	磁器 染付	中碗 端反形	100	6.1	40	—	外) 灰白10Y8/1 無) 灰白N8/	外) 略化した雷文帶か 丸文・草花文・團織 高台外) 二重團織 口縫内) 略化した雷文 帶か見込み) 団織		肥前産又は肥前系 1830年代～1860年 代
441	TP4 瓦部4	磁器 染付	中碗 端反形	11.0	—	—	—	外) 灰白5Y8/1 無) 灰白5Y8/1	外) 团織に雲気・区画 間に星・松・梅 口縫内) 团織に雲気	透明釉は貰入が入る。	肥前産又は肥前系 40・441組か
442	TP4 瓦部4	磁器 染付	中碗 端反形	10.2	6.0	39	—	外) 白 無) 白	外) 花唐草文・團織 高台外) 团織 口縫内) 二重團織 見込み) 团織・草花文		尾戸・美濃 19世紀前半～1860 年代
443	TP4 瓦部4	磁器 色絵	小杯	8.1	3.7	33	—	外) 白 無) 白	内) 赤・緑・黒の上絵付 によるめの楕文・文字 外) 赤の上絵付による 文字	見込み釉剥ぎ。	肥前産

Tab. 17 遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

団版 番号	出土 地点	種類	器形	法量 (cm)				色調	文様・繪葉	特徴 (成形・調整・釉調査)	備考 (生産地・生産年代・ 鉢・使用痕)
				口径	器高	底径	最大径				
444	TP4 瓦闌4	磁器 染付	小瓶 錐形	—	—	31	44	外) 灰白N8/ 断) 白	外) 帽唐草文・若松・ 草・團線 高台外) 團線	内面無釉。	肥前產
445	TP4 瓦闌4	陶器	中碗 丸形	99	—	—	—	外) 灰黄25Y7/2 断) 灰白10YR7/1	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる 透明の釉。	尾戸窯
446	TP4 瓦闌4	陶器	中碗	—	—	53	—	外) 黑25Y2/1 断) 灰白25Y8/2	鐵釉	高台内に墨状の鉄痕。高台 無釉。黒色の釉。	
447	TP4 瓦闌4	陶器	小碗	—	—	33	—	外) 灰黄25Y7/2 断) にぶい黄橙 10YR7/2	灰釉	外面下位に無い斑痕が残る。 高台無釉。灰白色を帯びる 半透明の釉。	尾戸窯
448	TP4 瓦闌4	陶器	小皿	82	20	43	—	外) 灰(25Y8/1 断) にぶい黄橙 10YR7/3	灰釉	ロクロ成形の後口縁部の數 箇所を押して輪花形に成形。 高台無釉。釉は焼成不良で 白濁。	尾戸窯
449	TP4 瓦闌4	陶器	小皿 丸形	124	41	55	—	外) 銀褐75YR3/4 断) 黄灰25Y5/1	鐵釉・白土	見込み鉢ノ目銀剥ぎし白土 を崩毛彫り。外面上位に沈 線。外端下半無釉。暗褐色 の釉。	能奈山窯
450	TP4 瓦闌4	陶器	灯明 受皿	95	12	42	—	外) 灰褐75YR5/2 内) 灰褐10YR5/2 断) 灰白10YR6/1	鐵釉	外面上位回転ナデ。外端下 位と外底回転ケズリ。外端 無釉。	備前
451	TP4 瓦闌4	陶器	灯明 受皿	90	14	38	—	外) 青灰10B5/4 内) 青灰10B4/4 断) 灰2.5YR5/2	鐵釉	外面回転ケズリ。内面回転 ナデ。外端無釉。	備前
452	TP4 瓦闌4	陶器	不明	—	—	—	—	外) オリーブ5Y5/4 断) 淡黄25Y8/3	灰釉・白土	内面ロクロ日。外面にヘラ 彫りによる破缺。手捏ねに よる崩れの痕跡。跡跡はヘ ラで底部に押さ部分的に白 土を施す。内面無釉。オリ ーブ色の釉。	
453	TP4 瓦闌4	陶器	土瓶蓋	笠部 径7.5	31	かえり 径5.2	摘み 径1.5	外) にぶい黄25Y6/3 断) 黄灰25Y7/2	外) 貼付による樹文 灰釉	灰白色土の製作による樹 文貼付。内面にかえり 無釉。にぶい黄色を帯び る透明の釉。	
454	TP4 瓦闌4	陶器	土瓶蓋	笠部 径5.4	25	かえり 径3.4	摘み 径0.8	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	灰釉	内面とかえり無釉。灰白色 の釉。	
455	TP4 瓦闌4	陶器	鳥の水 入れ 横円形	—	38	—	—	外) にぶい黄 10YR6/3 断) にぶい黄 10YR7/2	灰釉	内外面ロクロ日。底部貼り 合わせ。外底布目。内面施 釉。外底無釉。にぶい黄銀 色を帯びる透明の釉。	尾戸窯又は能奈山 窯か
456	TP4 瓦闌4	土師質 土器	小皿	65	11	47	—	にぶい黄 10YR6/3		内外面回転ナデ。外底回転 糸切り。	
457	TP4 瓦闌4	土師質 土器	從切 丸形	—	—	19.8	—	外) にぶい黄 75YR6/4 断) にぶい黄 10YR7/2		貼付高台。高台外面下位に 設。高台アーチ状の抉り と円孔あり。体部外回転ナデ ・ミガキ。内面回転ナデ。外 底ナデ。	
458	TP4 瓦闌4	土師質 土器	從切 筒形	—	—	113	—	外) にぶい黄 75YR6/4 断) にぶい黄 10YR7/2		体部前方下位に横円形の 内面下位に段をもつ。三足 を貼付。体部内外面と外底 ナデ。	
459	TP4 瓦闌4	土師質 土器	從切 筒形	—	—	10.5	—	外) にぶい黄 75YR7/4 断) にぶい黄 10YR7/3		体部前方下位に横円形の 内面下位に段をもつ。三足 を貼付。体部内外面と外底 ナデ。	
463	TP4 瓦闌4	瓦質 土器	從切 筒形	—	—	—	—	外) 黑5Y2/1 断) 黄灰10YR6/2		内部施設をもつ。内部施設 の接合部付近に粘土絆を光 顯しユビオサエ。体部外回 転ナデ・ミガキ。内面タケハ。	口縁部内面に焦げ。
478	TP5 瓦闌5	磁器 染付	瓶又は 壺口	104	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 花唐草文・鳥・蓮 舟文 口硝内) 四方擗 見込み	團線か	肥前產
479	TP5 瓦闌5	磁器 染付	小杯 漏斗形	67	—	—	—	外) 灰白10Y8/1 断) 灰白N8/	外) 草花文・團線		肥前產
480	TP5 瓦闌5	白磁	紅皿 菊花形	4.4	14	12	—	外) 白 断) 白	外) 型による菊弁	型押成形。外端無釉。 外底にチザレ目。	肥前產 1780~1860年代
481	TP5 瓦闌5	磁器 染付	皿	—	—	—	—	外) 白 断) 白	内) 鳥 高台内) 團線・角枠内 路		肥前產
482	TP5 瓦闌5	磁器 染付	香炉 又は 火入	114	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 二重團線・樹文 鉄釉	外面下半に鉄釉。内面無釉。	肥前產

Tab. 18 遺物觀察表（陶磁器・土器・その他）

国版 番号	出土 地点	種類	器形	法量 (cm)			色調	文様・繪葉	特徴 (成形・調整・釉焼館)	備考 (生産地・生産年代・ 鉢・使用箇所)		
				口径	器高	底径						
483	TP5 瓦罈5	磁器 染付	香炉 多角形	—	—	39	—	外) 灰白IN8/ 断) 灰IN8/	外) 帯に七宝彫ぎ・草 花文	三足を貼付。内面施釉。透 明釉は貫入が入る。	肥前產	
484	TP5 瓦罈5	磁器 染付	瓶 溜反 錐形	27	—	—	65	外) 灰白10Y8/1 断) 灰IN8/	外) 圖繪	内外面に優やかなロクロ目。 内面無釉。瓶頸は暗緑灰色 に発色。	肥前產	
485	TP5 瓦罈5	白磁	水滴	—	—	—	—	外) 白 断) 白	玄武	型押成形貼り合わせ。内面 エビオサエ。	肥前產	
486	TP5 瓦罈5	陶器	小碗 丸形	8.6	—	—	—	外) 明暦灰7.5YR7-1 断) 浅黄橙10YR8/3	灰釉	高台無釉。釉は焼成不良氣 味で白濁。	尾戸窯	
487	TP5 瓦罈5	陶器	中碗 大口形	—	—	—	—	外) 黒25Y2-1 断) 黒125Y8/1	黒釉	外面下位無釉。黒色の釉。	瀬戸・美濃	
488	TP5 瓦罈5	陶器	搖鉢	234	93	104	—	外) に伝灰・橙 25YR6-4 断) に伝い・橙 25YR6-4	焼締め・諸釉	口縁部外面に2条の四線。 体部外面にクロ目。外面下 位と外底回転ケズリ。内面 回転ナガ後輪目。口縁部外 面に諸釉。	備前	
489	TP5 瓦罈5	陶器	土瓶	6.6	—	—	100	外) 灰白5Y7-2 断) 灰白125Y8/2	外) 鉄絵・白土・具須に よる窓に富士・格子文 灰釉	注口部は不規。内面ロクロ 目。内面下位無釉。灰白色 を帯びる透明の釉。	関西系	
490	TP5 瓦罈5	陶器	土瓶 又は 急須蓋	笠部 径 6.4	14	25	—	摘み 径 1.0	外) 黒25Y7-2 断) 黒125Y7-1	外) 鉄絵による草文 白化粧土・灰釉	形2mmの円孔あり。外底回 転系切り。外面白化粧後灰 釉。外削無釉。	尾戸窯又は京都系
491	TP5 瓦罈5	陶器	蓋置	笠部 径 6.4	10	かえり 径 4.6	—	外) 灰白125Y8-2 断) 灰白125Y8-2	灰釉	内面無釉。灰白色を帯びる 透明の釉。	京都・信楽系	
492	TP5 瓦罈5	陶器	圓筒口1	5.0	29	4.3	—	外) に伝・黄橙 10YR7-3 断) 浅黄橙10YR8/3	灰釉	外底回転系切り。外底無釉。 灰白色を帯びる半透明の釉。		
493	TP5	土師質 土器	小皿	11.9	—	—	—	に伝・9.5YR7-4	—	外面と外底回転ケズリ後ナ ダ。内面コナダ。	尾戸窯	
494	TP5 瓦罈5	瓦質 土器	釜	—	—	—	—	跨部 径 241	外) 菊K3/ 断) 菊G1N7/	外) 型による菊花と流 水文	外面上半にによる陽刻文 様。外面上部にミガキ。内 面コナダ。	蜀の下面に焦げ。
495	TP6 瓦罈6	磁器 染付	小碗 半筒形	7.6	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 圖繪・略化した不 明2様 口縁内) 四方擗	—	肥前產 二次被熱により釉 は変質。	
496	TP6 瓦罈6	磁器 染付	中碗 丸形	—	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 文字 口縁内) 四方擗	望料碗か。	肥前產 18世紀後半 二次被熱により釉 は変質。	
497	TP6 瓦罈6	青花	皿	—	—	—	—	外) 明暦灰7.5YR8/1 断) 白	内) 玉取獅子文か	外底に粗砂が付着。	中国 景德鎮窯系 16世紀	
498	TP6 瓦罈6	磁器 染付	碗蓋	笠部 径 9.0	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 手文 描み外) 二重圖線 内) 圖繪	廣東形碗の蓋。	肥前產 1780~1860年代	
499	TP6 瓦罈6	磁器 染付	碗蓋	—	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 文字・区画間に山 水文か 内) 四方擗・二重圖線	望料碗の蓋。	肥前產 18世紀後半 二次被熱により釉 は変質。	
500	TP6 瓦罈6	磁器 染付	小瓶	1.7	—	—	—	外) 灰白IN8/ 断) 灰IN8/	外) 不明	内面無釉。具須は青灰色に 発色。	肥前產	
501	TP6 瓦罈6	磁器 染付	瓶	—	—	8.4	—	外) E5GY8/1 断) 灰IN8/	外) 草花文か	内面ロクロ目。内面無釉。	肥前產	
502	TP6 瓦罈6	磁器 色絵	不明	—	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 赤・緑・黒の上絵 付による丸に花卉	内面無釉。	肥前產	
503	TP6 瓦罈6	陶器	中碗	—	—	38	—	外) 灰黄25Y6-2 断) 灰白25Y7/1	灰釉	高台内無釉。灰黄色を帯び る透明の釉。御本が入る。	尾戸窯	
504	TP6 瓦罈6	陶器	中碗	—	—	4.0	—	外) 灰125Y7/1 断) 灰白10YR7/1	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる 半透明の釉。	尾戸窯	
505	TP6 瓦罈6	陶器	碗	—	—	—	—	外) 白	外) 白象嵌による圖繪	灰白色を帯びる透明の釉。 御本が入る。	尾戸窯	
506	TP6 瓦罈6	陶器	碗又は 鉢	11.7	—	—	—	外) 灰黄25Y7/2 断) 灰白25Y8/1	灰釉	ロクロ成形の後、中位を押 して深ませる。灰黄色を帯 びる透明の釉。	尾戸窯	
507	TP6 瓦罈6	陶器	中碗 大口形 か	—	—	4.2	—	外) 黒10YR2-1 断) 灰白10YR8/1	鉄釉	外面下位無釉。黒色の釉。	瀬戸・美濃 17世紀	
508	TP6 瓦罈6	陶器	圓筒口 か	6.0	14	5.8	—	外) 黃5Y6-1 断) 灰白10YR7/1	灰釉	外底回転系切り。外底無釉。	尾戸窯か	
509	TP6 瓦罈6	土師質 土器	白土器 小皿	11.6	17	8.0	—	灰白10YR8/1	内) 型による寿字文	内底にはによる陽刻文様。 外 面ヨコナダ。内面周縁回転 ナダ。内底直線方向のナダ。	尾戸窯	

Tab. 19 遺物觀察表 (陶磁器・土器・その他)

器版 番号	出土 地点	種類	器形	法量 (cm)				色調	文様・繪葉	特徴 (成形・調整・釉調査)	備考 (生産地・生産年代・ 鉢・使用痕)
				口径	器高	底径	最大径				
510	TP6 瓦部6	土師質 土器	白土器 小皿	—	18	—	—	灰白10YR8/1		外面ヨコナデ。内面周縁回転ナデ。内底直線方向のナデ。	尾戸窯
511	TP6 瓦部6	土師質 土器	小皿	7.1	11	3.6	—	にふい・粗7.5YR7/4		外表面回転ナデ。外底回転系り。	口縁部に灯芯油痕。
518	TP2 II層	磁器 染付 又は 白磁	小皿	—	—	4.2	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 底IN8/		透明釉は明緑灰色を帯び粗い貫入が入る。盤付に粗砂が付着。内底に灰色の跡目。	肥前産 1610~1620年代
519	TP2 II層	陶器 色絵	小杯 丸形	5.8	3.1	1.9	—	外) 灰白5Y7/1 断) 底G25Y7/1	外) 上絵付による筆文 灰釉	高台無輪。上絵付の色は変色し不明。	京都 第二次被熱により釉は変質。
520	TP5 II層	陶器	灯明 受皿	11.3	21	5.0	—	外) 灰7.5YR4/2 断) 灰7.5YR5/2	粗釉	外面上半回転ナデ。外面下半回転ケズリ。内面回転ナデ。内底ナデ。内面と口縁部外側に鉢輪。	備前
521	TP2 II層	陶器	灯明 受皿	10.6	—	—	—	外) 灰7.5YR5/2 断) にふい・褐 7.5YR6/3	粗釉	外面上半回転ナデ。外面下半回転ケズリ。内面回転ナデ。内底ナデ。内面と口縁部外側に鉢輪。	備前 外面に煤。
522	TP2 II層	陶器	灯明 受皿	10.0	—	—	—	外) 灰褐5YR4/2 断) 褐7.5YR5/1	粗釉	外面上半回転ナデ。外面下半回転ケズリ。内面回転ナデ。内底ナデ。内面と口縁部外側に鉢輪。	備前 外面に煤。
523	TP2 II層	陶器	灯明 受皿	8.6	—	—	—	外) にふい赤褐 SYR5/3 断) にふい・褐 SYR6/3	粗釉	外面上半回転ナデ。外面下半回転ケズリ。内面回転ナデ。内底ナデ。内面と口縁部外側に鉢輪。	備前 口縁部外側にタール状の焦げ。
524	TP2 II層	土師質 土器	焰壺	17.2	—	—	—	外) 灰黄褐10YR5/2 断) 明緑灰7.5YR7/2		外表面回転ナデ。	外表面に煤・焦げ。
525	TP1 瓦質	瓦質 土器	燒切 箱形	—	—	—	—	外) 黑 断) にふい・褐 7.5YR6/3		外表面ナデミガキ。上部内面に粘土を充填しユビオサ。	上面に丸印「八」 路印あり。
526	TP2 II層	施釉 土器	ひょう そく	4.6	1.9	3.0	—	外) 浅黄褐10YR8/3 内) 浅2.5Y7/4 断) 浅黄褐10YR8/3	にふい・黄色の低火度釉	型壓成形。外面ナデレ日。内面ナデ。外面無輪。内面ににふい・黄色を帯びる透明の釉。	灯芯立ての周囲に タール状の焦げ。
531	TP2 III-2層	磁器 染付	中碗 丸形	10.8	5.3	3.8	—	外) 白 断) 白	外) 草花文・二重團綴 高台外) 二重團綴 高台内) 団綴・不明		肥前産 17世紀後半
532	TP3 III層	磁器 染付	中碗 丸形	11.3	5.5	4.1	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 雲・二重團綴 高台外) 二重團綴 口縁内) 团綴 見込み) 二重團綴・不 明		肥前産 1650~1670年代
533	TP3 III層	磁器 染付	中碗 丸形	10.4	—	—	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 山水文・二重團綴		肥前産 17世紀
534	TP3 III-下層	磁器 染付	中碗 丸形	10.3	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 山水文		肥前産
535	TP3 III-下層	磁器 染付	中碗	11.2	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 雲・二重團綴		肥前産
536	TP3 III-下層	磁器 染付	碗	—	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 梅花文		肥前産 17世紀前半
537	TP3 III層	磁器 染付	小碗 丸形	7.7	—	—	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 白	外) 不明・團綴		肥前産
538	TP2 III-1層	青磁	中碗	—	—	—	—	外) 明緑灰10GY8/1 断) 白	青磁釉	高台内無輪。高台外側まで施釉。明緑灰色の釉。	肥前産 1630~1650年代
539	TP3 III-下層	磁器 珊瑚釉	碗か	—	—	—	—	外) 珊瑚釉	外面に柑色の釉。		肥前産 1630~1650年代
540	TP3 III-下層	磁器 色絵 染付	碗	—	—	4.0	—	外) 白 断) 白	外) 團綴・上絵付による 文様 高台外) 二重團綴 見込み) 二重團綴・上 絵付による花卉草文 高台内) 团綴・上絵付 による「福」	上絵付の色は剥離し不明。	肥前産
541	TP1 III-上層	磁器 染付	小皿	—	—	4.3	—	外) 明緑灰10GY8/1 断) 白	内) 植物か	乳頭は青灰色に発色。盤付に灰白色の粗砂が付着。	肥前産 17世紀前半
542	TP2 III-2層	磁器 染付	五寸皿 丸形	13.4	2.8	5.8	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 白	口縁外) 團綴 内) 拉文		肥前産 1630~1650年代

Tab. 20 遺物観察表(陶磁器・土器・その他)

国版 番号	出土 地点	種類	器形	法量(cm)				色調	文様・繪葉	特徴 (成形・調整・釉調)	備考 (生産地・生産年代・ 鉢・使用歴他)
				口径	器高	底径	最大径				
543	TP2 Ⅲ-2層	磁器 染付	五寸皿 折線形	15.0	—	—	—	外) 灰白25Y8/1 内) 白	燒成不良で透明釉は白濁す る。	肥前産 1630~1650年代	
544	TP2 Ⅲ-1層	磁器 染付	小皿	—	—	3.1	—	外) 灰白10Y8/1 内) 白	内) 不明	蛇ノ目高台。高台内兜巾状。	肥前産 1640~1650年代
545	TP1 Ⅲ-上層	磁器 染付	小皿	—	—	9.0	—	外) 白 内) 白	外) 花唐草文 高台外) 二重圓錐 内) 不明 高台内) 圖線・「□・ □製」		肥前産 17世紀後半
546	TP2 Ⅲ-1- 2層	磁器 色絵	皿 変形形	—	29	7.6	—	外) 白 内) 白	外) 赤の上絵付と舟彌 による梅文 高台外) 勾葉文 内) 赤・緑・黒その他の 上絵付による桐文 高台内) 角棒内変形字 鉢	絵付に粗糲が付着。	肥前産 17世紀後半
547	TP3 Ⅲ-下層	磁器 染付か	中皿	—	—	12.4	—	外) 明暦灰75GY8/1 内) 灰EN8*		文様の有無は不明。外面下 位に放射状の痕跡が残る。 透明釉は粗い貫入が入る。	肥前産
548	TP1 Ⅲ-上層	磁器 染付	大皿 丸形	35.6	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 山 内) 太湖岩・植物・團 綱		肥前産
549	TP3 Ⅲ層	釉裏紅	小皿	—	—	6.4	—	外) 灰白10Y7/1 内) 灰白N8/	内) 繻縞による不明文 様	文様は黒褐色に発色。	肥前産 1630~1640年代
550	TP2 Ⅲ- 2層	青磁	五寸皿	13.4	2.9	4.6	—	外) 明暦灰75GY7/1 内) 灰白N8/		見込み蛇ノ目輪割ぎ。高台 無釉。明暦灰色を帯びる半 透明の釉。	肥前 波佐見 18世紀
551	TP3 Ⅲ-下層	青磁	中皿	18.4	—	—	—	外) 明暦灰10GY7/1 内) 灰白N8/	内) 片切彫りによる文 様		肥前 波佐見 17世紀
552	TP3 Ⅲ-下層	青花	碗	—	—	4.4	—	外) 灰白10Y8/1 内) 灰白N8/	高台に灰白色の粗糾が付着。 舟彌は暗青灰色に発色。	中国 潮州窯系 16世紀末~17世紀 初頭	
553	TP2 Ⅲ- 2層	青花	皿	—	—	6.6	—	外) 灰黄25Y6/2 内) 灰白25Y7/1		絵付と外底に灰白色的粗糾 が付着。	中国 潮州窯系 16世紀末~17世紀 初頭
554	TP3 Ⅲ-上層	青花 又は 染付	皿	—	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 不明 内) 不明		中国又は肥前
555	TP3 Ⅲ-下層	青花	皿	—	—	—	—	外) 灰白10Y8/1 内) 灰白N8/	内) 青海波文 外) 團綱・不明	舟彌は暗青灰色に発色。	中国 潮州窯系 16世紀末~17世紀 初頭
556	TP2 Ⅲ-層	陶器	中碗 丸形	12.0	—	—	—	外) に伝・黄橙 10YR7/2 内) 灰白10YR8/2	灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉。	尾山窯又は京都
557	TP2 Ⅲ- 2層	陶器	蓋か	—	—	—	—	外) 灰白25Y7/1 内) 灰白25Y7/1	外) 鉄絵・舟彌による 四方彫 灰釉	灰白色を帯びる透明の釉。	京都か
558	TP1 Ⅲ-上層	陶器	小皿	13.2	3.5	4.7	—	外) に伝・褐 75YR6/3 内) に伝・褐 75YR7/4	内) 鉄絵 灰釉	絵唐津。高台内兜巾状。外 面下位無釉。に伝い褐色を 帯びる半透明の釉。内底に 砂目痕。	肥前産 1610年代
559	TP2 Ⅲ- 2層	陶器	小皿	—	—	4.2	—	外) に伝い・黄橙 10YR7/3 内) に伝い・黄橙 10YR7/2	灰釉	街津系灰釉陶器。高台内兜 巾状。高台無釉。に伝い黃 褐色を帯びる半透明の釉。 内底に砂目。	肥前産 1610~1630年代
560	TP3 Ⅲ層	陶器	小皿	—	—	4.1	—	外) 灰E25Y8/2 内) に伝・褐 75YR7/3	灰釉	街津系灰釉陶器。外面口 クロロ。外面下位無釉。釉は 燒成不良で白濁。	肥前産 1590~1630年代
561	TP3 Ⅲ-下層	陶器	鉢 折線形	33.2	10.4	11.6	—	外) 灰黄25Y6/2 内) に伝・黄橙 10YR5/4 内) に伝・褐 75YR7/3 内) 灰白5YR6/4	灰釉	口縁部済絵状。内外面口 クロロ。外面上位無釉。釉は 燒成不良気味で白濁。内底 に砂目。	肥前産
562	TP3 Ⅲ-下層	陶器	皿	—	—	—	—	外) 灰黄25Y6/2 内) に伝・黄橙 10YR5/1 内) に伝・黄橙 10YR7/2	灰釉	街津系灰釉陶器。内底に段。 外面口クロロ。外面上位無 釉。灰黄色を帯びる半透明 の釉。内底に胎土目。	肥前産 1590~1610年代
563	TP2 Ⅲ- 4層	陶器	中皿	—	—	14.5	—	外) 灰白25Y7/1 内) 灰白25Y7/1	灰釉	高台施釉。灰白色を帯びる 半透明の釉。卵本が入る。	
564	TP1 Ⅲ-上層	陶器	中皿	29.8	—	—	—	外) 灰白75YR5/1 内) 灰白5YR4/2	内) 白化粧土刷毛目・ 絵 灰釉	二彩手。内面に白化粧土刷 毛目後絵めの流し掛け。外 面口クロロ。外面下位無釉。	肥前 武雄 17世紀~18世紀 前半

Tab. 21 遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

国版 番号	出土 地点	種類	種類 器形	法量 (cm)			色調	文様・繪葉	特徴 (成形・調整・釉調性)	備考 (生産地・生産年代・ 銘・使用歴)	
				口径	器高	底径					
565	TP3 Ⅲ層 下層	陶器	縦鉢	292	—	—	—	外) 灰赤25YR4/2 内) 灰白10YR7/1	燒締め	口縁部外側に2条の凹線。 体部内外面クロロ目。内面 中位以下に横目。口縁部外 面に自然釉。	備前 17世紀前半
566	TP1 Ⅲ層	陶器	縦鉢	306	—	—	—	外) にぶい赤褐 25YR5-4 内) にぶい赤褐 25YR5-4	燒締め・錯釉	口縁部外側に凹線。 体部外側クロロ目。内面回転ナグ 後焼目。口縁部外側に渦紋。	備前 17世紀後半
567	TP3 Ⅲ層	陶器	縦鉢	290	—	—	—	外) 灰赤10B5/2 内) 灰白IN7-	燒締め	口縁部外側に2条の凹線。 体部外側回転ナグ。内面回 転ナグ後焼目。口縁部外側下端 に別焼体1脚部の渦紋。	備前 17世紀後半
568	TP2 ¹ Ⅲ- 2層	陶器	瓶	—	—	—	—	外) 灰赤25YR4/2 にぶい黄橙10YR7/3 内) 灰白10YR7/1	燒締め	内外面クロロ目。外面に自 然釉。	備前 568・569同一個体 か
569	TP2 ¹ Ⅲ- 3層	陶器	瓶	—	—	—	—	外) 灰赤25YR4/2 にぶい黄橙10YR7/3 内) 灰白10YR7/1	燒締め	内外面クロロ目。外面に自 然釉が附かる。	備前 568・569同一個体 か
570	TP2 ¹ Ⅲ- 2層	土師質 土器	小皿	92	20	50	—	にぶい灰75YR7/4		内外面回転ナグ。外底回転 系切り。内面クロロ目。	
571	TP3 Ⅲ層	土師質 土器	小皿	86	23	38	—	にぶい黄橙10YR7/2		摩耗し調整不明。口縁部に 灯芯油痕。	
572	TP2 ¹ Ⅲ-1層	土師質 土器	小皿	141	—	—	—	棕5YR7-6		内外面回転ナグ。	
573	TP2 ¹ Ⅲ-2層	土師質 土器	小皿	67	16	40	—	棕5YR7-6		手捏ね成形。内外面ユビオ サエ・ナゲ。外底ユビオサ エ・ナゲ。	京都系
574	TP3 Ⅳ層	陶器	甕	—	—	—	—	外) 灰白IN7/ 内) 灰白25Y7/1	燒締め	外面に平行状のき口目。内 面に青海波状の圧痕。	
575	TP2 ¹ Ⅳ層	陶器 又は 粗陶	甕	—	—	—	—	外) 黄赤25Y6/1 内) 灰白IN7/		口縁部内外面回転ナグ。体 部内面に青海波状の圧痕。 外面に自然釉。	
576	TP3 Ⅳ層	土師質 土器	小皿	—	19	—	—	にぶい棕5YR6/4		手捏ね成形。内外面ユビオ サエ・ナゲ。	京都系
577	I 層	磁器 染付	中碗 圓筒形	—	—	—	—	外) 灰白10Y8/1 内) 灰白	外) 不明・二重圓襯		肥前 二次焼成により釉 は変質。
578	TP1 搅乱	磁器 染付	中碗	—	—	4.9	—	外) 灰白5GY8/1 内) 白	外) 不明・團練 高台外) 二重圓襯 見込み) 雲・團練 高台内) 角棒内) 茶		龍茶山窯 1820~1860年代 角棒内「茶」路あり。
579	TP2 ¹ 搅乱	磁器 染付	皿	—	—	9.2	—	外) 灰白5Y8/1 内) 白	内) 植物 高台内) 角棒内「茶山」 内) 竹文 鍋内) 角棒内「茶」 内) 四方棒・二重圓襯・ 松竹梅円形文	蛇ノ目凹形高台。透明釉 は貫入が入る。	龍茶山窯 1820~1860年代 角棒内「茶」路あり。
580	TP1 搅乱	磁器 染付	碗	豊部 往 9.0	29	—	横み 往 4.0	外) 白 内) 白	外) 竹文 鍋内) 角棒内「茶」 内) 四方棒・二重圓襯・ 松竹梅円形文		龍茶山窯 1820~1860年代 角棒内「茶」路あり。
581	TP1 搅乱	磁器 染付	五寸皿 丸形	132	33	78	—	外) 灰白5GY8/1 内) 白	外) 連續唐草文・團練 内) 雷文帶・丸に不規 文様	蛇ノ目凹形高台。	肥前産又は肥前系
582	TP2 ¹ 搅乱	磁器 染付	無小皿	62	11	3.6	—	外) 白 内) 白	外) 連續唐草文・團練 高台外) 团練 内) 集		肥前産
583	TP1 搅乱	青花	皿	17.0	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 團練 内) 花唐草文・團練	口縁部の釉が虫食い状に 剥がれる。	中国 景德鎮窯系 17世紀前業~中業
584	TP1 搅乱	五彩 又は 赤絵	皿	—	—	—	—	外) 灰白75Y8/1 内) 赤の上繪付による 花文	外底に灰白色の粗糲が付着。 外底に灰白色の粗糲が付着。		中国 景德鎮窯系 16世紀末~17世紀 初頭
585	TP4 ¹ 搅乱	磁器 染付	蓋物	80	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 植物・二重圓襯		肥前産
586	TP1 搅乱	陶器	小碗 半球形	—	—	30	—	外) 灰白10YR8/2 内) 灰白25Y8/2	灰釉	結は焼成不良気味で白濁。 高台無釉。	京都・信楽系 18世紀第2・3回半 期
587	搅乱	陶器	小碗	—	—	35	—	外) 灰白5Y8/1 内) 灰白5Y8/1	灰釉	外面下位に沈綻の段を多 段造らす。高台内に渦状の 泡模。高台無釉。灰白色を 帯びる透明の釉。	
588	TP4 ¹ 搅乱	陶器	不明	—	—	—	—	外) 灰白25Y8/2 内) 灰白10YR8/2	灰釉	内面クロロ目。外底回転ケ ズリ・外底無釉。灰白色を 帯びる半透明の釉。	外底に墨書き。

Tab. 22 遺物觀察表 (陶磁器・土器・その他)

国版 番号	出土 地点	種類	番種 器形	法量 (cm)				色調	文様・繪葉	特徴 (成形・調整・釉調館)	備考 (生産地・生産年代・ 鉢・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大径				
589	TP2 機乱	陶器	小壺	—	—	48	79	外) 灰白5Y7/1 内) 灰白25Y7/1	外) 長頸・鉄袖による 若松文 灰袖	鈎状の口縁を貼付。接合部 に滑目。内面施釉。外底無 釉。灰白色を帯びる半透明 の釉。	尾戸窯
590	TP1 機乱	陶器	急須	7.6	6.5	6.6	8.8	外) にい・黄褐 10YR5/3 内) 灰黄25Y6/2	外) 型による粒状の文 様 焼締め	注口部は欠損する。把手は 接合部で継ぎ。内面ユビオ ナード。口縁部外側面 に連続したユビオサエ。	
591	TP4 機乱	陶器	眞猪口	6.0	2.6	4.1	—	外) 灰5Y6/1 内) 灰白25Y7/1	灰袖	把手の有無は不明。外底回 転ケズリ。外底無釉。灰白 色を帯びる透明の釉。	尾戸窯
592	TP1 機乱	陶器	ミニ チュア 彌鉢	8.9	—	—	—	外) 赤褐色10R4/4 内) にい・赤褐色 25YR5/4	焼締め	内外面回転ナデ。体部内面 に滑目。	
593	TP1 機乱	陶器	ミニ チュア 鉢	6.6	—	—	—	外) 菊褐7.5YR3/4 内) にい・黄橙 10YR7/2	鉄袖	把手の有無は不明。外底下 位無釉。暗褐色の釉。	
594	TP1 機乱	土師質 土器	泥面子	—	全厚 0.5	径 2.2	—	標準5YR7/6	鳥	型押成形。上面に型による 陽刻文様。側面にチアレ日。 下面ナデ。	
595	TP1 機乱	瓦質 土器	便器 箱形	上部径 約 22.2	—	—	—	外) 黒 内) にい・墨 5YR6/4	—	外面ナデ・ミガキ。体部内 面タテハケ。上面内面に枯 土を充填しスピオサエ。	上面に丸内「八」 踏印あり。
599	TPI 石列1 石の間	磁器 染付	中碗 平形	12.8	4.7	4.6	—	外) 草花文 高台外) 圓錐 口縁内) 金珠鑲	外) 草花文 高台外) 圓錐 口縁内) 金珠鑲	酸化コバルトによる文様。 内底に目前5足。	肥前系 近代
600	TPI 石列1 石の間	磁器 染付	小皿	—	—	6.8	—	外) 不明 内) 海浜風景文	蛇ノ目凹形高台。	酸化コバルトによる文様。	肥前系 座鹿窯か 明治5~20年代
601	TPI 石列1 石の間	磁器 染付	小碗 平形	10.1	4.5	3.4	—	外) 白 内) 白	外) 型紙刷りによる松・ 人物・蓮弁文 高台外) 圓錐 内) 型紙刷りによる宝 珠鑲	酸化コバルトによる文様。	肥前系又は肥前系 明治10年代以降
602	TPI I層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.9	2.6	—	摘み 径 3.7	外) 白 内) 白	外) 型紙刷りによる花文 摘み外) 二重圓錐 内) 型紙刷りによる宝 珠鑲 摘み内) 圓錐・角付内路	酸化コバルトによる文様。	肥前系又は肥前系 明治10年代以降
603	TPI 石列1 石の間	磁器 染付	五寸皿	13.4	2.8	6.8	—	外) 白 内) 白	外) 圓錐・型紙刷りによ る流水・菊花・鳥 内) 型紙刷りによる半 菊文・菊花	口縁部波線状。蛇ノ目凹形 高台。酸化コバルトによる 文様。	肥前系又は肥前系 明治10年代以降
604	TPI 石列1 石の間	磁器 染付	五寸皿	13.1	3.8	8.0	—	外) 灰白25GY8/1 内) 灰白N8/	外) 型紙刷りによる草 花文 内) 型紙刷りによる花 唐草文・恋に草花・海 潮風景文・施と草花	口縁部輪花形。蛇ノ目凹形 高台。酸化コバルトによる 文様。	肥前系又は肥前系 明治10年代以降
605	TP1 I層	磁器 染付	段重	10.8	2.0	10.0	—	外) 白 内) 白	外) 型紙刷りによる唐 草文	内面施釉。口縁端部と口縁 部内面無釉。高台無釉。 酸化コバルトによる文様。	肥前系又は肥前系 明治10年代以降
606	TP1 SX8	磁器 染付	鉢	—	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 区画間に雲・花卉 内) 四方襷・菊花	酸化コバルトによる文様。	肥前系又は肥前系 近代
609	TP3 I層	磁器 色絵 染付	小杯	—	—	2.2	—	外) 白 内) 赤・金の上締付に よる旭日旗・文字 高台外) 柳葉文 高台内) 变形字跡	内) 赤・金の上締付に よる旭日旗・文字 高台外) 柳葉文 高台内) 变形字跡	—	肥前系
610	TP2 I層	陶器	彌鉢	14.6	—	—	—	外) 黑褐7.5YR3/2 内) 灰2.5YR5/2 内) 摘灰10YR5/1	鉄袖	体部外側ロクロ目。内面に 滑目。内面と外底下半無釉。	能茶山窯か 近代
611	TP2 I層	陶器 染付	土瓶	6.9	7.7	6.2	10.0	外) 白 内) にい・黄25Y6/3 内) 灰白25Y7/1	外) 酸化コバルトによ る略化した文様・圓錐 白化粧土・灰袖	外面白化粧後透明釉。内面 灰袖。受部と外側下位無釉。 三足無し。	近代

Tab. 23 遺物観察表（石製品・金属製品・ガラス製品）

図版番号	出土地点	種類	器種	法量(cm)			重量(g)	色調	特徴・使用痕迹
				全长	全厚	全幅			
72	TP4 SK4	銅製品	鋸か	[78]	0.3	0.2	[25]	—	断面円形。
182	TP1 SX1	石製品	硯 箱形	9.0	1.3	3.8	[554]	灰黒 75YR6/2	粘板岩製。陸部は使用により窪む。陸部に縱方向の擦痕。背面に針状痕。砾石に転用か。
309	TP1 瓦溜1	石製品	硯 箱形	[5.3]	1.0	4.1	[552]	灰赤 25YR4/2	粘板岩製。陸部に黒が付着。
310	TP1 瓦溜1	石製品	石臼	復元径 約34.2	厚さ 8.8	—	[4800]	灰黒 25YR6/2	砂岩製。上臼：上部から下面上に貫通する円孔あり。円孔から底径37cm、下部径26cm。下面に回転方向の擦痕。
311	TP1 瓦溜1	石製品	不明 板状製品	[14.6]	0.4	—	[784]	暗灰N3/ 2	粘板岩製。板状製品。周縁を斜めに薄く削る。数箇所にぼ3mmの円孔。
312	TP1 瓦溜1	銅製品	匙か	[7.0]	1.3	1.6	[10.7]	—	把手は中空。径2mmの円孔あり。
313	TP1 瓦溜1	銅製品	不明 板状製品	[3.6]	0.2	1.3	[4.1]	—	板状製品。両面に型による陽刻の格子文と棱垣文。
381	TP2 瓦溜2	銅製品	錐管 吸口	7.2	ラウ接合 部径 1.1	吸口径 0.4	8.2	—	側面に接合痕が残る。ラウは残存しない。
382	TP2 瓦溜2	石製品	不明 板状製品	[4.8]	0.3	0.3	[11]	白	棒状製品。断面円形。先端部は尖らせる。
383	TP2 瓦溜2	石製品	硯 箱形	19.8	3.1	8.2	[881]	灰黒 25YR7/2	粘板岩製。薄背に凹みあり。陸部中央は使用により窪む。海記と側面、背面に黒が付着。陸部に針状の原体による数条の擦痕。
384	TP2 瓦溜2	石製品	硯 箱形	[14.0]	3.3	7.1	[540]	灰白 10YR8/1	滑灰岩製。海部を欠損する。海部の一部と陸部に黒が付着する。
385-a	TP2 瓦溜2	石製品	不明 板状製品	[9.5]	0.4	[8.2]	[62.3]	暗灰N3/ 2	粘板岩製。方形又は長方形の板状製品か。両面の周縁を斜めに薄く削る。側面に加工痕とみられる直線方向の擦痕。両面に阿特の擦痕と研磨。両面に針状の原体による直線方向の刺みが僅かに残る。
385-b	TP2 瓦溜2	石製品	不明 板状製品	[12.2]	0.5	[7.8]	[70.5]	暗灰N3/ 2	粘板岩製。側面を直線的に切り出し、両面の周縁を斜めに薄く削る。側面に加工痕とみられる直線方向の擦痕。表面に同様の擦痕と研磨。両面に針状の原体による直線方向の刺みが僅かに残る。
385-c	TP2 瓦溜2	石製品	不明 板状製品	[9.4]	0.4	[6.5]	[48.8]	暗灰N3/ 2	粘板岩製。方形又は長方形の板状製品か。周縁は僅かに薄くなる。側面に加工痕とみられる直線方向の擦痕。両面に同様の擦痕と研磨。表面に針状の原体による格子状の直線方向の刺み。
385-d	TP2 瓦溜2	石製品	不明 板状製品	[10.5]	0.4	[4.6]	[26.5]	暗灰N3/ 2	粘板岩製。板状製品か。表面の周縁を斜めに薄く削る。側面に加工痕とみられる直線方向の擦痕。両面に同様の擦痕と研磨。表面に針状の原体による格子状の直線と文字を刻む。
385-e	TP2 瓦溜2	石製品	不明 板状製品	[8.0]	0.5	[5.9]	[29.5]	暗灰N3/ 2	粘板岩製。方形又は長方形の板状製品か。表面の周縁を斜めに薄く削る。側面に加工痕とみられる直線方向の擦痕。両面に同様の擦痕と研磨。表面に針状の原体による明・文字、裏面に直線状の刺み。
385-f	TP2 瓦溜2	石製品	不明 板状製品	[6.3]	0.5	[3.5]	[15.6]	暗灰N3/ 2	粘板岩製。両面に研磨。一方の面上に針状の原体で格子状の直線を刻む。
460	TP4 瓦溜4	ガラス製品	不明 棒状製品	[5.6]	0.6	1.0	[114]	無色	棒状製品。断面長方形。
461	TP4 瓦溜4	石製品	不明 棒状製品	[3.4]	0.7	0.7	[3.3]	灰黒 10YR5/1	棒状製品。断面円形。外側縦方向のケズリ。端部を斜めに面取り2mmの円孔を穿つ。
462	TP4 瓦溜4	石製品	不明 棒状製品	[3.3]	0.5	0.5	[1.9]	にぶい青緑 10YR6/4	棒状製品。断面円形。外側縦方向のケズリ。両端部を尖らせる。
527	TP5 II層	石製品	不明 棒状製品	[3.3]	0.6	0.6	[2.4]	灰白Y7/2	棒状製品。断面丸丸形。上下を欠損。
528	TP5 II層	石製品	不明 棒状製品	[6.2]	0.5	0.6	[3.1]	灰白N7/	棒状製品。角に面取りを施す。陸部に縱方向の擦痕。海部と側面、背面に黒が付着。
529	TP2 II層	石製品	硯 箱形	7.8	0.9	3.6	[43.9]	灰黒 25YR6/2	粘板岩製。角に面取りを施す。陸部に縱方向の擦痕。海部と側面、背面に黒が付着。
530	TP3 II層	銅製品	錐管吸口	4.6	ラウ接合 部径 1.1	吸口径 0.5	54	—	肩付き。ラウが残存する。吸口は変形する。外側に鍵形にによる文様。
596	TP1 滾乱	石製品	硯 箱形	[14.3]	2.4	6.2	[425]	灰10Y4/1	粘板岩製。海部を欠損する。背に長方形の窪み。使用面に擦痕あり。背面に針状による文字。
597	TP1 I層	石製品	不明 棒状製品	[4.4]	0.4	0.6	[2.3]	灰白 25Y5/7	棒状製品。断面格子形。外側縦方向のケズリ。両端部を尖らせる。
607	TP1 SX8	石製品	不明 棒状製品	[5.8]	0.5	0.5	[4.3]	灰白 25Y7/1	棒状製品。断面円形。外側縦方向のケズリ。先端部を尖らせる。
608	TP1 SX8	石製品	不明 棒状製品	[4.5]	0.5	0.5	[2.4]	灰白 25Y7/1	棒状製品。断面円形。外側縦方向のケズリ。先端部を尖らせる。

※法量・重量とも[]は残存分。金属製品で諸がみられるものも[]表記した。

Tab. 24 遺物観察表（古錢）

国版 番号	出土 地点	種類	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考
				直径	穿孔	厚さ		
30	TP3 SK3 2層	銅錢	寛永通宝	24	0.6	0.1	27	古寛永。
280	TP2 瓦溜2	銅錢	寛永通宝	23	0.6	0.1	19	新寛永。
508	TP6 1層	銅錢	寛永通宝	24	0.6	0.1	37	新寛永。

Tab. 25 遺物観察表（瓦）

国版 番号	出土 地点	種類	法量 (cm)			色調	特徴	備考 (生産地・銘・使用痕跡)
			瓦当高 丈様区高 丈様区徑	丈様区高 丈様区徑	平瓦厚			
73	TP4 SK4	軒瓦 左横瓦	—	—	15	外) 灰5Y5/1 内) 灰5Y6/1	中心彫りは不明。外側に均整唐草文。	角枠内「ヒロタ」銘印あり。
74	TP4 SK4	丸瓦	—	—	全厚 15	外) 灰4N3/ 内) 灰5Y7/1		高知県安芸市 「アキ」銘印あり。
75	TP4 SK4	棟瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 灰4N/ 内) 灰6/		高知県安芸市 「御瓦能」銘印あり。
145	TP1 SD2 下層	平瓦	—	—	20	外) にふい模5YR6/4 内) にふい模5YR6/4		「十月□元禄十□火…」 墨書き。二度被熱により 変色。
185	TP1 SX1	軒瓦 左横瓦	—	—	16	外) 灰4N/ 内) 灰5Y7/1	中心彫りは不明。外側に均整唐草文。	高知県香南市西牧町應王子 「とく□」銘印あり。
186	TP1 SX1	軒瓦 右横瓦	4.5	31	16	外) 灰4N3/ 内) 灰5Y7/1	中心彫りは巴文。両側に均整唐草文。	高知県安芸市 山に「久」と「アキ蒙」銘 印あり。
187	TP1 SX1	棟瓦又は 平瓦	—	—	16	外) 灰4N3/ 内) 灰5Y7/1		高知県安芸市 「アキ」銘印あり。
188	TP1 SX1	棟瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 灰4N/ 内) 灰5N・灰白5Y7/1		高知県安芸市 「アキ□」銘印あり。
189	TP1 SX1	棟瓦又は 平瓦	—	—	16	外) 灰4N3/ 内) 灰6/7		高知県安芸市 「アキ□」銘印あり。
190	TP1 SX1	棟瓦又は 平瓦	—	—	16	外) 灰4N3/ 内) 灰6/		高知県香南市夜須 「やす□」銘印あり。
191	TP1 SX1	棟瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 灰4N3/ 内) 灰6/7		角枠内「□博」銘印あり。
192	TP1 SX1	棟瓦又は 平瓦	—	—	16	外) 灰4N3/ 内) 灰6N・灰白N7/		角枠内「謙百」銘印あり。
193	TP1 SX1	棟瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 灰4N3/ 内) 灰白5Y7/1		銘印あり。
194	TP1 SX1	棟瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 灰4N3/ 内) 灰6N・灰白N7/		銘印あり。
220	TP2 SX14	軒丸瓦	166	129	—	外) 黑N2・灰白 10YR7/1 内) にふい黄橙10YR7/3	巴文。	
221	TP1 SX14	丸瓦	—	—	全厚 17	外) 灰N5/ 内) 黄灰25Y6/1	外面イタナデ。内面布目。	
314	TP1 瓦溜1	軒瓦 右横瓦	4.1	25	15	外) 灰4N3/ 内) 灰白N7/	中心彫りは巴文。両側に均整唐草文。	角枠内「ヒロタ」銘印あり。
315	TP1 瓦溜1	軒瓦 左横瓦	—	—	16	外) 灰4N・灰N6/ 内) 灰6/	中心彫りは丁字文。外側に均整唐草文。	高知県香美市土佐山田町 片瀬 「片當」銘印あり。 315・397同范。
316	TP1 瓦溜1	軒瓦 左横瓦	4.2	25	15	外) 灰4N3/ 内) 灰5Y7/1	中心彫りは巴文。両側に均整唐草文。	高知県香美市野市町中山田 角桿内「中山林」銘印あり。
317	TP1 瓦溜1	棟彫り瓦	8.0	47	—	外) 灰4N3/ 内) 灰6N・灰白5Y7/1	丸に一つ石紋。	
318	TP1 瓦溜1	丸瓦	—	—	全厚 15	外) 灰4N3/ 内) 灰白5Y7/1		角枠内「□の□」銘印あり。
319	TP1 瓦溜1	丸瓦	—	—	全厚 16	外) 灰4N/ 内) 灰6N・灰白N7/		高知県安芸市 「アキ」銘印あり。
320	TP1 瓦溜1	平瓦	—	—	15	外) 灰4N3/ 内) 灰6N・灰白5Y7/1		高知県安芸市 「アキ」銘印あり。
321	TP1 瓦溜1	棟瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 灰4N/ 内) 灰6N・灰白N7/		高知県安芸市 「アキ□」銘印あり。
322	TP1 瓦溜1	棟瓦又は 平瓦	—	—	16	外) 灰4N3/ 内) 灰5N・灰白N7/		角枠内「□川正」銘印あり。

Tab. 26 遺物觀察表（瓦）

固番号	出土地点	種類	法量 (cm)			色調	特徴	備考 (生産地・路・使用痕)
			瓦当高 瓦当径	文様区高 文様区徑	平瓦厚			
323	TP1 瓦溜1	棟瓦	—	—	1.6	外) 墓N4/ 斯) 墓白N7/		高知県香南市野市町中山田か 「中友」鉢印あり。
386	TP2 瓦溜2	棟廻り瓦	152	113	—	外) 墓N3/ 斯) 墓N5・墓白5Y7/1	巴文。	
387	TP2 瓦溜2	軒丸瓦	155	109	—	外) 墓N3/・墓白5 Y7/1 斯) 墓N3/	巴文。	
388	TP2 瓦溜2	軒丸瓦	—	—	1.5	外) 墓N3/ 斯) 墓N5・墓白5Y7/1	中心彫りは不明。外側に幅広の葉。	
389	TP2 瓦溜2	軒平瓦か	53	29	1.6	外) 墓N3/・墓白 5Y7/1 斯) 墓N4/	中心彫りは花文。外側に均整唐草文。	高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。 389 ~ 391・402・403同范。
390	TP2 瓦溜2	軒平瓦か	—	30	1.7	外) 墓N3/ 斯) 墓N5	中心彫りは花文。外側に均整唐草文。	高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。 389 ~ 391・402・403同范。
391	TP2 瓦溜2	軒平瓦か	48	26	1.5	外) 墓N4/ 斯) 墓N6/・墓白5Y7/1	中心彫りは花文。両側に均整唐草文。	高知県安芸市 389 ~ 391・402・403同范。
392	TP2 瓦溜2	軒横丸か	46	27	1.6	外) 墓N4/ 斯) 墓N5/	中心彫りは文文。外側に均整唐草文。	高知県安芸市 392 ~ 394・400・401同范。
393	TP2 瓦溜2	軒横丸か	—	—	1.6	外) 墓N3/ 斯) 墓N6	中心彫りは文文。外側に均整唐草文。	高知県安芸市 392 ~ 394・400・401同范。
394	TP2 瓦溜2	軒横丸か	46	27	1.5	外) 墓N3/・墓白 5Y7/1 斯) 墓10Y4/1	中心彫りは文文。両側に均整唐草文。	高知県安芸市 392 ~ 394・400・401同范。
395	TP2 瓦溜2	軒横丸か	—	27	1.6	外) 墓N3/ 斯) 墓10Y7/1	中心彫りは文文。外側に均整唐草文。	
396	TP2 瓦溜2	軒丸瓦 左丸瓦	—	—	1.5	外) 墓N4/ 斯) 墓N6/・墓白5Y7/1	中心彫りは不明。外側に均整唐草文。	高知県安芸市 「安芸□」鉢印あり。
397	TP2 瓦溜2	軒丸瓦 左丸瓦	45	33	1.5	外) 墓N3/ 斯) 墓白N7/	中心彫りは丁字文。両側に均整唐草文。	高知県安芸市 片瀬 「片瀬」鉢印あり。 315・397同范。
398	TP2 瓦溜2	軒丸瓦か	—	28	—	外) 墓N4/ 斯) 墓N6/・墓白5Y7/1	中心彫りは丁字文。外側に均整唐草文。	
399	TP2 瓦溜2	軒丸瓦	—	—	1.5	外) 墓N3/ 斯) 墓N6	中心彫りは丁字文。外側に均整唐草文。	
400	TP2 瓦溜2	軒丸瓦 左丸瓦	45	27	1.6	外) 墓N3/ 斯) 墓N5/	中心彫りは文文。両側に均整唐草文。	高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。 392 ~ 394・400・401同范。
401	TP2 瓦溜2	軒丸瓦 左丸瓦	48	27	1.7	外) 墓N3/ 斯) 墓N6	中心彫りは文文。両側に均整唐草文。	高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。 392 ~ 394・400・401同范。
402	TP2 瓦溜2	軒平瓦か	—	30	1.9	外) 墓N4/ 斯) 墓N4/	中心彫りは花文。外側に均整唐草文。	高知県安芸市 389 ~ 391・402・403同范。
403	TP2 瓦溜2	軒平瓦か	47	30	1.4	外) 墓N3/ 斯) 墓N4/・墓白5Y7/1	中心彫りは花文。外側に均整唐草文。	高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。 389 ~ 391・402・403同范。
404	TP2 瓦溜2	棟瓦又は 平瓦	—	—	1.7	外) 墓N4/ 斯) 墓N5/		高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。
405	TP2 瓦溜2	棟瓦	—	—	1.7	外) 墓N3/ 斯) 墓白N7/		高知県安芸市 「アキ兼」鉢印あり。
406	TP2 瓦溜2	棟瓦又は 平瓦	—	—	1.6	外) 墓N3/ 斯) 墓白N7/		角衿内に「山博」鉢印あり。
407	TP2 瓦溜2	棟瓦又は 平瓦	—	—	1.6	外) にぶい黄櫻10YR7/2 斯) 墓10Y3/1		高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。 被焼、変色。
408	TP2 瓦溜2	棟瓦	—	—	1.5	外) 墓N3/ 斯) 墓N6・墓白5Y7/1		高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。
409	TP2 瓦溜2	棟瓦又は 平瓦	—	—	1.8	外) 墓N3/ 斯) 墓N4/・墓白5Y7/1		高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。
410	TP2 瓦溜2	棟瓦又は 平瓦	—	—	1.7	外) 墓N3/・墓白 5Y7/1 斯) 墓N5/・墓白5Y7/1		高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。
411	TP2 瓦溜2	棟瓦又は 平瓦	—	—	1.5	外) 墓N3/ 斯) 墓N6・墓白5Y7/1		高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。
412	TP2 瓦溜2	棟瓦又は 平瓦	—	—	1.6	外) 墓N3/ 斯) 墓N5/		高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。

Tab. 27 遺物觀察表（瓦）

固版 番号	出土 地点	種類	法量 (cm)			色調	特徴	備考 (生産地・路・使用痕他)
			瓦当高 瓦当径	文様区高 文様区徑	平圧厚			
413	TP2 瓦溜2	棟瓦	—	—	15	外) 暗灰N3/ 断) 灰白N4/		高知県安芸市 「アキ万」銘印あり。
414	TP2 瓦溜2	棟瓦	—	—	15	外) 灰白N4/ 断) 灰白N5/・灰白5Y7/1		高知県安芸市 「アキ万」銘印あり。
415	TP2 瓦溜2	棟瓦又は 平瓦	—	—	16	外) 暗灰N3/ 断) 灰白N5/・灰白5Y7/1		高知県安芸市 「アキ万」銘印あり。
416	TP2 瓦溜2	棟瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 暗灰N3/ 断) 灰白N6/・灰白5Y7/1		高知県安芸市 「御瓦口」銘印あり。
417	TP2 瓦溜2	棟瓦又は 平瓦	—	—	16	外) 暗灰N3/ 断) 灰白5Y7/1		高知県香南市野市町中山田か 「中口」銘印あり。
418	TP2 瓦溜2	棟瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 暗灰N3/ 断) 灰白N5/・灰白5Y7/1		高知県香美市土佐山田町 片地 「片常」銘印あり。
419	TP2 瓦溜2	棟瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 灰白N4/ 断) 灰白5Y5/1		高知県香美市土佐山田町 片地 「片重」銘印あり。
420	TP2 瓦溜2	棟瓦又は 平瓦	—	—	13	外) 灰白N4/ 断) 灰白N6/・灰白5Y7/1		高知県香美市土佐山田町 片地 角幹内「片口」銘印あり。
421	TP2 瓦溜2	棟瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 暗灰N3/ 断) 灰白N7/		高知県香美市土佐山田町 片地 角幹内「片口」銘印あり。
422	TP2 瓦溜2	棟瓦	—	—	15	外) 灰白N4/ 断) 灰白N5/・灰白5Y7/1		高知県香美市土佐山田町 片地 角幹内「片口」銘印あり。
423	TP2 瓦溜2	棟瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 暗灰N3/ 断) 灰白S7/1		高知市布留田 「布直」銘印あり。
424	TP2 瓦溜2	棟瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 灰白N4/ 断) 灰白S7/1		「・口部」銘印あり。
425	TP2 瓦溜2	棟瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 暗灰N3/ 断) 灰白N5/・灰白5Y7/1		角幹内鉢印あり。
464	TP4 瓦溜4	軒丸瓦	159	122	—	外) 灰白N6/ 断) 灰白N6/	巴文。瓦当文様区に粗糸が付着。	
465	TP4 瓦溜4	軒丸瓦 又は 軒平瓦	—	—	19	外) 暗灰N3/ 断) 灰白5Y7/1	中心彫りは不明。外側に均整唐草文。	
466	TP4 瓦溜4	軒丸瓦 又は 軒平瓦	45	34	15	外) 灰白N5/ 断) 灰白N7/	中心彫りは丁字文。両側に均整唐草文。	
467	TP4 瓦溜4	軒丸瓦 又は 軒平瓦	—	—	—	外) 灰白N4/ 断) 灰白N6/	中心彫りは不明。外側に均整唐草文。	
468	TP4 瓦溜4	軒丸瓦 左丸瓦	—	—	17	外) 灰白N5/ 断) 灰白N6/・灰白N7/	中心彫りは不明。外側に均整唐草文。	
469	TP4 瓦溜4	軒丸瓦 又は 軒平瓦	—	—	16	外) 暗灰N3/ 断) 灰白N7/	中心彫りは丁字文。外側に均整唐草文。	
470	TP4 瓦溜4	軒丸瓦 左丸瓦	—	—	15	外) 暗灰N3/ 断) 灰白N6/	中心彫りは不明。外側に均整唐草文。	高知県香美市土佐山田町 片地 「片万」銘印あり。
471	TP4 瓦溜4	棟瓦	—	—	14	外) 灰白N4/ 断) 灰白N7/		高知県安芸市 「アキ安」銘印あり。
472	TP4 瓦溜4	棟瓦	—	—	15	外) 暗灰N3/ 断) 灰白N6/・灰白5Y7/1		高知県安芸市 「アキ口」銘印あり。
473	TP4 瓦溜4	棟瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 暗灰N3/ 断) 灰白N6/		高知県安芸市 「御瓦口」銘印あり。
474	TP4 瓦溜4	棟瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 灰白N4/ 断) 灰白N6/		高知県香南市野市町中山田 小判幹内「中口」銘印あり。
475	TP4 瓦溜4	棟瓦又は 平瓦	—	—	14	外) 灰白N4/ 断) 灰白N6/・灰白5Y7/1		高知県香美市土佐山田町 片地 「片常」銘印あり。
476	TP4 瓦溜4	棟瓦又は 平瓦	—	—	14	外) 灰白N4/ 断) 灰白N6/		高知県香美市土佐山田町 片地 角幹内「片口」銘印あり。
477	TP4 瓦溜4	棟瓦	—	—	17	外) 灰白N4/ 断) 灰白N7/		「山寅」銘印あり。
512	TP6 瓦溜6	軒丸瓦	178	128	—	外) 灰白N4/ 断) 灰白N7/	巴文。	
513	TP6 瓦溜6	軒丸瓦 左丸瓦	—	—	15	外) 暗灰N3/ 断) 灰白N5/・灰白5Y7/1	中心彫りは不明。外側に均整唐草文。	高知県安芸市 「ア口」銘印あり。

Tab. 28 遺物観察表（瓦）

団版 番号	出土 地点	種類	法量 (cm)			色調	特徴	備考 (生産地・路・使用痕他)
			瓦当高 瓦当径	文様区高 文様区径	平瓦厚			
514	TP6 瓦當6	桟瓦又は 平瓦	—	—	1.6	外) に赤い模75YR6/3 内) に赤い模75YR6/4		高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。 被熱し変色する。
515	TP1 三層瓦 集中1	丸瓦	全長26.3	全幅13.1	全厚2.0	外) 暗灰N3/ 内) 不明		
516	TP1 三層瓦 集中1	丸瓦	全長24.7	全幅13.2	全厚1.9	外) 暗灰N3/-灰白 5Y7/1 内) 不明		
517	TP1 三層瓦 集中1	丸瓦	残存長 [27.2]	全幅15.5	全厚2.2	外) 暗灰N3/-灰白 5Y7/1 内) 不明		
612	TP5 1層	軒瓦R 左軒瓦	—	—	1.5	外) 暗灰N3/ 内) 灰白N8/	中心飾りは巴文。外側に均整唐草文。	高知県香美市土佐山田町 片地 山に「片口」鉢印あり。
613	TP5 1層	桟瓦又は 平瓦	—	—	1.5	外) 灰N4/ 内) 灰白N5/1 - 灰白N6/		高知県安芸市 「△キ△」鉢印あり。
614	TP5 1層	桟瓦又は 平瓦	—	—	1.4	外) 暗灰N3/ 内) 灰白N4/-灰白5Y7/1		高知県南国市久礼田 小判仲内「クレタ□」鉢印 あり。
615	TP5 1層	桟瓦又は 平瓦	—	—	1.6	外) 暗灰N3/ 内) 灰白N7/		「□□□吉」鉢印あり。
616	TP5 1層	桟瓦又は 平瓦	—	—	1.4	外) 暗灰N3/ 内) 灰白N7/		「前長」鉢印あり。
617	TP6 1層	桟瓦又は 平瓦	—	—	2.0	外) 暗灰N3/ 内) 灰白N7/		角衿内跳印あり。
618	TP6 1層	桟瓦又は 平瓦	—	—	2.0	外) に△△-模75YR6/4 内) に△△-模75YR6/4		角衿内跳印あり。被熱し変 色する。
619	TP4 櫻皿	桟瓦又は 平瓦	—	—	2.0	外) 暗灰N3/ 内) 灰白N7/		高知県安芸市 「アキ友」鉢印あり。
620	TP4 櫻皿	桟瓦又は 平瓦	—	—	1.5	外) 暗灰N3/ 内) 灰白N6/-灰白N8/		高知県香美市土佐山田町 片地 角衿内「片兼」鉢印あり。

Tab.29 遺物観察表（木製品）

図版 番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特徴・使用痕跡
			全長	全厚	全幅		
1	平成24年度 調査 TP6 9層	荷札か	79	0.2	[17]	—	板状製品。括れあり。径1mmの円孔を穿つ。
2	平成24年度 調査 TP6 9層	著	[234]	0.6	0.6	—	棒状。断面不整形。側面に面取りを施し、先端付近は窄ませる。
3	平成24年度 調査 TP6 9層	著	[210]	0.5	0.6	—	棒状。断面不整形。側面に面取りを施し、先端付近は窄ませる。
146	TP2 SD2 下層	不明	[162]	0.6	5.5	—	用途不明の板状製品。先端は窄ませる。
147	TP2 SD2 下層	不明	[163]	0.4	1.8	—	用途不明の板状製品。
148	TP2 SD2 下層	不明	[82]	0.9	1.3	—	用途不明の棒状製品。断面四角形。
149	TP2 SD2 下層	著	[192]	0.5	0.8	—	棒状。断面不整形。側面に面取りを施し、先端付近は窄ませる。
222- a・b	TP2 SX14 床	漆器 椀	—	—	—	—	内外面に墨塗。外側に赤絵絵による文様。
223	TP2 SX14	下駄	[158]	高さ 48	全幅 93	台部厚 10	漆面・小判形。台部の断面は板状。歯は削り出しによって作り出されており、前後の厚み2.5cm、接地面の幅9.3cm。鼻緒の穴は径6mm。歯の接地面は使用によって片側が頗くように摩耗する。
224	TP2 SX14	下駄 歯	—	—	—	—	差歯。上部の差し込み部は3箇所で、断面四角形。歯は幅9.3cm厚さ1.5cm。歯の接地面は幅約11.4cm厚さ1.8cmで、底に向かって幅広がりの形態をとる。接地面は使用によって摩耗する。
225	TP2 SX14	著	[186]	0.5	0.6	—	棒状。断面不整形。側面に面取りを施し、先端付近は窄ませる。
226	TP2 SX14	著	[193]	0.5	0.6	—	棒状。断面不整形。側面に面取りを施し、先端付近は窄ませる。
227	TP2 SX14 床	著	[169]	0.5	0.7	—	棒状。断面六角形。側面に面取りを施し、先端付近は窄ませる。
228	TP2 SX14	著	[110]	0.6	0.6	—	棒状。断面円形。側面に面取りを施し、先端付近は窄ませる。
229	TP2 SX14 床	不明	53.0	1.1	3.9	—	用途不明の板状製品。断面長方形。一方の隅に切り込みあり。229・230同一個体か。
230	TP2 SX14 床	不明	52.7	1.1	4.0	—	用途不明の板状製品。断面長方形。両端に釘穴と釘の圧痕。片側面の両端に釘穴。229・230同一個体か。

※ []は残存分。

[遺物観察表凡例]

- 1) 法量・重量：[]は残存分。
- 2) 色調：「外」は外面、「内」は内面、「断」は断面を表している。色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帳」による。

第VI章 考察

第1節 絵図・文献にみる近世の追手筋と追手筋遺跡

はじめに

平成25年度に調査を実施した追手前小学校跡地は、追手筋の南に面しており、近世には侍屋敷の敷地内にあったことが絵図等から知られている。調査対象地は屋敷地北側の一部にあたり、調査面積も限定されたものであったが、屋敷地の境界施設や火災関連構造など、近世前期から後期、近代までの遺構と遺物が検出され、侍屋敷の変遷を知る貴重な資料が得られている。また、これに統一して高知県埋蔵文化財センターが実施した発掘調査では、広大な池を備えた庭園跡や、建物群、水通施設、井戸、屋敷境などが検出され、近世の侍屋敷の構造が明らかにされている。^(注1)

これらの検出遺構の背景を知る手掛かりとして、本節では関連の絵図や文献史料から得られる情報を読み解きながら、周辺の景観や居住者の動きをたどり、この地域が歴史的にどのような変遷を遂げてきたのかを検討してみたい。

1. 追手筋遺跡の性格と変遷

近世の追手筋

近世初頭、山内氏による城下町の造営とともに、道路網の整備が進められた。城下は東西の筋と、南北の通りによって貫かれ、町並みが形成された。城下町を東西に貫く主要な道のうち、本町筋（現在の電車通り）が経済上の幹線道路としての機能を果たしたのに対し、高知城の正門にあたる大門（後の大手門・追手門）から東の廿代筋までの間を東西に延びる大門筋（後の大手筋・追手筋）は藩の儀礼上の表通りであり、参勤交代の際には、城の大門から出立した行列がこの筋を通って東の山田橋に向かい、参勤交代路へと進んだ。

筋や町の名称は、近世前期の絵図に「大御門筋」とみており^(注2)、近世前期の町並みを記した『侍町小割帳』^(注3)にも「大門筋」と記されている。また、元禄11年（1698）の記事「御侍屋敷焼失之覚」^(注4)には「大門町」の町名、同年の「元禄十一年寅ノ十月六日家消失覚」^(注5)にも「大御門筋」の名称がみえる。しかし、享保12年（1727）の「公義御差出」の覚^(注6)では門の呼称が「大手門」となっており、近世中期以降の絵図には「大手筋」や「追手筋」と記されている。（Tab.31）

近世初期の大門筋の様子は、寛永4年（1627）の「かうち之城」^(注7)や正保元年（1644）の「正保土佐国城絵図」^(注8)に描かれており、大門筋の西端の一画が広小路となっている。この広小路は近世を通して絵図に表れ、「元禄十一年以前図」（Fig.72-図3）や延享3年（1746）の「高知城郭図絵」（Fig.73-図4）には、広小路の南側に細長い施設の絵も描かれている。後の絵図（Fig.73-図6・Fig.74-図7）に「大コシカケ」、「大腰掛」と記されるこの施設は、登城する藩士の従者達が待つ場所にあてられたものとされており、この空間の多様な用途がうかがえる。

広小路を含めて、大門筋の両側には侍屋敷が並んでおり、寛永元年（1624）から万治2年（1659）間の作成と推察されている『侍町小割帳』では、「大門筋」の南面に12棟、北面に12棟の屋敷が記

載されている。また寛文9年（1669）頃の城下の様子を描いたとされる「寛文己酉高知絵図」^(註2)でも「大御門筋」の両面に各12棟の屋敷が描かれている。

近世前期の居住者と変遷

『侍町小割帳』（史料1）によると、「大門筋」の西部には、南面に沿って西から「野々村大学」「山内市正」「百々出雲」「山内左衛門佐」、北面に沿って西から「寺村主膳」「寺村清兵衛」横道を挟み「桐間兵庫」「村田白庵」「並川主税」横道を挟み「山内右近」の屋敷名が記載され、各屋敷の間口は、村田と並川が22～25間半である他は、30～51間前後となっている。一方、これより東側の筋沿いに並ぶ侍屋敷は間口16～32間前後であり、西部に特に間口の広い屋敷地が配置されている。

また「寛文己酉高知絵図」（Fig.72-図1）では、西部には、筋の南面に西から「野々村長左衛門」「山内蔵監」道を挟み「百々伊織」「山内左衛門佐」、筋の北面に西から「寺村淡路」「寺村清兵衛」道を挟み「桐間兵庫」「村田康庵」「並川主税」道を挟み「山内丹波」の屋敷がみえ、居住者の変化は認められない。

これら「大門筋」に屋敷を構えた居住者の知行の石高や役職についてみてみると、寛文2年（1662）の「寛文二年卯正月 日 御家中侍衆分限帳」^(註3)に記載を確認できるものでは、「二千四百石 野々村長左衛門」「三千七百石 百々刑部」「六千八百石 山内左衛門佐」「四千五百石 寺村淡路」「千八百五拾石 桐間伊東」「三百石 村田玄寿」「五千石 山内丹波」などがみえており、三百石の村田氏を除くと、西部の居住者は何れも知行1800～6800石である。一方、東部に居住する侍は「五百石 野々村権右衛門」「二百石 遠藤加左衛門」「三百石 ミのべ團丞」「百五拾石 清水勘左衛門」「三百石 真鍋五郎左衛門」などであり、知行150～500石の上級武士が認められている。^(註4)

このうち、大門筋南面4棟めにみえる「山内左衛門佐」以下の山内氏は藩主の一門にあたり、初代が山内一豊の姉の子である山内可氏で、宿毛領主である。また、北面6棟めにみえる「山内右近」「山内丹波」以下の山内氏（林氏）は窪川領主で、家老職を務めている。^(註5)また、南面1棟めにみえる野々村氏は山内氏の姓を押し、奉行職。南面2棟めの「山内市正」「山内蔵監」以下の山内氏は、山内姓を押した家老。百々、並川、桐間氏は家老、寺村氏は中老、村田氏は医官法橋、法眼であった。（Tab.30）

この様に、17世紀の「大門筋」西部には、山内姓を称した家老や藩主一門、家老、中老、医官の屋敷が並び、その東には、御馬廻など知行150石以上を給された上級武士の屋敷が配置されていた。

近世中期～後期の居住者と変遷

次に、各時期の絵図や史料にみえる西部の屋敷群について、以降の動きをみてみたい。（Tab.31）

まず元禄年間（1688～1704）の状況を表わしたとされる「建依別高知城郭之図」^(註6)（Fig.72-図2）では、筋の南面に西から「野々村□□□」「山内彦作」「百々采女」「山内源藏」、筋の北面に西から「□□外記」「山内□□」「桐間兵庫」「村田康庵」「深尾内匠」「山内□□」となっている。一方、「皆山集」に収められた「元禄十一年以前図」^(註7)（Fig.72-図3）には、筋の南面に西から「□□□□□」「山内彦作」「積古屋敷」「山内半左衛門」、筋の北面に西から「五藤外記」「山内主馬」「桐間将監」「村田康庵」「深尾内匠」「山内常之助」とある。これらの元禄年間の絵図では「寛文己酉高知絵図」まで認められた寺村氏の屋敷地が「五藤」と「山内」、並川氏の屋敷地が「深尾」に入れ替わって

いる。また、「建依別高知城郭之図」での「百々采女」屋敷地が、「元禄十一年以前図」では「稽古屋敷」に変っており、家老職を離れた家臣の屋敷替えが一部認められている。

一方、延享3年（1746）の写図である「高知城郭図絵」^[註14]（Fig.73-図4）をみると、南面に西から「山内監□」「深尾長門」「山内源藏」「村田玄□」（村田玄寿か）、北面に西から「会所」「□□□□」「□□□□」「山内隼人」となっており、元禄年間の絵図にみられた居住者が全体的に入れ替わっている。さらに、北面西端には「会所」などの藩の施設が現れている。

続いて、延享3年（1746）～寛延年間（1748～1751）の状況を表わしたと推定される「高知廓中図」^[註15]（Fig.73-図5）でも、南面に西から「山内□□」「深尾長門」「山内源藏」「村田□□」、北面に西から「新會所」「山内上□」「深尾□□」「山内隼人」屋敷となっており、同様である。

また、天明4年（1784）の『御家中御侍屋敷附』^[註16]でも、南面に西から「山内監物」「深尾主水」、「山内源藏」「村田玄端」、北面に西から「北御會所」「山内伊織」「深尾内匠」「山内勘解由」とあり、屋敷の居住者や会所の位置に変化がなく、享和元年（1801）の「高知御家中等施圖」^[註17]（Fig.73-図6）も、南面に西から「山内左衛門」「深尾近江」、「山内源藏」「村田玄寿」、北面に西から「北御會所」、「山内伊織」「深尾丹波」「山内織部」となっており、延享～寛延年間までの状況を引き継いでいる。

以降の絵図では、天保元年（1830）の「天保元年高知之圖」^[註18]（Fig.74-図7）で南面の山内と村田氏の屋敷の間に「馬場」が設けられるなどの変化が一部あるが、弘化年間（1844～1848）の「弘化年間高知城中絵図」^[註19]（Fig.74-図8）、慶応年間（1865～1868）の「慶応初年廓中高知街図」^[註20]（Fig.74-図9）まで同様の内容であり、幕末頃まで、この一帯の屋敷配置には殆ど変化がない。

この様に、元禄11年以前の絵図とそれ以降では屋敷配置が全体に変わっており、その後は幕末頃まではほぼ変化がなかった。また筋の北面西端にあった屋敷の跡地には藩の役所にあたる会所が置かれている。

会所には郡方、免方、普請方、山方、浦方などの諸役所が置かれ、宝暦10年（1760）には、8代藩主山内豊敷によって教授場が併設された。教授場はその後、九代藩主山内豊雍により教授館と改称され、谷真潮、宮地春樹、戸部良熙らが、朱子学を中心に藩士の教育にあたったとされる。

災害と復興

さて、各期の絵図をみると、大門筋（追手筋）の屋敷は17世紀末から18世紀前葉の間に居住者の入れ替わりが最も多く、以降は幕末頃まで変化が少なかった。また、元禄年間（1688～1704）の「建依別高知城郭之図」（Fig.72-図2）や「元禄十一年以前の図」（Fig.72-図3）までは侍屋敷があった位置に、延享3年（1746）の図（Fig.73-図4）では「会所」が現れているなど、やはりこの間に移転が行われている。元禄年間の絵図以前に認められた個々の屋敷の配置替えは、家系の断絶や役職の変化などが背景の一つとして考えられたが、これ以降に、全城に入れ替わりが生じた背景としては、この時期、城下に甚大な被害をもたらした火災の影響が考えられよう。そこで以下では、元禄11年と享保12年の大火について関連の記事を取り上げ、大門筋周辺の状況を確認しておきたい。

まず、城内の下屋敷と太鼓丸が焼失した元禄11年（1698）の大火について、「南路志」に収められた記事「十月六日出火、御侍屋敷焼失之覚」^[註21]には、焼失した北奉公人町、内堤、帶屋町筋、大門町、本町筋、中島町、与力町、南片町の侍屋敷が列挙されている。ここには焼失した大門筋の

屋敷について、「大門町 山内彦作 稲吉屋敷 山内半左衛門 深尾四郎左衛門 日根野弥五郎 遠藤嘉左衛門 美濃邊團丞 同園三 井上孫右衛門 吉田善左衛門 ぬし部屋 清水一郎右衛門 五島外記 山内主馬 桐間将監 村田康菴 山内常之助 百々平次 山内半左衛門 深尾内匠 …(以下略)」と39棟の記録があり、大門筋では西端から、東端の清水氏屋敷辺りまで焼失したことが分かる。そして、本調査地点が該当すると考えられる「元禄十年以前図」(Fig.72-図3)での「稻吉屋敷」「山内半左衛門」の屋敷名も見出され、元禄11年に焼失していることが分かる。

次に享保12年(1727)の大火については、「南路志」に収められた「城下大火・御城本丸まで焼失 附公義御差出」^(註22)の記事に、城内の殆どが焼失した他、郭中の侍屋敷387軒と、廿代町、細工町、種崎町、蓮池町、農人町、新町、新市町、北奉公人町、堺町、唐人町、浦戸町、掛川町、朝倉町の町屋が焼失したとあり、郭中の被害の様子が記されている。

同記事によると、城内では「御城本丸 二丸 三丸 鉄門 良櫓上下 乾櫓 二丸内櫓二ヶ所 本丸納戸蔵 二丸茶蔵 杉之段長崎蔵 紙役所 新庭亭 射場亭并射手己屋 北ノ口作事木屋并左官方 同萬方 掃除方役所共焼失」とあり、城内の建物の多くが被害を受けたことが窺える。また、同史料に収められた享保12年2月18日の「附公義御差出」の覚えには、城内の建物について「天守 本丸 二之丸 三之丸 役所三ヶ所」が焼失し、「大手門 西ノ口大門 北ノ口大門」は焼け残ったと記されている。

同史料の中では、郭中の侍屋敷で焼け残ったものについて「郭内残家 带屋町北側山田多門屋敷々下堀端火之見迄拾六軒。同南側高屋又兵衛宅々今田清左衛門迄拾壹軒。本町乾又五郎、大黒甚左衛門、野中六左衛門迄三軒。西大門北蔽際、佐藤五郎左衛門壹軒。金子橋蔵之内北小笠原又右衛門外輪々南鷹匠町堺迄、東ハ大塚藤右衛門、金子博十郎々合面八軒。鷹匠町南側西々八軒。同北側後藤甚五右衛門一軒。外江ノ口分鷹見市垂壹軒。合四拾九軒残。」と記されているが、享保12年の大門筋の屋敷の被害については詳細がつかめない。

2. 追手筋遺跡の居住者と性格

居住者の推定

最後に、今次調査地点がどのような位置付けができるのか、検討しておきたい。

藩撰図と推定されその製図法の巧緻さが評価されている寛文9年の「寛文己酉高知絵図」には、通りごとに屋敷地の間口と居住した侍名が列記されている。これをもとに現在の市街地図(Fig.75-図11)と比較すると、高知城の内堀が埋められ、追手筋の道幅が南側へ拡張されている他は、追手筋北側の敷地境界や帶屋町筋の道幅、南北の道などが近世の絵図に一致しており、現況の街区画が近世の町割りをほぼ踏襲していることが見て取れる。そして、近世当時の状況を比較的良好にとどめている街区画を同倍率で重ね合わせ、今回の調査区の位置を絵図上に推定復元したものがFig.75-図10になる。これによると、今次調査区の東部(TP1)が「百々」と「山内」の屋敷の境界付近にあたることが推定される。また、現在の追手筋は戦後の改修により拡張されているため、近世の屋敷の北側境界は現在よりさらに北にあったことが推定される。

これ以降の絵図では現況位置との照合は困難であるが、屋敷割りから、対応関係を推定すること

は可能で（Tab.31）、以下、元禄年間の「建依別高知城郭之図」の「百々采女」と「山内源蔵」、「元禄十一年以前図」の「稽古屋敷」と「山内半左衛門」、延享3年「高知城郭図絵」の「山内源蔵」と「村田玄寿」、以降「慶応初年頃中高知街図」まで山内と村田の屋敷地を該当させることができる。

そこで以下では、百々・山内・村田氏について、史料に表れる各人物の跡目相続の期間や身分、役職などを検討し、本遺跡の性格を知る手がかりとしたい。

百々氏について

初代の百々越前安行は、もと岐阜城主の岐阜中納言秀信（織田信長の孫、織田秀信）の家老であったが、慶長5年（1600）に岐阜城が落ち、秀信は高野山に入る。越前安行は京都に隠棲中、山内一豊に召出され、土佐入国後は7000石を与えられている。

『御侍中先祖書系図牒』^{〔註2〕}に収められた初代から五代までの跡目相続の期間と役職は次の通りである。

元祖 越前安行 慶長5年（1600）召出、築城総奉行、知行七千石、慶長14年（1609）没

二代 出雲直安 慶長15年（1610）跡目、築城総奉行、家老、明暦2年（1656）没

三代 刑部安政 明暦元年（1655）跡目、家老、総奉行、寛文8年（1668）没

四代 伊織安集 寛文8年（1668）跡目、家老、元禄元年（1688）没

五代 采女安英 元禄2年（1689）跡目、家老、元禄4年（1691）没、跡目断絶

百々氏は、初代の越前安行が7000石、2代以降は知行3700石を賜った。初代の越前安行と二代出雲直安は高知城の築城に総奉行としてあたっている。

五代の采女安英は27歳で亡くなり家系が絶えたが、百々氏には他に、元禄2年（1689）に別家となった百々平次集宣（采女安英の弟）の家系があり、知行400石で御馬廻を務めている。御馬廻の百々氏は平次集宣を初代として、八代禮三郎安處までの記録が残る。

元禄4年（1691）に家系が断絶した後、百々采女屋敷の跡地は、その後の絵図に「稽古屋敷」と表れており、元禄11年の火災によって焼失している。^{〔註3〕}

山内氏について

初代の山内可氏は、美濃国本郷郡北方領主の安東郷氏の子で、初名は安藤可氏を名乗る。母は山内一豊の姉にあたり、父、安東郷氏の死後は叔父の山内一豊を頼って召抱えられ、天正13年（1585）に山内姓を拝した。初代の可氏左衛門佐は、慶長6年（1601）に6000石を与えられて幡多郡宿毛城主となり、家老を務める。宿毛城は一国一城制によって、元和元年（1615）に取り壊しとなっている。

初代から十一代までの跡目相続の期間と役職は次の通りである。

初代 可氏 左衛門佐 慶長5年（1600）登用 知行千石、宿毛城主六千石、家老

寛永6年（1629）没

二代 定氏 左衛門佐 寛永7年（1630）跡目、正保3年（1646）没

三代 節氏 左衛門佐 源蔵 正保4年（1647）跡目、元禄11年（1698）没

四代 優氏 鶴太郎 半左衛門 藏人 元禄12年（1699）跡目、宝永6年（1709）没

五代 晴氏 宝永6年（1709）跡目、没年不明

六代 邦俊 半左衛門 享保9年（1724）跡目、奉行職、寛延2年（1749）没

七代 氏篤 源藏	寛延4（1751）跡目、奉行職、天明7年（1787）没
八代 保氏	天明6年（1786）跡目、奉行職、享和2年（1802）没
九代 氏謙 源藏	享和2年（1802）跡目、奉行職、文化8年（1811）没
十代 氏固 太郎左衛門	文化8年（1811）跡目、奉行職、文久元年（1861）没
十一代 氏理 左衛門佐 主馬 安政3年（1856）	跡目、奉行職、明治21年（1888）没
元禄11年の火災焼失記録に記された「山内半左衛門」は四代目の半左衛門蔵人にあたるとみられる。これ以降、山内氏の屋敷は西側に移っており、以後、慶応年間の絵図まで西側の屋敷区画に「山内源藏」「山内太郎左衛門」「山内左衛門佐」「山内主馬」の名が認められている。	

しかし、山内氏の屋敷地が所在した追手筋南沿いの一角には、明治5年（1872）に高知街連公立小学校が創立され、その後、明治9年（1876）に追手筋小学校と改称されているため、山内屋敷の転居も明治初年には行われていたとみられる。

村田氏について

村田氏は代々、医官の職に就いた家系である。初代の白菴玄怡は、周防岩国城主毛利広家の家臣村田仁右衛門の子で、曲直瀬元朝に医術を学び、寛永元年（1624）に江戸で二代藩主山内忠義に200石で召抱えられ、後に100石を加増された。その後、法橋に任せられ、慶安元年（1648）に法眼に昇進した。

『御侍中先祖書系図牒』に収められた初代から八代までの跡目相続の期間と、各代の役職は次の通りである。

先祖 村田右近

元祖 村田 法眼 白菴玄怡	寛永元年（1624）登用、知行二百石、加増百石、
	寛永13年（1636）知行四百石、寛永14年（1637）医官法橋、
	慶安元年（1648）医官法眼、慶安4年（1651）没

二代 法橋 康菴玄寿	承応元年（1652）跡目、知行四百石、明暦2年（1656）法橋、
	宝永元年（1704）没

三代 法橋 白菴玄泉	宝永元年（1704）跡目、法橋、享保4年（1719）没
------------	-----------------------------

四代 法橋 康庵玄寿	享保4年（1719）跡目、元文4年（1739）医官法橋、延享5年（1748）没
------------	---

五代 玄端	寛延元年（1748）跡目、知行二百五十石、寛政10年（1798）没
-------	-----------------------------------

六代 玄寿 成澄	寛政11年（1799）跡目、文化10年（1813）没
----------	----------------------------

七代 玄明 成文	文化11年（1814）跡目、天保2年（1831）医官、明治2年（1869）没
----------	--

八代 孫七郎 悅成	明治2年（1869）跡目、御馬廻、明治6年（1873）没
-----------	------------------------------

二代の康庵玄寿は叔父の白菴玄怡の養子となってその跡を継ぎ、治術は父を超える名医と言われた。明暦2年（1656）に法橋になり、四代豊昌の侍医として400石で仕えた。三代の白菴玄泉、四代の康庵玄寿とも、法橋に任官している。

村田氏の屋敷は、元禄年間以前の絵図では大門筋の北面にあり、元禄11年大火の焼失記録に二代の村田康菴玄寿の名が認められる。その後、村田屋敷は筋の南面に移り、以降慶応年間の絵図に表れる七代の村田玄明まで、当地での居住が確認できる。

【註】

- 1)『追手筋跡－新図書館等複合施設建設に伴う発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター・高知県教育委員会・高知市教育委員会2015
- 2)「寛文己酉高知絵図」高知市立市民図書館所蔵
- 3)『侍町小割帳』は高知城下の侍町の住居者名簿とでもいべき史料であり、通りごとに屋敷地の間口と居住者の氏名が列記されている。史料の成立年代は不詳であるが、寛政3年(1791)の写しが文政9年(1826)に再写され、その伝来資料を明治29年(1896)松野尾章行氏が再転写したものが『皆山集』に収められている。寛政期に書写した人物が史料末尾に付記した内容によると、寛永元年(1624)に山内家に召し抱えられた仙石忠右衛門と、万治2年(1659)に他国へ出た間宮九左衛門の屋敷が記されていることから、寛永元年から万治2年の間に成立したものと推定されている。さらに、松野尾章行氏はその上限を水国寺創建の寛永5年(1628)、下限を寛政期の筆写者が推定した万治2年(1659)としている。ただし、「御侍中先祖書系図帳」と人名との照合など今後の研究によって、成立時期をさらに絞り込むことが可能であろうとされる。『土佐国史料集成 土佐國群書類従 第八卷』高知県立図書館2006年、大脇保彦「侍屋敷調査帳と廓中國」「描かれた高知市・高知市史絵図地図編」高知市史編さん委員会絵図地図部会・高知市2012年
- 4)「御侍屋敷焼失之覚」「南路志 卷七十」農昌公御代七付録『土佐国史料集成 南路志』第6卷P424 高知県立図書館
- 5)「元禄十一年寅ノ十月六日家消失覚」「皆山集」第六章火災『土佐国史料類纂 皆山集』第6卷P215 高知県立図書館
- 6)「公義御差出」「南路志」卷七十五「農敷公御代一」「土佐国史料集成 南路志」第7卷P169 高知県立図書館
- 7)「かうち之城」高知市立市民図書館所蔵『描かれた高知市』P32より引用
- 8)「正保土佐国絵図」国立公文書館所蔵『描かれた高知市』P33より引用
- 9)「寛文二年卯正月一日 御家中侍衆分限帳」「土佐之国史料類纂 皆山集 第七卷」高知県立図書館昭和52年
- 10)この他、万治3年(1660)の「万治三年分限帳」に記載を確認できるものでは、西側の居住者「三千七百石 百々刑部」「六千八百石 山内左衛門佐」「四五千百石 寺村淡路」「三百石 村田玄寿」「五千石 山内丹後」一方、東側居住者では「二百石 遠藤加左衛門」「三百石 美濃部團丞」「百五拾石 清水勘左衛門」「三百石 真鍋五郎左衛門」などが認められる。
- 11)北面6棟にみえる山内氏は、初代を山内伊賀一吉(林一吉)とする。初代の林伝左衛門勝吉(後の山内伊賀一吉)は播磨で山内一豊に召抱えられ、土佐入国後に山内の称号を与えられて窪川城主となった。慶長9年(1604)に5000石を賜り家老職を務めた。林氏は2代の山内右近(林勝久)、3代の山内丹波(林勝政)、4代の山内傳左衛門(林勝定)、5代の山内大学(林勝知)、6代の□□(林勝興)まで窪川を領し、家老を務めた。
- 12)「建依別高知城郭之図」高知市立市民図書館所蔵『建依別高知城郭之図』は松野尾章行氏による写図で原図は不明。大脇保彦「元禄期の城下町絵図」「描かれた高知市』P42より引用
- 13)「元禄十一年以前図」高知県立図書館所蔵
- 14)「高知城郭絵図」高知県立図書館所蔵『高知城郭図絵』は延享3年(1746)年9月の写図であり、原図はそれ以前、町会所の位置などから元文5年(1740)以降の状況を示した図であったことが分かる。加筆・訂正も見え、実用にされていた痕跡も示している。大脇保彦「延享の大前後の城下町絵図写図」「描かれた高知市』P44より引用

- 15)「高知廓中図」個人蔵「高知廓中図」は図題がなく仮題で、原図も写した年次も不明である。しかし図中の内容から延享の大火以降、寛延年間までの状況とされている。大脇保彦『延享の大火前の城下町絵図写図』『描かれた高知市』P45より引用
- 16)「御家中御侍屋敷附」高知市立自由民権記念館寄託 德弘家資料「御家中御侍屋敷附」は徳弘家五代目慧助の代に作られたもの。今井章博「侍屋敷調査帳と廓中図」『描かれた高知市』P53より引用
- 17)「高知御家中等廻図」安芸市立歴史民俗資料館所蔵「高知御家中等廻図」は土佐藩家老五藤家に伝わる高知城下町絵図で、享和元年（1801）の原図を、文化8年（1811）に写したもの。『描かれた高知市』P48より引用
- 18)「天保元年高知之図」個人蔵「天保元年高知之図」は吉松清氏の模写。原図の伝来は不明であるが、図中の書き込みに、文政13年（1830）南鏡が作成した「土陽府御絵図」を、天保5年（1834）に鏡立敬人が改正正作図した図の模写という図歴記録がある。大脇保彦「民撰御城下図」『描かれた高知市』P57より引用
- 19)「弘化年間堺郭中絵図」高知市立市民図書館所蔵「弘化年間堺郭中絵図」は個人所蔵の図を平尾道雄氏が写したもの。大脇保彦「幕末の堺中絵図」『描かれた高知市』P58より引用
- 20)「慶応初年廊中高知街図」高知市立市民図書館所蔵「慶応初年廊中高知街図」は日根野弘宣氏が慶応年間の高知城下の侍屋敷の配置と居住状況を調査し復元したもの。作成は大正4年（1915）。岩河忠信「幕末の堺中絵図」『描かれた高知市』P59より引用
- 21)「御侍屋敷焼失之覚」「南路志」巻七十 豊昌公御代七付録『土佐国史料集成 南路志』第6巻P424 高知県立図書館
- 22)「城下大火、御城本丸まで焼失 附公義御差出」「南路志」巻七十五 豊敷公御代一『土佐国史料集成 南路志』第7巻P169高知県立図書館
- 23)「御侍中先祖書系図帳」土佐山内家宝物資料館

【参考文献】

大脇保彦「高知城下町絵図について－歴史空間の情報源としての吟味と課題」『土佐女子短期大学紀要8』土佐女子短期大学2001年

寺石正路「土佐名家系譜」歴史図書社 昭和51年

山本泰三「土佐の墓」土佐史談会 昭和62年

「土佐之国史料類纂 皆山集」高知県立図書館 昭和48年

「土佐国史料集成 南路志」高知県立図書館 平成6年

「土佐国史料集成 土佐國群書類從」高知県立図書館2006年

「御侍中先祖書系図帳」土佐山内家宝物資料館

「改訂版 高知城下町談本」土佐史談会・高知市2004年

『描かれた高知市 高知市史 絵図地図編』高知市史編さん委員会絵図地図部会・高知市2012年

【絵図出典】

No.1)「かうち之城」高知市立市民図書館所蔵

No.2)「正保土佐国城絵図」国立公文書館所蔵

- No.3) 「慶安五年高知廓中絵図」高知市立市民図書館所蔵
- No.4) 「寛文七年図」高知県立図書館所蔵
- No.5) 「寛文己酉高知絵図」高知市立市民図書館平尾文庫所蔵
- No.6) 「建依別高知城郭之図」高知市立市民図書館所蔵
- No.7) 「元禄十一年以前図」高知県立図書館所蔵
- No.8) 「高知城郭図絵」高知県立図書館所蔵
- No.9) 「高知廓中図」個人蔵
- No.10) 「御家中御侍屋敷附」徳弘家資料 高知市立自由民権記念館寄託
- No.11) 「高知御家中等施図」安芸市立歴史民俗資料館所蔵
- No.12) 「天保元年高知之図」個人蔵
- No.13) 「弘化年間高知中絵図」高知市立市民図書館所蔵
- No.14) 「慶応初年廓中高知街図」高知市立市民図書館所蔵

※ 1 ~ 14は「描かれた高知市 高知市史 絵図地図編』より転載・引用

Tab.30 近世前期の居住者と性格

座敷位置	〔寺町小割帳〕記載名	〔寛文己酉高知絵図〕記載名	役職	備考
南面、西から1棟め	野々村大学	野々村長左衛門	奉行職	初代の野々村源政は遠州掛川で山内一豊に召抱えられ、土佐入後は山内姓を承し奉行職となる。2代は野々村大学。
2棟め	山内市正	山内善監	家老	初代は山内脇後和三（乾式）。乾脇後和三と乾彦作で信の兄弟は天正6年（1578）に播磨国で山内一豊に召抱えられ、慶長6年（1601）に山内姓を承する。
3棟め	百々出雲	百々伊織	家老	
4棟め	山内左衛門佐	山内左衛門佐	家老、宿毛領主	蓬主一門。初代は山内一豊の姉の子。慶長6年（1601）に初代の山内左衛門佐が知行6000石で宿毛城主となる。
北面、西から1棟め	寺村主膳	寺村淡路	中老	
2棟め	寺村清兵衛	寺村清兵衛		
3棟め	桐間兵庫	桐間兵庫	家老	
4棟め	村田白庵	村田康庵	医官法橋、法眼	初代の村田白庵は医官法橋、後に医官法眼、2代の村田康庵は法橋。
5棟め	井川主税	並川主税	家老	
6棟め	山内右近	山内丹波	家老、森川領主	初代の林伝左衛門勝吉（後の山内伊賀一吉）が播磨国で山内一豊に召抱えられ、土佐入後は山内姓を与えられて森川領主となる。

Tab.31 絵図・史料にみる追手筋と居住者の変遷

No.	絵図番号	年代	資料名	若狭面、西から				若狭面、西から			
				1種の 2種の 3種の 4種の 5種の 6種の	「調査区」 「調定地」 「指定地」	1種め 2種め 3種め 4種め 5種め	井田直 井田直 井田直 井田直 井田直 井田直	山内右近 山内右近 山内右近 山内右近 山内右近 山内右近	井田直 井田直 井田直 井田直 井田直 井田直	山内右近 山内右近 山内右近 山内右近 山内右近 山内右近	
1	Fig.73-4	寛永4年(1627)	「かうら之郷」								門々道の野原、広小路の位置
2	Fig.73-4	正保4年(1644~1648)	「庄屋在住区域別図」								
3	Fig.73-4	慶安5年(1652)	「慶安令高知郡中 絵図」			記載なし					
4	Fig.73-4	寛文7年(1667)	「寛文七年閏 絵図」			記載なし					
5	Fig.73-4	寛文9年(1669)	「寛文九年閏 絵図」	百々山露正 野々村良長家門 野々村良長家門	百々山露正 百々山露正 百々山露正	百々山露正 百々山露正 百々山露正	寺村直 寺村直 寺村直	寺村直 寺村直 寺村直	寺村直 寺村直 寺村直	井田直 井田直 井田直	山内右近 山内右近 山内右近
6	Fig.73-4	元禄2年(1688~1704)	「龍林高知城郭之 圖」	野々村良長家門 野々村良長家門	野々村良長家門 野々村良長家門	野々村良長家門 野々村良長家門	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	井田直 井田直 井田直 井田直 井田直 井田直	山内右近 山内右近 山内右近 山内右近 山内右近 山内右近
7	Fig.73-4	元禄11年(1698)	「元禄十一年正月閏 絵図」	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	井田直 井田直 井田直 井田直 井田直 井田直	山内右近 山内右近 山内右近 山内右近 山内右近 山内右近
8	Fig.73-4	享和3年(1763)	「高知御用廻」	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	井田直 井田直 井田直 井田直 井田直 井田直	山内右近 山内右近 山内右近 山内右近 山内右近 山内右近
9	Fig.73-4	推定1766~1770	「高知御中図」	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	井田直 井田直 井田直 井田直 井田直 井田直	山内右近 山内右近 山内右近 山内右近 山内右近 山内右近
10	Fig.73-4	天明4年(1784)	「御本中漁村聚落図」	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	井田直 井田直 井田直 井田直 井田直 井田直	山内右近 山内右近 山内右近 山内右近 山内右近 山内右近
11	Fig.73-4	享和元年(1801)	「高知御家中等図」	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	井田直 井田直 井田直 井田直 井田直 井田直	山内右近 山内右近 山内右近 山内右近 山内右近 山内右近
12	Fig.74-7	天保元年(1830)	「天保元年高知御中等図」	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	井田直 井田直 井田直 井田直 井田直 井田直	山内右近 山内右近 山内右近 山内右近 山内右近 山内右近
13	Fig.74-7	弘化2年(1844~1848)	「弘化2年高知御中等図」	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	井田直 井田直 井田直 井田直 井田直 井田直	山内右近 山内右近 山内右近 山内右近 山内右近 山内右近
14	Fig.74-7	慶応2年(1865~1868)	「慶応2年高知御中等図」	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近 山内左近	井田直 井田直 井田直 井田直 井田直 井田直	山内右近 山内右近 山内右近 山内右近 山内右近 山内右近	



図1 「寛文己酉高知絵図」寛文9年（1669）（高知市立市民図書館所蔵）

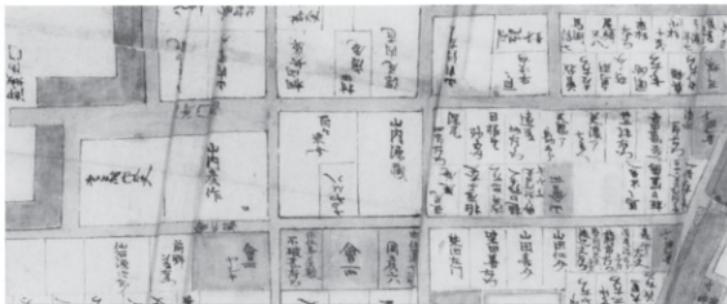


図2 「建依別高知城郭之図」元禄年間（1688～1704）（高知市立市民図書館所蔵）



図3 「元禄十一年以前図」元禄11年（1698）（高知県立図書館所蔵）

Fig.72 絵図にみる追手筋遺跡の変遷(1)



図4 「高知城郭図繪」延享3年（1746）写図（高知県立図書館所蔵）



図5 「高知城郭図」延享3年～寛延年間（1746～1751）（個人蔵）



図6 「高知御家中等施図」享和元年（1801）（安芸市立歴史民俗資料館）

Fig.73 絵図にみる追手筋遺跡の変遷（2）



図7 「天保元年高知之圖」天保元年（1830）（個人蔵）



図8 「弘化年間高郭中絵図」弘化年間（1844～1848）（高知市立市民図書館所蔵）



図9 「慶応初年廓中高知街図」慶応年間（1865～1868）（高知市立市民図書館所蔵）

Fig.74 絵図にみる追手筋遺跡の変遷（3）

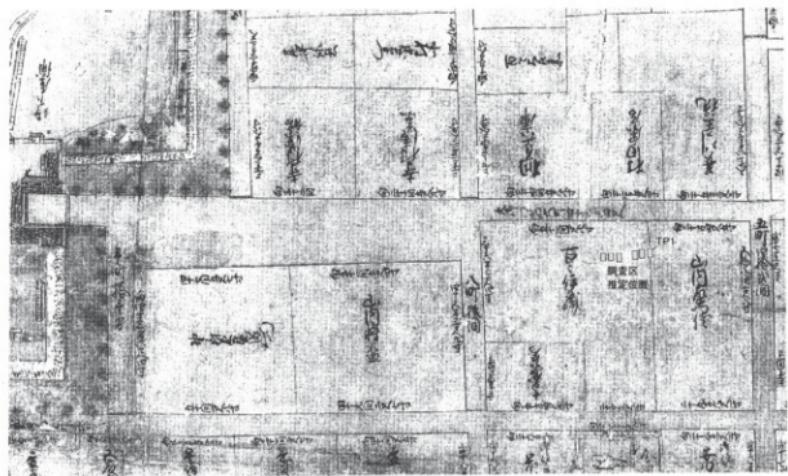


図10 「寛文己酉高知絵図」(高知市立市民図書館所蔵の絵図をもとに加筆)

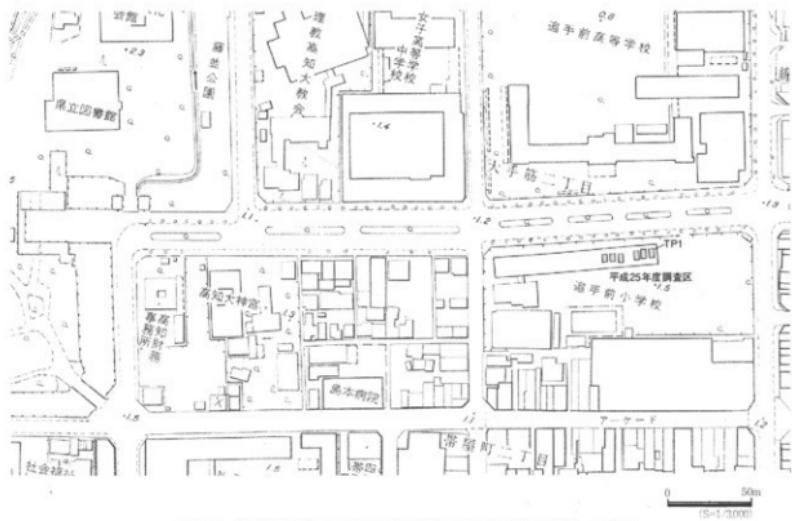


図11 平成13年地図(平成13年修正の「高知広域都市図38」に加筆)

Fig.75 追手筋遺跡調査区の推定位置

第2節 追手筋遺跡検出遺構と遺物

はじめに

近世の高知城下町の発掘調査は、平成13年度に高知県埋蔵文化財センターが実施した高知城伝下屋敷跡^[註1]の調査を初めとして、その後、高知城の西に広がる高知城跡内堀跡西側地区^[註2]と西弘小路遺跡^[註3]、城の南から南東に広がる追手筋遺跡^[註4]、弘人屋敷跡^[註5]、帯屋町遺跡^[註6]、本町遺跡^[註7]の発掘調査が続き、高知城周辺の近世遺跡の様相が序々に明らかになってきている。また今回の試掘調査の後、平成25年度に高知県埋蔵文化財センターが実施した追手筋遺跡の発掘調査では、近世の屋敷跡に伴う多数の遺構が検出され、侍屋敷の構造が明らかにされている。

今回の調査は既存建物の基礎を残しての調査という制約もあり、調査面積は限定されたものであったが、各試掘坑からは近世前期から後期までの遺構や遺物が検出され、各期の屋敷地の変遷や屋敷地北部の構造を知る多くの成果を得ることができた。

本節では、絵図や史料から知り得た遺跡の性格や周辺の発掘調査成果なども照合させながら、今次検出遺構と遺物の特徴について検討したい。

1. 検出遺構の概要

前節で触れたように、本調査区は2つの屋敷地の境界付近に位置している。(Fig.75) そして調査区東端のTP1が屋敷境界にあたり、TP2～6は西側の屋敷に該当している。そのため、境界施設を除く今次検出遺構の多くは、西側の居住者である百々氏と山内氏屋敷に関連していたと推定される。

各期の検出遺構の概要は次の通りである。(時期表記は廃絶年代)

1期：17世紀～18世紀初頭 [主な推定居住者…百々氏]

SK9（17世紀前半）SX11・14・15（17世紀前半～中葉）

SK2・10・11・11'・12・SX9・SD1（17世紀後半）

SK3・SD2（17世紀末～18世紀初頭）

2期：18世紀 [推定居住者…山内氏]

SX12・16（18世紀）

3期：18世紀末～19世紀中葉・・・[推定居住者…山内氏]

SK6・8・SX1（18世紀～19世紀中葉）

SK5・7（19世紀前半～中葉）

SK1・4・瓦溜1～6（19世紀中葉）

4期：近代

SX8・石列1

これによると、本調査区の検出遺構は17世紀末までに廃絶するものと、18世紀以降のものに大きく分かれる。また、18世紀については検出遺構が減少するが、この期間、安定的に屋敷地が継続したことと、この地点が屋敷の正面付近の位置にあり、廃棄土坑や井戸など生活関連の遺構が掘削されにくい空間であったためではないかと考えられる。

さて、これらの遺構群から本屋敷地における画期を考えると、17世紀から18世紀の間では、全域に広がる遺物廃棄や建物の解体などは認め難いが、屋敷境にあたるSD2の廃絶や複数の遺構の埋め戻しなどから、第1の画期を17世紀末～18世紀初頭の間に認めることができる。

また19世紀中葉には、近世の屋敷地の建物が取り壊され、瓦を廃棄した瓦溜りが全体に広がるなど、遺構廃絶と遺物廃棄のピークがあり、屋敷地が一変する大きな画期となっている。

これらの画期に従って、以下では各期の検出遺構を前半期（17世紀）と後半期（18世紀～19世紀中葉）に分け、その特徴をみていきたい。

2. 17世紀の遺構と遺物

17世紀の遺構は、近世前期の整地層にあたるⅢ・Ⅲ'層の下面で検出されるもの（SK9・SX11・14・15）と、Ⅲ層内またはⅢ層の上面で検出されるもの（SK2・3・10・11・11'・12、SX9・SD1・2）に分かれ、時期差が認められている。

整地層Ⅲ・Ⅲ'層以前の遺構群

SX9・SX11・14・15は17世紀の整地層Ⅲ・Ⅲ'層に先行する段階の遺構群で、SK9が17世紀前半、SX11・14・15が17世紀前半～中葉に比定される。

SX14は屋敷境に近いTP1・2で検出した浅い落ち込み状の遺構である。本地点では溝状の緩やかな落ち込みが南北方向に検出されており、高知県埋蔵文化財センターによる平成25年度発掘調査でも、南側の延長で類似した溝状の浅い落ち込みが検出されている。SX14は、そのうちの窪んだ部分に木屑等が溜った遺物溜りと考えられ、検出規模は南北確認長5.00m、東西幅4.32m、深さ32cmを測る。埋土は木屑を多量に含んだ腐植土層で、床面からは下駄、桶の底、箸、漆器椀などの木製品や木片等が多数出土している。また、イヌ、ネコ、ニホンジカ、ツキノワグマなどの動物骨も出土している。^(注8)

また、TP4検出のSX11はSX14に類似する浅い落ち込み状の遺構で、埋土は炭化物を多く含む粘質シルトである。床面からは多数の杭穴が検出され、埋土中からも数本の杭が横たわった状態で出土している。SX11の性格は不明であるが、埋土の状況から、水や粘土が溜まり易い環境にあった浅い溝や窪み状の遺構と考えられる。

SX11・14は最終的に17世紀の整地層Ⅲ・Ⅲ'層によって覆われ、埋め戻されている。

境界施設

屋敷境に関連する施設では、TP1で検出した南北方向の溝SD2がある。溝の掘削時期は詳細が分からぬが、整地層Ⅲ'層の上面で検出されていることなどから、17世紀中葉以降に機能した屋敷境と推定される。

検出規模は幅1.20～1.54m、深さ46cmで、断面形は逆台形である。SD2はN-17°-Wの軸方向をもち、現在の追手筋に対してほぼ垂直方向に延びている。高知県埋蔵文化財センターによる平成25年度調査でも、この溝の延長で南北方向の溝が検出されており、位置関係から同一の屋敷境界施設であると推定される。

SD2の埋め戻しにあたっては、溝内に大型のチャートの角礫が多数投げ込まれている。また埋土

中からは、17世紀～18世紀初頭までの陶磁器や土器、木製品などの生活用具と瓦片が出土している。注目されるものとしては、下層から「十月□ 元禄十□ 火□…」の墨書を記した被熱した瓦片が出土しており、溝の底絶と元禄11年（1698）の火災との関連が窺われる。

火災関連の遺構と遺物

火災に関連する遺構にはTP2・3で検出したSK3がある。南側が調査区外に出るため平面プランが不明であるが、SK3は南北に長い浅い掘り込みとみられ、検出規模は、南北確認長5.08m、東西長4.10m、深さ32～38cmを測る。SK3の埋土は焼土と炭化物を多く含む灰黄褐色シルトと明赤褐色シルトで、埋土中には被熱し橙色に変色した瓦片や被熱した陶磁器、炭化した木片、硬化した焼土塊などが多く含まれている。

SK3の下面には、同様の規模をもつ南北に長い浅い落ち込み状の遺構SX9があり、SX9の底には腐植土層とみられる黒褐色シルトが堆積しているが、この上面に、SK3の焼土層が入り込んでいるため、本来あった落ち込みを利用して火災の瓦礫や焼土を廃棄していた可能性がある。また、SK3東西の整地層Ⅲ・Ⅲ'層の上面にも炭化物溜りが広がっており、周辺ではSD1の上面を炭化物や炭化材が覆う様子が確認されている。

SK3から出土する陶磁器は17世紀前半～後半の製品を主体としており、元禄11年（1698）の火災との関連が考えられる。

3. 18世紀～19世紀中葉の遺構と遺物

18世紀の可能性をもつ遺構ではSK6・8・SX1があるが、18世紀に特定できる検出遺構が少なく、この頃の状況が分かりにくい。SX1は近代の石列1の直下で検出されたもので、位置から、屋敷の境界に関わる溝と推定される。一方、19世紀前半～中葉の遺構には、SK1・4・5・7と調査区全域に広がる瓦溜1～6があり、この時期、検出遺構数が増加している。19世紀中葉に比定される瓦溜1～6には、多量の瓦片と陶磁器・土器などの生活用具が一括廃棄されており、建物の取り壊しを伴う屋敷地の大きな変化がこの時期にあったことが窺える。

屋敷境関連の遺構

近世中期～後期の屋敷境に関連する遺構としては、TP1のⅡ層下面で検出したSX1がある。SX1は浅い溝状の遺構で、近世前期の屋敷境の溝SD2と共に軸方向をもって南北方向に延びている。検出規模は幅1.80～1.90m、深さ30cmを測り、埋土の最下層にあたる黒褐色粘質シルト層には腐植した植物が多く含まれている。SX1埋め戻しの埋土中からは瓦片や18世紀を主体とする遺物が多く出土するが、機能した期間の詳細については明らかでない。

SX1の検出位置はSD2の上面付近にあるが60cmほど西側に寄っており、近世前期とそれ以降の境界施設には僅かなずれがある。またSX1の上面では近代の石列1が検出されており、近世後期から近代までは屋敷境の位置が引き継がれたことが分かる。

幕末の一括廃棄遺構と遺物

19世紀にはSK1・4・5・7など、陶磁器や瓦片を廃棄した廃棄土坑が各所に掘削されている。このうちSK1・4・瓦溜1～6は19世紀中葉に比定されるもので、調査区の全域に多量の瓦片と陶磁器

や土器などの生活用具が廃棄されており、幕末の居住者の移転や建物の解体にともなう一括廃棄遺構と考えられるものである。

これらの遺構内に廃棄された瓦片は、近世中期以降の製品とみられるもので、軒伐瓦、棟瓦、軒丸瓦、丸瓦が主体である。19世紀中葉の廃棄遺構にあたるSK1・4・瓦溜1～6からは、「御瓦師」「アキ」「アキ口」「アキ万」「アキ安」「安喜口」(高知県安芸市)、「中己」「中山林」「中友」「中口」(高知県香南市野市町中山田)、「片常」「片重」「片万」「片口」(高知県香美市土佐山田町片地)、「布直」(高知市布師田)、「山寅」「ヒロタ」「□の□」「□川正」「・□郎」などの銘印をもつ瓦片が出土している。また、SK5～8・SX1からは「アキ」「アキ口」「アキ口」山に「久」と「アキ兼」(高知県安芸市)、「やス□□」(高知県香南市夜須)、「とく□」(高知県香南市香我美町徳王子)、「□傳」「蒲百」の銘印をもつ瓦片が出土しており、各地の瓦製品が流通していたことが窺える。

この他、瓦溜1からは丸に一つ石紋の棟飾り瓦(317)も出土している。天保元年(1830)の「天保元年高知之圖」(Fig.74-図7)には、本調査区が該当する西側の屋敷区画に、居住者である山内太郎左衛門の名と家紋の丸に一つ石紋の絵が描かれており、これらのことから、山内氏の屋敷には家紋瓦に飾られた建物が存在していたことが推察される。

[註]

- 1)『高知城伝下屋敷跡－高知地家簡裁序舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002年
- 2)『史跡高知城跡－内堀跡西側地区埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会2013年
- 3)『西弘小路遺跡－総合あんしんセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会2010年
『西弘小路遺跡－高知法務総合庁舎新営埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター 2012年
- 4)『追手筋遺跡－新図書館等複合施設建設に伴う発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター・高知県教育委員会・高知市教育委員会2015年
- 5)『弘人屋敷跡－新資料館整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県・高知県文化財団埋蔵文化財センター 2014年
- 6)『帝屋町遺跡発掘調査現地説明会資料』高知市教育委員会2016年
- 7)『本町・帝屋町遺跡発掘調査現地説明会資料』高知市教育委員会2017年
- 8)池田研「追手筋遺跡出土の脊椎動物遺存体」「追手筋遺跡 -新図書館等複合施設建設に伴う埋蔵文化財試掘確認調査報告書」高知市教育委員会2016年

第Ⅷ章 自然遺物

追手筋遺跡出土の脊椎動物遺存体

池田 研（土佐市教育委員会）

ここでは追手筋遺跡平成25年度調査で出土した脊椎動物遺存体について報告する。出土した資料は発掘調査中に肉眼で確認したもので、同定作業にあたっては東海大学海洋学部の丸山真史氏より御教示を賜った。同定結果は表1・2の通りである。

表1 種名一覧

食肉目 Carnivora

クマ科 Ursidae

ツキノワグマ *Selenarctos thibetanus*

イヌ科 Canidae

イヌ *Canis familiaris*

ネコ科 Felidae

ネコ *Felis silvestris catus*

偶蹄目 Artiodactyla

イノシシ科 Suidae

イノシシ（もしくはブタ） *Sus scrofa*

シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon*

確認されたのは哺乳類5種で、そのうちイノシシとニホンジカは近世において一般的に食用にされていたことが知られているほか、ツキノワグマについても京都の本多甲斐守邸宅跡〔丸山真史・富岡直人・平尾政幸2007〕など各地の近世遺跡で出土例があり、『松屋筆記』には19世紀前半の江戸にクマ肉を扱う店があったことが記されていることから、本調査で出土した資料についても食料残滓である可能性が高い。イヌについては狩猟用・愛玩用として飼育されるものがある一方で、明石城武家屋敷跡などで解体痕のある出土例が報告されるなど、中世には常態化していた犬食文化が、近世に入っても根強く定着していたことが明らかとなってきており、今回のように解体痕の有無が確認できない状態の資料はその性格を判断することが困難である。

表2 出土脊椎動物遺存体一覧

資料番号	出土遺構・包含層	出土地点	地区	時期	種名	部位	部分	左右	備考
1	SX14	床No. 4	TP2	17C前半	イヌ	下顎骨		L	
2		床No. 1			ニホンジカ	中手骨	近位	R	
3・5		床No. 1			ニホンジカ	上腕骨	完形	R	
4		床No. 1			ニホンジカ	橈骨	近位	R	
6		床No. 2			同定不能				
7		床No. 3			イヌ	大腿骨	完形	R	GL1630mm Bp34.5mm Bd27.4mm
8		床No. 5			ニホンジカ	中手骨	ほぼ完形	L	
9		No. 1の直下			ネコ	橈骨	遠位	L	
10		SK11'	TP3	17C後半	同定不能				
11	SX14		TP2	17C前半	ツキノワグマ	橈骨	骨幹	R	
12					ネコ	上腕骨	完形	L	やや小型
13					ネコ	脛骨	骨幹	L	
14・15	瓦器1 中層	No. 5	TP1	19C中葉	イノシシ もしくは ブタ	上腕骨	遠位	L	
16・17・18	Ⅲ層上層		TP1	17C後半	ニホンジカ	脛骨	近位・骨幹 ・遠位	R	接合しないが同一個体か

註

1)「時期」欄の「●C」は「●世紀」を指す。

追手筋遺跡出土の貝類

池田 研 (土佐市教育委員会)

ここでは追手筋遺跡平成25年度調査でサンプル採取した貝類について報告する。同定作業には現生標本と図鑑【吉良哲明1954・波部忠重1961】を利用しており、西宮市貝類館の高田良二氏より御教示を賜った。貝類の個体数に関して腹足綱は殻口数を、二枚貝綱は左右殻頂数の多數の方を原則として採用している。同定結果は表3・4の通りである。

表3 種名一覧

腹足綱	Gastropoda
アワビ属	Haliotis sp. Indet.
サザエ	Turbo (Batillus) cornutus Solander
テングニシ (コブ型)	Pugilina (Hemifusus) ternatana (Gmelin)
二枚貝綱	Bivalvia
ハイガイ	Anadara (Tegillarca) granosa bisenensis Schenck et Reinhart
イタヤガイ	Pecten (Notovola) albicans (Schroeter)
ハマグリ	Meretrix lusoria (Roeding)
オキシジミ	Cyclina orientalis Sowerby
オニアサリ	Protothaca jedoensis (Lischke)
スダレガイ属	Paphia sp. Indet.
ヤマトシジミ	Corbicula japonica Prime

表4 出土貝類一覧

出土遺構 ・包含層	地区	時期	ハイ ガイ	イタヤ ガイ	ハマ グリ	オキ シジミ	オニ アサリ	スダレ ガイ属	ヤマト シジミ	アワビ 属	サザエ	テング ニシ
SK4	TP4	19C中葉		1	4	1			12	●	1	
SK4	TP4	19C中葉			1?					●		
瓦器1	TP1	19C中葉									2	
瓦器2	TP2	19C中葉	2			1			1	●	3	
瓦器4	TP4	19C中葉	1		4	1	1	1	34			
複数	TP1	近世～近現代										1

註

- 1) 右殻を用いた貝釣子。
- 2) 「時期」欄の「●」は「●世紀」を指す。
- 3) ●は殻頂・殻口部が出土しておらず個体数は不明であるが、破片から存在が確認されたもの。

母体資料数が限定されているが、貝種構成を生息域別に見ると、汽水性種と鹹水性種から構成されており、淡水性種は含まれていない。種別ではヤマトシジミが47個体(65%)ともっとも多く、ハマグリが9個体(13%)、サザエが6個体(8%)と続いている。

個別の貝種について見ると、まず瓦溜2と瓦溜4から出土したハイガイは殻長が50mm以上の大型の個体が主体を占める。また、搅乱出土のテングニシはコブ(ツノ)型で、SK4出土のハマグリにはチョウセンハマグリが含まれている可能性がある。一方、イタヤガイは右殻を貝杓子として加工したもので、柄を固定するための直径3mm程度の小円孔が2個所に穿たれている。

本調査で出土した貝種は、いずれも近世には食用とされていたものである。当地域から魚貝類が供給されていた大坂城・城下町跡における出土資料と共通する貝種も多いが〔池田2005・2010〕、コブ(ツノ)型のテングニシは大坂城・城下町跡でも出土例がなく、スダレガイ属も稀少であることから、そうした種は捕獲地周辺に流通範囲が限定されていた可能性がある。

引用・参考文献

- 池田研2005「中・近世における大坂城下町出土の貝類について」大阪大学考古学研究室編『侍兼山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－』pp. 859–886
- 池田研2010「堂島蔵屋敷B地点(DJ08-2次) 調査出土の貝類について」大阪市文化財協会編『堂島蔵屋敷跡Ⅲ』pp. 78–86
- 吉良哲明1954『原色日本貝類図鑑』保育社
- 波部忠重1961『続原色日本貝類図鑑』保育社
- 丸山真史・富岡直人・平尾政幸2007「本多甲斐守京邸出土の動物遺存体」京都市埋蔵文化財研究所編『研究紀要 第10号』pp. 227–244

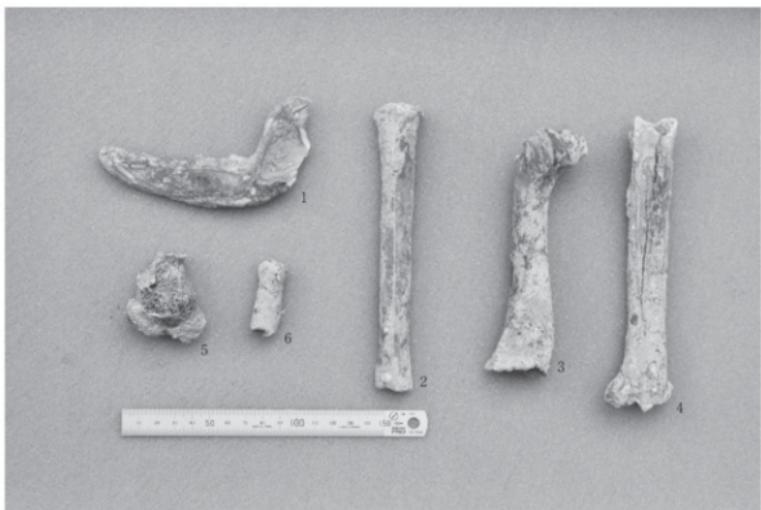


Fig.76 追手筋遺跡出土脊椎動物遺存体（1）

1. イヌ 下顎骨 2. ニホンジカ 中手骨 3・5. ニホンジカ 上腕骨 4. ニホンジカ 桡骨 6. 同定不能



Fig.77 追手筋遺跡出土脊椎動物遺存体（2）

7. イヌ 大腿骨 8. ニホンジカ 中手骨 9. ネコ 桡骨 10. 同定不能 11. ツキノワグマ 桡骨



Fig.78 追手筋遺跡出土脊椎動物遺存体 (3)

12. ネコ 上腕骨 13. ネコ 脊骨 14・15. イノシシもしくはブタ 上腕骨 16～18. ニホンジカ 脊骨



Fig.79 追手筋遺跡出土貝類

1. ハイガイ 2. ハマグリ 3. オキシジミ 4. ヤマトシジミ 5・6. アワビ属 7. サザエ
(1・3・4・6・7: 瓦溜2、2・5: SK4)

写 真 図 版



調査前風景（南東より）



調査区遠景（東より）



TP1 石列 1 (南より)



TP1 石列 1 (南西より)



TP1 石列 1 の胴木痕（西より）



TP1 石列 1 最下段の石列（南より）



TP1 SX1 完掘状況（南より）



TP1 SD2 砥出土状況（南より）



TP1 SD2 墨書瓦 (145) 出土状況



TP2 瓦溜 2 遺物出土状況 (東より)



TP3 SK3 遺物出土状況（南より）



TP2 SK3・SX9・SK11セクション（東より）



TP2 SX9・SD1 完掘状況（南より）



TP2 SK11・SX14（南より）



TP2 SK11 (南東より、東側遺物はSX14)



TP2 西壁セクション (SK3・SX9・SK11)



TP2 SX14 遺物出土状況（南西より）



TP2 SX14 遺物出土状況



TP2 SX14 遺物出土状況（骨片）



TP3 SK12・13（南より）



TP3 SK2セクション (東より)



TP4 SK4・7セクション (南より)



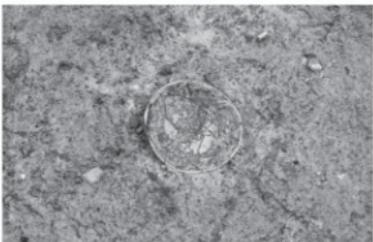
TP5 SK5セクション（南より）



TP6 SK8 木片・砾出土状況（北より）



TP4 SK4 遺物出土状況（32・49）



TP6 SK6 遺物出土状況（107）



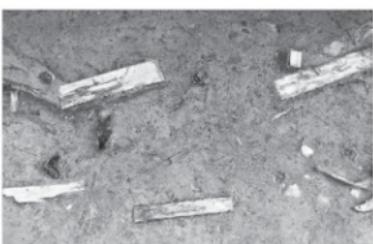
TP6 SK6 遺物出土状況（108）



TP2 SX14 遺物出土状況（桶）



TP2 SX14 遺物出土状況（骨片）



TP2 SX14 遺物出土状況（骨片・木製品）



TP1 瓦溜 1 遺物出土状況（310）



TP2 瓦溜 2 遺物出土状況（378）



TP2 II層遺物出土状況



TP2 II層遺物出土状況 (526)



TP3 III層遺物出土状況 (561)

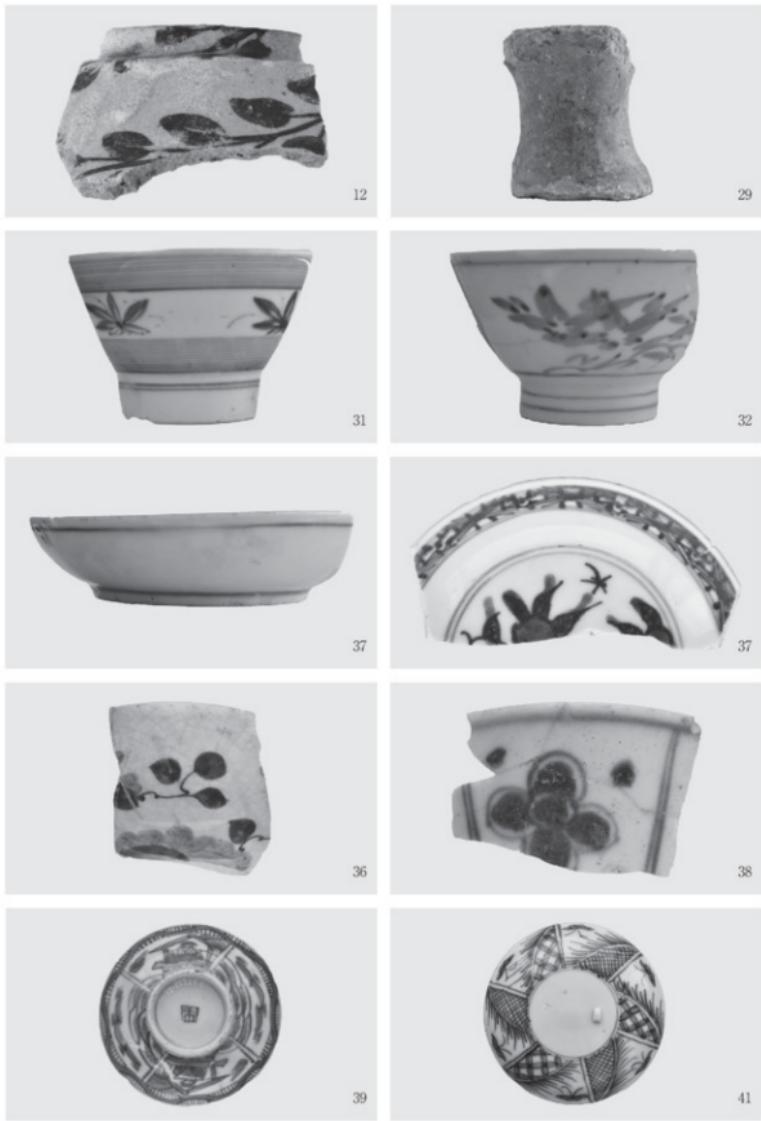


TP1 石列 1 遺物出土状況 (606)



調査区周辺の遺跡

高知県埋蔵文化財センター実施の平成25年度追手筋遺跡発掘調査
(写真提供:高知県文化財団埋蔵文化財センター)



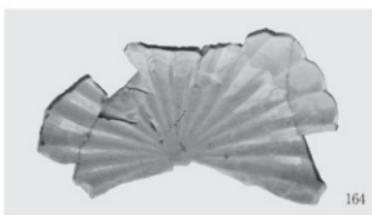
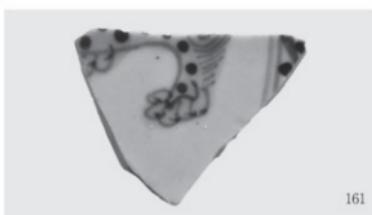
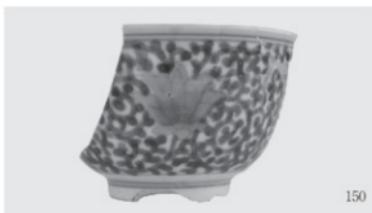
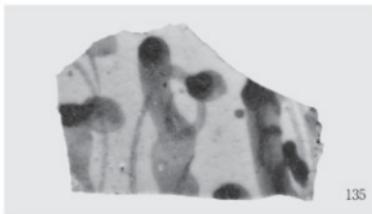
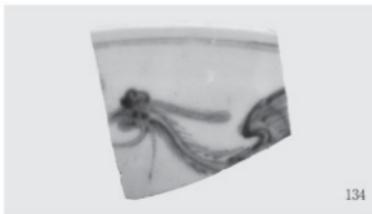
SK2~4 出土遺物



SK4 · 5 出土遺物



SK6 · 9 · 11 出土遺物



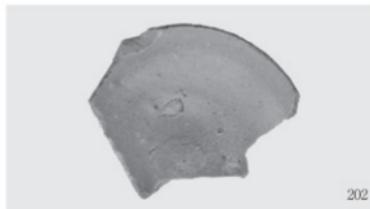
SD2 · SX1 出土遺物



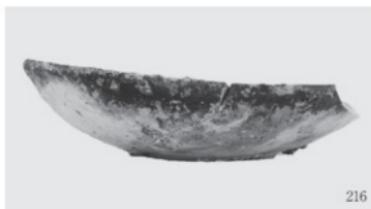
SX1 · 9 出土遺物



197



202



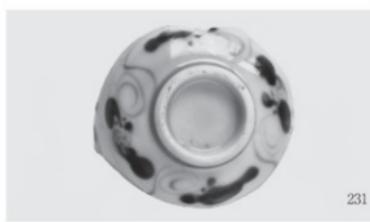
216



219



231



231



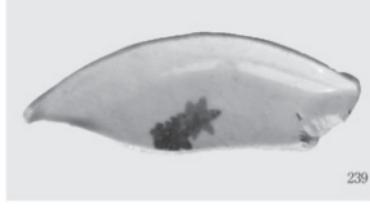
232



232



239



239

SX9 · 12 · 14 · 瓦溜 1 出土遺物



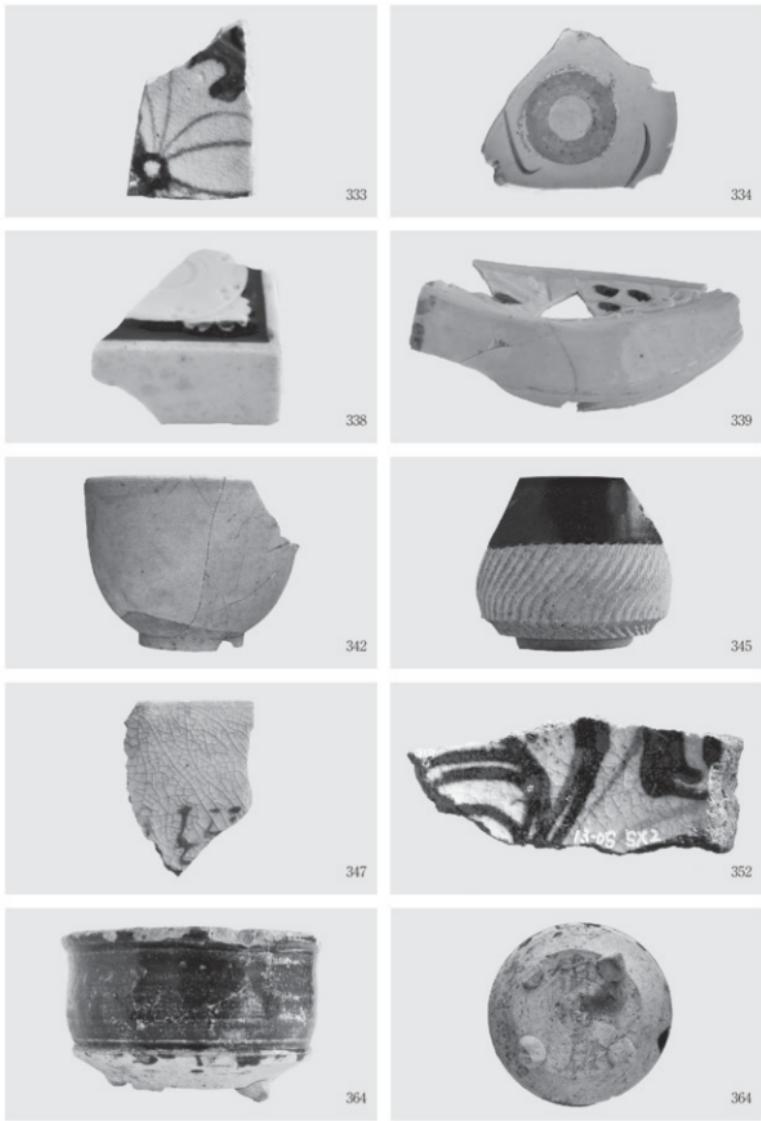
瓦溜 1 出土遗物



瓦窑 1 出土遗物



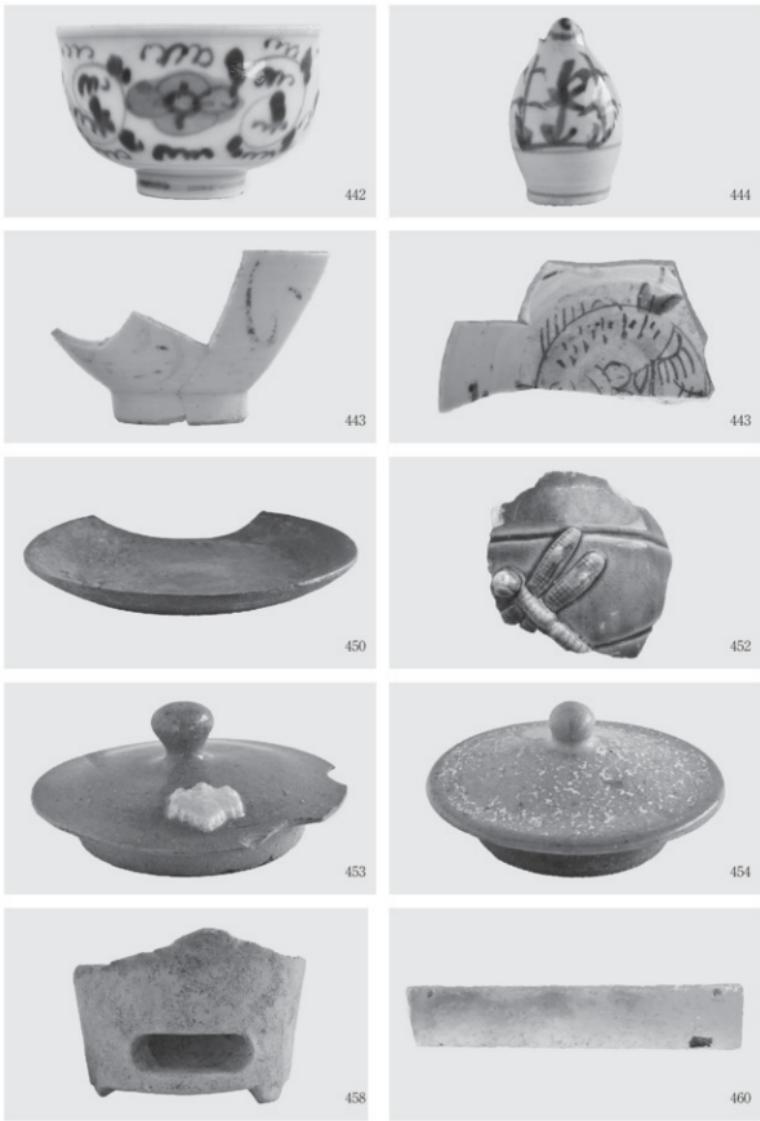
瓦溜 1 · 2 出土遺物



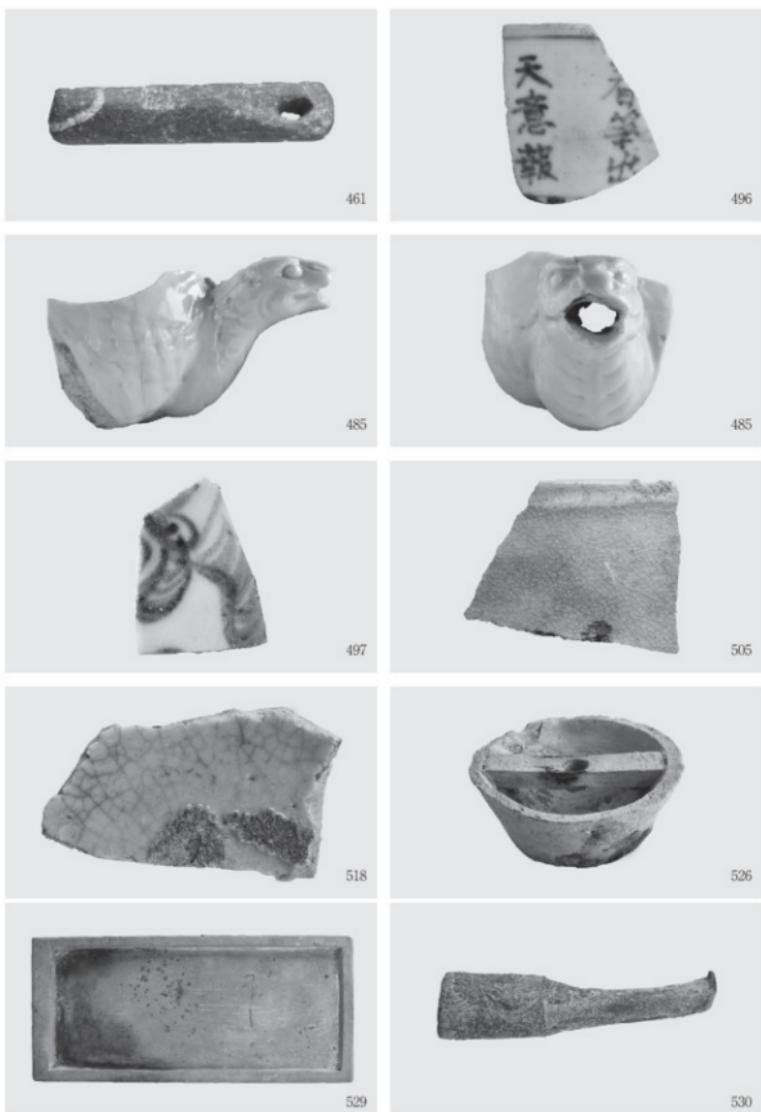
瓦溜 2 出土遗物



瓦溜2·3出土遺物



瓦窑 4 出土遗物



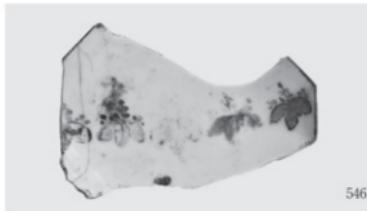
瓦溜4～6・Ⅱ層出土遺物



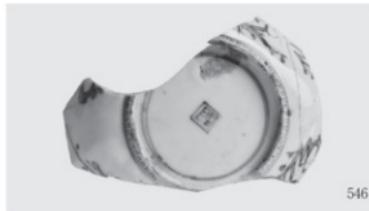
531



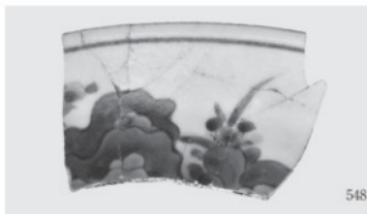
532



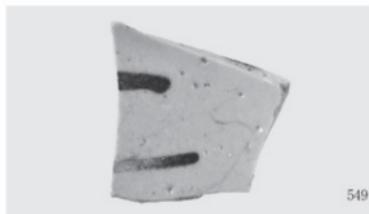
546



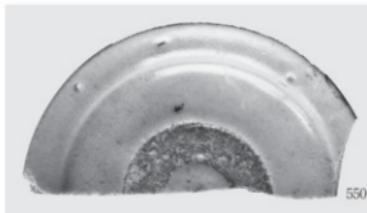
546



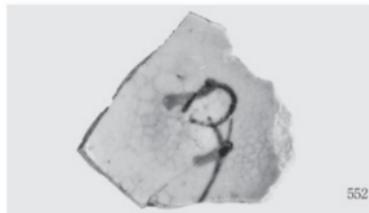
548



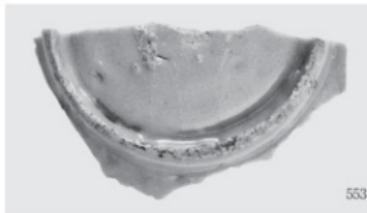
549



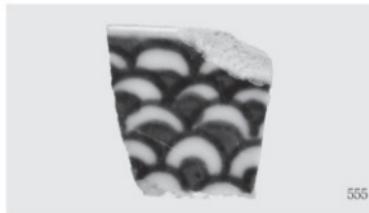
550



552



553



555

III・III'層 出土遺物



III·III'·扰乱層出土遺物



石列 1 · SX8 · I 層 · 搅乱層 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	おおてすじいせき							
書名	追手筋遺跡							
副書名	新図書館等複合施設建設に伴う埋蔵文化財試掘確認調査報告書							
卷次								
シリーズ名	高知市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第40集							
編著者名	浜田恵子・梶原瑞司							
編集機関	高知市教育委員会							
所在地	〒780-8571 高知県高知市鷹匠町2丁目1-43 Tel. 088-832-7277							
発行年月日	西暦2016年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおてすじいせき 追手筋遺跡	こうちけんこうち 高知県高知市 おおてすじ 追手筋2丁目 1番12号	39201	10172	33度 33分 39秒	133度 32分 12秒	2012年 8月20日 ～ 8月24日 2013年 5月24日 ～ 6月19日	22m ² 95m ²	新図書館等複合施設建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
追手筋遺跡	屋敷跡	江戸時代 近代	土坑 溝 杭跡 性格不明 遺構 石列	近世陶磁器・土器 貿易陶磁器 石製品 金属製品 古銭 木製品 瓦	近世の屋敷に伴う土坑・溝・性格不明遺構、火災関連の廃棄遺構を検出。近世～近代の屋敷跡とみられる溝・石列を検出。			

高知市文化財調査報告書 第40集

追手筋遺跡

新図書館等複合施設建設に伴う埋蔵文化財試掘確認調査報告書

2016年3月

発行 高知市教育委員会

〒780-8571 高知県高知市鷹匠町2丁目1-43

民権・文化財課

電話088-832-7277

印刷 弘文印刷株式会社

